

長野県松本市

*SAKAIKUBO*

境 窪 遺 跡

*KAWANISHI-KAIDEN*

川西開田遺跡 | ・ | |

—緊急発掘調査報告書—

*1998.3*

松本市教育委員会



境窪遺跡出土弥生土器 壺



境窪遺跡出土弥生土器 甕・鉢・大地系壺





境窪遺跡出土石器 打製鏃形石器 (212・349・78・141・404)、錐形石器 (130)、管状石器 (669)、接合資料 S = 1 : 1



境窪遺跡出土石器 磨製鏃形石器 (211)、磨製斧形石器 (687・661・296)、スクレイパー状石器 (124) S = 1 : 2



境窪遺跡出土石器 磨製斧形石器 (373・374・375・504)、遺構間接合資料 S = 1 : 4





境窪遺跡弥生時代遺構群近景（第6～8号住居址付近、南西から）



同上（第5号住居址・礫床木棺墓付近、東から）



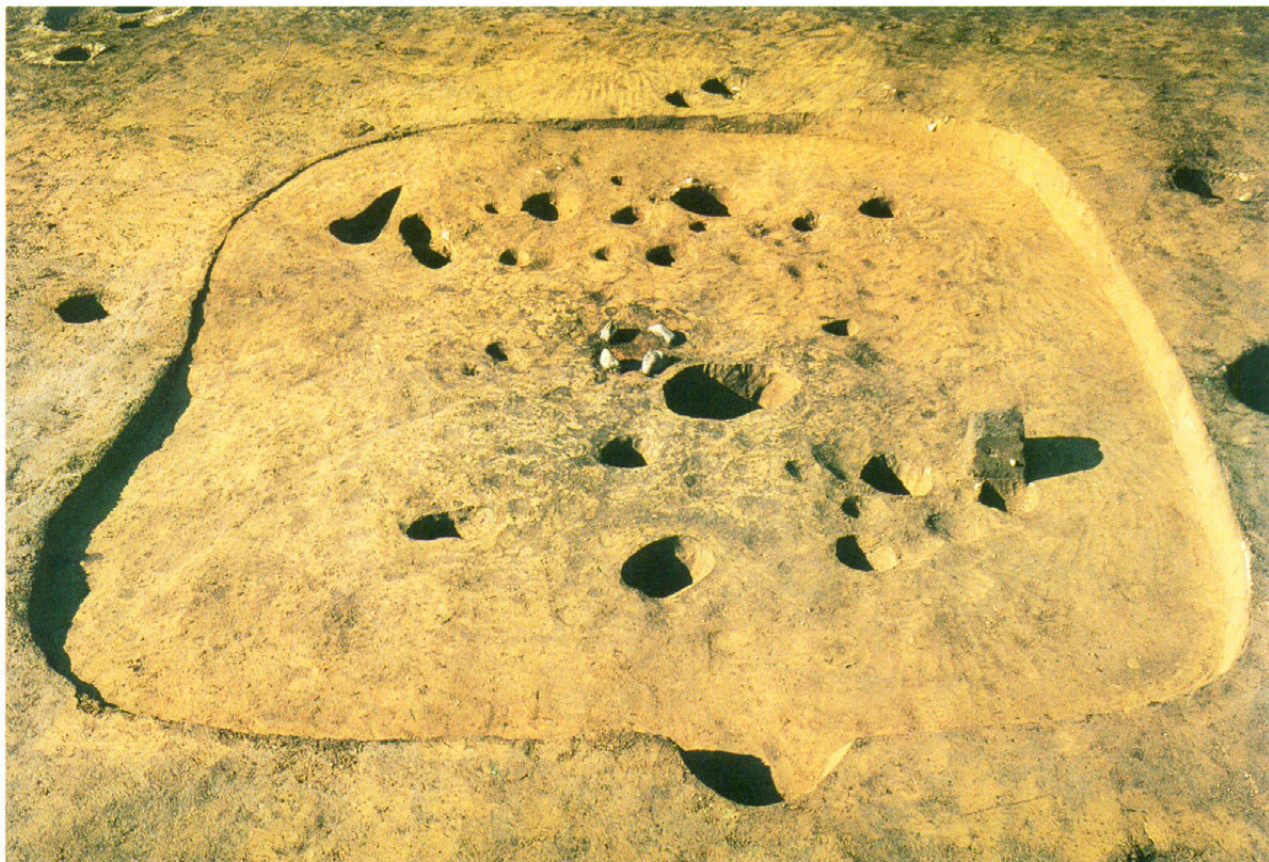


境窪遺跡弥生時代遺構群近景 (第7・8号住居址付近、西から)



同上 (第3号住居址付近、北西から)





境窪遺跡第5号住居址 (完掘状況、東から)



同上 (炭化材・遺物出土状況、南から)





境窪遺跡第6号住居址（完掘状況、東から）



同上 第7号住居址（炭化材・遺物出土状況、南から）



# 序

---

松本市西南部に位置する神林・今井地区には、多くの埋蔵文化財が残されています。境窪・川西開田遺跡もその一つとして知られていました。このたびその一帯に圃場整備事業が再びおよぶことになり、文化財の保護を図るために松本市が神林土地改良区から委託を受け、松本市教育委員会が緊急発掘調査を実施したものです。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成7・8年の2年度にわたって行われました。作業は主に寒風吹きさぶ厳冬期に行われ、過酷を極めました。参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、境窪遺跡では弥生時代中期前半期の良好な集落跡を、川西開田遺跡では縄紋時代から平安時代にいたる生活の跡を見出すことができました。これらは学術的価値が非常に高く、地域の歴史解明にも大いに役立つ資料になることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査には、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わるものの苦悩は絶えません。本書を通して貴重な文化財の保護とその施策へのご理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、過酷な状況のなか発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解とご協力をいただいた神林土地改良区、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋



# 例 言

- 1 本書は、平成7年10月30日～平成8年1月9日に実施された松本市神林・今井に所在する境窪遺跡および川西開田遺跡第1次調査(川西開田Ⅰ)、平成8年4月22日～5月10日と同年11月5日～12月12日に行われた川西開田遺跡第2次調査(川西開田Ⅱ)の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は平成7・8年度神林地区県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査であり、神林土地改良区より松本市が委託を受け、松本市から再委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団・松本市立考古博物館が発掘調査を実施、本書の作成は平成9年度に松本市教育委員会が行った。なお業務委託および財団法人への再委託にかかる事務処理については松本市教育委員会が行った。
- 3 本書の作成にあたり、できるだけ多くの遺構・遺物について図・写真を掲載する予定であったが、時間および頁数の制約から川西開田遺跡の縄紋時代の遺物については掲載をあきらめた。これについては別の機会に報告したい。
- 4 本書の執筆は、Ⅰ：事務局、Ⅱ-1：太田守夫、Ⅳ-2-(2)-①：直井雅尚、Ⅳ-2-(2)-②：太田圭郁、その他を竹原 学が行い、付編については執筆者を文頭に記した。
- 5 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。なおその実施にあたっては各調査担当から多くの助力を得ている。  
遺物洗浄 竹平悦子、林 和子、洞沢文江、百瀬二三子  
遺物保存処理・復原 五十嵐周子、内沢紀代子、内田和子、大角けさ子、洞沢文江、村松恵美子  
遺物実測 内田和子、太田圭郁、竹平悦子、洞沢文江、松尾明恵、三宅康司、村松恵美子  
遺構図整理 石合英子  
トレース 内田和子、太田圭郁、開嶋八重子、竹平悦子、洞沢文江、松尾明恵、三宅康司、横山真理  
版 組 石合英子、内田和子、林 和子  
写真撮影 神田訓安、長畦和正、村田昇司、荒木 龍(遺構写真)、宮嶋洋一(遺物写真)、エアータック(航空写真)  
総括・編集 竹原 学
- 6 本書で使用した遺構の略称は次の通りである。  
竪穴住居址→住、竪穴状遺構→竪、掘立柱建物址→建、平地建物址→平建、柱穴列→柱、土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝
- 7 図中で用いた方位記号はすべて真北方向を指している。遺構配置図に示した座標線は境窪遺跡および川西開田遺跡第1次調査区では磁北を基準としており、方位記号(真北方向)より約6度30分西に振っている。また川西開田遺跡2A・B調査区では真北方向を基準としており、方位記号とのずれはない。
- 8 遺構・遺物の記述中で用いた古代の土器の時期区分、用語については下記文献に拠っている。  
小平和夫 1990 「第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 ―松本市内その1― 総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 9 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は以下の通りである。  
表記法 土色(混入物・量) 混入物量 a 少量 b 中量 c 多量  
土 色  
1 褐色 6 黄褐色 11 暗灰色 16 黄色 21 砂  
2 暗褐色 7 茶褐色 12 黒灰色 17 暗黄褐色 22 砂 礫  
3 黒褐色 8 灰褐色 13 赤灰色 18 暗茶褐色 23 緑灰色  
4 明褐色 9 橙褐色 14 黄灰色 19 黒色  
5 赤褐色 10 灰色 15 青灰色 20 焼土  
混入物  
A 小 礫 F 炭化物塊 K 茶褐色土粒 P 砂 粒 U 灰色土粒  
B 礫 G 炭化材 L 黄色土塊 Q 黒色土粒 V 灰色土塊  
C 焼土粒 H 黄色土粒 M 黄褐色土塊 R 黒色土塊 W 赤褐色土粒  
D 焼土塊 I 黄褐色土粒 N 橙褐色土塊 S 暗褐色土粒 X 赤褐色土塊  
E 炭化物粒 J 橙褐色土粒 O 茶褐色土塊 T 暗褐色土塊 Y 鉄 分
- 10 調査・整理期間中、以下の方々から教示・協力を得た。記して感謝申し上げます。  
荒川隆史、石黒立人、伊藤淳史、尾見智志、藤山誠一、加藤 学、神村 透、神沢昌二郎、桐原 健、小山岳夫、佐藤由紀男、設楽博巳、関沢 聡、千野 浩、寺島孝典、樋口昇一、藤田英博、保坂和博、百瀬長秀、山口 明、山下誠一
- 11 境窪遺跡の既出資料については神沢昌二郎氏の所蔵品であり、実測図の作成、掲載は同氏の許可を得て行った。
- 12 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館(〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に収蔵されている。

# 目 次

巻頭図版

序

例 言

目 次

## I 調査の経緯

1. 文書記録…………… 1
2. 調査体制…………… 2

## II 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と地形・地質…………… 3
2. 歴史的環境および過去の調査…………… 6

## III 調査の概要…………… 8

## IV 境窪遺跡の調査成果

1. 検出遺構
  - (1) 竪穴住居址…………… 16
  - (2) 平地建物址…………… 18
  - (3) 掘立柱建物址…………… 19
  - (4) 柱穴列…………… 19
  - (5) 墓 址…………… 19
  - (6) 土 坑…………… 20
  - (7) ピット…………… 20
  - (8) 黒耀石集中地点…………… 21
  - (9) 土器集中地点…………… 21
  - (10) 礫集中地点…………… 21
  - (11) 溝状遺構…………… 22
  - (12) 谷状地形…………… 22
2. 出土遺物
  - (1) 縄紋時代の遺物…………… 43
  - (2) 弥生時代の遺物
    - ①土 器…………… 43
    - ②石器・石製品…………… 75
    - ③土製品…………… 106
  - (3) 平安時代の遺物…………… 106
3. まとめ…………… 108

## V 川西開田遺跡の調査成果

1. 検出遺構
  - (1) 竪穴住居址・竪穴状遺構…………… 110
  - (2) 掘立柱建物址…………… 110
  - (3) 遺物集中地点…………… 110
  - (4) 土 坑…………… 111
  - (5) ピット…………… 111
  - (6) 溝状遺構…………… 111
2. 出土遺物
  - (1) 縄紋時代の遺物…………… 122
  - (2) 弥生時代の遺物…………… 122
  - (3) 古墳時代の遺物…………… 122
  - (4) 奈良～平安時代の遺物
    - ①土器・陶器…………… 122
    - ②鉄 器…………… 123
    - ③銅製品・銭貨…………… 123
3. まとめ…………… 131

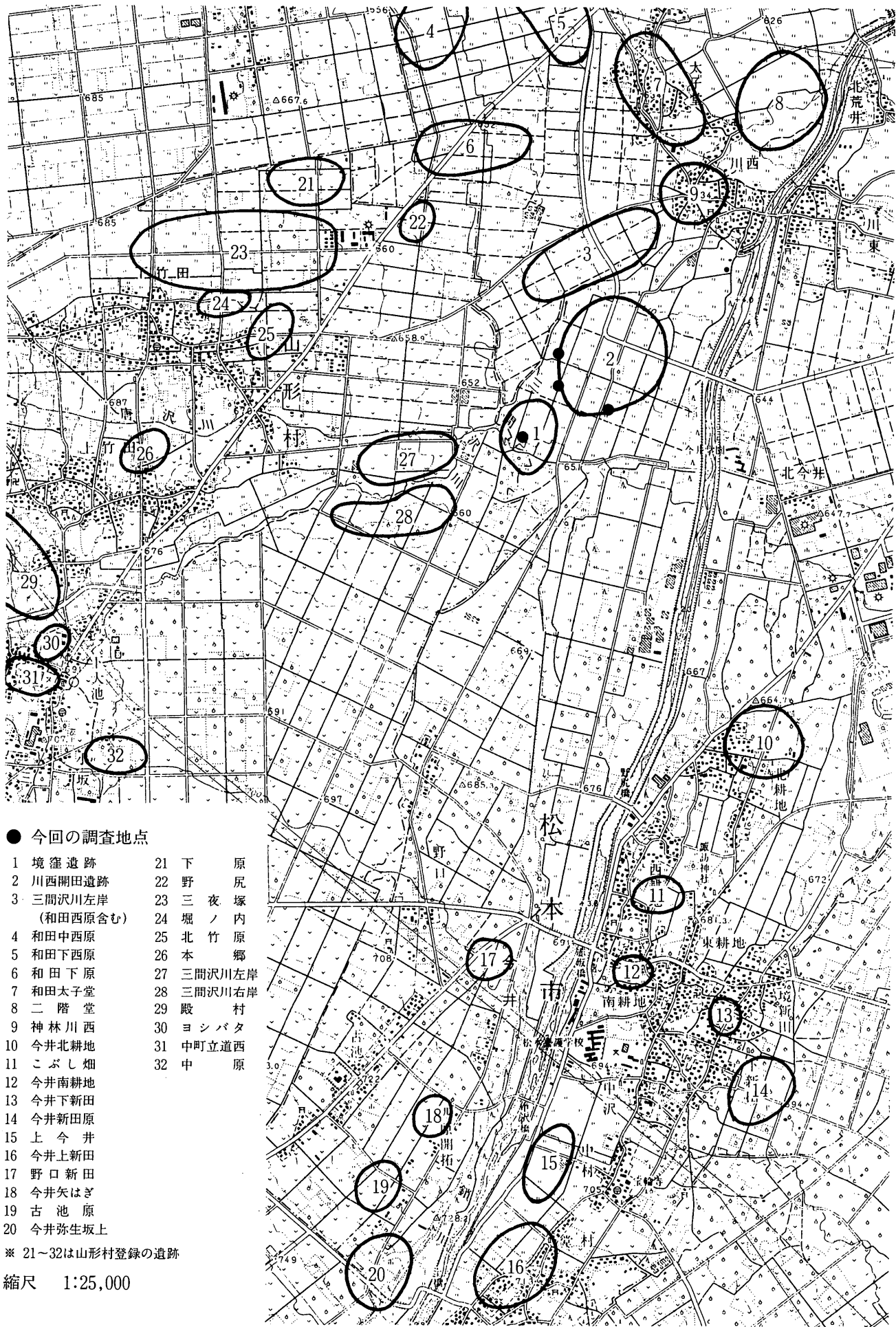
付 編

1. 境窪遺跡放射性炭素年代測定結果報告…………… (パリノ・サーヴェイ株式会社)…………… 132
2. 境窪遺跡出土炭化材樹種同定結果報告…………… (森 義直)…………… 134

図 版

報告書抄録





● 今回の調査地点

- |                      |           |
|----------------------|-----------|
| 1 境窪遺跡               | 21 下原     |
| 2 川西開田遺跡             | 22 野尻     |
| 3 三間沢川左岸<br>(和田西原含む) | 23 夜塚     |
| 4 和田中西原              | 24 堀内     |
| 5 和田下西原              | 25 北竹原    |
| 6 和田下原               | 26 本郷     |
| 7 和田太子堂              | 27 三間沢川左岸 |
| 8 二階堂                | 28 三間沢川右岸 |
| 9 神林川西               | 29 殿村     |
| 10 今井北耕地             | 30 ヨシバタ   |
| 11 こぶし畑              | 31 中町立道西  |
| 12 今井南耕地             | 32 中原     |
| 13 今井下新田             |           |
| 14 今井新田原             |           |
| 15 上今井               |           |
| 16 今井上新田             |           |
| 17 野口新田              |           |
| 18 今井矢はぎ             |           |
| 19 古池原               |           |
| 20 今井弥生坂上            |           |

※ 21~32は山形村登録の遺跡

縮尺 1:25,000

第1図 調査地の位置と周辺遺跡

# I 調査の経緯

## 1. 文書記録

平成 6年 12月 16日	平成 7年度補助事業計画書提出
平成 7年 6月 5日	平成 7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定
6月 16日	平成 7年度文化財保護事業補助金（県費）内定
6月 23日	平成 7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出
6月 26日	平成 7年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出
8月 31日	川西開田遺跡・境窪遺跡埋蔵文化財発掘調査通知提出
9月 27日	平成 7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知
9月 27日	平成 7年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知
9月 28日	川西開田遺跡・境窪遺跡発掘調査委託契約締結
11月 24日	平成 7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出 平成 7年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出
12月 11日	平成 8年度補助事業計画書提出
平成 8年 1月 16日	川西開田遺跡・境窪遺跡埋蔵文化財拾得届及び保管証、発掘調査終了通知提出
3月 11日	平成 7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知 平成 7年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知
3月 18日	川西開田遺跡埋蔵文化財発掘調査通知提出
3月 29日	平成 7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知 平成 7年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知
4月 15日	川西開田遺跡・境窪遺跡発掘調査委託契約締結
5月 15日	平成 8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定
5月 16日	平成 8年度文化財保護事業補助金（県費）内定
6月 3日	平成 8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出
6月 7日	川西開田遺跡埋蔵文化財拾得届及び保管証、発掘調査終了通知提出
6月 13日	平成 8年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出
8月 9日	平成 8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知
8月 19日	平成 8年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知
10月 11日	平成 9年度補助事業計画書提出
平成 9年 3月 31日	平成 8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知 平成 8年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知
5月 1日	川西開田遺跡・境窪遺跡発掘調査委託契約締結
5月 15日	平成 9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定
5月 19日	平成 9年度文化財保護事業補助金（県費）内定
5月 30日	平成 9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出
7月 3日	平成 9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知
7月 30日	平成 9年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出
7月 14日	平成 9年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知
平成 10年 12月 30日	平成 9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知 平成 9年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知



## 2. 調査体制

---

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者 境窪遺跡 竹原 学、長畦和正、荒木 龍

川西開田遺跡Ⅰ 高桑俊雄、村田昇司

川西開田遺跡Ⅱ A 竹原 学、高桑俊雄、長畦和正、村田昇司

川西開田遺跡Ⅱ B 神田訓安、高桑俊雄、村田昇司

調査員 太田圭郁、竹原久子、松尾明恵、宮島洋一

協力者 青木正志、赤羽包子、浅井信興、浅輪敬二、畔上治恵、荒井留美子、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、石井脩二、市場茂男、入山正男、上兼昭一、上兼操子、臼井秀明、内川初男、内沢紀代子、内田和子、大城よしの、大角けさ子、大月八十喜、小原きみえ、小幅幸男、開嶋八重子、鹿取 功、上條尚美、上條道代、神沢一郎、神田栄次、河野清司、小林 隆、小林みつる、小松正子、小松幸美、坂口ふみ代、塩原啓次郎、塩原てる子、塩原春子、芝田とり子、下谷亜希子、鈴木幸子、鷺見昇司、高荷敏之、高橋登喜男、竹平悦子、田多井 亘、堤 加代子、鶴川 登、寺島 実、中川利正、中村恵子、中村安雄、中山自子、畑 茂、林 和子、林 武佐、平出貴史、藤沢正秀、布山 洋、細田貞子、洞沢文江、前沢保亀、丸山喜和子、丸山恵子、御子柴長寿、道浦久美子、水野佳子、三村けさ子、實村操子、三宅康司、宮坂ふみ、宮部元子、三代沢二三恵、MIN AUNG THWE、村松恵美子、村山牧枝、甕 国成、望月佳代子、百瀬二三子、百瀬正彦、百瀬美枝子、百瀬義友、矢崎寛子、横山 清、横山真理、吉田 勝、米山禎興

### 事務局

<平成7年度>

松本市教育委員会 岩渕世紀（文化課長）、木下雅文（課長補佐）、窪田雅之

（財）松本市教育文化振興財団

事務局 大池 光（事務局長）、太田陽啓（局次長）、櫻井莊作（次長補佐）

考古博物館 熊谷康治（館長）、松沢憲一、古幡昌史、遠藤 守、秋山桂子

<平成8年度>

松本市教育委員会 岩渕世紀（文化課長）、熊谷康治（文化財係長）、田多井用章

（財）松本市教育文化振興財団

事務局 大池 光（事務局長）、手塚英男（局次長）、川窪 茂（次長補佐）

考古博物館 村田正幸（館長）、松沢憲一、近藤 潔、川上真澄

<平成9年度>

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、

近藤 潔、田多井用章、川上真澄

## II 遺跡の環境

### 1. 遺跡の立地と地形・地質

#### (1) 位置と地形

境窪・川西開田遺跡（1次調査地点）は、松本市神林川西集落の南西およそ1,000 m（川西開田）、1,400 m（境窪遺跡）、鎖川の現河床からは西およそ400 m（川西開田遺跡）、800 m（境窪遺跡）に位置し、標高640～650 m、北北東へ緩やかに傾く沖積堆積層面上（鎖川のはん濫原）、平均傾斜 10.8 / 1,000、鎖川河床 11.8 / 1,000）にある。遺跡および周辺は、土地区画整理事業によりほ場整備された水田地域となっているが、かつては古見原に続く森林や桑園・普通畑として利用されていた。

地形上は北流する鎖川の左岸のはん濫原上に位置する。このはん濫原は右岸の広大なはん濫原に比べ、台地（古見・波田面～更新世の波田礫層で波田ロームに厚く覆われる）や段丘地形に遮られ狭長（幅 250～300 m）である。たまたま両遺跡周辺に至って、この台地を浸食して流れるただ一つの川～三間沢川（旧鎖川扇状地と旧梓川・唐沢川扇状地の縫合線の凹地帯を流れる）の堆積層と接することにより、はん濫原の幅を1,000 mに広げている。三間沢川は両遺跡の西及び北を北東乃至東流し、鎖川本流へ入っている。また三間沢川は鎖川はん濫原と台地の間に凹地をつくっている。ちょうど遺跡の周辺は三間沢川の谷口に当たり、かつて山形村、旧今井村・神林村の境界線の集まる場所であったので境窪の呼名がある。遺跡周辺の鎖川はん濫原との比高は極めて小さく、左右両岸とも最近まではん濫の被害を受けることが多く、その都度の砂礫層の堆積が見られる。ほ場整備以前の地形面の平均傾斜は北北東へ、はん濫原 9.5 / 1,000、鎖川 12.5 / 1,000 である。

#### (2) 地層と堆積

両遺跡および周辺の堆積層は、鎖川（中・古生層系統）による砂質・ローム質砂質土と大礫（円礫）を含む中・細礫の河床礫（円礫）からなる。礫の種類は硬砂岩・砂岩が最も多く径が大きい。チャートは10cm内外、粘板岩は細礫となっている。このような土壌や礫が地層（土層）として見られるが、その堆積の状態は鎖川現河床に近い程砂礫層が発達し、西方に移るに従い砂質土・ローム質砂質土の占める割合が多い。両遺跡の河床礫層は表層近くか、地下160 cm前後の基底に見られる。表層近くのもの、両遺跡ともその走向がN-20°-Wを示し、かつてのはん濫や河流の方向を知ることが出来る。礫の大きさは大・中・細礫で、現河床に近づくものほど径が大きくなる。両遺跡ともそれぞれ一つの明りょうな河床礫層が見られる。

黄色～黄褐色の砂質土・ローム質砂質土の土層は河床礫層の走向に介在し、典型的なはん濫原の堆積状況を示す。この土層の多くは河床礫層との同時異相のものと考えられる。基底の礫層と考えられる層は、上部の河床礫層より一段階前の堆積と見られ、礫種は上部のものと同じである。一般に河床礫層に介在する土層は、鎖川右岸より厚い。これは左岸近くに発達する台地のロームや、三間沢川の影響によるものと考えられ、境窪では土層が2 mを超えところもある。

また境窪遺跡の発掘断面からは、これらの堆積層を浸食した谷状地形と、これを埋めた再堆積層の状態が発見されたのが注目される。

川西開田遺跡（1次調査地点） 堆積層は一般に河床礫層と並行する黄色い厚い砂質土が基層であるが、第2図で見ると多少の違いが現れている。堆積層の上部層では平安時代の住居址や遺物、下層部で縄紋時代の土器片・炭・割り石・花こう岩の焼け石等が発見された。たまたまこれらの土層断面は、遺跡を東西に切る溝8（平安時代以降に掘られた幅3 m、長さ30 m以上の溝）の側壁断面で観察することが出来、遺跡内の堆積層



は西に行くに従い、含む礫が少なくなり、やがて厚いローム質の砂質土に変わっている。溝の埋積土は、鎖川寄りの東端で厚さ1 mに及ぶ巨・大・中礫に覆われているが、西へ15 m移ると50 cmの厚さに減じ、さらに14 m移ると中・細礫混じり砂質土に変わる。続く7 m地点からは細礫混じり砂質土になっていて、溝内には暗褐色や黒褐色土は見られない。これによって溝内に及ぼした鎖川の状態が読める。

**境窪遺跡** 河床礫層は発掘地のほぼ中央を左右に黄色砂質土を介在させ、N-20°-Wの方向に走っている。礫層の下部は薄い黒褐色土層を挟んで、厚い黄色砂質土となっている。介在する黄色～黄褐色砂質土層は、川西開田遺跡（1次調査地点）よりも広くまた深く分布し、谷状地形に設けたトレンチA・B・Cでの観察では2 mを超えるところがあり、また中・細礫の砂礫層を挟むところも見られる。表層との間に黒褐色土層を持ち、この層が弥生時代の遺物包含層であるのに対し、黄色～黄褐色砂質土層には住居址の掘り込みはあるが、遺物を持っていない。したがって弥生時代以前の堆積と考えられる。またこの辺りは川西開田遺跡（1次調査地点）と違い、鎖川の影響のほか三間沢川の浸食、堆積が及び、川西開田遺跡（2A・2B次調査地点）と共通するところが見られる。三間沢川沿いには（南から境窪・川西開田2A・2B）一般に開田時に動かした土の下部は、厚い黄色土層で、境窪だけ暗褐色土層に覆われている。黄色土層の下部は暗褐色土層が広がり、さらにその下部は暗黄褐色土層となっていて、ほぼ均一な土層の構成が考えられる。黄色土層には弥生時代の住居・穴、平安時代の住居・穴が掘り込まれており、暗褐色土層は縄紋時代の遺物の包含層である。境窪の黄色土上の黒褐色土層は弥生時代の遺物の包含層となっている。

発掘地B区の南部にはトレンチC・A・Bをへりとして連ねた谷状地形が発見されている。発掘地西部の水田でも同じように右岸の境界線が二つのトレンチ（TP1・2）で、谷の真中が四つのトレンチ（TP3～6）で確認されている。この遺跡に沿う谷状地形は、鎖川から三間沢川の低地へ流入したものと考えられ、地形の高低差から推定し幅は50～100 mに及び、遺跡に沿う延長だけでも300 mを超える。さらに下流は北北東流し、川西開田遺跡（2A・B次調査地点）に添う形で、三間沢川に達したものと思われる。上流は境窪遺跡の南西部で大きく蛇行し、南乃至南南西に向かっている。この方向は凹地形の追跡によって、今井野尻橋以北のはん濫口に達する。トレンチC・A・B付近は最も曲流し、北北西・西・西南西・南西へ屈曲、一転して北北東へ向かっている。この谷状地形の堆積層をトレンチの断面でみると次のようになっている。トレンチAでは黒褐色土、黄褐色土の砂質土層を浸食し、黒色の間層を挟んで黄色の砂の堆積が見られる。断面で見られる谷状地形の側壁の傾斜は30°である。またこの流れは弥生時代中期の住居址（4住）を破壊している。

トレンチCでは、断面（第2図④）で見られる側壁の傾斜はやはり30°、基底の礫層までの深さは190 cmである。谷状地形に再堆積した土層（第2図⑤）は、上層から①黄色砂質土20 cm、②同（細砂混じり）20 cm、③同（粗砂混じり）30 cm、④同（細礫・粗砂混じり）20 cm、⑤同（礫がなくなる）20 cm、⑥黄色砂質土20 cm、⑦同30 cm、⑧同30 cmの互層が見られる。また側壁の斜面では、基底の礫層までの間の、深さ90 cm、130 cm、160 cmに、礫をのせた平たん面（幅430～80 cm）が見られる。前記の再堆積土（埋積土）の互層との対比から浸食面と考えられる。当時の浸食の状況が示されていて、おそらく盛んな浸食の後、堆積に移り次第にうめられて行ったものであろう。このトレンチで見られる川底の幅は3 mである。

なお、発掘地の西南部に6 m前後の間隔で、N-20°-Wの方向へ並走する二条の溝があり、谷状地形や弥生時代の住居址を切っているので平安時代かそれ以降の溝と見られている。

### (3) 地形の形成と遺跡

境窪やその周辺の地形形成には、鎖川や三間沢川の堆積・浸食が大きく関係していることは前にも述べた。特に境窪遺跡における谷状地形は、住居址・遺物との切り合いや再堆積などの状況から、地層（土層）の前後関係や時代の指標となっている。三間沢川は波田堆積以前に、すでに鎖川・梓川の両堆積層（波田礫層）の間

を流れ、2～3段の段丘地形を形成していた。また堆積した波田ローム面上では、縄紋時代の遺物も多数採集されている。今回の発掘では三間沢川扇状地の地形や地層に多くの解明を得た。以下、地形の形成順をまとめると次のように考えられる。

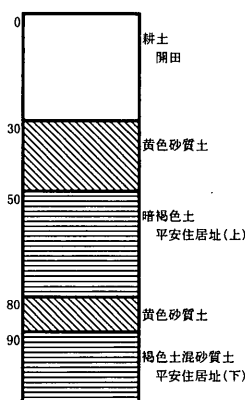
①境窪遺跡

- i 下底の礫層の堆積（基底層） 鎖川・三間沢川の河床礫・運搬土と風成土
- ii 暗黄褐色土層の堆積 〃
- iii 暗褐色土層の堆積（縄紋時代遺構・遺物の包含層） 〃
- iv 黄色～黄褐色土層の堆積 〃  
中央の河床礫層の堆積 —— 同時異相かそれに近い
- v 黒褐色土層の生成（弥生時代遺構・遺物の包含層＝生活面）
- vi 谷状地形の形成  
浸食 弥生時代の住居址を切る  
黒色の間層の拡大  
再堆積—埋積が終わる—平坦化
- vii 平安時代の生活面（住居址、溝1・2、穴）

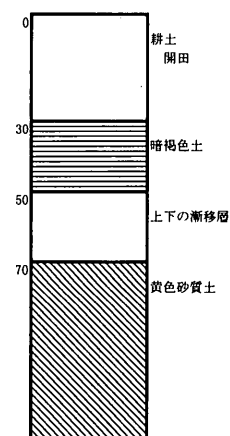
②川西開田遺跡（1次調査地点）

- i 下底礫層の堆積?
- ii 黄色～黄褐色土層、中央の河床礫層の堆積（同時異相か、それに近い）
- iii 平安時代の生活面（住居址・遺物）
- iv 東西性の溝の形成（溝8）
- v 溝内の再堆積（埋積土）
- vi 新河床礫の堆積（鎖川のはん濫）

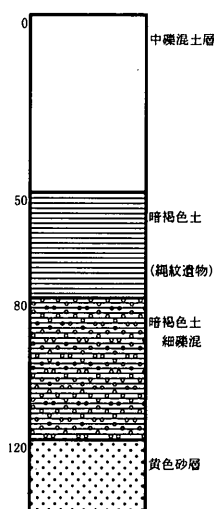
①川西開田 I



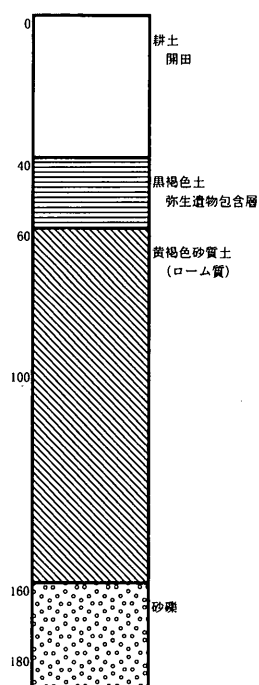
②川西開田 I 溝8 西部側壁



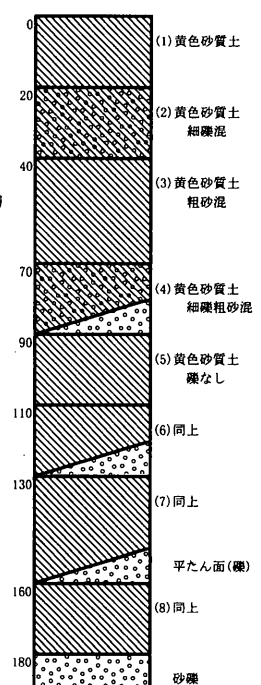
③川西開田 I 溝8 東部側壁



④境窪 谷状地形 トレンチC側壁



⑤境窪 谷状地形 トレンチC内部



第2図 境窪・川西開田遺跡の土層構成



## 2. 歴史的環境および過去の調査

---

境窪・川西開田遺跡の所在する今井・神林地区、すなわち鎖川右岸および三間沢川流域における遺跡の分布状況は、これまで必ずしも鮮明であったとは言えない。この地域における本格的な発掘調査の実施は昭和62・63年の三間沢川左岸遺跡を待たねばならず、それ以前の状況についてはもっぱら昭和30年代に行われた開田工事の折、神沢昌二郎氏ら中信考古学会メンバーによって行われた踏査の成果に負うところが多い。しかしながら広範にわたる開田工事に伴い地形が大きく変貌し、多くの遺跡の厳密な位置や範囲が不鮮明となり、今日に至っている。従って第1図に示した遺跡の範囲は必ずしも的を得たものではなく、記載漏れの遺跡も多々存在すると考えられる。今後現地における分布調査や発掘調査の積み重ねによって確固としたものにする必要がある。

### (1) 旧石器・縄紋時代の遺跡

旧石器時代の遺跡としては今井地区の上新田原遺跡から尖頭器、古池原遺跡よりナイフ形石器が採集されているが、いずれも遺跡の様相は不明である。

縄紋時代の遺跡は神林地区では左岸にのみ分布があり、今回報告の川西開田遺跡で中・後期の遺物が出土し、住居址を伴う集落遺跡が広い範囲に分布することが判明した他、三間沢川を挟んだ対岸の和田西原遺跡でも中期中葉の住居址が調査されている（昭和62年）。

鎖川を溯って今井地区では、鎖川右岸・左岸ともに多くの遺跡の存在が知られ、北耕地遺跡から上新田原遺跡にかけて中期を主体にした遺跡の分布が見られる。この地域で発掘調査の及んだ例としては、こぶし畑遺跡（昭和45年調査）から早期の集石遺構と押型紋土器、石器、中期初頭の遺物が検出されており、北耕地遺跡では平成8年調査地点（第2次調査）において晩期終末氷式期の土器片を伴う土坑が検出されている。

### (2) 弥生時代の遺跡

現在までに知られている遺跡は少ない。境窪遺跡では製瓦用粘土の採掘時に、神沢昌二郎氏によって中期前半期の多量の土器・石器が採集されており（第3図に地点を示し、出土土器については神沢氏の了解の下、本書に実測図を掲載した）、今回の調査で集落址の明確な姿が浮かび上がった。鎖川を溯った右岸のこぶし畑遺跡でも東海地方の岩滑式や貝田町式土器を伴う同時期の土器・石器が出土している。その他、今井の野尻地籍、北耕地遺跡、神林太子堂地籍等でも遺物の出土が報じられている。

このように、先に触れた北耕地遺跡の水式期の資料や、唐沢遺跡等山形村内で過去に採集された弥生土器等と併せて、縄紋文化の終末から弥生文化開始期の遺跡が松本平東部と同様にこの地域にも確実な分布を見ることが明らかとなりつつある。しかし中期後半や後期の確実な集落址は今のところ見つかっていない。こうした点では奈良井川右岸や田川流域とは様相を異にしており、居住と水稻生産の場としてこの地域が必ずしも適地ではなかったことが大きく影響しているものと考えられる。

### (3) 古墳時代の遺跡

今のところ確実な遺跡の存在は知られておらず、この時代にはまだ開発が及ばない地域と考えられる。しかし、今回報告した川西開田遺跡の資料中には点数こそ少ないものの、外来系を含む残存度の良好な前期土器が3個体出土している。付近に確実な集落址が存在するのか、松本平西部の古墳時代を考える上で今後注意すべき資料である。

#### (4) 奈良・平安時代の遺跡

鎖川流域における開発は、古墳時代後期に始まる奈良井川西部、神林や島立地区に大きく遅れ、9世紀以降にようやく開始された状況が窺える。これまでに三間沢川左岸遺跡（昭和62・63年）、川西開田遺跡（本報告）、境窪遺跡（本報告）、今井北耕地遺跡（第1次調査・平成7年）、こぶし畑遺跡等で発掘調査が行われ、多くの遺構・遺物を得ている。

三間沢川左岸遺跡は9世紀前半から突如として出現する大集落で、10世紀後半代まで継続、調査されただけでも250棟以上の竪穴住居址が検出された。大型住居址や掘立柱建物址群の存在、計画的な水路と村落構成、緑釉陶器や銅製・石製の帯金具、八稜鏡、「長良私印」銘の銅印の存在等、通常の集落とは異なった内容、展開を見せ、荘園を構成する集落と考えられている。後に報告する境窪・川西開田遺跡でも同時期の遺構・遺物が得られており、三間沢川左岸遺跡をとりまく小集落と考えられる。

こぶし畑遺跡では奈良時代の、今井北耕地遺跡では平安時代（9世紀代）の住居址が検出されている。

#### (5) 中世以降の遺跡

現在までに内容の知られている遺跡は非常に少ない。中世の遺跡としては三間沢川左岸遺跡（昭和63年調査地点）から屋敷地の区画溝が検出され、日本民俗資料館に所蔵されている鎌倉時代の青銅製孔雀紋馨が本遺跡内、発掘調査地とは県道を隔てた東側の水田から出土したものであることが近年判明した。それより北、和田の衣外では蔵骨に用いられた古瀬戸の四耳壺が出土している。

近世の遺跡では今井新田原遺跡（平成9年調査）において豪農屋敷跡の一角が調査されている。

#### 〈参考文献〉

- 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上  
松本市教育委員会 1974 『松本市今井こぶし畑遺跡緊急発掘調査概要』  
1979 『松本市和田衣外四耳壺出土報告書』  
今井地区誌編纂会 1993 『今井地区誌』  
松本市 1993 『松本市史』第二巻歴史編I



### III 調査の概要

松本市神林・今井地区に所在する境窪遺跡（松本市遺跡地図ではサカイクボ遺跡となっている）、川西開田遺跡は、ともに松本平の南西部、鎖川とその支流である三間沢川に挟まれた扇状地の緩斜面上、標高644～650 mに立地する縄紋・弥生・平安時代の集落址を主体とする遺跡で、現況は水田となっている。

この地域における遺跡の存在は昭和30年代に実施された開田工事や、製瓦用の粘土採掘の際、神沢昌二郎氏らにより遺物が採集され、周知されるに至った。しかし正式な発掘調査を経ていないこと、開田工事により地形が一変したこと等により、遺跡の広がりや遺構の状況等、現在まで詳細は不明なままであった。

今回計画された再圃場整備事業は対象が非常に広範囲にわたるため、平成5年に当該地域内における遺跡の存在や分布範囲について市教委は市内遺跡確認事業として試掘確認調査を行い、その結果から圃場整備事業に伴う事業として境窪遺跡および川西開田遺跡第1次調査の地点について決定、平成7年に本調査を実施した。その後圃場整備工事に供するための土砂採取が北接する工業団地予定地内で急遽行われることとなったため、この地域においても遺跡の存在を予想して平成8年に市内遺跡確認事業として試掘確認調査を実施、その結果を踏まえ、遺構の確認された2地点について圃場整備事業に伴う事業として本調査を行った（川西開田遺跡第2 A・2 B次調査）。

なお川西開田遺跡では遺物包含層が2面確認されている。すなわち上層は1次調査地点で平安時代、2 A次調査地点では弥生中期・平安時代、下層では1次調査地点で縄紋中期後半、2 A次調査地点で縄紋中期中葉、2 B次調査地点で縄紋中・後期の遺構・遺物がそれぞれ存在している。今回は時間的理由と深度的に施工が及ばないため下層の遺構についてはその存在を確認するだけにとどめ、各地点とも上層の生活面についてのみ調査を実施した。ただし川西開田遺跡2 B次調査では上層での遺構・遺物がほとんど検出されなかったため、下層の縄紋時代遺物包含層まで調査を進めた。

調査の方法は遺構の掘り込まれる黄褐色土層面まで重機で表土を除去した後、人力で遺構確認、掘り下げ作業を行い、調査終了後再び重機にて埋め戻しを行った。遺構などの測量記録は境窪遺跡および川西開田遺跡第1次調査では磁北方向に沿って、また川西開田遺跡第2 A・B次調査においては圃場整備工事で設置された図根点等から得た真北方向に沿って3 mの方眼を設定して行った。

調査の実施期間、面積、遺構遺物の詳細については以下に列記しておく。

調査期間	【境窪遺跡】	平成7年10月30日～平成8年1月9日		
	【川西開田遺跡】第1次	平成7年10月30日～平成8年1月8日		
	第2 A次	平成8年4月22日～平成8年5月10日		
	第2 B次	平成8年11月5日～平成8年12月12日		
調査面積	【境窪遺跡】	【川西開田遺跡】		
	A地区	2,425 m <sup>2</sup>	1次調査区	4,203 m <sup>2</sup>
	B地区	2,765 m <sup>2</sup>	2 A次調査区	1,521 m <sup>2</sup>
	合計	5,190 m <sup>2</sup>	2 B次調査区	1,181 m <sup>2</sup>
			合計	6,905 m <sup>2</sup>
検出遺構	【境窪遺跡】			
	竪穴住居址	12棟（弥生中期10・平安2）		
	平地建物址	2棟（弥生中期）		

掘立柱建物址	9棟 (弥生中期)
柱穴列	9条 (弥生中期)
墓 址	2基 (弥生中期、礫床木棺墓1・土器棺墓1)
土 坑	196基 (弥生中期)
ピット	648基 (弥生中期)
黒耀石集中地点	1カ所 (弥生中期)
土器集中地点	4カ所 (縄紋後期)
礫集中地点	1カ所 (弥生中期)
溝状遺構	3条 (弥生1・平安以降2)
谷状地形	1カ所

【川西開田遺跡】

竪穴住居址	16棟 (奈良～平安)
竪穴状遺構	1棟 (時期不明)
掘立柱建物址	3棟 (奈良～平安)
遺物集中地点	1カ所 (縄紋後期)
土 坑	38基 (縄紋・弥生・奈良～平安・近世)
ピット	246基 (縄紋・弥生・平安)
溝状遺構	8条 (平安～近世)

出土遺物

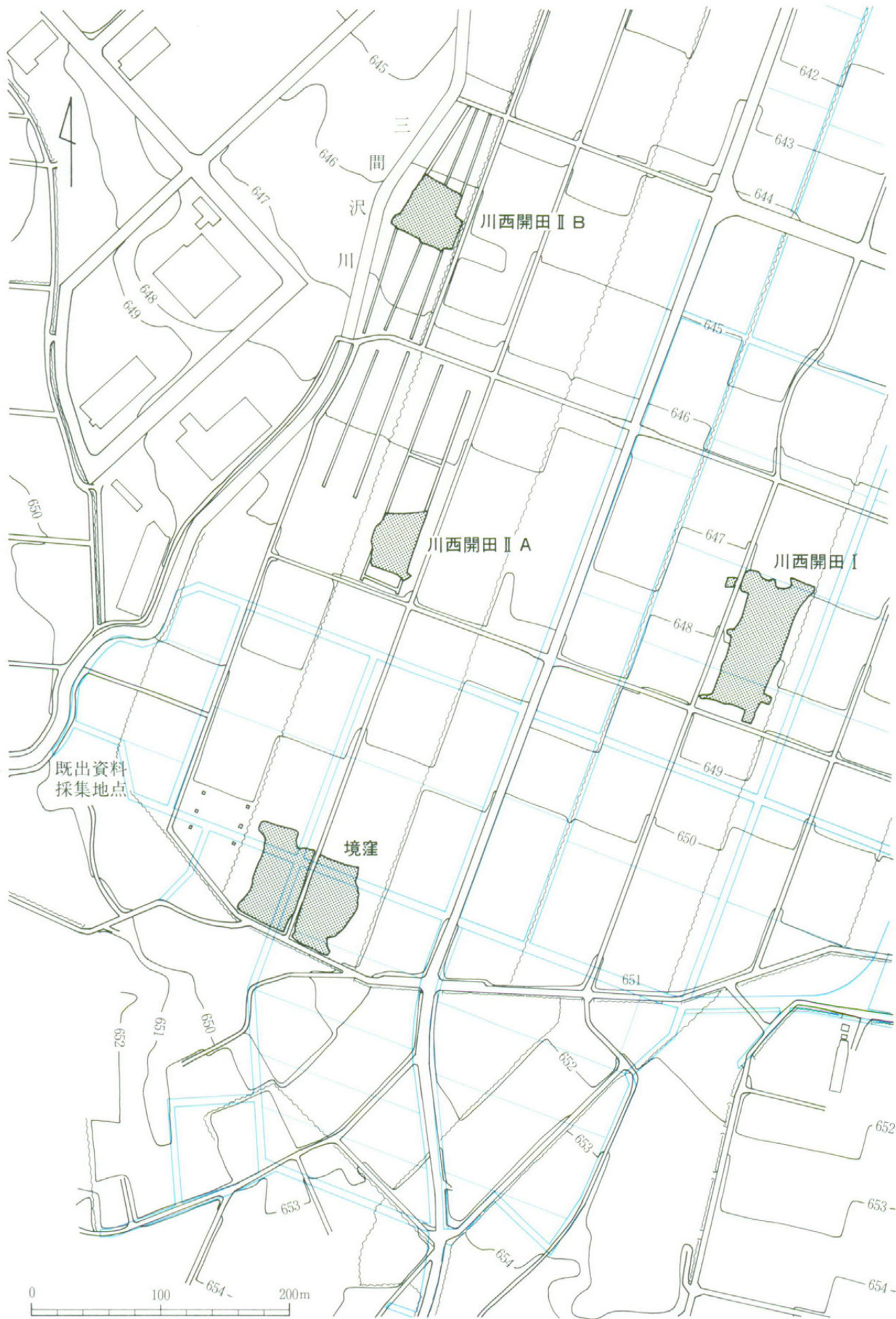
【境窪遺跡】

縄紋時代	土器 (深鉢)
弥生時代	土器 (壺・甕・鉢)
	石器 (打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・砥石等)
	石製品・土製品 (管玉、ミニチュア土器・紡錘車・匙形土製品)
	炭化材・人骨
平安時代	土器・陶器 (土師器・須恵器・灰釉陶器)

【川西開田遺跡】

縄紋時代	土器 (深鉢等)
	石器 (石鏃・石匙・打製石斧等)
	土製品 (土偶・土鈴)
弥生時代	土器 (壺等)
	石器
古墳時代	土器 (前期)
平安時代	土器・陶器 (土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器)
	石器 (砥石・編物石)
	鉄器 (釘・鎌・鏃・馬具・刀子等)
	銅製品 (円盤状銅製品)
	銭 (延喜通寶)
近 世	陶磁器

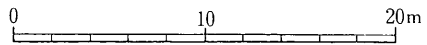




第3図 調査範囲



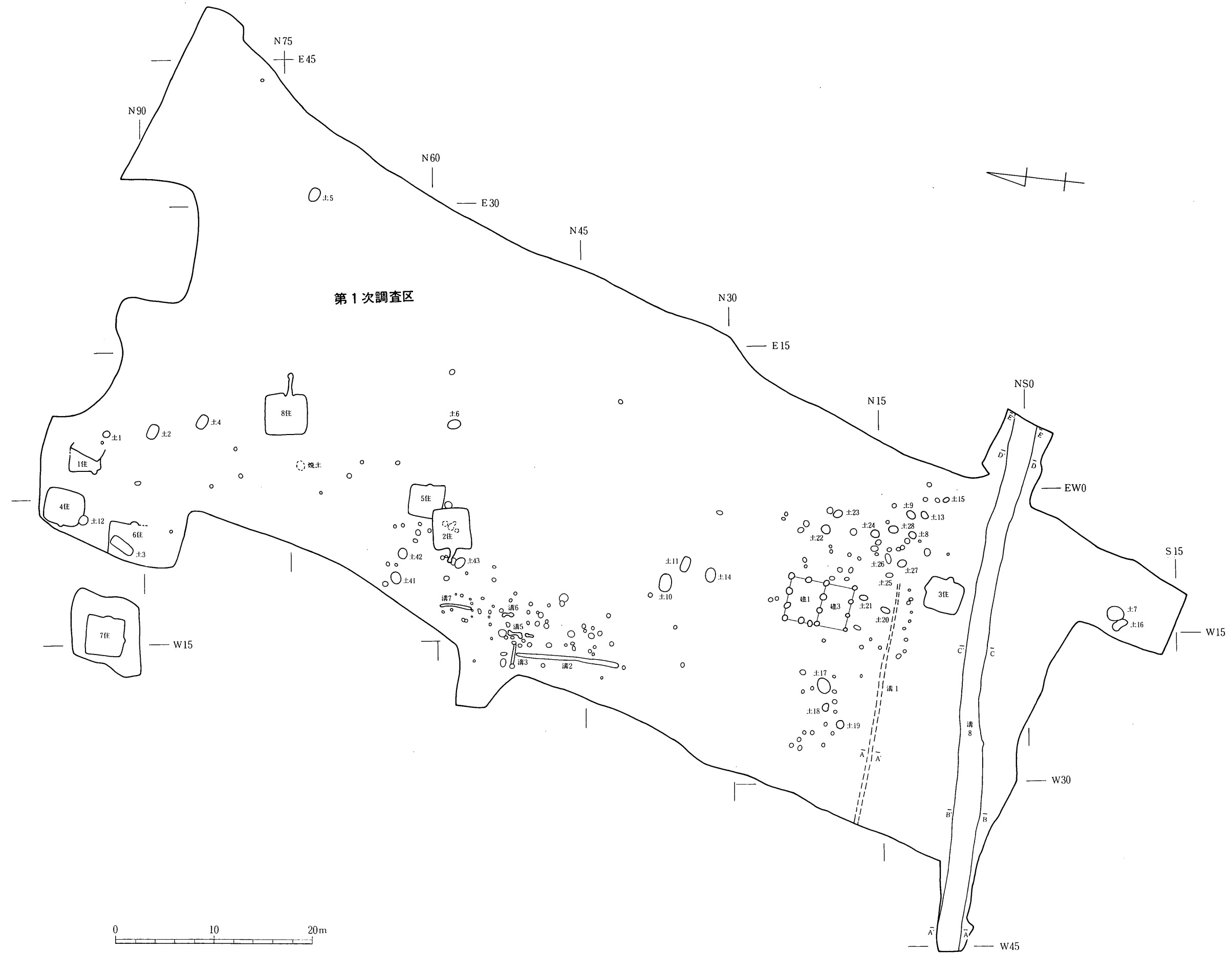
※土坑は番号のみ記入し、略号は省いた。



第4図 境窪遺跡 遺構配置

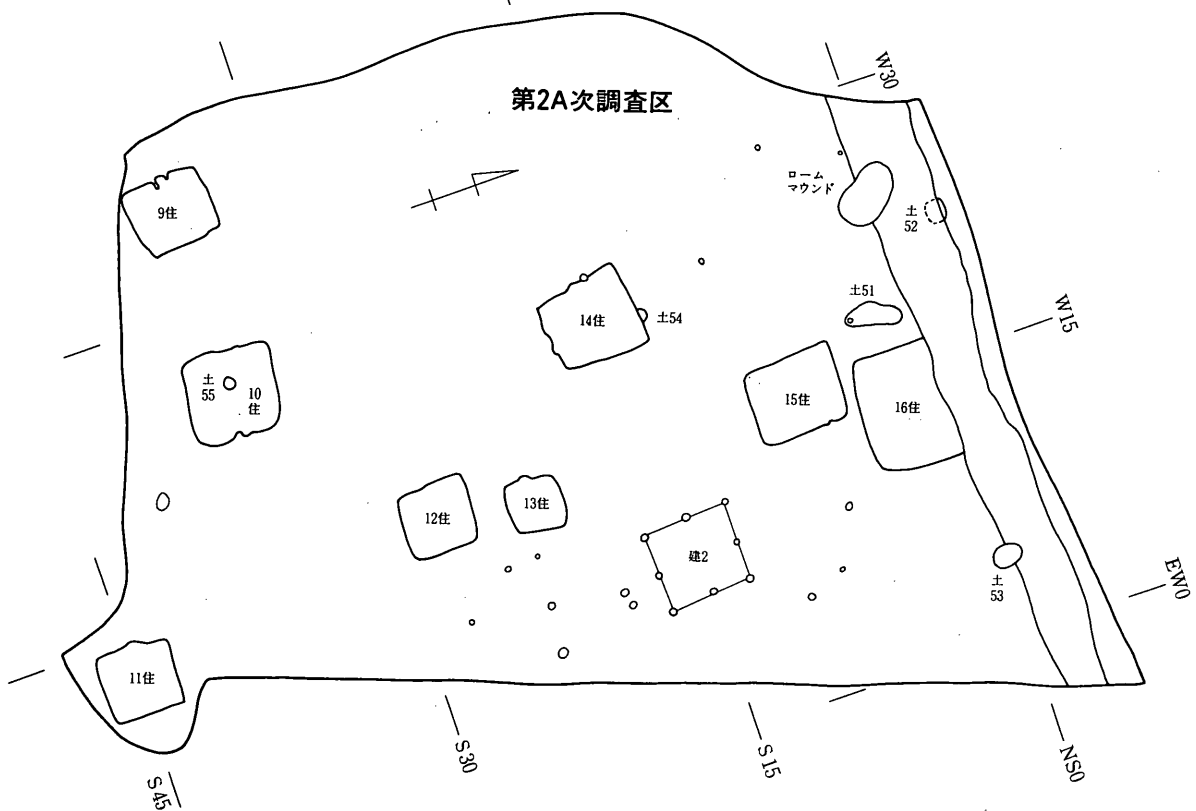
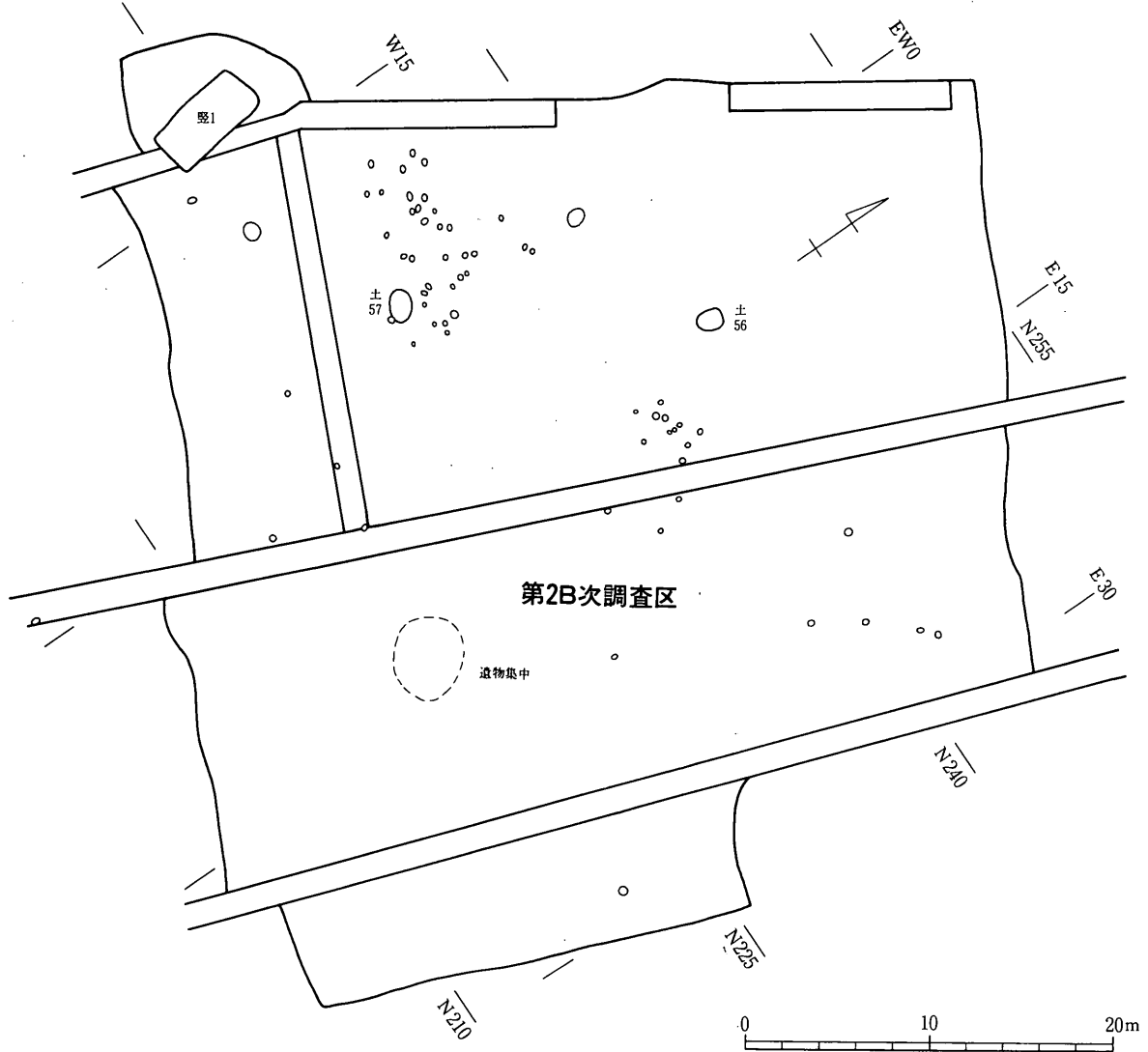






第5図 川西開田遺跡 遺構配置(1)





第6図 川西開田遺跡 遺構配置 (2)



## IV 境窪遺跡の調査成果

### 1. 検出遺構

#### (1) 竪穴住居址（第1表、第7・9～13図）

弥生時代中期前半10棟、平安時代7～8期に帰属するもの2棟が検出された。このうち弥生時代の竪穴住居址については保存状態が良好であり、土器様相から見て各遺構間には数型式にわたるような時間差は認められず、中期前半期の特定段階の様相を示す資料と思われる。各遺構の詳細については一覧表に譲り、ここでは弥生時代の竪穴住居址の全体的な傾向について、遺構の属性毎に概観しておきたい。

**平面形態** 大半は明確な円形を呈するもの（6～8住）と、方形を呈するもの（4・5・9・10住）の二者に大きく分かれる。さらに少数だが3住のように方形に近いが一部のコーナーが著しく曲線を描いたり、あるいは12住では小判形に近い形態を呈する等、両者の中間的形態とも捉えられるものが存在する。

**規模・方位** 各住居址とも概ね直径（長辺）4.2～5.5 m、床面積15～22 m<sup>2</sup>の範囲に収まるが、円形の6住のみ直径が6 mを超え、床面積も28 m<sup>2</sup>と飛び抜けて大型である。柱穴のあり方から拡張の跡が窺え、この住居址が長期にわたって営まれたことを示唆している。住居の方向は方形基調の4・5・9・10住および3住の場合、ほぼ例外なく長軸を東西方向に向けている。円形基調の6～8住や12住では長径を南北方向に向けている。柱配置や炉から見てそれら長軸や長径の方向が住居の軸方向と捉えられる。

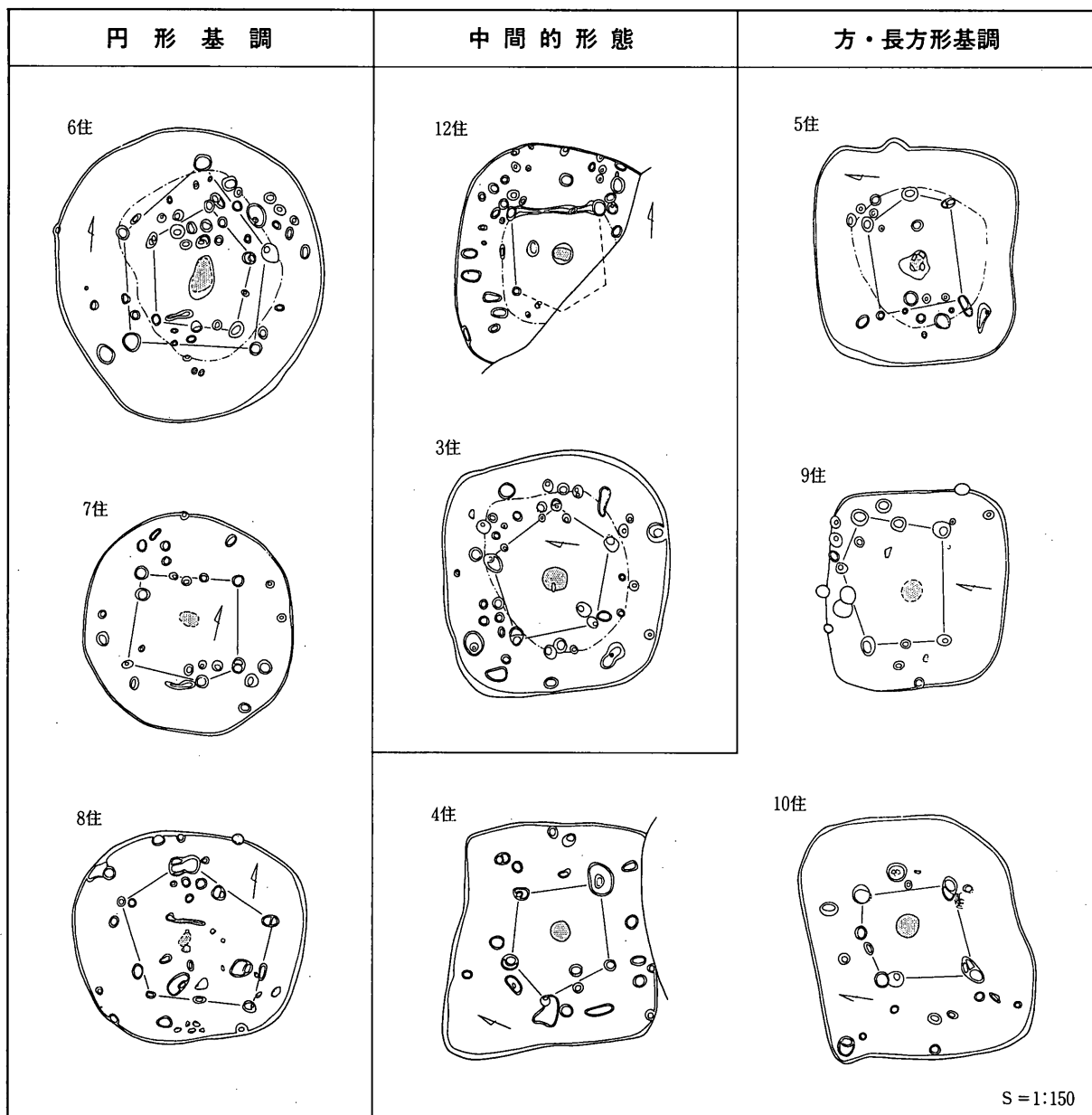
**炉** 形態はすべて地床炉で、直径30～50 cm程を測る。6住のみ遺構の規模に比例して炉も大きく、明瞭な掘り込みが見られるが、その他の住居址では平坦か、わずかに窪む程度である。5住では住居プランの対角線方向、4カ所に縁石が埋め込まれているが、隙間には空間が設けられ、「石囲い」とはならない。

**柱配置** 主柱穴のあり方には明瞭な規則性があり、5本柱穴で壁と炉のほぼ中間の位置に配置されるのを原則としている。ただし配列は平面形が円形基調の住居址では正五角形に近いのに対し、方形基調のものでは（長）方形に近い配置となる傾向が窺える。各主柱穴は掘立柱建物址と比較して径が小さい（15～20 cmが主体）。主柱穴以外にも支柱穴や垂木穴様のピットが壁下等に見られる場合がある。

**床面** 床面のあり方にも規則性が窺え、特に3・5・6・12住で明確である。これらの住居址では主柱穴を結んだ線の内側では非常に堅緻なタタキ床を呈するのに対し、その外側では軟弱でやや不明瞭な床面となり、その境界も鮮明である。その他の住居址でもこうした傾向は窺える。その他柱穴間およびその外側では小ピット状の凹凸が多く見られるのも特徴である。床面のレベルは概して中央部で緩く低い。5住では南西隅のみ他より高まっており、あるいは出入口を示唆しているのかもしれない。

**その他の屋内施設** 12住では柱穴間に間仕切り溝状の掘り込みがあり、7住でも同様なものが一部に見られる。また8住では炉に近接して溝状の掘り込みが設けられる。3住と5住では南西隅に不整楕円形の浅いピットがあり、内部にミニチュア土器が埋設されていた。

**炭化材と覆土の状況** 大半の住居址では壁際に暗黄褐色の流入土が認められ、中央部の上層では暗色の堆積土が覆う。周囲から徐々に土砂が流入し埋没していった過程が読み取られる。5住や6住では床面中央部に上屋の構築材に起因すると考えられる炭化材、炭粒の集積が見られるが、壁際の流入土の堆積範囲にはまったく認められず、上屋倒壊後やや時間を置いてから形成、恐らく意図的に焼却された可能性が高い。4住でも床面より若干浮いて中央部に焼土や炭が認められ、遺構の埋没過程で形成されたものと捉えられる。一方7住では垂木等の炭化材が床面上に残されていたが壁際まで達しており、流入土の堆積以前すなわち廃絶後早い段階で焼失（焼却）したものと捉えられ、他と様相を異にしている。

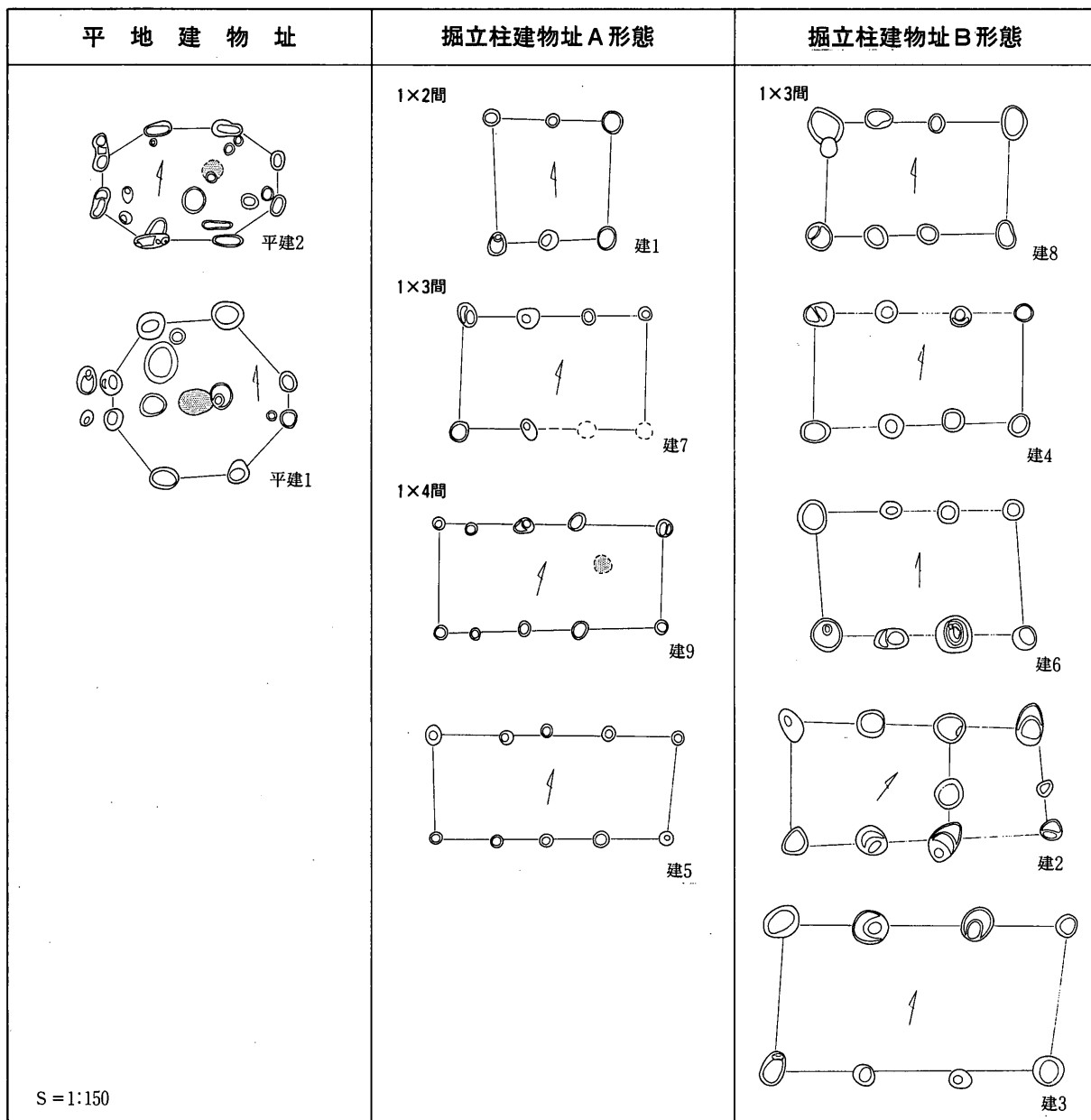


第7図 境窪遺跡 竪穴住居址の形態と柱配置

**遺物の出土状況** 4～7住で比較的まとまった量の遺物が得られているが、それらのうち5・7住では支柱穴間、あるいは壁際の床面上に完形の土器や石器が多く残されていた。従って先に触れた覆土の状況と併せて推察すれば、住居の廃絶に伴いそれらの遺物も廃棄された、あるいは置き去られた可能性が高い。5住では個体数も多く、未着柄状態の太型蛤刃石斧が2本整然と並べ置かれていたり、北東部では黒耀石の微細なチップや剥片が床面に散乱し、あたかも石器製作が行われたかのような状況を呈していた。石鏃の出土量や剥片の接合資料が多いこともそれを裏付けている。

その他4住でも遺物の出土が多かったが、5住や7住とは異なり、炉の周辺から若干床面より浮いて同一個体の壺・甕の大型破片が散乱する状況が看取された。同一レベルに存した焼土や炭化物と同時期に廃棄されたものと考えられる。

**住居址の分布状況** 大型の住居址である6住をはじめ円形基調の住居址(7・8住)は遺構密度の最も濃い一帯にあり、南北方向に近接して連なるのに対し、方形系統のものはその東側に列を変えて、南から4・5・9・10住の順に互いの間隔を大きくとって直線状に配列し、掘立柱建物址と分布が重なる。中間的な形態の3・4住は南寄りに位置している。



第8図 境窪遺跡 建物址の形態と規模

(2) 平地建物址 (第1表、第8・14図)

竪穴住居址のような掘り込みがなく、黒褐色土層(旧地表)面に炉を設け、柱穴が八角形に配列される遺構がB区より2基検出された。竪穴住居址や掘立柱建物址とは構造が異なる建物であり、また地表面付近に生活面を設けていることから、平地建物址と呼称した。

床面は黒褐色土層の上面ないしは層中にあるためか、把握は不可能であった。炉は恐らく地床炉と考えられ、焼土のみが捉えられた。平建1は北東寄り、平建2では中央に設けられている。

柱穴は平建2では長楕円形ないし瓢箪形を呈し、その長軸方向のあり方から建て替えによるピットの切り合いとは考えにくい。むしろ2本程の柱材を組み合わせて一つの柱穴に立てた結果と考えたい。平建1では掘立柱建物址と同様、掘り込みの大きなピットで構成され、竪穴住居址の柱穴とは異なっている。

どちらの建物址も長軸を東西方向に向け、この点では方形基調の竪穴住居址や掘立柱建物址と共通する。

遺構の帰属時期は、一括遺物等は得られなかったものの、検出面やピット内から得られた土器片から見て、竪穴住居址と同様中期前半期と考えられよう。



### (3) 掘立柱建物址 (第2表、第8・14・15図)

A区から1棟、B区から8棟が検出された。これらは柱穴のあり方から二者に分けられ、ここではA形態、B形態とする(第4図)。

A形態は柱穴が概して小さく(15～25cm)、柱配置も不揃いになりがちで貧弱な感を受ける。B形態は柱穴が大きく(30～40cm主体)掘り込みもしっかりしており、配置も整然としている。これらは柱の太さや建築精度を反映しており、上屋構造の違いに起因するものと考えられる。

両形態とも基本的に梁間は1間で、桁を東西方向に振っている。A形態には2×1間(建1、6.5㎡)、3×1間(建7、9.3㎡)、4×1間(建5・9、11.1～11.6㎡)の3種の形態・規模があり、規模に応じて柱数が増している。B形態は3×1間のみだが、規模的には11㎡前後のもの(建4・6・8)とそれより大きいもの(建2・3)が見られる。

建物址に伴う諸施設として、A形態の建9では地床炉と思われる焼土面があり、B形態の建2では東半部のみ梁間が2間構成となっており、規模等から見て補助柱穴と捉えられる。これらのことと、先に触れた両形態における柱穴の規模や配置のあり方から穿って推論するならば、A形態は平地式、B形態は高床式倉庫等、頑強な構造を必要とする建物とは考えられないであろうか。

掘立柱建物址からの遺物の出土は多くないが、柱穴内から大形の土器片が出土する事例がしばしば見られる。特に建6では北西隅柱穴の埋土中位、恐らく柱の周囲に、甕1/2個体分の破片を意図的に敷いていた。

掘立柱建物址の分布は建1・2を除いて竪穴住居址群の外(東)縁部、先に触れた方形基調の住居址の分布域とほぼ重なる。従って方形住居址の5住と10住では掘立柱建物址との切り合い関係があり、いずれも建物址が住居址に先行することが判明している。建1・2のみ住居址や他の建物址群とは距離をおいて東側に位置している。これは両者の間には礫層帯が走っており、意図的にそれを避けた結果2棟のみ東側に偏在したか、あるいは建2のみ柱配置や軸方位が異なっている点を評価して、位置的な問題と絡めて他の建物址とは異なる性格を与えることができるのかもしれない。

### (4) 柱穴列 (第2表、第16図)

3基以上のピットが一定の間隔をもって直線的に配列するものを積極的に構造物として捉えた。多くは柵ないしそれに類する施設と推定されるが、整理段階で恣意的に捉えたため遺構としての成否が確実でないものも含まれている。各遺構の軸方向は掘立柱建物址と同じく東西方向にとるか、北西-南東方向に走るものが大半である。柱穴列を構成するピットはA形態の掘立柱建物址と同様、径の小さいものが多い。柱間間隔や軸の精度も建物址ほどには厳密でない。

### (5) 墓 址 (第16図)

確実なものとして礫床木棺墓1基と土器棺墓1基がある。

礫床木棺墓は建7の北方で検出され、東西に長軸をとる長さ1.2m、幅1mの長方形の墓壙である。覆土は小円礫を多量に含み、その上面付近から少量の人骨片と土器片が出土したことから礫床をなしたものと考えられる。また墓壙の東西壁下、木棺小口板の部分は底面を一段低く掘り窪めている。想定される木棺の大きさは長さ1m、幅0.8m程度であろう。その他建9と重複して検出された土194も、長さ72cmと小型の土坑ではあるが、底面に小口痕状の窪みが見られ、あるいは木棺墓の可能性もある。

土器棺墓は5住の南側で検出され、礫床木棺墓とは位置的に近い。口縁部を欠いた(後世の削平による可能性が高い)胴径25cm、現存高28cmの深鉢を正位に埋設し、別個体の壺胴部大形破片を蓋にしている。土器棺内部には暗褐色土が堆積するが骨は検出されなかった。

## (6) 土坑 (第3表、第17～23図)

総数196基が検出された。直径50cm以上の穴のうち明らかな柱穴を除いたものを土坑として扱ったが、一部ピットに含むべきものが残る(P類)。また自然遺構と見るべきものが多数含まれる(N類)。主に形態上や覆土の特徴から、大まかに以下のように分別される。詳細は一覧表を参照されたい。

**A類** N類を除いて土坑の主体をなす。底面が平坦で壁との境界が明瞭なものを一括した。A3類の土194のように壁下に木棺小口板痕状の落ち込みが見られるものもあり、他大きな礫を伴う土173・174等、墓の可能性のあるものを含んでいる。主に平面形態の違いから次の4種に細別できる。分布はB区に集中、住居址やピットなど重なる。

**A1** 土15・16・17・26・42・43・64・131・148・182・183・214が該当する。

直径50～100cm程の整った円形を呈するもの。壁は直か斜めで、底面は平坦。A区南半部に多い。

**A2** 土14・18・36・46・50・52・94・107・135・143・147・154・155・162・163・171・173・176・184・195・196・197・203・208等が該当する。

A類の主体をなす。長径60～180cm程の楕円形を呈し、壁は傾斜する。覆土中に小礫や大礫の伴うものがある(土173・176・195等)。B区に多く分布している。

**A3** 土174・192・194・198・213が該当する。

長辺68～126cmの長方形を呈するもの。大礫が少量伴うものあり(土174・213)。B区南部に多い。

**A4** 土1・2・172の3基が該当。長径130～220cm程の長楕円形を呈するもの。

**B類** 壁から底面になだらかに移行し、船底形を呈するもの。大きさの違いから二分される。

**B1** 土8・24・73・74・142・153・166が該当する。長径70～80cm程の円ないし楕円形を呈する小形の土坑。

**B2** 土4・133・138・144・204・210・211・212が該当する。

長径が100cmを超す楕円形の大形土坑で、土138では隣接して焼土面が存在。ほとんどのものがB区に分布している。

**C類** 土11・21・38・80・106・145・167・168が該当する。円ないし楕円形のA類土坑の底面に、壁に接してピット状の一段深い底面が伴うもの。

**D類** 土29・189が該当。大形で明瞭な掘り込みを有するが、平面形が不整なもの。土189では焼土面が伴い、石器類の出土が豊富である。

**L類** 土22・39・51・61・68・69・75・77・86・87・104・116・117・118・121・122・123・124・125・128・152・156・158・164・165・169・179がこれに当たる。

三日月形を呈する平面の内湾側壁面がオーバーハングし、外側の壁面が斜めにガラガラと立ち上がる特徴的なもの。2個対になるものもあり、その特徴からロームマウンドと捉えられる。土124等覆土上面に焼土面を伴うものや、遺物が多く出土するものもあり、注意される。

**N類** 楕円形や不整形を呈し、非常に浅く壁の不明瞭なもの。覆土は均質で混入物や遺物をまったく含まず、弥生時代の包含層である暗褐色土層下面の凹凸を落ち込みとして捉えた可能性が高い。A区の土坑の大半が該当する。

**P類** 土62・93・101・151・202・215が該当する。小形の円形を呈し、2段底となるものも多い。むしろピットとして扱うべきか。

## (7) ピット (第4・16図)

総数648基が検出された。多くはB区の住居址や建物址、土坑群と分布が重なっている。土坑と同様、A区には旧表土である黒褐色土の凹凸をピットとして捉えたものが多く、柱穴等人為的なものは少ない。

B区におけるピットの分布状況としてさらに詳細に観察すると、まず他の遺構と同様、礫層帯にはほとんど見られないことで、意図的に構築を避けているものと思われる。次にピットが4～6 m程の範囲に集中して設けられる部分が見られることである（ピット群1～4）。

ピット群1は8住に北接し、3基の土坑とともに南北5 m・東西8 m程の範囲に33基の円形ピットが集中する。検出面からは遺物の出土も多い。

ピット群2は4住と6住の間にあり、先に触れた黒耀石集中と一帯をなすものである。東西南北4～5 mの範囲に26基の円形ピットが黒耀石集中を囲むように分布する。

ピット群3はピット群2の西、建9の北側にあり、接して土137～139等が位置する。南北4 m・東西5 mの範囲に33基のピットが集中する。

ピット群4は11住の北にあり、東西南北5 m程の範囲に22基の円形ピットが集中している。

これら特にピットの集中が著しい地点は、柱穴様の円形ピットが主体をなし、明確な柱配置はとらないものの平地建物等、何らかの建物が存していた可能性が高い。

検出されたピットには内部に完形、あるいはそれに近い土器の伴うものがある。P 306・320・441・442等が該当し、それらのうち明らかな柱穴とみられるP 442では1個体分の深鉢大形破片が埋め込まれており、その状況から柱を囲んで配されたものと考えられる。

#### (8) 黒耀石集中地点（第4図）

B区の南部でその存在が確認されたが、凍土の除去作業中であつたため遺構を破壊してしまい、図面および写真記録を成し得なかつたものである。出土状況を復原すると直径15～20 cm程、深さ約10 cmの小ピット内に黒耀石原石5点、石核7点が集積していたものである。これらの石材は住居址等他の遺構出土品に比較して個体が大きく、加工も進んでいない。また剥片も含まれない。従つて本遺構の性格は石器素材のデポとして捉えることが妥当であろう。そうした性格から考えて本遺構が屋外に単独で存在したとは到底考えにくく、何らかの施設内に設けられたものと見るべきであろう。遺構の周囲には衛星状に小ピットがとりまいていく状況が看取され、柱配置が明確に定まらないため今回積極的に捉えなかつたが、平地式、あるいは簡易な掘立柱建物址を構成していた可能性が高い。

#### (9) 土器集中地点（第4図）

A区の中部から北部にかけての一帯で、地山の黄褐色土中に1～2個体分の土器片が集中的に包含される地点が4カ所検出された。土器はいずれも無文の深鉢のみで、底部に網代痕を残す縄紋時代後期の粗製土器である。黄褐色土層は約30 cm程の厚さをもっており、基本的には無遺物層である。その下層には黒褐色土層があり、川西開田遺跡第2次調査の所見から縄紋時代中～後期の遺物包含層であることが判明している。従つてこれらの遺物は本来黒褐色土層上面に存したものが黄褐色土の堆積時に攪乱されたものと捉えたい。なお境窪遺跡の調査範囲においては縄紋時代の遺構・遺物は希薄であり、北方の川西開田遺跡に分布の中心があるものと考えられる。

#### (10) 礫集中地点（第23図）

B区南東部、谷状地形に接して検出された。鎖川に由来する円礫・角礫46点が南北2.6 m、東西1 mの範囲に集中して見られたが、散在的で積み重なつてはいない。層位的には弥生時代の表土である黒褐色土層中にあり、地山の黄褐色土層面からは浮く。礫の中には砥石が含まれている。



#### (11) 溝状遺構 (第 23・24 図)

B 区南部から西部にかけて走る 2 条の溝状遺構を検出した。溝 1・2 ともに幅 20～45 cm、深さは最深部で 20～30 cm 内外を測り、6～8 m 程の間隔を保って直線的に並走、あたかも道路側溝のような状況を呈する。その方向は N-21° - W を指す。溝の断面形状は逆台形を呈し、埋土の下半は砂礫である。地形の傾斜に合わせ、南から北への水流のあったことを物語っている。

このように溝 1・2 の形成には多分に計画性が窺えるが、その帰属時期を決定するに足る根拠には恵まれない。唯 1 点、溝 2 より須恵器甕片が出土していることと、谷状地形の埋没後に構築されていることから古代以降の遺構であることがようやく判明するのみである。

その他、礫床木棺墓や土 204 と重複して浅く黒褐色土が堆積した溝 3 がある。掘り込みは不鮮明で、明確な壁をなさない。平面的には礫床墓付近を屈折点とした L 字形を呈し、東側の端に土 204 がある。北端部の底面には大形の砥石状の石器が遺存し、隣接して円形ピット 2 基が見られた。

#### (12) 谷状地形 (第 24 図)

A 区南東隅～B 区南部にかけて、北側に大きく弧状に張り出して暗黄褐色砂質土に覆われた地域が見出された。その性格を追求するため B 区に 3 ヶ所のトレンチを設けの断面観察を行った結果、弥生時代の住居址 (4・16 住) を切る谷状の落ち込みが埋没したものであることが判明した。検出面からの深さ 2 m 程までは埋没土に土質の変化はほとんどなく、急速に埋没したものと考えられる。その堆積時期は弥生時代以降、下限は 9 世紀代に位置付く 2 住が埋没土を切ることから平安時代前期と考えられる。ただし谷状地形そのものはおそらく鎖川の旧流路として弥生時代には既に存在していた可能性が高い。確認のため B 区西隣の水田に 6 ヶ所の試掘坑を設け追求した結果、B 区のとレンチ A～C と同様、TP 1・2 においても弥生時代の遺構の縁を確認、それより西側の試掘坑では砂礫を主体とした堆積が観察され、谷状地形の内部に位置することが明らかとなった。弥生時代以後も浸食作用により谷状地形が拡大し、結果として住居址等の遺構を破壊するに至り、平安時代までのある段階に埋没したものと考えられる。なお B 区南西の畑地には現在でも緩い窪地が残っており、遺物の散布も認められる。「境窪」の名の由来であろうか。窪地を挟んだ西側、三間沢川との間の微高地からも多くの遺物が採集されており、かつて谷状地形を挟んだ東西両岸に集落が展開したものと考えられる。

第1表 境窪遺跡竪穴住居址・平地建物址一覧

規模はすべてcm単位、面積はm<sup>2</sup>である。( )は推定値、〈 〉は残存値、深さは検出面からの最大値を示す。

住 No.	地 区	平面形	平面形		主軸方位	炉 位 置	主柱穴	遺 構 所 見	時 期
			長・短・深	床面積					
1	A	方 形	長<164 短<120 深 -48	<1.1>	N-83°-E	石組カマド 東 壁 北寄りか?	不 明	遺構の大半が区域外にあり、北東部のみ調査。黄褐色礫混土層中に構築され、壁・床ともに明瞭。カマドはわずかに左袖のみ確認、主要部は未調査。出土遺物はカマド脇に存した土師器杯1点のみ。	平 安
2	A	方 形	426 408 -12	15.5	N-83°-E	石組カマド 東壁中央	4基 P1~4	土107を切る。黒色土層(弥生時代包含層)中に掘り込まれる。覆土は褐色を呈し、床面は黒色土層中にあるため黄褐色土を薄く貼るが、周辺部では軟弱不明瞭。カマドは石材が抜き取られ、土師器甕片等とともに火床面上や北東隅の床面上に置き去りにされる。遺物はカマド内および周辺から多く出土し、土師器杯・碗・鉢・円筒形土器・甕等がみられる。また弥生土器の大形破片が混入する。	平 安 7 ~ 8 期
3	B	隅丸方形	520 496 -32	21.4	N-76°-E	地床炉 床中央	5基 P1~5 径25~40 深30~55	黄褐色土層中に構築される。覆土は壁際に流入土が観察され、自然堆積の様相を呈している。壁は直に掘り込まれ、床面は主柱穴を結んだ範囲内では非常に堅緻な貼床をなし、外側では軟弱である。炉は底面がわずかに窪み被熱・硬化が著しい。主柱穴は五角形配置で掘り込みは非常に深い。また主柱穴周辺には浅いピット状の凹凸が顕著にみられる。土器の出土は覆土中、床面共に非常に少なく、一括品、完形品は得られていない。なおP12内にミニチュア土器壺が正位に埋設される。それに対し石器は、有茎鏃形石器3点、接合資料1例2点を含む119点という多量の出土を見た。点数比では黒耀石が9割以上を占める。	弥 生 中 期
4	B	長方形	500 468 -12	(19.9)	N-65°-E	地床炉 床中央	5基 P1~5 径22~28 深20~37	土197を切る。谷状地形に南壁を切られる。覆土は自然堆積の様相を呈するが、堆積の過程(Ⅱ層上面)で中央付近に焼土面が形成される。壁・床は小礫混じりの黄褐色土層中にあり、貼床は平坦・明瞭。炉は明瞭な掘り込みがなく、被熱面がわずかに窪み程度である。柱穴は五角形配置で、各穴とも深さ30~40cm程を測る。柱穴~壁間には浅いピットが多数ある。土器は中央やや西寄りのⅡ層中に壺・甕等の一括遺物がみられる。石器は有茎鏃形石器3点、明確な遺構に伴ったものとしては本遺跡において唯一の黒耀石製鏃形石器を含む96点の出土を見た。南壁下西寄りの床面からは磨製石鏃、土製紡錘車が出土している。	弥 生 中 期
5	B	隅丸方形	452 472 -14	18.3	N-81°-E	地床炉 縁石×4 床中央	5基 P1~5 径20~35 深10~28	黄褐色土層中に掘り込まれる。覆土は地山の黄褐色土を多く含む流入土(Ⅲ層)が壁際に、中央部には暗褐色のⅠ・Ⅱ層が堆積する。このⅡ層中には住居の上屋根材と考えられる炭化材、炭粒が多量に存し、床面を被っているが、壁際のⅢ層中には全くその痕跡がない。床面は主柱穴より内側では非常に堅緻な貼床をなし、軟弱な壁側とは対照的である。南西隅では周囲より面が高く、あるいは出入口に関係するものか。炉は縁石が四方に配され、底面は被熱硬化が著しい。主柱穴の配置は整然とした五角形配置ではなく、むしろ方形4本配列の東辺に1本を足した状況である。あまり深くない。遺物は主に貼床部分の床面上~Ⅱ層中に一括遺物が多い。北西部では未着柄と推定される大型蛤刃石斧2点が床上に並べられ、南壁沿いに甕、北東寄りにも大型蛤刃石斧と倒立状態の壺、北西寄りにも壺がある。この他、北東隅付近の床面上には微細な黒耀石フレイク・チップが集中し、床土内にも多数めり込んでいた。南西隅の浅いP8には杯形のミニチュア土器が正位に埋設されている。石器は遺構単位として見ると質・量共に最大級の石器群を形成しており、有茎を主体とする鏃形石器7点、接合資料5例10点等を含む162点の出土を見た。所謂大型蛤刃石斧3点のほかにイレギュラーな磨製斧形石器1点、それらと対応関係を持つかは不明であるが大形の砥石状石器も1点出土している。点数比では黒耀石が9割を占める。	弥 生 中 期
6	B	円 形	628 600 -26	28.1	N-3°-E	地床炉 床中央	5基 P1~5 拡張後 P6~9・11 径20~40 深11~44	溝2に切られる。検出住居址中では最大規模で、黄褐色土層中に構築される。覆土のあり方は5住とまったく同様である。すなわち壁際に暗黄褐色の第1次堆積が形成され、その分布域を除いた床面は上層構築材によると考えられる炭粒や焼土に覆われている。その後、自然堆積により埋没した過程が窺える。床面は主柱穴より内側で堅い貼床が認められ、中央部が緩く窪む。柱穴の外側では貼床がなく、軟弱な床面をなす。炉は長楕円形の浅い皿状を呈し、被熱による硬化が著しい。主柱穴は掘り込みが深く、二重に巡ることから一度の建て替え・拡張が行われたものと考えられる。柱穴周辺には浅い円形のピットないしは窪みが集中的にみられる。遺物は炭・焼土の分布域・層位に多いが土器は破片が主体である。石器は5住に次ぐ質・量共に最大級の石器群を形成する。未製品を含め有茎を主体とする鏃形石器7点、所謂大型蛤刃石斧1点、礫石器類10点、接合資料3例7点、遺構間接合資料の構成個体1点等を含む146点の出土を見た。点数比では黒耀石が8割弱を占め、自然礫を含めた場合砂岩類が1割強を占める。遺構間接合資料は砂岩製礫片であり、少なくとも16m以上を隔てる12住出土石核と剥離面に近い剥落面において接合する。	弥 生 中 期

住 No.	地 区	平面形	平面形		主軸方位	炉 位 置	主柱穴	遺 構 所 見	時 期
			長・短・深	床面積					
7	B	円形	472 456 -26	17.1	N-12°-W	地床炉 床中央	5基 P1~5 径20~30 深10~30	溝2に切られる。黄褐色土層を掘り込んでいる。覆土は垂木と思われる放射状に分布する炭化材や炭粒を多く含んだ層が床面を被い、その後壁際流入土が形成される点で5・6住と異なっている。床面は主柱穴より内側で貼床が施されるが、外側とはそれ程顕著な差はみられない。炉は小さく、底面はわずかに窪む。主柱穴は大きさ・深さともに小振りである。P4脇には間仕切り溝状の浅い掘り込みがある。土器は少ない。北壁下および南壁下床面に壘が横倒して遺存する。それに対し石器は有茎を主体とした鏝形石器4点、接合資料3例12点等を含む109点が出土した。点数比では黒耀石が9割弱を占める。	弥 生 中 期
8	B	円形	512 464 -24	18.6	N-15°-W	地床炉 床中央	5基 P1~6 径15~40 深17~43	黄褐色土層中に設けられる。覆土は壁際から徐々に埋没した過程が顕著に窺える。床上に炭化材等は認められない。床面は中央部ではさほど堅くはないものの貼床が施される。炉はわずかな焼土面が観察されるが掘り込み等はみられない。また炉の北側には間仕切り溝状の浅い掘り込みが検出された。主柱穴は同位置に2~3基が存し、建て替えを示唆する。土器の一括品はほとんどないが、南壁下の床面上から匙形土製品が出土している。石器は黒耀石製鏝形石器1点、イレギュラーな輝緑凝灰岩製磨製斧形石器1点、接合資料1例2点等を含む47点が出土しているが、他の住居址と比較すると少ないと言える。炉の北脇床面からは本遺跡唯一の所謂管玉1点が出土している。点数比では、黒耀石が6割弱を占め、次いで砂岩類が3割強を占める。	弥 生 中 期
9	B	隅丸 長方形	428 400 -6	15.2	N-79°-E	地床炉 床中央	5(7)基 P1~6・9 径25~40 深17~30	黄褐色土層中に床を設けるが、壁の大半は暗褐色土層(旧表土)中にあり、検出時に北壁をほとんど失った。そのため覆土も薄く、遺構の埋没過程を窺うには至らない。床面は全体に薄い貼床が観察されるが、あまり堅緻ではない。主柱穴は北壁下の深いピットを考慮して5(6)本配置と捉えるか、あるいはP1~6の4(6)本構成と捉えるか判断し難い。いずれにせよ数回の建て替えが行われたものとみたい。遺物はほとんど出土していない。石器は4点が出土したのみである。	弥 生 中 期
10	B	隅丸 長方形	540 464 -12	22.0	N-69°-E	地床炉 床中央	5基 P1~6 径25~42 深29~75	建3・4を切る。小礫混じりの黄褐色土層中に構築されている。床面は平坦で、中央部では不明瞭ながら貼床が施される。炉は皿状に緩く窪むが、被熱はさほど顕著ではない。炉の西脇には建4の柱穴がありこれを埋め貼っているが、貼土下には焼土面があり本住の旧炉として利用した時期があったものかと考えられる。主柱穴は4本配置で各ピットの掘り込みは非常に深い。遺物は非常に少ない。P10内、およびP5脇に土器の大形破片が存する。石器も他の住居址と比較すると少なく、黒耀石製有茎鏝形石器1点、イレギュラーな磨製斧形石器1点等を含む19点が出土している。	弥 生 中 期
11	B	不明	(488) (228) -6	<6.5>	不明	地床炉 中央北寄り	不明	西半が区域外のため未調査、溝1・土177に切れ、さらに覆土が薄く壁の一部が把握できたのみで、全形は不明である。床は黄褐色土を貼るが、あまり堅くはない。P3付近では細片化した炭化材が散在し、5~7住と同様な状況を呈している。炉は北寄り床面で捉えた焼土面を当てるが明確に決定できない。柱穴の配置も定かでない。遺物は焼土面周辺の床上に大形の土器片が散在する。石器は全く出土していない。	弥 生 中 期
12	B	楕円形	(496) (434) -18	<18.6>	N-7°-W	地床炉 床中央	不明 P1~3	谷状地形に東~南部を切られる。黄褐色土層中に床を設けるが壁の大半は暗褐色土層(旧表土)中に存する。覆土は壁際に第1次流入土が形成されている。床面は平坦で、柱穴より内側では貼床が施され堅緻である。炉は円形の掘り込みをが底面はほとんど焼けていない。主柱穴は恐らく5本構成と考えられ、3基のみ残存している。P2とP3の間は間仕切り溝状の掘り込みで結ばれる。土器は一括品が見られず破片主体で、他に覆土中からベンガラの小塊数点が出土している。石器は黒耀石製有茎鏝形石器未製品1点、接合資料7例15点、遺構間接合資料の構成個体1点等を含む112点が出土した。点数比では黒耀石が9割強を占める。遺構間接合資料は砂岩製石核であり、6住出土礫片と剥離面に近い剥落面において接合する。	弥 生 中 期
平1	B	(八角形)	412 344	(10.9)	N-93°-E	地床炉 中央	8基 P1~8 径35~70 深38~52	旧称建10。建8、土202と重複。地山の黄褐色土面で炉の痕跡と柱穴を確認したが、床面は恐らく暗褐色土層(旧表土)中に存在したものと考えられる。柱穴は南北辺の4基で径が大きく、東西辺の4基は小径である。西側のP9・10の外側には浅いピットが付随する。炉は楕円形の掘り込みを有するが、使用面は黄褐色土層上面で捉えた焼土上と考えられる。土器は柱穴内からの出土品のみである。石器は黒耀石製鏝形石器未製品1点を含む3点のみである。	弥 生 中 期
平2	B	(八角形)	392 240	(9.4)	N-85°-E	地床炉 中央やや東 北寄り	8基 P1~8 径45~80 深18~34	旧称建11。床面は暗褐色土層(旧表土)中に存するものと考えられ、柱穴のみ黄褐色土層に達している。炉は暗褐色土層中にあり、地床炉と考えられる焼土面をやや北東寄りで捉えた。柱穴はいずれも細長い形態をなし、柱痕は明確に捉えられなかったが、板状の柱か、柱2本を1対で用いた可能性もある。遺物は暗褐色土層中で得た土器片などが該当するが少ない。石器は検出面より打製斧形石器を含む6点が出土したのみである。	弥 生 中 期

第2表 境窪遺跡掘立柱建物址・柱穴一覧

建 No.	地 区	平面形 柱配り	主軸方位 面積(m <sup>2</sup> )	規 模 (cm)	柱間寸法 (cm)		柱 穴			備 考
					桁行	梁間	平面形	規模(cm)	柱痕	
1	A	方 形 側柱式	N-83°-E 6.5	2間×1間 254×254	桁行 108~136 (127)	梁間 252~256 (254)	円 形	径28~48 深12~36	有	
2	B	長方形 側柱式	N-53°-E 13.2	3間×1間 540×244	桁行 160~216 (176)	梁間 228~260 (244)	円 形	径32~96 深10~44	有	東側1間分の梁間は2間構成になっている。
3	B	方 形 側柱式	N-76°-E 20.2	3間×1間 616×328	桁行 204~220 (212)	梁間 320~336 (328)	円 形	径40~84 深12~44	有	10住に切られる。黒耀石製鐵形石器1点、接合資料1例2点等を含む15点の出土を見た。
4	B	方 形 側柱式	N-82°-E 11.2	3間×1間 452×248	桁行 136~168 (152)	梁間 240~256 (248)	円 形	径42~68 深12~44	有	10住に切られる。
5	B	方 形 側柱式	N-82°-E 11.6	4間×1間 524×222	桁行 88~156 (131)	梁間 220~224 (222)	円 形	径26~40 深10~34		
6	B	方 形 側柱式	N-89°-E 11.5	3間×1間 436×264	桁行 124~168 (145)	梁間 248~280 (264)	円 形	径36~80 深10~44		溝3を切る。 P1の覆土中に甕1/2個体分の大形破片を伏せる。
7	B	方 形 側柱式	N-81°-E (9.3)	3間×1間 388×240	桁行 124~132 (129)	梁間 232~248 (240)	円 形	径28~52 深20~46		礫層にかかるピット2基については未確認。遺構間接合資料構成個体1点を含む9点の出土を見た。
8	B	方 形 側柱式	N-83°-E 10.1	3間×1間 408×248	桁行 112~168 (136)	梁間 240~252 (248)	円 形	径34~80 深28~40	有	5住に切られる。平建1と切り合う。弥生中期。
9	B	方 形 側柱式	N-72°-E 11.1	3間×1間 492×226	桁行 112~120 (116)	梁間 182~190 (186)	円 形	径24~44 深30~56		溝1に切られる。弥生中期。
柱1	B		N-78°-E	4間・568	100~152 (142)		円 形	径24~40		溝3を切る。
柱2	B		N-73°-E	2間・280	128~148 (140)		円 形	径24~30		
柱3	B		N-73°-W	2間・296	124~164 (148)		円 形	径28~44		
柱4	B		N-67°-W	3間・536	160~180 (179)		円 形	径24~54		
柱5	B		N-77°-E	2間・292	140~152 (146)		円 形	径26~36		
柱6	B		N-81°-W	2間・168	84		円 形	径24~32		
柱7	B		N-49°-W	2間・196	98		円 形	径26~34		
柱8	B		N-7°-W	4間・728	80~208 (182)		円 形	径22~50		
柱9	B		N-46°-E	2間・200	100		円 形	径18~24		

第3表 境窪遺跡土坑一覧

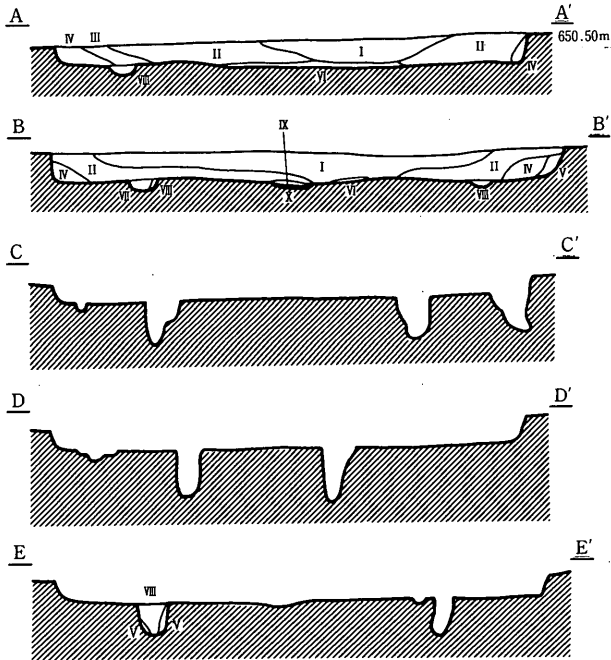
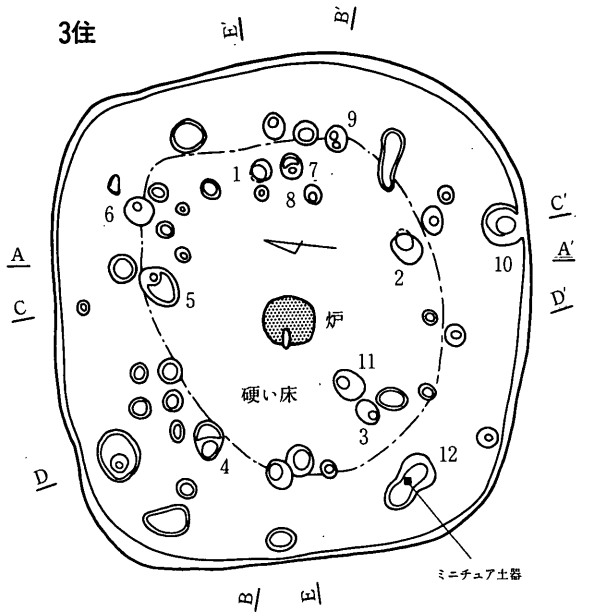
土 No.	地区 位置	規模 (cm) 長軸×短軸×深	平面形	類 型	備 考	土 No.	地区 位置	規模 (cm) 長軸×短軸×深	平面形	類 型	備 考
1	A南	216×84×18	楕円形	A4		38	A中	128×94×33	楕円形	C	
2	A南	224×80×22	楕円形	A4		39	A中	280×50×30	隅丸長方形	L	
3	-	-	-	-	欠番	40	A中	96×60×5	隅丸長方形	N	
4	A南	140×96×22	楕円形	B2		41	A中	128×100×20	隅丸長方形	N	Pと切り合う。
5	A南	116×78×5	楕円形	N		42	A南	92×92×32	円 形	A1	
6	A南	108×48×6	楕円形	N		43	A南	72×60×30	円 形	A1	
7	A南	72×64×6	円 形	N		44	A南	66×48×6	楕円形	N	
8	A南	80×64×16	楕円形	B1		45	A中	176×(94)×8	不 明	N	区域外にかかる。
9	A南	132×112×4	円 形	N	土10を切る。	46	A中	92×82×20	不 明	A2	区域外にかかる。
10	A南	108×(88)×6	楕円形	N	土9に切られる。	47	A中	88×78×12	楕円形	N	
11	A南	84×70×18	楕円形	C		48	A南	66×46×8	楕円形	N	
12	-	-	-	-	欠番	49	A南	134×80×6	楕円形	N	
13	A南	84×72×8	円 形	N		50	A南	62×54×20	円 形	A2	
14	A南	68×52×14	楕円形	A2		51	A南	324×74×26	不整長方形	L	
15	A南	84×76×20	円 形	A1		52	A中	78×56×18	楕円形	A2	
16	A南	72×72×27	円 形	A1		53	A中	108×34×18	不整長方形	N	
17	A南	132×132×10	円 形	A1		54	A中	100×30×4	円 形	N	
18	A南	114×74×19	楕円形	A2		55	A中	428×152×10	不整形	N	
19	A南	92×82×8	隅丸長方形	N		56	A中	106×56×8	不整楕円形	N	
20	A南	68×64×7	隅丸長方形	N		57	A中	68×40×6	隅丸長方形	N	
21	A南	140×106×18	隅丸長方形	C		58	A中	82×60×8	楕円形	N	
22	A南	(92)×44×14	不 明	L	区域外にかかる。	59	-	-	-	-	欠番
23	A南	98×76×6	楕円形	N		60	A中	88×68×6	隅丸長方形	N	
24	A南	66×52×17	楕円形	B1		61	A中	228×74×50	隅丸長方形	L	
25	A南	188×92×16	長楕円形	A4	土26に切られる。	62	A中	76×70×28	円 形	P	
26	A南	80×72×22	円 形	A1	土25を切る。	63	A中	144×104×20	楕円形	N	
27	A南	268×184×6	不整長方形	N	土28を切る。Pと切り合う。	64	A中	48×46×16	円 形	A1	
28	A南	92×(68)×4	不 明	N	土27・Pに切られる。	65	A中	88×56×8	隅丸長方形	N	
29	A南	232×(196)×30	不 明	D	区域外にかかる。	66	A中	72×52×10	楕円形	N	
30	A南	84×66×8	楕円形	N		67	A中	76×46×10	楕円形	N	
31	A南	104×62×8	楕円形	N		68	A中	136×40×14	隅丸長方形	L	
32	A南	130×84×7	楕円形	N		69	A中	66×46×38	楕円形	L	
33	A中	76×52×6	楕円形	N		70	A中	64×54×10	楕円形	N	
34	A中	58×58×8	円 形	N		71	A中	70×56×10	楕円形	N	
35	A中	88×76×20	楕円形	N		72	A中	86×60×6	隅丸長方形	N	
36	A中	68×46×16	楕円形	A2		73	A中	70×40×11	楕円形	B1	
37	A中	60×50×11	不整楕円形	N		74	A北	78×36×22	隅丸長方形	B1	



土 No.	地区 位置	規模 (cm) 長軸×短軸×深	平面形	類型	備 考	土 No.	地区 位置	規模 (cm) 長軸×短軸×深	平面形	類型	備 考
75	A中	194×68×12	不整長方形	L		146	B南	200×76×6	不整長方形	N	
76	A中	92×76×6	楕円形	N		147	B南	60×60×14	隅丸方形	A1	
77	A中	324×66×26	不整長方形	L		148	B南	88×84×12	円形	A2	
78	—	—	—	—	欠番	149	B南	124×94×40	隅丸長方形	N	P2基と切り合う。
79	A中	58×46×8	円形	N		150	—	—	—	—	欠番
80	A中	68×64×24	円形	C		151	B中	88×28×30	不整長方形	P	P3基の切り合いか。
81	A中	76×52×19	楕円形	N		152	B中	256×84×50	隅丸長方形	L	
82	A中	56×52×6	円形	N		153	B中	80×62×10	隅丸長方形	B1	
83	A中	92×88×6	隅丸方形	N		154	B中	90×60×80	隅丸長方形	A2	
84	A中	60×56×8	円形	N		155	B中	100×68×14	隅丸長方形	A2	
85	A中	134×84×6	隅丸長方形	N		156	B中	260×76×38	隅丸長方形	L	
86	A中	172×28×4	不整形	L		157	B中	104×76×8	楕円形	N	
87	A中	132×58×10	不整形	L		158	B中	196×84×16	隅丸長方形	L	
88	A中	70×62×14	楕円形	N		159	—	—	—	—	欠番、建6の柱穴。
89	A北	72×68×8	円形	N		160	—	—	—	—	欠番、建6の柱穴。
90	A北	56×52×4	円形	N		161	B中	74×57×8	楕円形	N	
91	A北	104×80×6	楕円形	N		162	B中	118×84×28	隅丸長方形	A2	
92	A北	78×50×6	楕円形	N		163	B中	116×82×20	楕円形	A2	
93	A北	56×48×12	円形	P		164	B中	216×74×32	隅丸長方形	L	
94	A北	128×78×14	楕円形	A2		165	B中	92×74×28	楕円形	L	
95	A北	68×44×8	不整長方形	N		166	B中	80×50×24	楕円形	B1	
96	A北	206×67×6	不整長方形	N		167	B中	80×72×24	不整形	C	
97	A北	50×42×4	不整長方形	N		168	B中	94×74×36	隅丸方形	C	
98	A北	152×130×4	不整円形	N	Pと切り合う。	169	B中	186×64×20	隅丸長方形	L	
99	A北	56×56×4	円形	N		170	—	—	—	—	欠番
100	A北	72×40×14	楕円形	N		171	B北	120×76×4	楕円形	A2	
101	A北	60×38×16	楕円形	P		172	B北	132×72×16	隅丸長方形	A4	建3と重複。
102	A北	204×64×7	不整長方形	N		173	B北	106×84×12	隅丸長方形	A2	建3と重複。
103	A北	92×70×14	不整円形	N		174	B北	126×88×26	隅丸長方形	A3	建3と重複。
104	A北	192×30×30	不整長方形	L		175	B中	〈320〉×228×38	不明	N	P10基と切り合う。
105	A北	76×40×10	隅丸長方形	N		176	B南	196×166×28	楕円形	A2	
106	A北	96×50×24	不整楕円形	C		177	B中	(272)×132×8	楕円形	N	11住を切る。Pと切り合う。
107	A南	90×70×28	不明	A2	2住に切られる。	178	B南	96×78×4	楕円形	N	
108	A北	92×50×6	楕円形	N	Pと切り合う。	179	B中	336×88×26	隅丸長方形	L	
109	A北	180×66×8	隅丸長方形	N	〃	180	B中	96×80×22	長方形	—	礎床木棺墓
110	A北	72×32×27	楕円形	N		181	B中	152×86×4	隅丸長方形	N	
111	A中	88×〈60〉×10	不明	N	区域外にかかる。	182	B中	64×64×18	円形	A1	
112	A北	114×94×7	不整形	N	P4基と切り合う。	183	B北	82×70×28	円形	A1	
113	A北	76×58×4	楕円形	N	P161に切られる。	184	B北	60×48×14	楕円形	A2	
114	A北	62×56×6	円形	N		185	B北	116×74×6	楕円形	N	
115	A北	144×78×23	楕円形	N	Pと切り合う。	186	—	—	—	—	欠番、建6の柱穴。
116	A北	260×28×22	不整長方形	L	土117と対。	187	—	—	—	—	欠番、建6の柱穴。
117	A北	276×44×52	不整長方形	L	土116と対。	188	B北	100×32×8	長方形	N	
118	A北	128×40×16	不整形	L		189	B北	342×216×18	不整形	D	黒耀石剥片類多出。焼土有。
119	A北	116×104×7	隅丸方形	N		190	B中	80×42×8	不整形	N	P2基と切り合う。
120	A北	336×118×22	不整形	N	P5基と切り合う。	191	—	—	—	—	欠番、建8の柱穴。
121	A中	156×48×36	不整長方形	L	土122と対。	192	B南	92×62×12	長方形	A3	
122	A中	196×44×22	不整長方形	L	土121と対。	193	B南	56×52×6	円形	N	
123	A中	152×116×24	不整形	L		194	B南	72×58×8	長方形	A3	建9と重複。木棺墓？
124	A北	300×66×56	隅丸長方形	L	焼土面伴う。土125と対。	195	B南	82×60×8	楕円形	A2	建9と重複。
125	A北	308×24×20	不整形	L	土124と対。	196	B中	72×56×22	楕円形	A2	
126	A北	78×48×10	楕円形	N		197	B南	(96)×66×6	楕円形	A2	
127	A北	64×60×6	円形	N		198	B南	68×60×10	長方形	A3	
128	A中	284×40×16	不整長方形	L		199	—	—	—	—	欠番、平建1の柱穴。
129	—	—	—	—	欠番	200	—	—	—	—	欠番、平建1の柱穴。
130	B南	170×50×12	不明	N	土133を切る。	201	—	—	—	—	欠番、平建1の柱穴。
131	B南	80×74×26	円形	A1		202	B中	54×48×28	楕円形	P	平建1と重複。
132	B南	124×84×14	不整長方形	N	P3基と切り合う。	203	B中	88×74×7	楕円形	A2	平建1と重複。
133	B南	188×114×12	楕円形	B2		204	B中	160×132×18	楕円形	B2	溝3と切り合う。
134	B中	108×60×28	隅丸長方形	N	Pと切り合う。	205	—	—	—	—	欠番
135	B南	176×126×14	楕円形	A2	建9と切り合う。	206	—	—	—	—	欠番
136	—	—	—	—	欠番	207	B中	80×80×4	円形	N	P431と切り合う。
137	—	—	—	—	欠番	208	B中	118×104×8	円形	A2	
138	B中	112×96×16	不整楕円形	B2	黒耀石多出。焼土面伴う。	209	B北	76×(72)×24	円形	P	
139	B中	128×106×6	隅丸長方形	N	P226に切られる。	210	B南	124×122×9	楕円形	B2	
140	B中	102×80×4	楕円形	N		211	B南	120×92×20	楕円形	B2	
141	B中	180×140×42	楕円形	N	Pと切り合う。	212	B南	136×92×24	楕円形	B2	
142	B中	80×56×14	楕円形	B1		213	B南	108×74×4	隅丸長方形	A3	
143	B中	98×66×12	楕円形	A2		214	B中	92×82×39	円形	A1	
144	B中	116×84×20	楕円形	B2		215	B北	48×36×14	楕円形	P	
145	B南	84×56×42	楕円形	C							

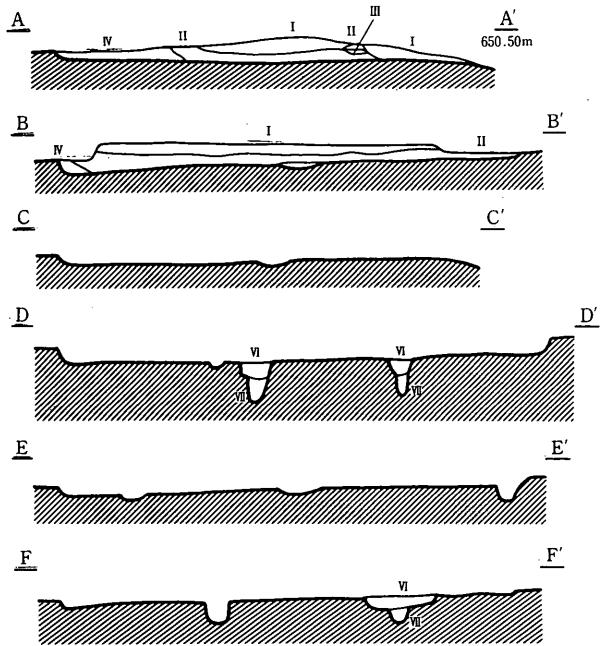
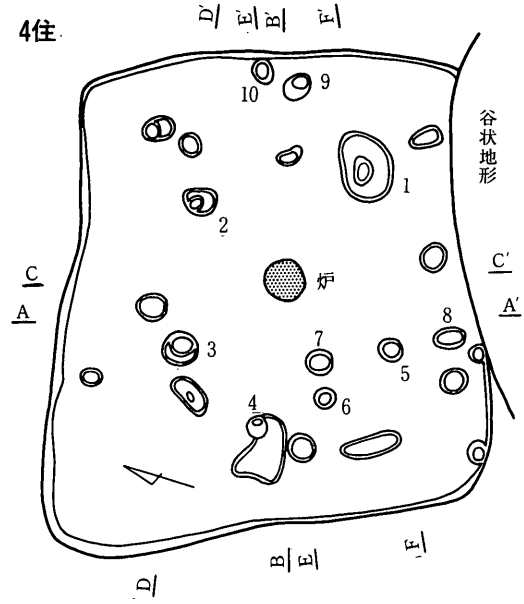
弥生時代の竪穴住居址

3住



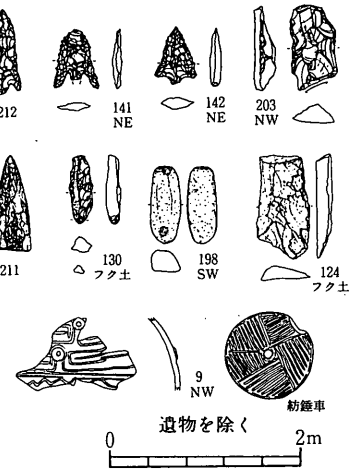
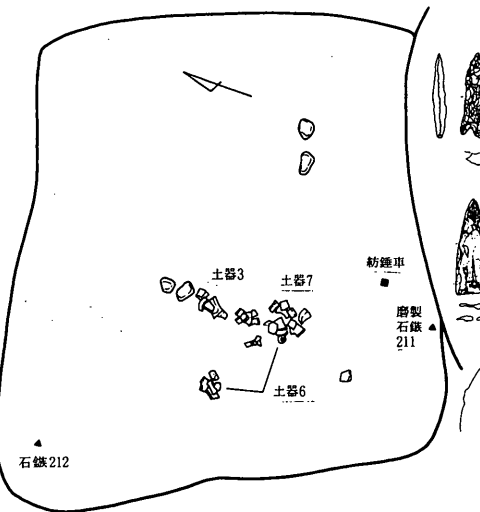
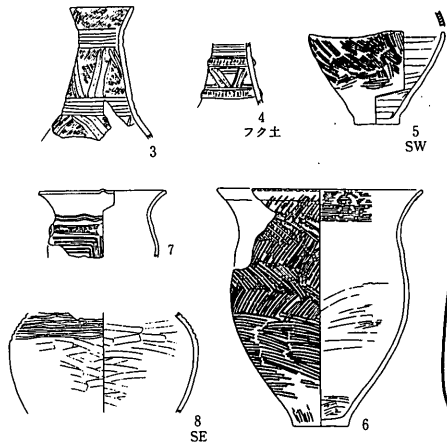
- I : 1 (Ha)
- II : 1 (Hb, Lb)
- III : 2 (Ha)
- IV : 3 (Hb, Lb)
- V : 1 (Hc)
- VI : 19 (Ec)
- VII : 2
- VIII : 1 (Lb)
- IX : 1 (Ca, Ea)
- X : 1 (Cc, Eb)

4住



- I : 3 (Hb)
- II : 2 (Ea, Ha)
- III : 20 (Eb)
- IV : 1 (Hc)
- V : 3 (Ca, Ea, La)
- VI : 2 (Ab)
- VII : 1 (Ab, Hc)

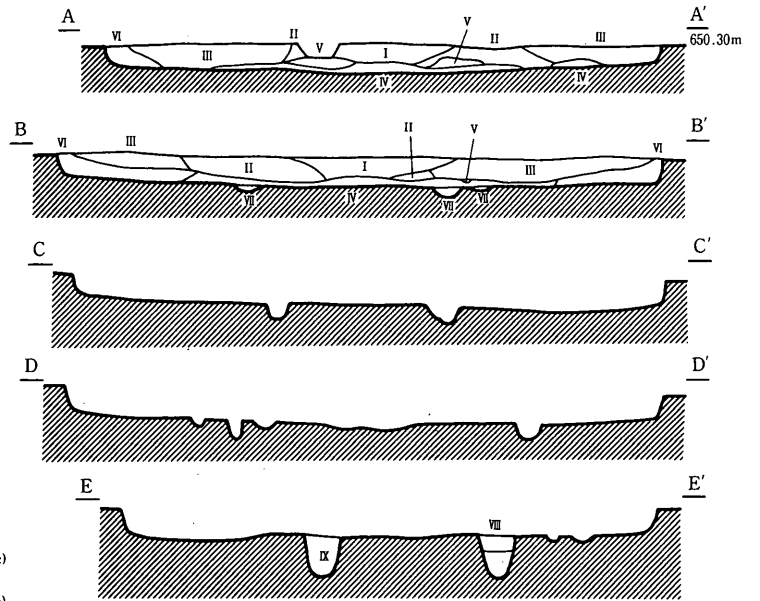
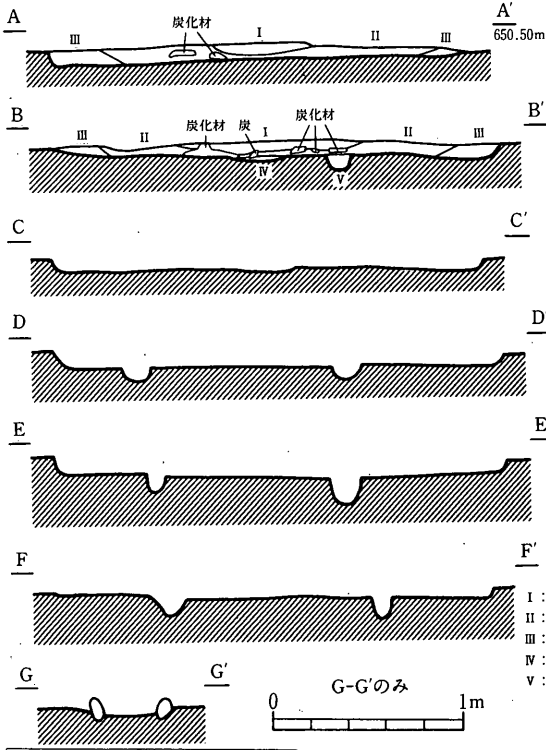
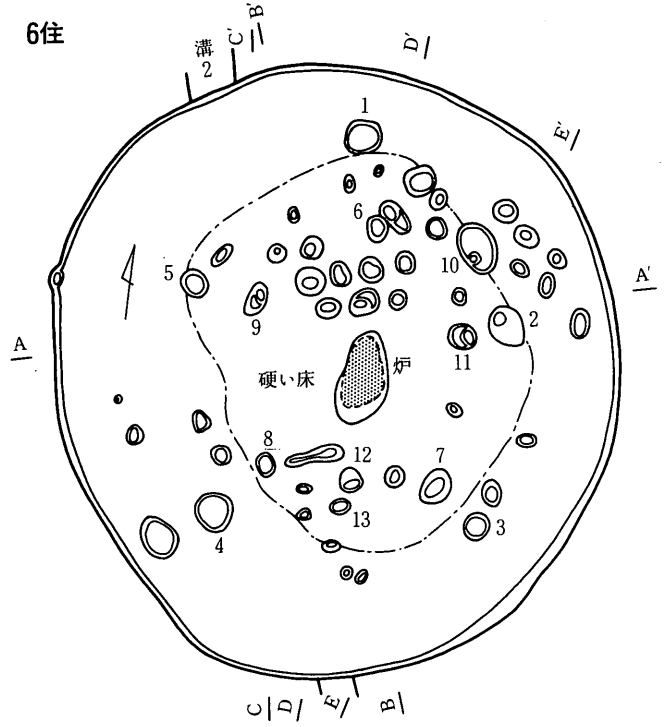
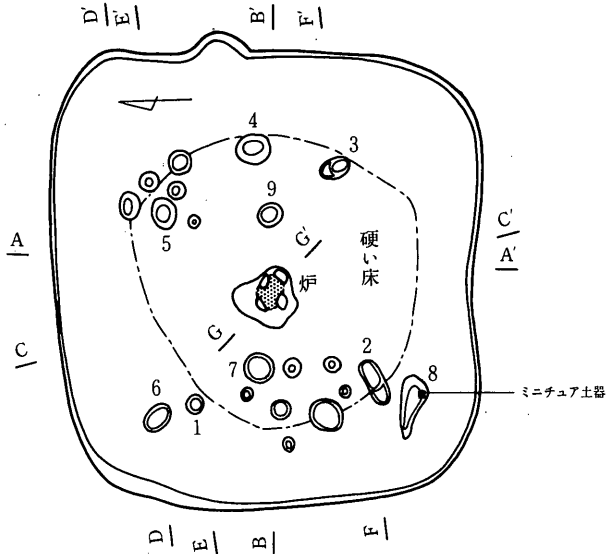
4住 遺物出土状況



第9図 境窪遺跡 竪穴住居址 (1)

5住

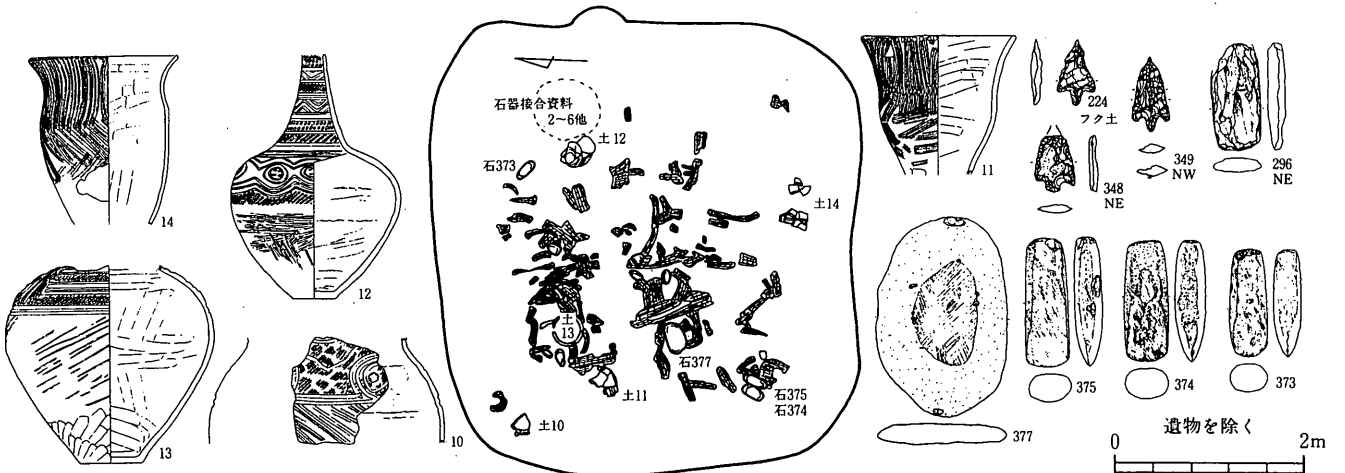
6住



- I : 2 (Eb)
- II : 2 (Cb, Ec)
- III : 1 (He)
- IV : 3 (Cc, Ec)
- V : 3 (Eb)

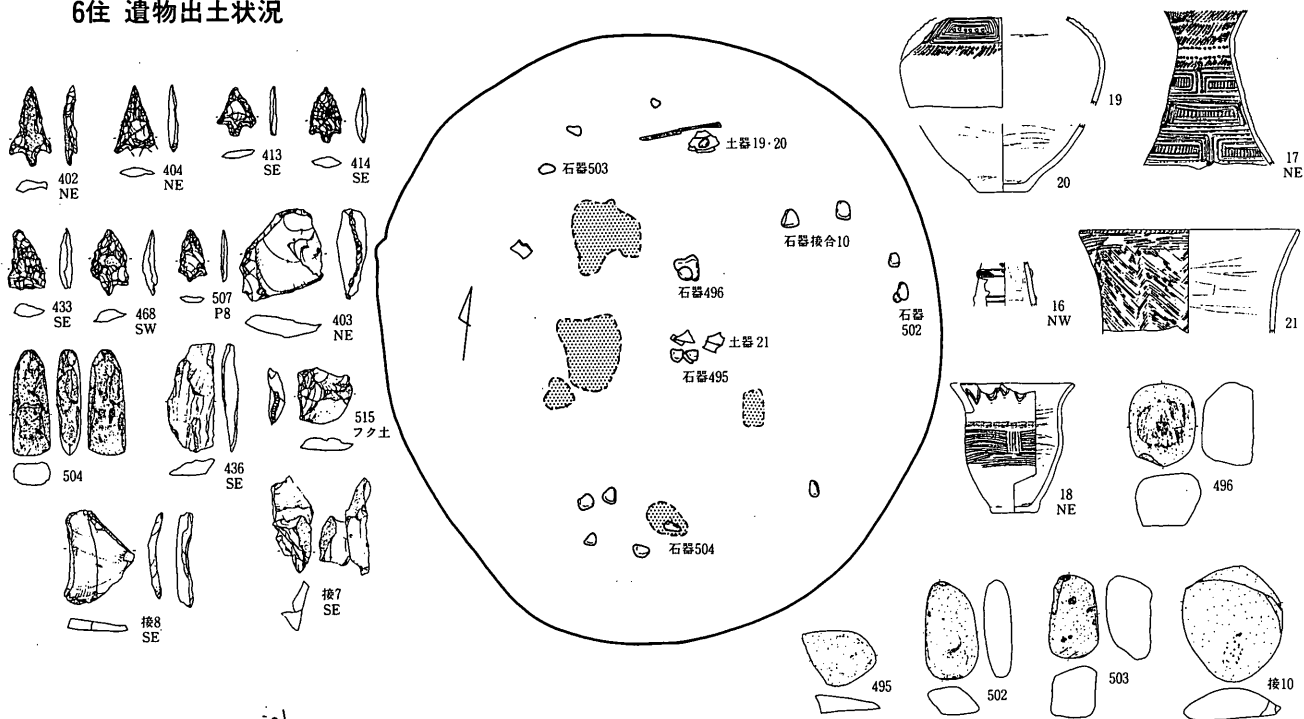
- I : 2 (Ea, Ha)
- II : 2 (Eb, Ha)
- III : 2 (Ea, Hb)
- IV : 2 (Cb, Ec, Ha)
- V : 20
- VI : 2 (Hb, Lc, Oc)
- VII : 2 (Eb, Lb)
- VIII : 1 (Le)
- IX : 1 (Ab, Hc)

5住 遺物出土状況

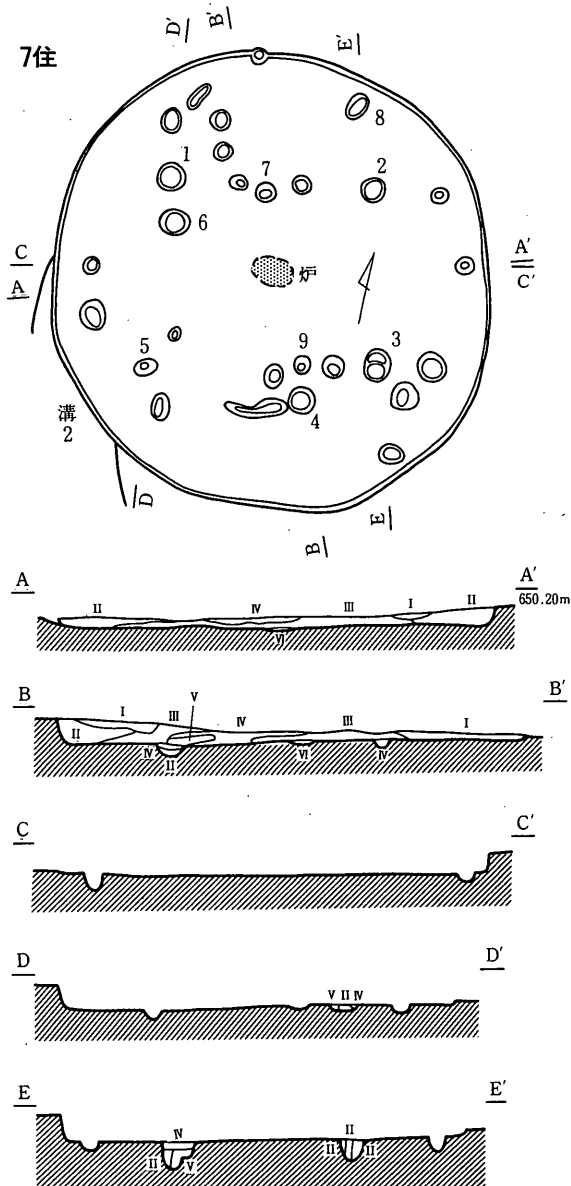


第10図 境窪遺跡 竪穴住居址 (2)

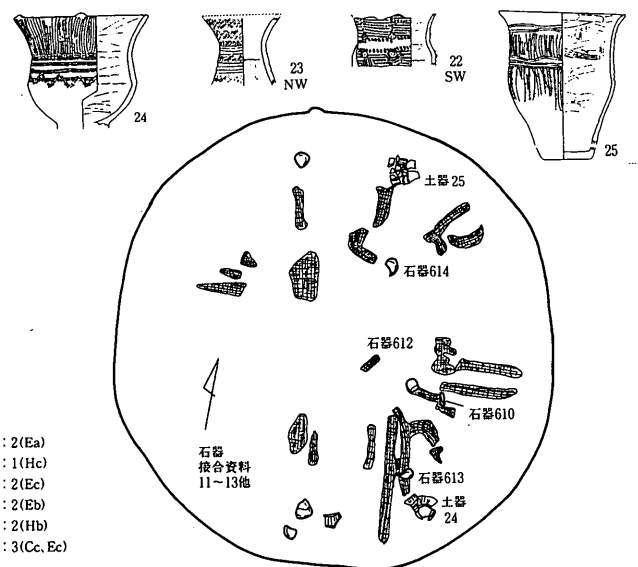
6住 遺物出土状況



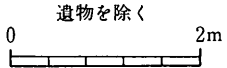
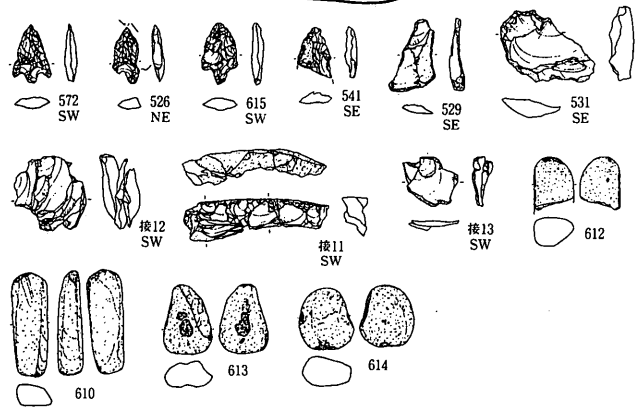
7住



7住 遺物出土状況



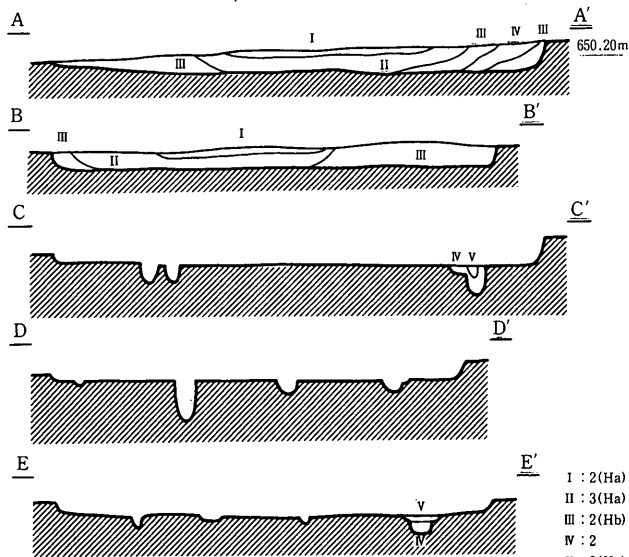
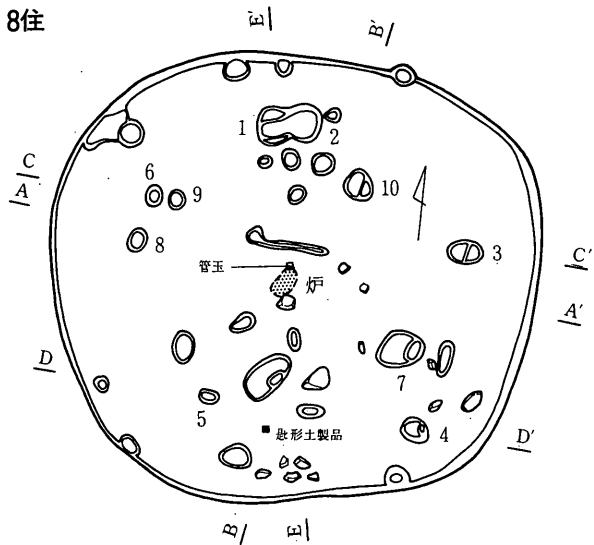
- I : 2(Ea)
- II : 1(Hc)
- III : 2(Ec)
- IV : 2(Eb)
- V : 2(Hb)
- VI : 3(Cc, Ec)



第11図 境窪遺跡 竪穴住居址 (3)

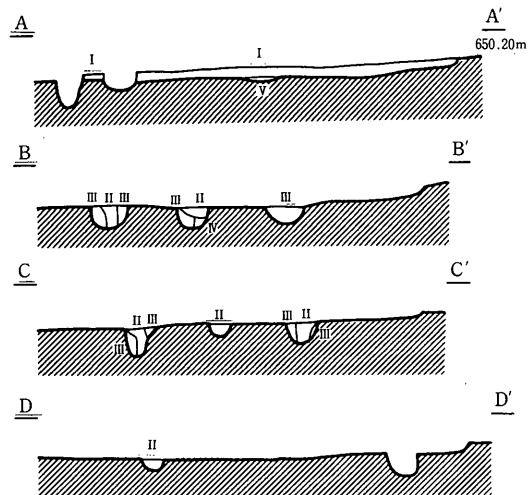
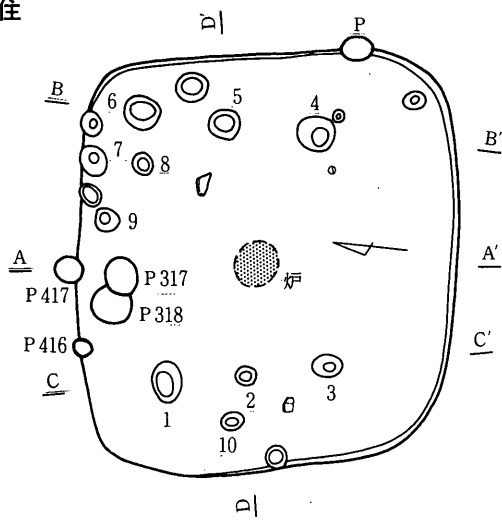


8住



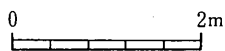
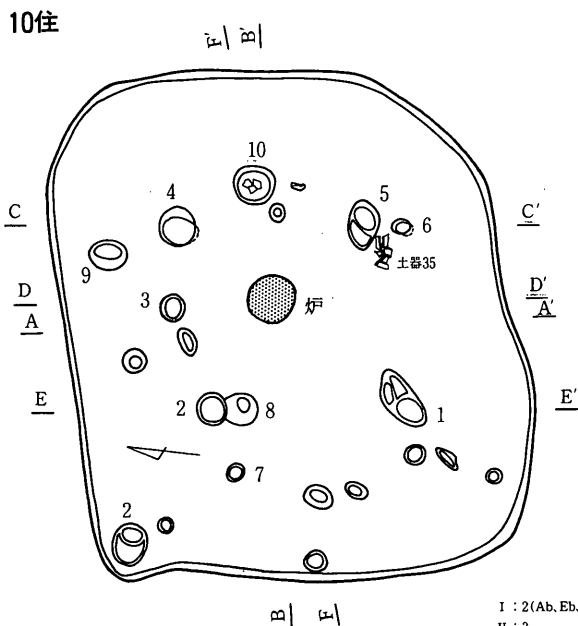
- I : 2(Ha)
- II : 3(Ha)
- III : 2(Hb)
- IV : 2
- V : 2(Hc)
- VI : 1(Hc)

9住

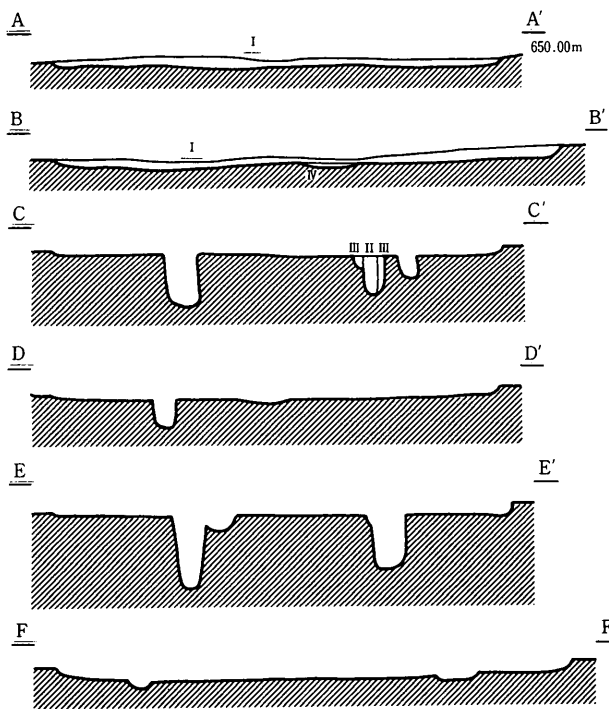


- I : 2(Hb, Lb)
- II : 3(Ha)
- III : 3(Hb, Lb)
- IV : 3(Hb)
- V : 3(Cc, Hc)

10住

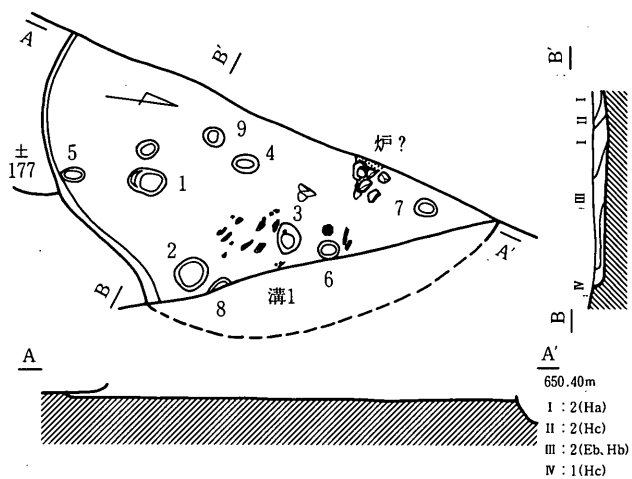


- I : 2(Ab, Eb, Hb)
- II : 3
- III : 1(Hc)
- IV : 3(Cc, Hc)

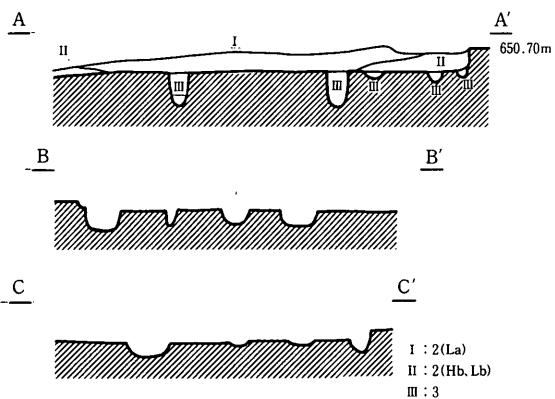
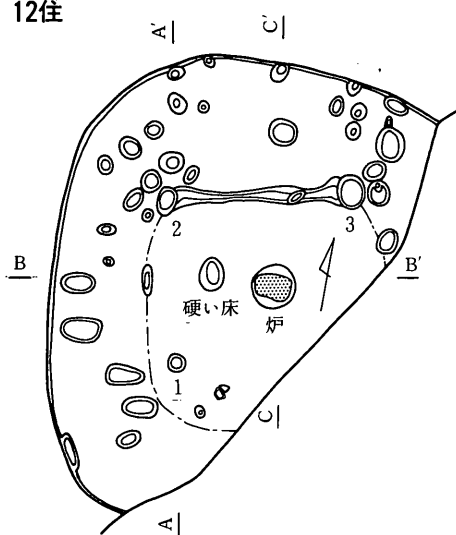


第12図 境窪遺跡 竪穴住居址(4)

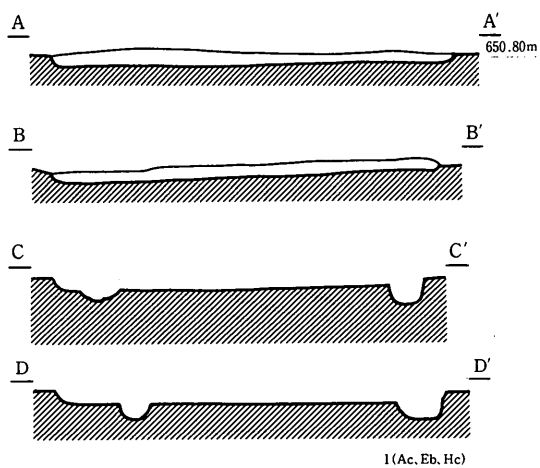
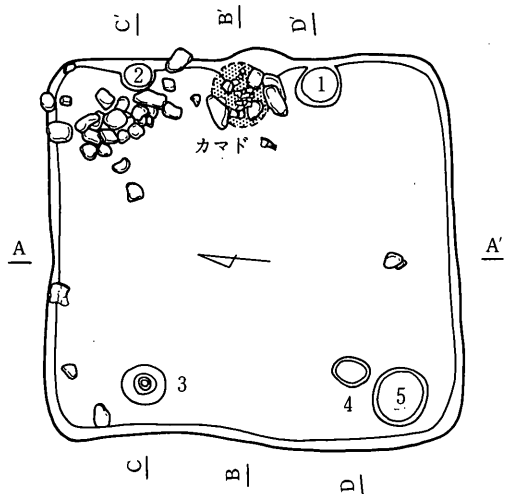
11住



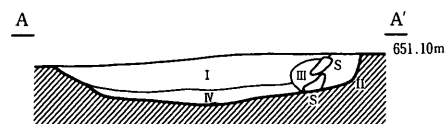
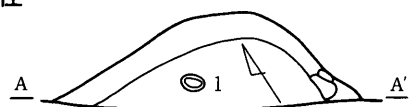
12住



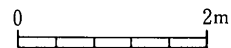
平安時代の竪穴住居址  
2住



1住

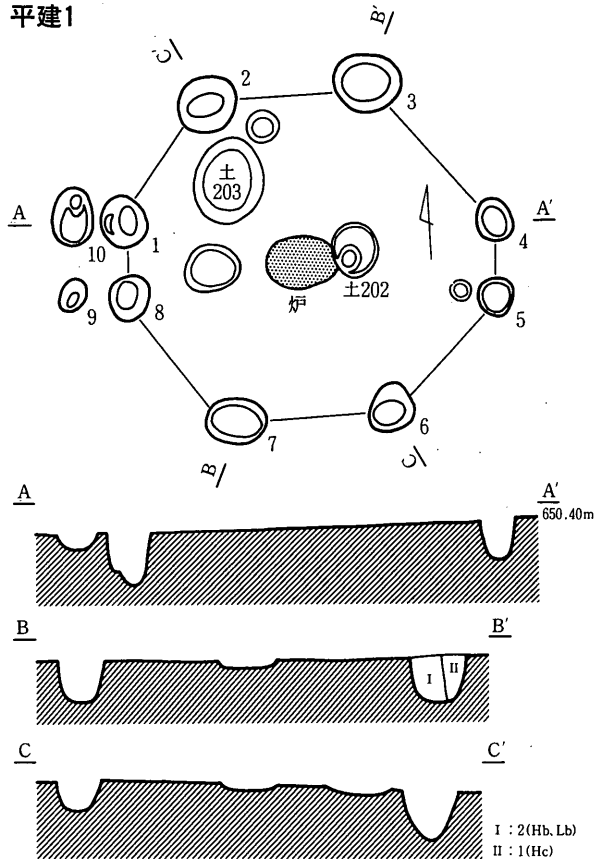


I : 2(Ac)  
II : 2(Hc)  
III : 2(Ab, Ch, Hc, Lb)  
IV : 3(Ab, Eb)

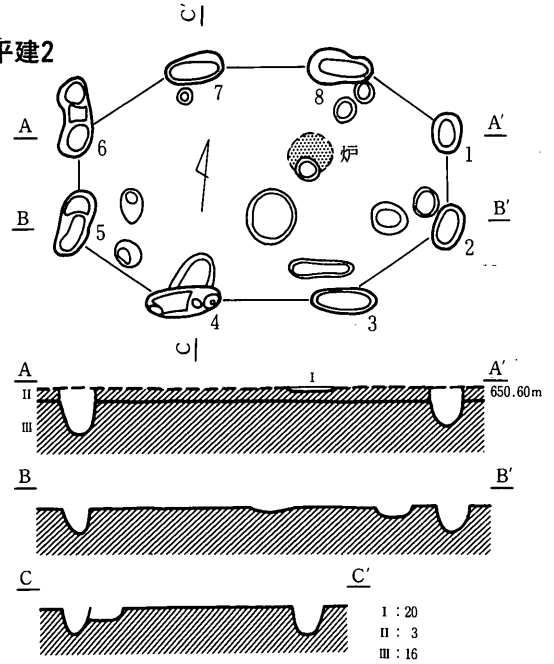


第13図 境窪遺跡 竪穴住居址 (5)

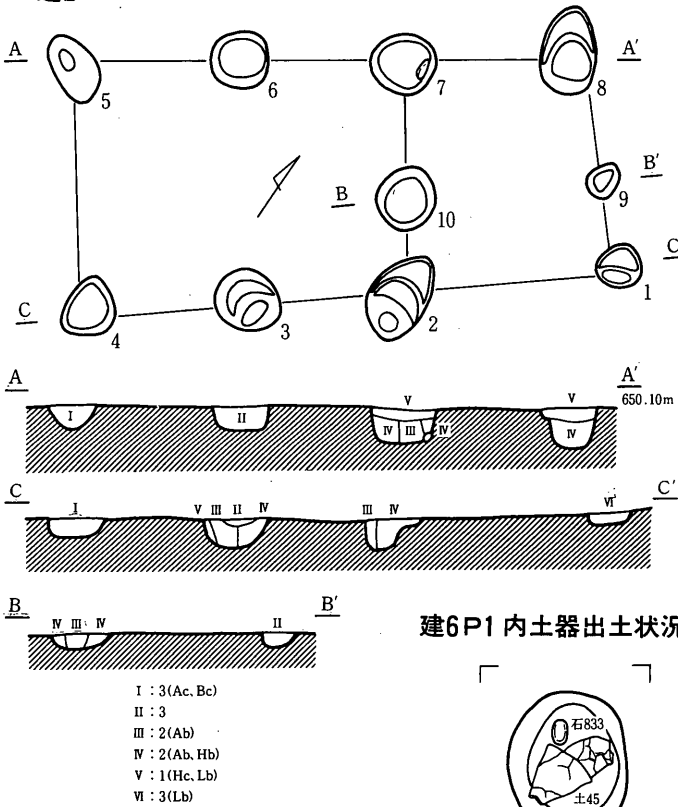
平地建物址  
 平建1



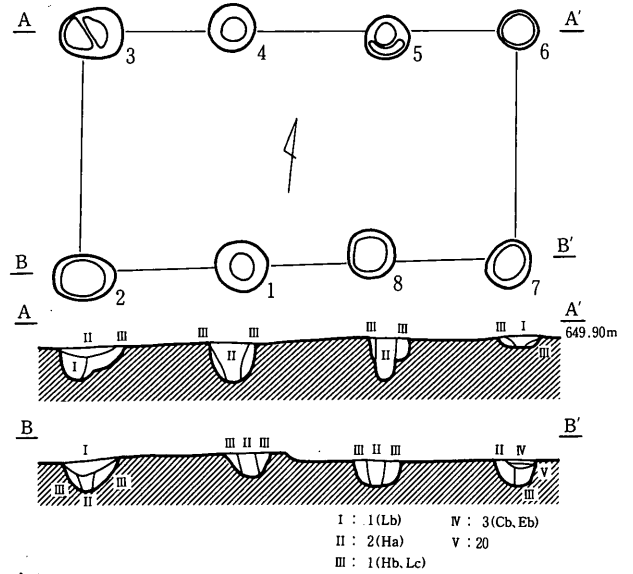
平建2



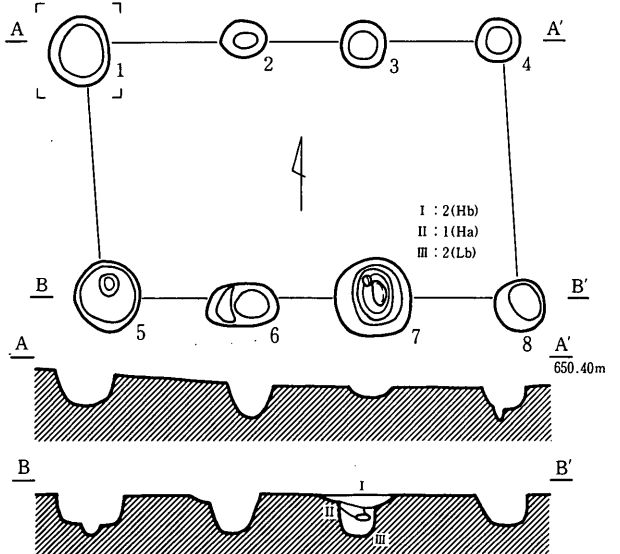
掘立柱建物址  
 建2



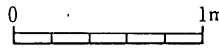
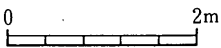
建4



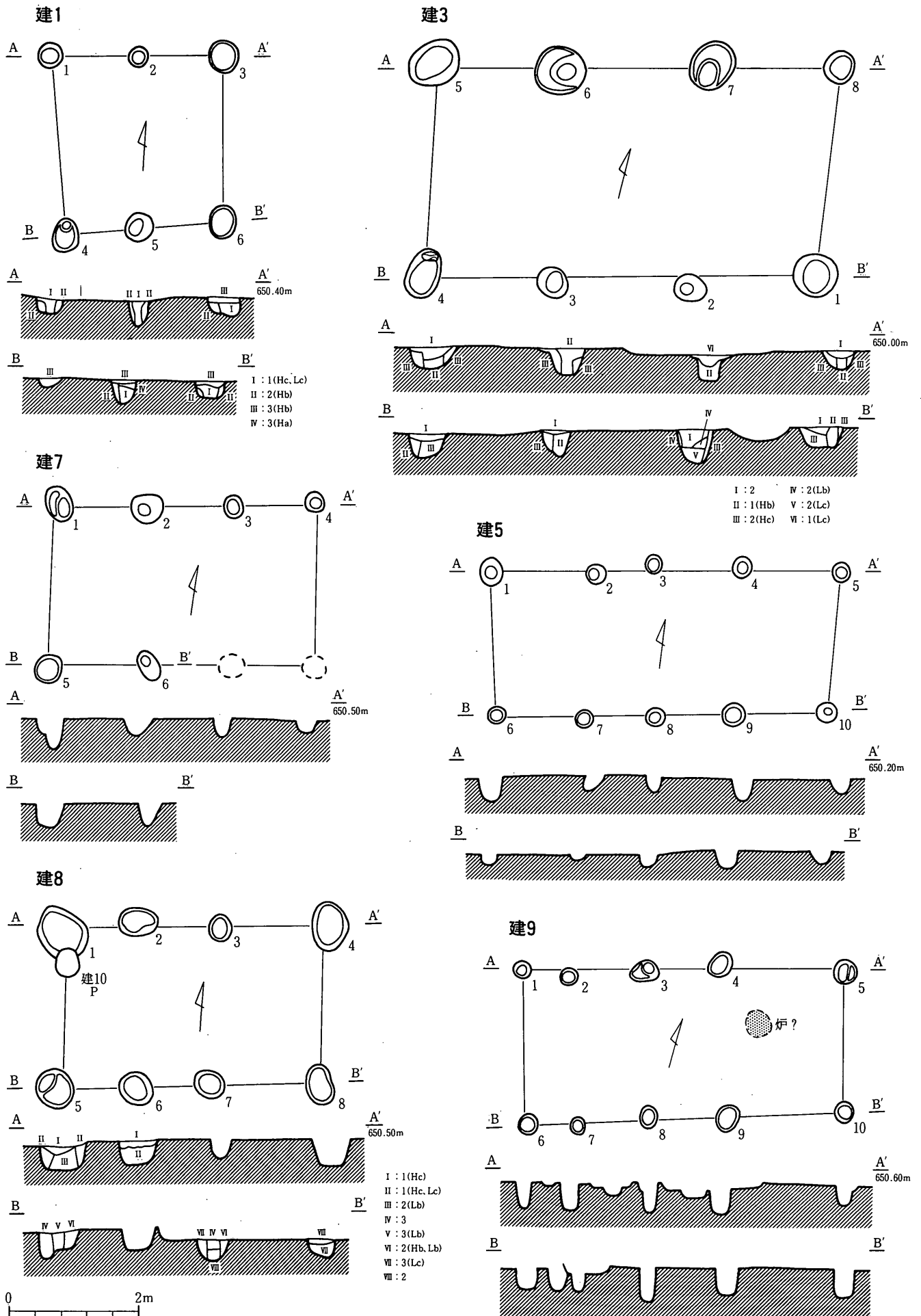
建6



建6P1 内土器出土状况



第14图 境窪遺跡 平地建物址・掘立柱建物址(1)

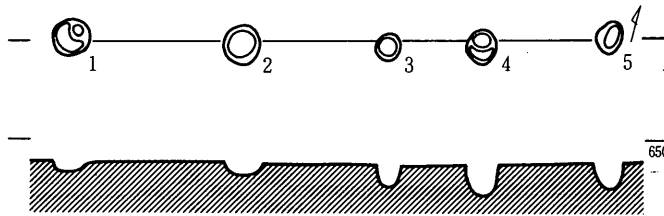


第15图 境窪遺跡 掘立柱建物址 (2)

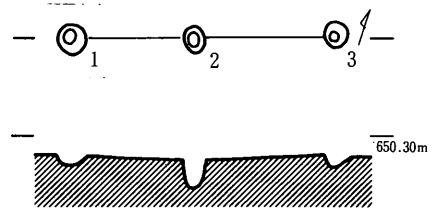


柱穴列

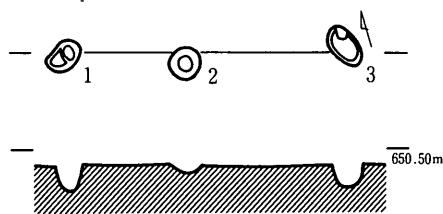
柱1



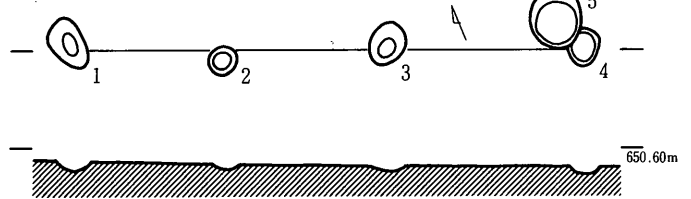
柱2



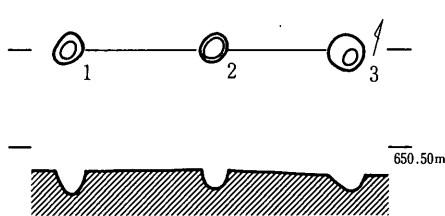
柱3



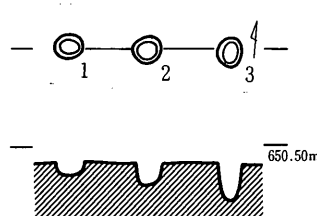
柱4



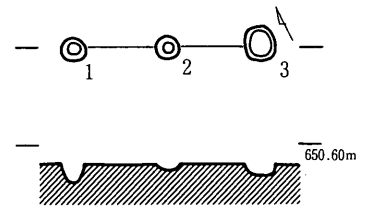
柱5



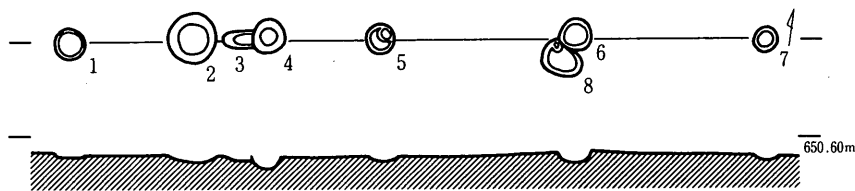
柱6



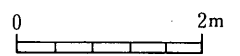
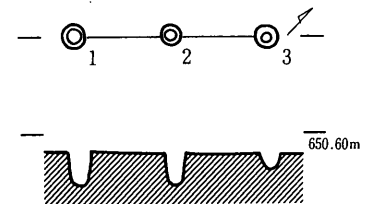
柱7



柱8

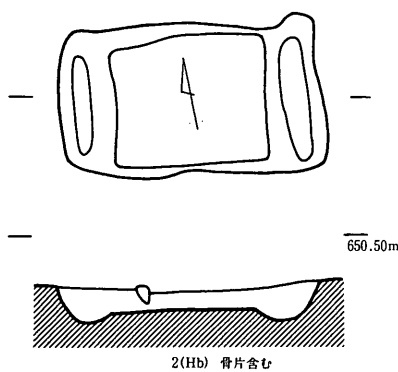


柱9



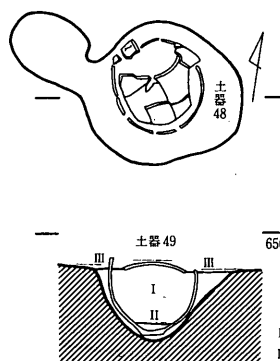
墓址

礫床木棺墓



2(Hb) 骨片含む

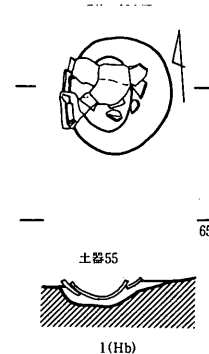
土器棺墓



土器 48  
I : 2  
II : 1(Hc)  
III : 5

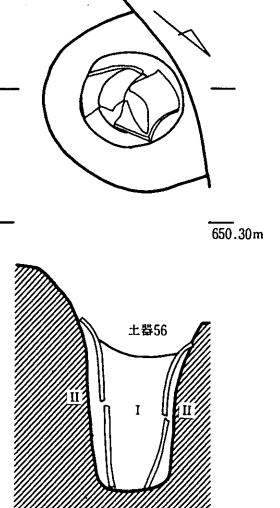
ピット

P 441

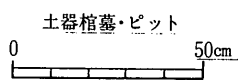
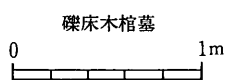


土器 55  
I(Hb)

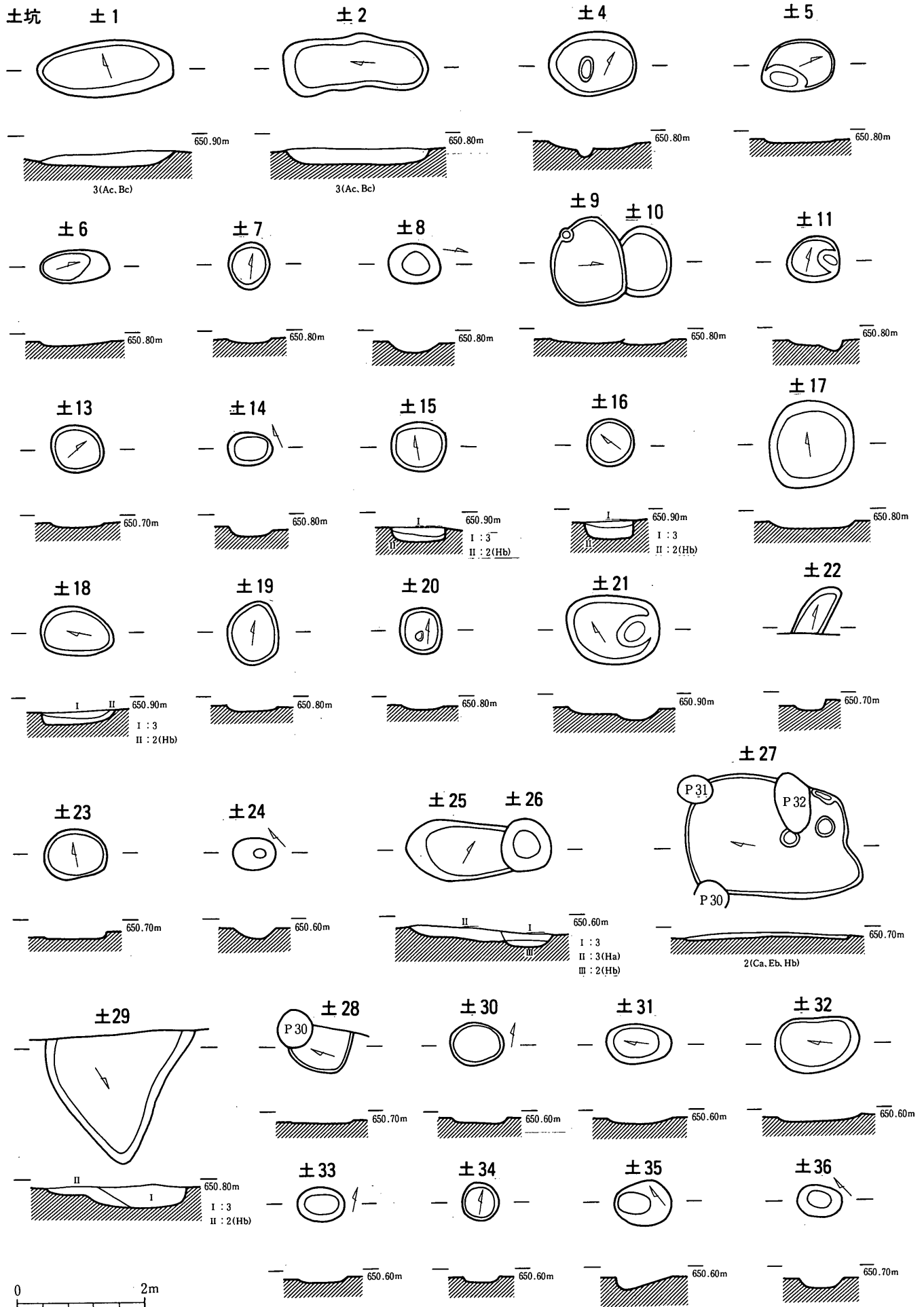
P 442



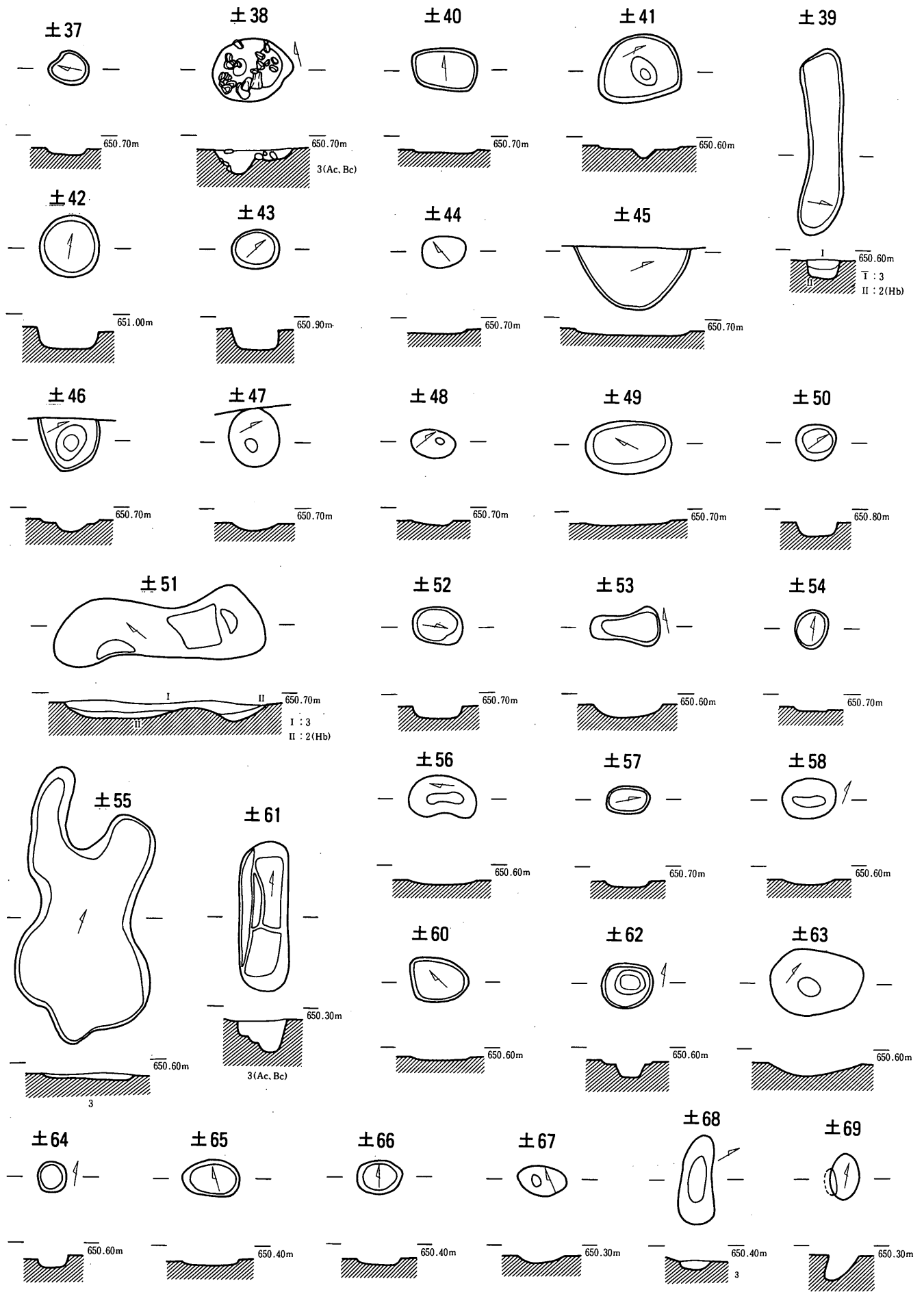
土器 56  
I : 1(Hb)  
II : 2(Hc)



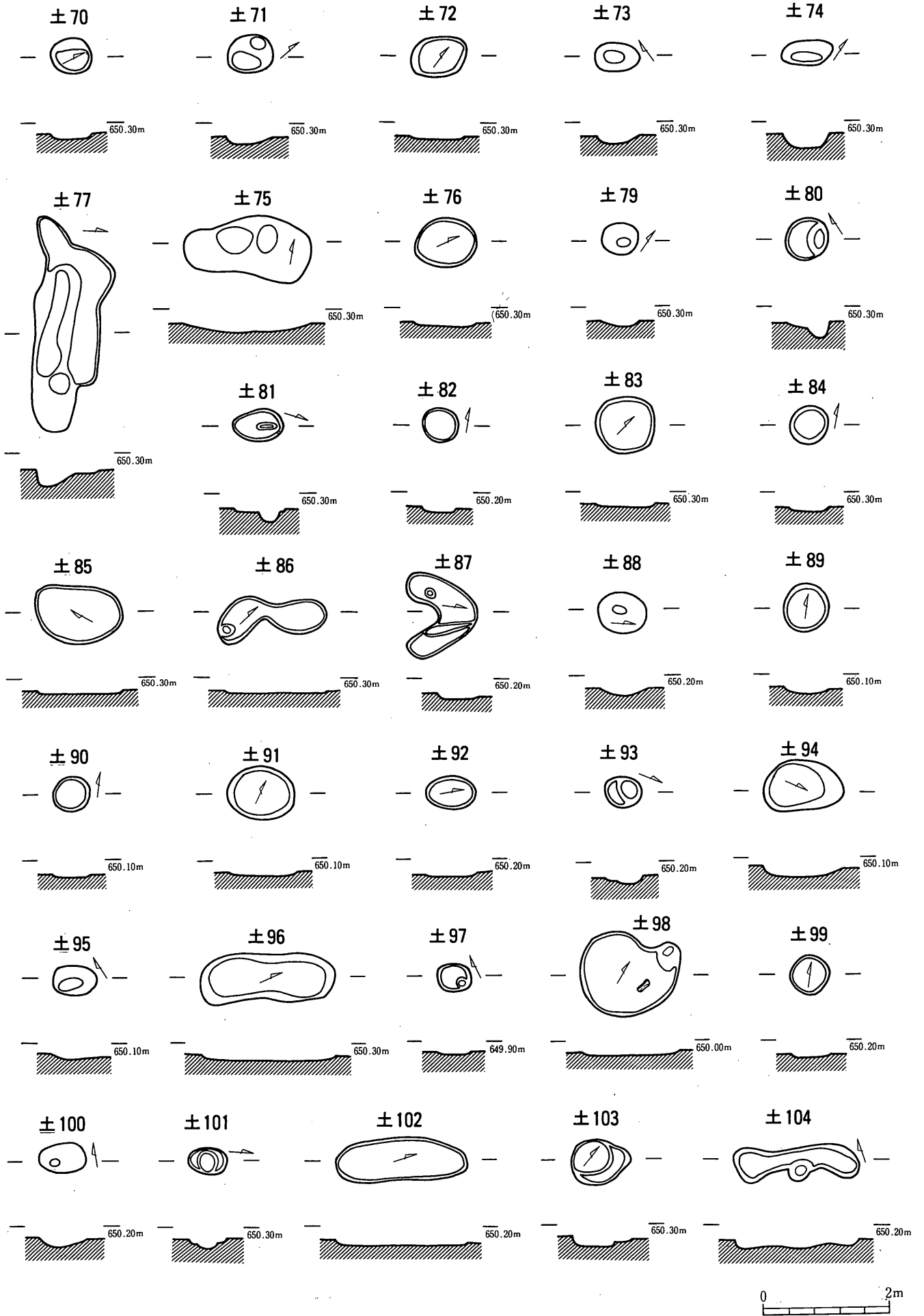
第 16 図 境窪遺跡 柱穴列・墓址・ピット



第 17 图 境窪遺跡 土坑 (1)

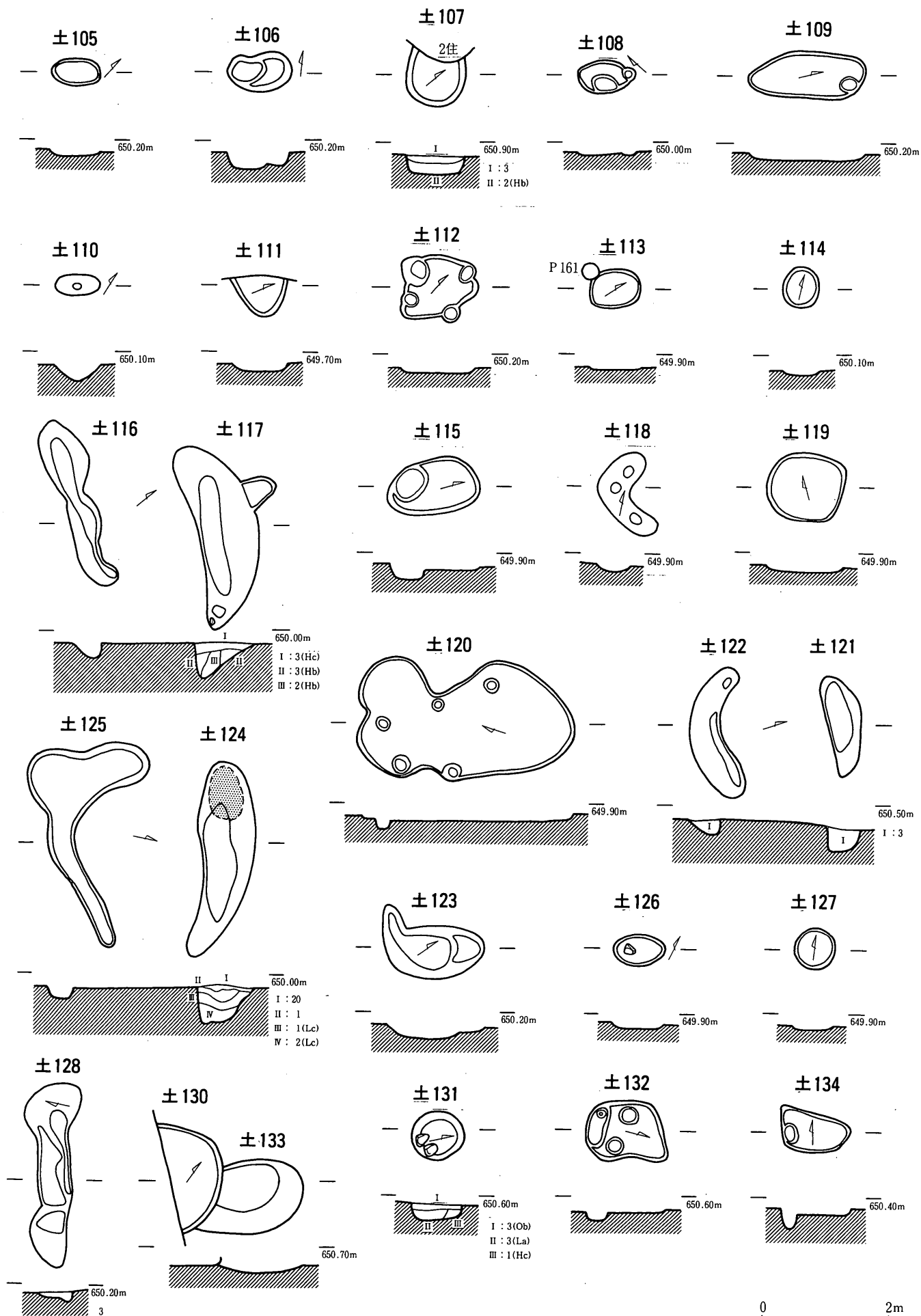


第18图 境窪遺跡 土坑(2)

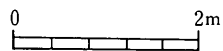


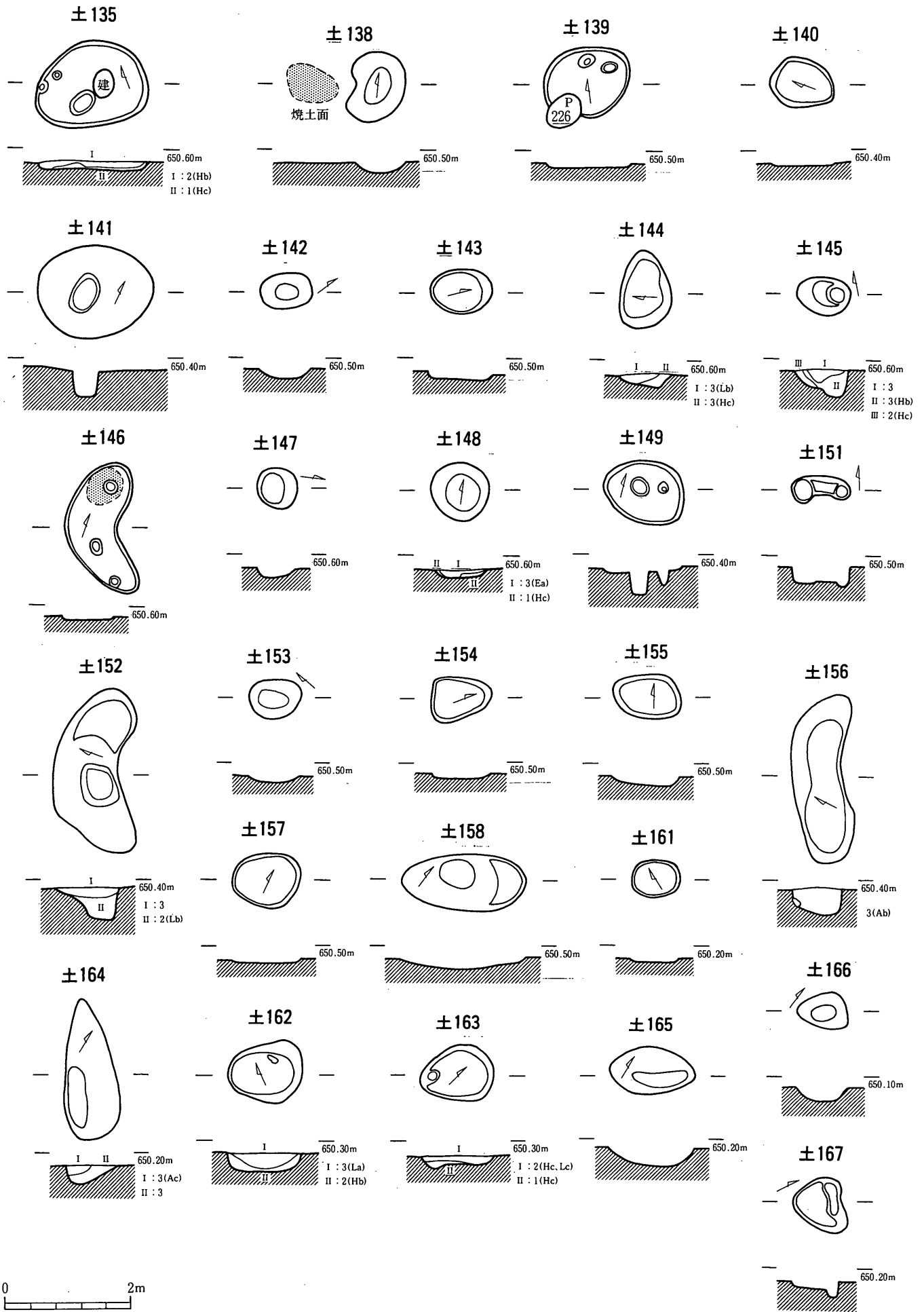
第19圖 境窪遺跡 土坑 (3)



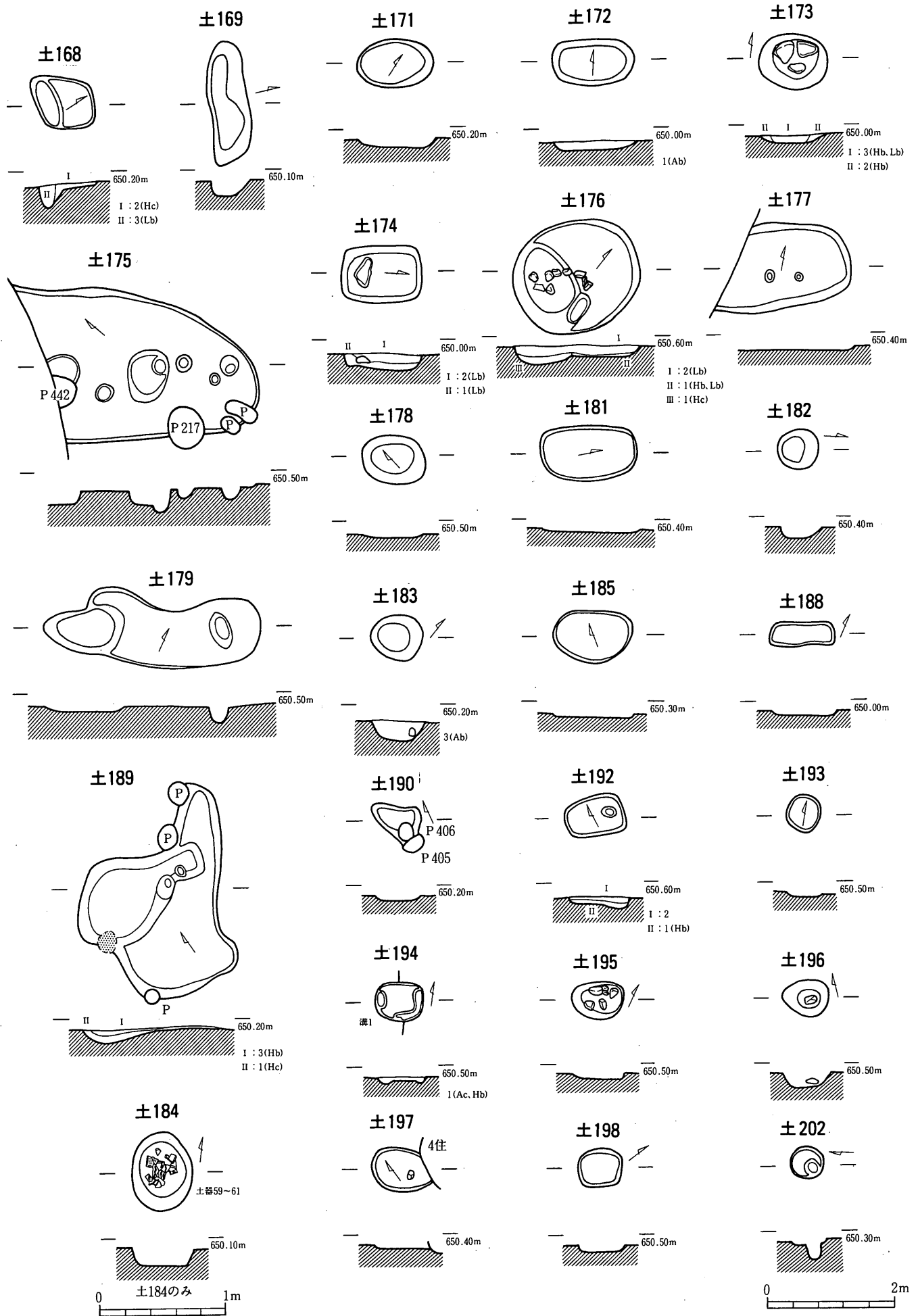


第 20 图 境窪遺跡 土坑 (4)

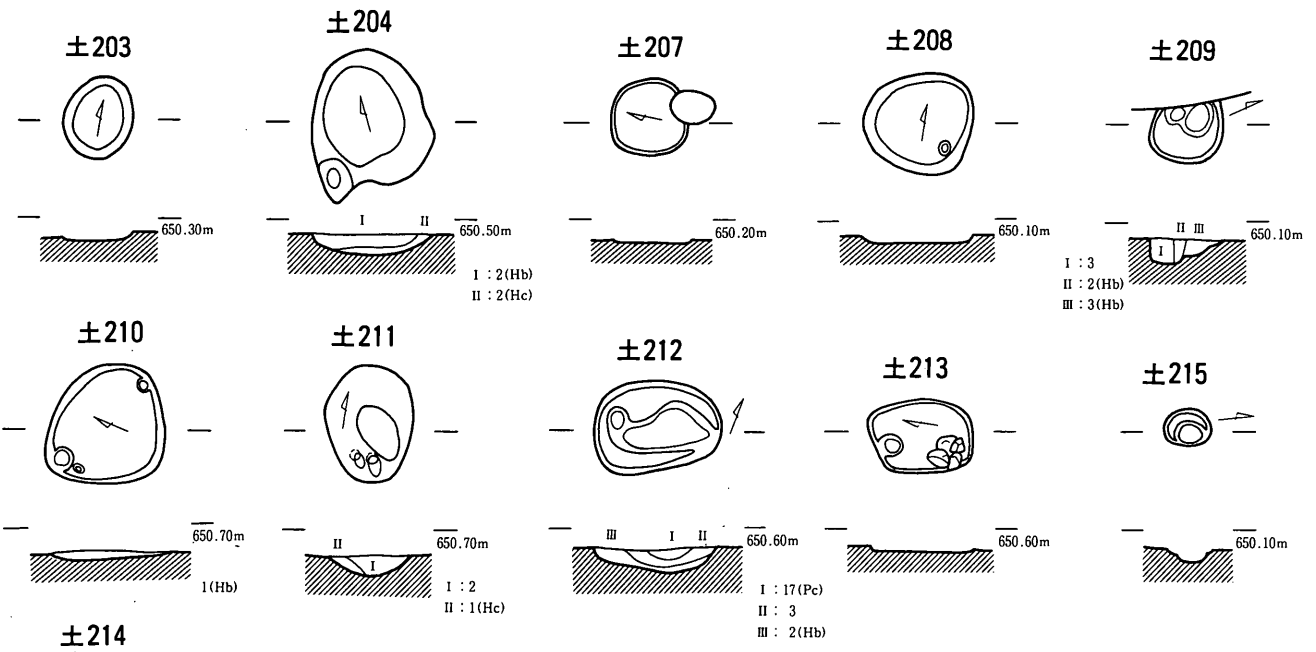




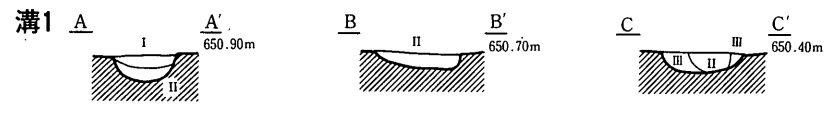
第 21 图 境窪遺跡 土坑 (5)



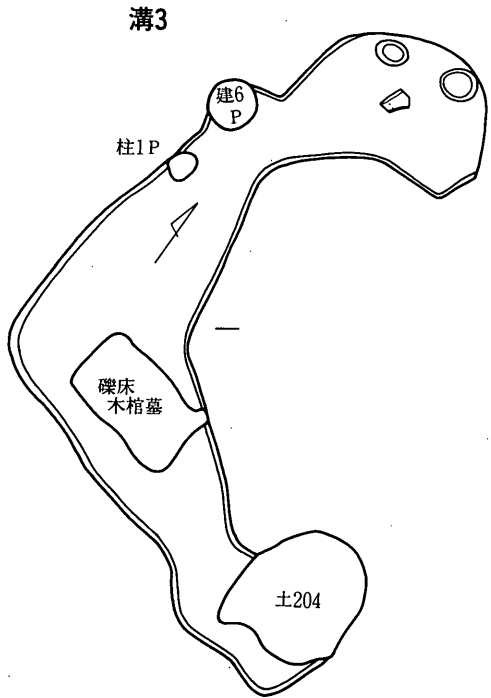
第22図 境窪遺跡 土坑(6)



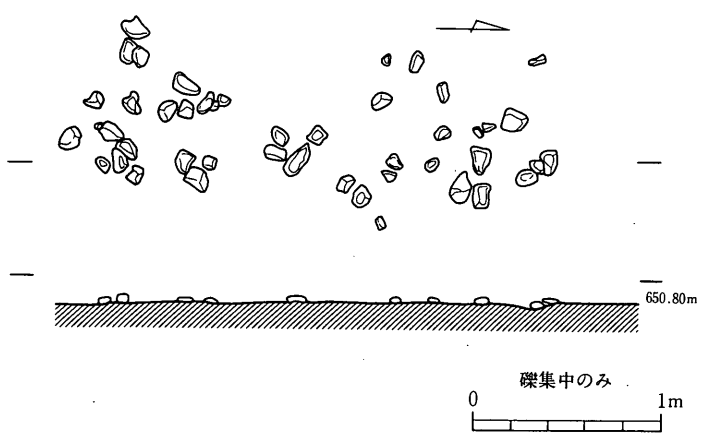
溝状遺構



- I : 2 (Ac, Bc)
  - II : 1 (Ac, Bc)
  - III : 2 (Ab, Bb)
- 
- I : 2 (Ac, Bc)
  - II : 2 (Ab)
  - III : 1 (Ac, Bc)

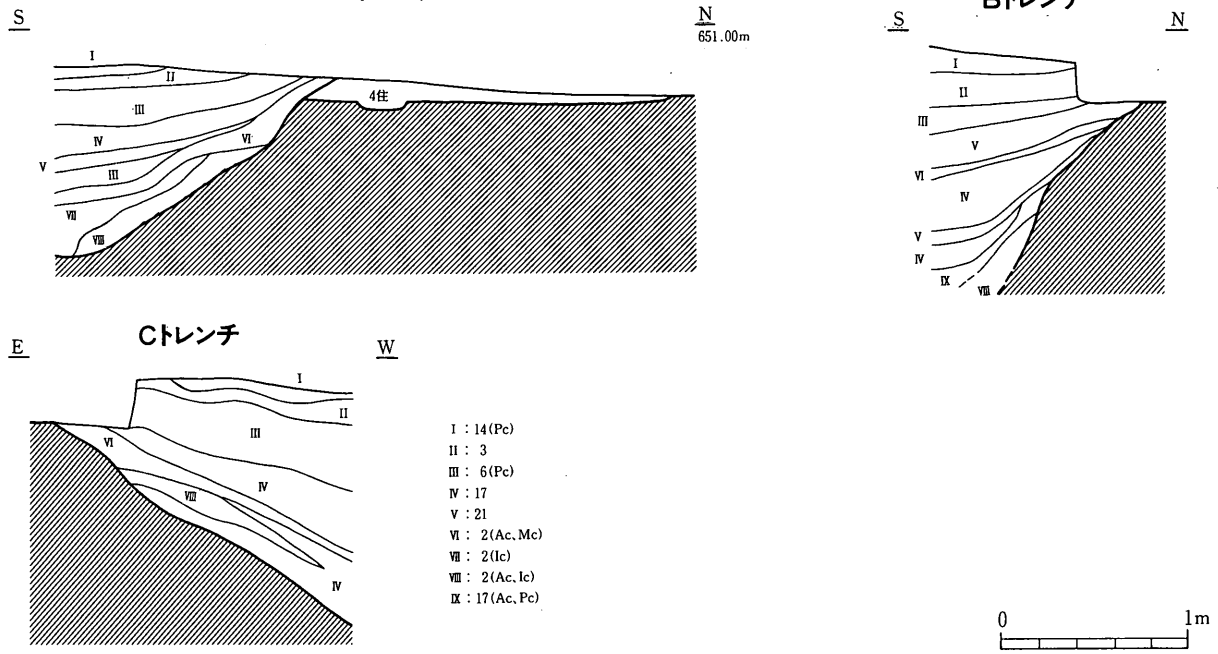


礫集中

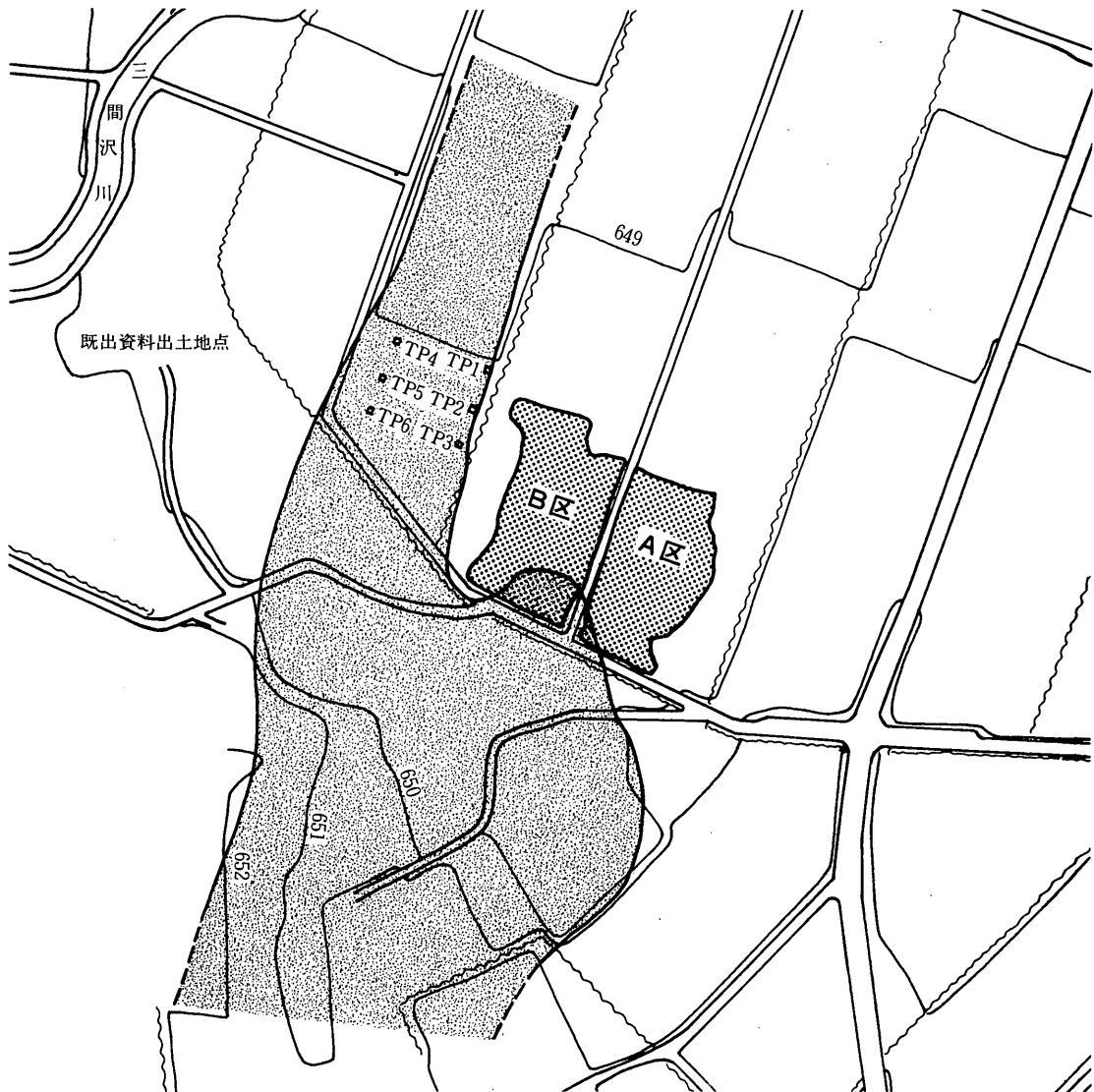


第 23 図 境窪遺跡 土坑 (7)・溝状遺構・礫集中

谷状地形



谷状地形の推定範囲



第24図 境窪遺跡 谷状地形



## 2. 出土遺物

### (1) 縄紋時代の遺物

土器集中1～4、および弥生時代の建10のピット内から後期の粗製深鉢片が数個体分出土しているが、紙幅の関係上今回は図化提示を諦めた。川西開田遺跡の縄紋時代遺物と合わせ、別の機会に報告したい。

### (2) 弥生時代の遺物

#### ①土器（第4・5表、第25～41図）

##### i) 概要

今回の調査では竪穴住居址を主体とする各遺構内、谷状地形及び検出面・包含層から多量の弥生土器が出土した。時期的にはすべて弥生時代中期前半～中葉に属するものであり、総量は整理用コンテナ20箱に及ぶ。このうち図化提示できたもの90点、拓影で示したもの366点で、各個体のデータは第4表に実測品を、第5表に拓影を示した。本文中で単位のない数字はすべて実測及び拓影の土器番号を示し、第4・5表の番号とも対応している。

今回の調査報告書作成にあたり、弥生土器の実測図は可能なものについては極力作成した。しかし、破片数が多量であったため、拓影は遺構の時期的特徴を示すとともに土器の紋様を把握するのに役立つものに絞らざるをえなかった。したがって、実測図及び拓影の数量が出土土器の器種・器形あるいは紋様についての組成の上での量的な比率を反映してはいない。また、当地域で資料の蓄積がきわめて希薄な時期であり、土器の器種・器形組成などほとんどの問題が解明されていない研究情勢であったため、本稿では土器の個体単位の検討に重点を置いた。その結果、遺構・層位ごとの土器群や組成の検討は充分にできなかった。

ところで、境窪遺跡では昭和30年代に工事等にもない多量の土器が採集されている。これらについても合わせて図化提示を行い、当遺跡の土器様相を探る一助とした。第31図71～90、第40・41図421～456が該当し、第4・5表中では出土地点を「既出品」として示した。

##### ii) 器種・器形

全形を捉えられる個体が少ないのでかなり限定した分類しかできない。基本的に壺形土器（以下「壺」と略称する。他の器種も同様）、甕、鉢の3器種が存在する。拓影資料などで小片のため器種同定が不確実なもの第4・5表の器種欄に「?」を付した。

##### a. 壺

胴部上半に最大径をもち、頸部が長く、口縁部が小さく外開・外反する「長首壺」とでも呼称できるものが大半を占める。代表例は3・12・15・17・69などである。小形品は頸部と胴部の区分が外形や紋様の上でもはっきりしないものが多い（29・30・47）。

これらに対して相対的に頸部が短めで太いものがわずかにある。71・400が該当するが、前者から明確に分離するのは不適切かもしれない。他に無頸壺が1点みられる（67）。

##### b. 甕

頸部のくびれがほとんど感じられない深鉢形のものも含めて甕と総称する。すべて口縁部に最大径をもつ。胴部はわずかに張りを感じる程度（11・14・18・25・45・56・57・61・65・77）から、かなり丸みのあるもの（6・24）までさまざまで、後者には胴部上半に頸部と形容することができる幾分かのかくびれを有するものもある。また、紋様構成によって甕A・Bに分類できる。

### c. 鉢

深鉢形の甕に対して浅いものを鉢とした。明瞭に鉢と判別できるものは1個体(9)、他に鉢と推定しているものが1個体(43)あるのみである。

### d. 「大地系」壺

54に代表される小形の壺の一群は明瞭な頸部を作り、そこから口縁部が大きく外反する形態をとる特徴的な外形を呈し、紋様も他の壺とは大きく異なる特異なものである。濃尾、飛騨地方で「大地式土器」あるいは「沈線紋系土器」などと呼ばれているものに近縁性があると推定するため、ここでは「大地系」壺と仮称する。7・13・22・54・84・89などが該当する。

## iii) 施紋原体

### a. 条痕原体

甕を中心に多数の条痕(条痕紋)がみられるが、細かくみると痕跡から推定される施紋原体にはいくつかの種類が想定できる。第一は条線の凹部もその両側の凸部にも擦痕が観察される条痕(条痕A)で、貝殻腹縁やそれに類似する端部を作り出した原体の存在が予想される。第二は条線の凹部のみに擦痕が観察されるもので(条痕B)、なかでも①かなり太い条線が無造作に束ねて引かれているもの、②中程度の太さ条線が櫛描紋のようにきちんと揃っているもの、③細密条痕のように細い条線がまばらに引かれるもの、などに大別できる。①~③の違いは、条痕原体が1本ずつ分離した単体を束ねたものであり、材質に係わる太さと束ね方の違いに起因すると考える。甕の口縁内面にまれにみられる太く四角い列点刺突(137・201・448)は条痕Aの原体による可能性が高い。

### b. 櫛描原体

条痕というよりは櫛描紋と呼んだほうが適切なほど整った波状紋や短線紋、直線紋がみられる。これらは条痕原体の②とほぼ同じ原体で施紋されていると推定する。径1~2mmの円に近い断面形をした単体を一直線に数本束ねているのであろう。単位が揃う細かい列点刺突(刺突B)はこの櫛描原体によると推定する。

### c. 沈線原体(篋描原体)

壺を中心に各種の沈線紋(篋描紋)がみられるが、これらの沈線の断面形は概ね半円ないし円周の1/3~1/4ほどを描いている。この点から先端の鋭いものではなく、断面が円形を呈す篋状(棒状)の施紋具が使われたと考えたい。このことは壺や一部の甕に残されている刺突が同一土器の沈線紋を描いた施紋具と同一の施紋具で行われていることからもうなずける。円形竹管や半截・多截竹管の可能性も大いにあると考える。原体の太さはさまざまでもっとも太い115・120・123など壺肩部のものは、沈線幅に限っても7mmを越える。

### d. 縄紋原体

壺の口縁部や頸部、肩部に主にみられる縄紋はほとんどが単節LRの原体をもちいている。まれに無節Rの原体がみられるのみで、主に縄紋原体の多様性は原体の太さ、節の大小に限られているとよい。

## iv) 基本的な紋様

### a. 刺突・キザミ

刺突やキザミは各器種のさまざまな部分に用いられるが、いずれも補助的な紋様とよい。

**刺突A** 沈線原体の単体による刺突。これらは沈線による各種区画の周囲を飾ったり(23・69)、区画内を充填する(12・19・49・181)他に、沈線の代わりに区画線に用いられる(17・30)こともある。ほとんどは原体を傾けて施紋するため縦長の爪形や半月形、半円形を呈しているが、まれに原体を垂直に施紋した円形のもの(刺突A1)がみられる(4:貼付紋中)。

**刺突B** 条痕原体または櫛描原体による刺突。これらは単位を有する列点となることが特徴で、ひとつずつの点の大きさや単位の幅は原体の太さに左右される。甕や壺の口縁部内面（40・73・74）や口唇部（35・78・403）にみられる。

**キザミ** 甕の口唇部に多くみられ、横断面が浅めの「V」字形になるように口唇端を抉り取っている。原体は、刺突のように形態を明瞭に反映していないので特定できない。甕の胴部にも付加紋様Aとして少数見られる（11）。また、甕口唇部での使用法はキザミと同じだが稜が緩やかな押圧痕も認められる（14）。

#### b. 条痕紋

甕を主体的に飾る紋様だが、壺の胴部下半にもみられる。施紋方向によって、斜条痕、縦条痕、横条痕、羽状条痕の4種類があり、さらに羽状条痕には縦羽状条痕と横羽状条痕の2種がある。ただし、条痕紋の種類によって先述の各種原体の使い分けがなされる状況は今のところ認められず、1個体には単一原体が使われる。いずれの条痕も器面に密に施紋され、18・45の甕の懸垂のように単独の単位で用いられることはまれである。

#### c. 沈線紋（篋描紋）

壺を飾る主要な紋様で多様性がある。それらの呼称についてもさまざまなものが用いられてきた。便宜的に以下のように仮称して略説する。

**平行沈線** 2本以上の平行な沈線のみで構成される紋様で、8・38・90などひとつの紋様帯を構成するものと、3・23など主に壺頸部の横紋様帯間を区切るものの2種が代表的である。

**山形沈線（山形紋）** 1～2本の直線を上下に斜行させながら横走させるもので、壺・甕ともに用いられているが数は多くない。典型的なものとしては90の壺肩上部、240のものを挙げることができる。他には12の壺頸部は3本が重ねられた重山形紋、18の甕口縁部には平行沈線による波状紋に近い山形紋、24の甕胴部には2本歯の櫛描による短線紋連結の山形がみられる。

**弧状沈線** 沈線で大きな弧状の枠を描く紋様で、大きくうねりながら横走し壺の肩部を飾る。太い沈線枠の中におそらく櫛描または条痕で条線が埋められるもの（97・248）と縄紋が充填されるもの（122・125）の2種がある。後者は周期の大きな波状にもみえる。いずれも拓影資料に限られ、全形がわかるものがない。

**円形・同心円沈線** 円または同心円を描き、その周囲を同様の円弧で囲むもので、壺の胴部紋様に多数みられる。ほとんどは円内または外周に縄紋を充填しており、中心の円内に沈線と同一施紋具による刺突Aをもつもの（12・49・112・321・370）、貼付紋をもつもの（10・99）もある。

**三角形沈線（鋸歯紋・複合鋸歯紋）** 主に壺に用いられ、頸部に複数の沈線によって交互の三角を連続して描くもの（3・4・96）、肩部に三角を連ねて内部に縄紋や刺突を充填し円などを配すもの（49・110・123・124）などがある。小形の甕60の胴部には三角内に斜沈線を充填した複合鋸歯紋が描かれている。

**菱形沈線** 壺の頸部や肩部に横位に菱形を連ねるもので、菱形間の接点には円形突起が貼り付けられている。全形がわかる資料には恵まれず、195・376・439などにみられるのみである。

**重四角沈線** 長方形を入れ子状に二重以上に重ねて描くもので、多いものでは7段に重ねられている。壺に多用されており、頸部と胴部にみられる。最も内側の長方形の内部は刺突A（19・82）、刺突B（156）縦沈線充填（17）、縄紋充填（69・83・157）、単なる横沈線（9・15・37・40・43）などで埋められている。

**工字状沈線** 沈線で「工」の字状の区画を描き、その内部または外部に縄紋を充填するもので、壺の肩部に限ってみられる。31・85・180などが代表的で、58・305・322などもここに含まれると考える。

#### d. 櫛描紋

この紋様はさらに櫛描短線紋（以下「短線紋」と略記。他の櫛描紋も同じ）、直線紋、波状紋、円弧状紋などに分けることができる。施紋原体からすると櫛描条痕紋も当然ありうるが、ここでは櫛描紋ではなく条痕

紋に含める。

**短線紋** 原体を短距離間動かしただけの施紋だが、単体が縦方向や斜行のものはみあたらず、甕の胴部に付加紋Aとして使用されている簾状紋状に連結される形態が主である(18・24・48)。252・257は甕Aの口縁部に横向き短線紋をわずかな間隔をおいて並べるものだが、この形態の短線紋施紋はきわめて少ない。

**直線紋** 甕の胴部などに横走するもの(24・61)があり、まれに付加紋Bの懸垂として縦方向のもの(18・61・228)もみられる。

**波状紋** 一部の甕の口縁部・胴部にみられ(18・61・186・202・232・338)、横走するものが多い。甕口縁部内面上端に刺突Bに替えて1条施紋されるものもある(106)。また、壺にもわずかに認められ(178)、小形の壺に全面波状紋を描いたものもある(47)。

**円弧状紋** 櫛描紋独自で円弧紋やコンパス紋を描くのではなく、沈線による大きな円弧区画内に沿って櫛描紋の曲線を充填するもの(97)で沈線紋の弧状沈線と関連する。

#### e. 縄紋

壺の口縁部・頸部・肩部に用いられている。器面を縄紋のみで埋めるという施紋は少なく、沈線紋の区画内外への充填が主要な使用方法である。縄紋地紋のうえに紋様を描く例は珍しく(19?)、ほとんどは沈線や刺突の施紋後に縄紋施紋を行っている。区画外にはみ出した縄紋は擦り消されているが、消されずにそのまま残っている例も多い(43・49・163・224)。

#### f. 貼付紋(浮紋)・突起

貼付紋や浮紋と呼称されるものは主に壺に用いられており、菱形紋様の接点(195)や重四角紋様の角(9・17・154)、円形・同心円紋様の中心(10・99)や隣との接点(71)に貼り付けられている。貼付紋のほとんどは平面形が円形で、中央部に沈線原体を垂直にして突いたと推定される円形の刺突を持つものもある(9・154)。54の壺の貼付紋は周辺の胴部紋様と同様の細かい爪形刺突が複数行われている。

突起は口縁部が一定の間隔をおいて小さく突出するもの(7・24)と、壺の頸部に縦の鱗状に付されるもの(27)がある。

#### g. 赤彩

器面に赤彩が施された痕跡を残す土器は少ない。22の大地系壺の頸部無紋部分や23の壺頸部縄紋帯にわずかに赤彩を認める程度である。

### v) 壺の紋様帯(第25図)

壺は各部位ごとに特徴的な紋様を持つことが多く、それぞれを紋様帯として把握する。基本的に口縁部、頸部、肩部、胴部の4部位に分け、各部位ごとの紋様の組合せの特徴をみてみたい。

#### a. 壺口縁部紋様帯

明確に壺口縁部と確認できる個体が少ないので多様性は探れないが、縄紋を満たすものと縦沈線を連ねるものの2形態が認められる。前者の中では頸部に続くくびれ部の施紋に違いがあり、沈線を巡らして口縁部を画すもの(3・87・177)、沈線ではなく刺突で画すもの(17・29・30・384)、沈線と刺突を平行して巡らすもの(23)などがみられる。86は沈線と刺突及び縄紋で口縁部紋様が構成され類型を探り得ない。

口縁部内面上端部に刺突Bによる横位1段の紋様帯を持つものがまれにある(40・107・137・201)。

#### b. 壺頸部紋様帯

ほぼ頸部の全容が捉えられる3・12・17をみると、横帯構成を基本としている。そのなかでは沈線による三角形紋様連結(三角形連繫紋)と重四角紋様連結(方形連繫紋)の2形態に大別できる。三角形紋様連結を主体に構成されるのを壺頸部紋様帯A、同様に重四角紋様のものを壺頸部紋様帯Bと仮称する。12は縄紋帯

を挟んで重山形紋帯が2段巡るが、Aの一種と捉えておきたい。

壺頸部紋様帯 A 1：2段以上に三角形を重ねる (3)

壺頸部紋様帯 A 2：1段のみ (4)

壺頸部紋様帯 B 1：1段のみ (40)

壺頸部紋様帯 B 2：2段以上に重四角を重ねる (17)

壺頸部紋様帯 C：壺頸部紋様帯 A・B 以外

#### c. 壺肩部紋様帯

肩部は横沈線で区画される無紋あるいは縄紋帯によって頸部紋様帯と画され、単純な条痕または無紋の胴部とも明瞭に区分される。ほぼ単一段の横位紋様帯となっており、構成する基本的な紋様によって次のような5形態ほどに分類できる。

壺肩部紋様帯 A：三角形を横に連繋または並べるもの (49・123)

壺肩部紋様帯 B 1：重四角を横に連繋または並べるもの (19・43・69)。

B 2：さらに2段以上重ねるもの (9)。

〈重四角が歪む平行四辺形を連繋するもの (221)〉

壺肩部紋様帯 C：円形・同心円紋様を横方向に連繋または並べるもの (10・12)

壺肩部紋様帯 D：工字状紋を横方向に並べるもの (31・85?・160?・180・305・322)

壺肩部紋様帯 E：大きな弧線紋様を巡らすもの (97・122・125・248)

壺肩部紋様帯 F：横長の長方形、長楕円形 (小判型) を巡らすもの (15・58)

壺肩部紋様帯 G：横方向の平行沈線を数本巡らすもの (8・38・90)

#### d. 壺胴部紋様 (調整)

斜条痕で埋められるもの (10・15・31・38・43) と、無紋のもの (8・12・19・49・58・69) のいずれかである。条痕は右下がりと左下がりの双方がみられるが、31のように方向がかなり乱れた条痕もある。無紋のものも器面調整として斜方向の工具ナデやミガキ状の調整がなされており、この点から推察すると、この部位の条痕は紋様というより調整の一種に近い。

#### vi) 甕の紋様による分類 (第25図)

甕は全形がわかるものは9点しかないが、紋様全体の傾向を捉え甕A・Bの2種類に分類する。外形の異なりが紋様構成の違いに反映しているとは認められないので、ここでは最終的に甕A・Bは形式 (小形式) とすることができると思う。

##### a. 甕 A

条痕が紋様の主体となる甕を総称する。口縁部以下における複数の紋様帯の有無と、条痕の施紋種類によって次のように細分できる。

甕 Aa：肩部または腰部で条痕の紋様帯が変化するもの (2段の紋様帯を持つもの)

①：肩部以上が縦条痕

ア：肩部以下が横羽状条痕 (11・14・65)

イ：肩部以下が横条痕 (48・75)

ウ：肩部以下が斜条痕 (56)

②：肩部以上が横条痕 (62・63)

〈②-1：口縁部が横条痕 (21・303・373)〉

③：腰部以上が横羽状条痕 (6・45・57?)



甕 Ab：肩部または腰部で紋様帯の変化がないもの（土器全体が単一の紋様帯で覆われるもの）

①：斜条痕（52）

②：縦羽状条痕（21?）

また、細分にかかわらずほとんどの個体が口唇部に紋様を有す。その大半はキザミだが、45・133・333は胴部と同じ条痕、14は押圧痕、35には刺突B、252・257には櫛描短線紋がみられる。同様に、口縁部内面上端部に刺突Bによる横位1段の紋様帯を持つものがまれにある（74・201・230・277・287）。

#### b. 甕B

条痕以外の紋様が主体となるもの（18・24・25・61・73・77・186・202・364）。主に櫛描紋が描かれ、口縁部、胴部上半に紋様帯を持つ。数量的に少ないため、紋様帯の組合せなどによる類型化への方向は今回は見出せない。各部の紋様帯ごとの概略を以下に記す。

甕口縁部紋様帯：縦の櫛描条痕（24・61）、横の櫛描波状紋（18・73）、交互方向の櫛描斜行短線（77）、無紋（25）などさまざまである。

甕胴部上半紋様：横帯3段以上の櫛描直線紋と波状紋の組合せ（61・77）、横の櫛描条痕と同小懸垂（18）、縦条痕（25）などがみられる。24は波状紋ではなく櫛描短線紋を連続させて山形を描いている。

甕胴部下半紋様：わずかに77に斜条痕がみられるのみである。

#### vii) 「大地系」壺の紋様帯

大地系の壺と仮称する土器は不確実なものを含めて実測図8点、拓影17点を提示したが紋様構成の全体を知りうる個体は1点にすぎない。紋様帯は口縁部、頸部及び胴部の紋様帯に区分される。また、口縁部の内面に付加紋B2に類似する沈線紋を配すもの（7・12・60・142）や、沈線・縄紋・刺突の横帯をもつもの（54・88）がある。

口縁部紋様帯 22・54・88・108・109・176などにみられるが、紋様構成は一定していない。54は口縁部全面を横羽状（横帯の綾杉状）沈線単段でうめるが、88は上半を無紋にして下半に3本の沈線を平行に引くのみである。7にみられる頸部上の2本の沈線も88と同様のものとみなすこともできる。22は口縁部の全形を知りえないが、細かい刺突で横長の長方形に区画した中に刺突と同一施紋具で引いた横沈線を並べ、頸部際の長方形区画の角には円形貼付紋を貼っている。109と176も22に類似する紋様構成になると考える。

頸部紋様帯 基本的には口縁部紋様帯の下端と胴部紋様帯の上端を画す横位の沈線または刺突列に挟まれた領域であり、無紋となっているか（22・54・89・191）、刺突（7）や横沈線（68）などが充填されている。84には縄紋がみられる。

胴部紋様帯 3単位ないしは4単位で横位に重四角紋様または下方に開く「コ」の字重ね紋を連ねる紋様構成が最も多い（7・22・54・68・84・149・150・190・191）。重四角やコの字の内部には刺突（84は縄紋）、接点には円形貼付紋があるのも共通している。89は横位平行に引く数本の沈線を2種類のキザミによって8等分する特殊な紋様だが、4単位の重四角の変形と解釈することもできる。60は外形や口縁内面の施紋からここに該当させたが、胴部紋様帯は沈線による複合鋸歯紋となっており他に例をみない。

#### viii) 付加紋様

主要な紋様や紋様帯ではないが、一定の傾向をもって紋様帯の区画に用いられらたり紋様帯の中に追加されるように描かれる紋様をここでまとめる。

##### a. 付加紋A

甕Aaにみられる。甕肩部または腰部で条痕の紋様帯が方向の異なる条痕による次の紋様帯へ切り変わる境

界を、さらに強調するごとく施紋される。また、紋様帯に変化はないが、甕の肩部や腰部にあたる外形的な境界の位置を明示するように施紋されているものもある(44・141・188)。使用される基本的な紋様によって4種類に細分する。

付加紋A1 キザミを横方向に並べるもので11が典型例。11のキザミ単体は縦方向に刻み込まれている。

付加紋A2 刺突Aを横方向に並べるもので75・147・148・172・189・247などが典型。44のように横方向の刺突列に縦方向の刺突が伴っているものもある。187にみられる縦列の刺突も44に類すると推定する。

付加紋A3 横向きの櫛描短線を横方向に連結するもので48が典型。甕Aaに伴うものではないが、甕Bの18・25に見られる横方向に連結された櫛描短線紋も紋様帯の区画を強調するという点では本付加紋の範囲に加えてよいと考える。

付加紋A4 横の条痕を甕腰部の境界に施紋するもので56・231などに代表される。56は横方向に3段の条痕が巡っており付加紋とするには厚みがあるが、基本的に上下の紋様帯を区切るものと捉え付加紋とした。

#### b. 付加紋B

横位の紋様帯を部分的に縦に切る(または分断する)懸垂紋様を付加紋Bと総称する。甕A・B以外に壺にもみられる。施紋原体と形態により3種に細分する。

付加紋B1 櫛描直線を垂下させるもの。甕Abに付加されるものは条痕の紋様部分を上から下までとおして切る形で描かれる(41・45)。ただし、施紋順において41が条痕施紋後(条痕を切る)なのに対し、45はまず付加紋B1を器面全周で3単位垂下させた後に条痕を間に満たしている。原体は条痕と同一である。拓影資料の228も同様の付加紋と考えるが、背景の条痕とは施紋原体が異なる。

次に、甕Bに付加されるものでは長さの短いもの(18)と、長めのもの(61)がある。原体は条痕と同一で61は周囲を沈線で囲まれている。18の短い懸垂は系統的には次に述べる付加紋B2に近いと考える。

付加紋B2 複数の短い平行沈線を垂下させたもの。横位の平行沈線による壺肩部紋様帯を切る例がある(90・121・164・194)。切られる紋様帯も付加紋も同一原体である。また、大地系壺の口縁内面の紋様には、164や194によく似る3本の短い沈線で中央の沈線のみをやや長めにしたものが描かれている(7・13・60:ただし60は「山」の字になっている)。

付加紋B3 甕Aの横条痕による紋様帯を、櫛描原体や条痕原体とは異なる沈線原体による太い沈線で縦に切ったものである(63・337)。

### ix) 境窪遺跡出土弥生土器群の検討

#### a. 組成の量的な問題

すべての遺構及び包含層出土品のなかで器種や紋様を識別できた約800点(破片資料および実測、拓影で提示できなかったものを含む)を母集団として、器種ごとの比較を行った結果は次のとおりである。

甕/全体=53.7%、壺(大地系除く)/全体=43.2%、大地系壺/全体=3.1%

この数字は遺跡内での時間幅を含むものであり概要を示すにすぎないが、壺が甕に比肩する量で存在していることが想像される。壺には胴部下半が無紋のものもあり、これを考慮すれば壺の比率はもう少し上昇するであろう。また、大地系壺と仮称した沈線紋系土器が3%の割合で存在することは注目できる。

形式の分類が可能だった甕について甕A・Bの比率をみみると、甕Aは遺跡全体ですべての甕の91.7%を占め、主要な遺構でも同様比率90%代にある。甕Aが主体を占めるといっても過言ではない。これに対し甕Bは遺跡全体で全甕の5.1%、各遺構では7・8住で15.8%、23.1%という値を示すが、他は一桁代である。客体的という表現は控えるが、甕Bは主流ではない。

壺は形式の分類ができなかったので、ここでは壺の各種紋様帯の出現頻度について触れたい。小破片でも

比較的容易に識別できる円形・同心円沈線、三角沈線、重四角沈線、菱形沈線の頸部紋様帯での出現頻度は円形・同心円 3.8%、三角 69.3%、重四角 19.2%、菱形 7.7%、肩部紋様帯での出現頻度は円形・同心円 19.0%、三角 42.1%、重四角 33.1%、菱形 5.8%（いずれも当該紋様のみの合計で対比）である。

遺構ごとの傾向では、前述のように 7・8 住で甕 B の出土の比率が高い他に、6 住と 12 住で壺の重四角沈線の出現比率が高くなっている。しかし、これを遺構の時期差や居住者の違いなどの問題に昇華させるのは、統計的にみても形式分類においても現状では困難であろう。

#### b. 紋様の継続性

中期後半の栗林式土器に継続していく要素を挙げてみたい。第一は付加紋 A にみられる甕の胴部を上下に区切ろうとする意図で、紋様帯の違いを失いながらも付加紋 A 1 のキザミは栗林式前半の甕の中に残っていく。第二は付加紋 B 1 の縦に長い櫛描直線を引き降ろす施紋で、栗林式の終末段階以前まで波状紋を切る形で残る。最後に大地系壺と仮称した土器の胴部にみられる重四角沈線だが、54 などでは下方が開き「コ」の字重ね紋になっており、栗林式にみられる小形台付甕の胴部紋様に特徴のコの字重ね紋にきわめて類似する。同紋様の初源を大地系壺と断定するのは尚早だが、検討に値する問題であろう。

#### c. 境窪遺跡出土弥生土器の編年的な位置

既出品を含めた境窪資料と周辺の同時期遺跡出土資料との簡単な比較を行ってみる。かなり感覚的な視点ではあるが、今回出土の資料を今後どこに位置づけていくかの手掛かりとしたい。

明科町緑が丘遺跡では、甕 A・B がみられ、甕 A への付加紋 A・B 3 もある。壺でも肩部紋様帯 B・C・D・F がみられ、境窪資料に共通するところが多い。

松本市横山城遺跡では、壺の口縁部や頸部に条痕が用いられているものがある。沈線を用いたものには肩部紋様帯 D あるいは F と類似するものもみられるが、他の多様性は少ない観がある。条痕の使用が多いこと、沈線紋が豊富ではないことは境窪資料との相違点といえる。

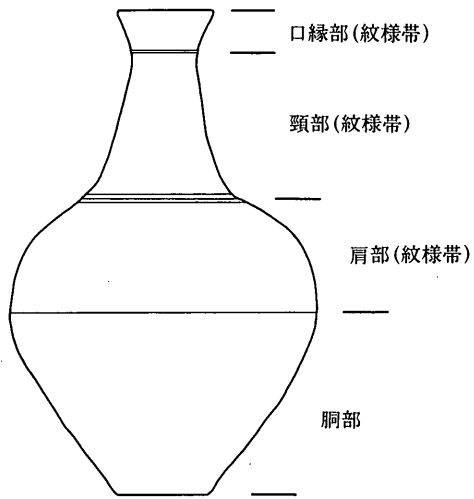
三郷村黒沢川右岸遺跡では、第 1 号住居址出土品は、壺では肩部紋様帯 B・C・G や菱形連繋、山形沈線、短い弧状沈線などの紋様がみられる。甕では甕 A に付加紋 A 1・A 2 がみられる。第 2 号住居址出土土器もほぼ同じである。壺に条痕がないこと、甕 A が主体を占めていて付加紋もみられることなどが類似点である。複線三角形連繋があまり目立たないこと、短い弧状沈線のような紋様の存在などが相違点である。

これら 3 遺跡と境窪資料の相違が時期差に起因すると考えれば次の 2 点を指摘できよう。第一に、境窪資料はかなり短時期にまとまっていることが窺える。今回出土品を遺構毎に時期的特徴を抽出し段階設定を行うことは現段階ではむずかしい。第二に、総体的にみると横山城→境窪・緑が丘→黒沢川右岸という流れの中で、中期初頭の条痕紋土器から中期後半の栗林式土器への大きな変化の一部が捉えられるのではないかと考える。

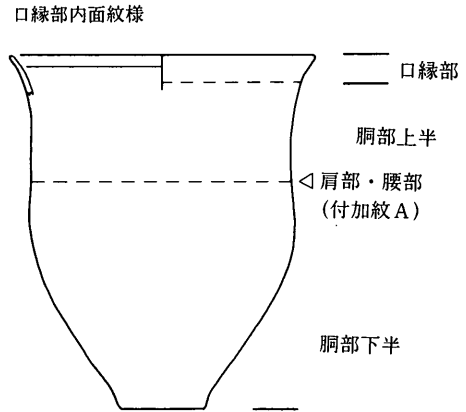
※多数の方から有益なご教示を頂いたが筆者不勉強で本文に生かせなかった。お詫び申し上げたい。

#### <参考文献>

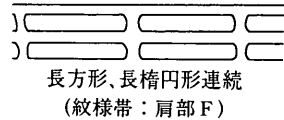
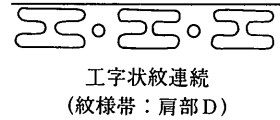
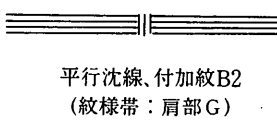
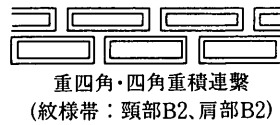
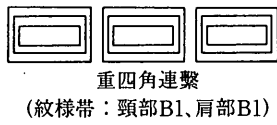
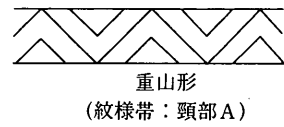
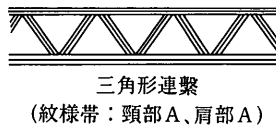
- 松本市教育委員会 1974 『長野県松本市今井こぶし畑遺跡緊急発掘調査概報』
- 百瀬長秀 1983 「中部高地における初期弥生土器」『三県シンポジウム 東日本における黎明期の弥生土器』
- 三郷村教育委員会 1988 『黒沢川右岸遺跡』
- 笹沢 浩 1983 「中部高地」『弥生土器Ⅱ』ニュー・サイエンス社
- 藤沢宗平 1966 「長野県松本市横山城遺跡」『信濃』18-7
- 永井宏幸 1994 「沈線紋系土器について」『朝日遺跡Ⅴ』財団法人愛知県埋蔵文化財センター



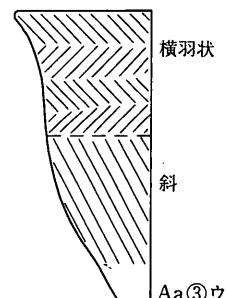
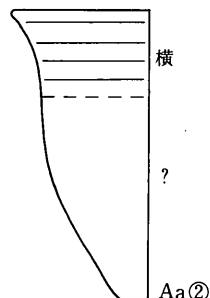
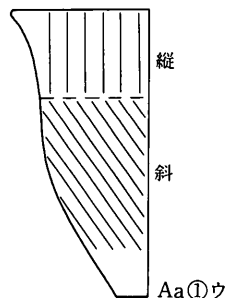
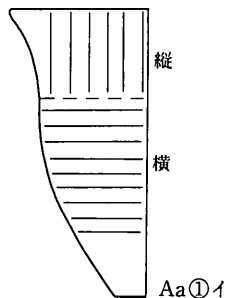
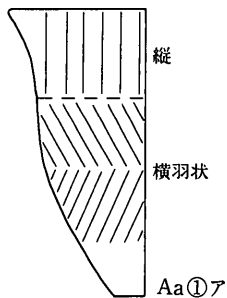
壺の各部名称



甕の各部名称



壺の主な紋様 模式図



甕Aaの条痕 模式図

第25図 境窪遺跡 弥生土器の形態・紋様模式

第4表 境窪遺跡弥生土器一覽

<胎土欄凡例>石:石英、長:長石、雲:雲母、褐:褐色粒

番号	番号	寸法	残存	色調	紋	棟	注記・実測番号
地点		部位・長さ (cm)	部位・割合	胎土	成形・調整		備考
1	甕	底径 5.4	底部完	黄褐			B3住SW、3住-2
	3住	現高 2.0		長・雲	(外)ナデ (内)ナデ (底面)ナデ		
2	甕A	底径 7.0	底部3/4	淡黄褐		斜条痕	B3住P検、3住-1
	3住	現高10.0		石・長・褐・雲	(外)ケズリ (内)ナデ (底面)布目痕		内面炭化物付着
3	壺		口頸部	橙褐	頸部紋様帯A1 (3本沈線)、円形沈線、LR縄紋充填		B4住Na5、4住-1
	4住	現高17.7		石・長・褐・雲	口縁ヨコナデ、(内)工具ナデ		
4	壺		頸部	橙褐	頸部紋様帯A2 (キザミを伴う隆帯間)		B4住、4住-2
	4住	現高 8.5		石・長・褐	(内)ナデ		内外面磨滅
5	鉢	口径18.1 底径 5.9	口縁1/2	橙褐	乱れた斜条痕 (4本/9ミ)、口唇キザミ		B4住SW、4住-7
	4住	器高13.5	底部1/2	石・長・褐・雲	(内)工具ナデだが僅かにハケメ状の条が残る		
6	甕A	口径27.4 底径 7.4	口縁	暗褐	口唇キザミ、胴上半横羽状・下半斜条痕		B4住Na7、4住-5
	4住	器高31.2	底部	長・褐	口縁外面折り返し状、(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ部分的にハケメ状		内面上部黒変
7	壺	口径17.2	口縁1/3	暗褐	頸部沈線間刺突Aと4単位円形貼付紋、胴部重四角沈線、口縁内面付加紋B2(3本)		B4住Na7、4住-6
	4住	現高 8.9		石・長	口唇部沈線状の面、突起3単位 (外)ヨコナデ (内)ナデ、ヨコナデ		大地系壺、内外面磨滅
8	壺		胴部	黄褐	肩部紋様帯G		B4住SE、4住-4
	4住	現高13.3		石・長	(外)板状工具ナデややミガキ状、紋様部地ハケ(条痕) (内)板状工具ナデ		
9	壺		肩部	黄褐	肩部紋様帯B2、山形沈線、間に円形貼付紋		B4住NW、4住-3
	4住	現高 9.6		石・長	(内)ナデ		
10	壺		肩部	暗褐	肩部紋様帯C、円中心貼付紋、山形沈線?、LR縄紋地紋		B5住Na2、5住-3
	5住	現高14.0		石・長・雲	(外)紋様帯以下斜条痕 (内)ナデ、指オサエ		
11	甕A	口径20.6	口縁1/3	暗褐	胴部上半縦条痕、下半乱れた斜条痕(横羽状)、口唇キザミ付加紋A1		B5住Na3、5住-5
	5住	現高18.3		石・長・褐	(外)ヨコナデ、底部外周ケズリ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ		
12	壺	底径 5.8	底部完	橙褐	頸部LR縄紋帯と重山形紋帯交互で下段刺突帯、肩部紋様帯C、刺突A充填		B5住、5住-1
	5住	現高32.4		石・長・小礫	(外)胴部ミガキ (内)ナデ、工具ナデ		器面磨滅紋様不明瞭
13	壺	口径14.6	口縁1/3	暗褐	口唇刺突A、頸部横沈線、口縁内面付加紋B2(3本)4単位		B5住SW、5住-6
	5住	現高 4.6		長・雲	口唇4単位突起 (外)ナデ、ヨコナデ (内)ヨコナデ、ナデ		大地系壺、外面炭化物付着
14	甕A	口径19.9	口縁完	暗褐	口唇押圧、胴部上半縦条痕、下半1段の横羽状条痕 (3本/10ミ前後)		B5住Na5、5住-4
	5住	現高22.3		石・長・雲	(内)ケズリ状の工具ナデ		内外面炭化物付着
15	壺	底径 7.9	底部完	黄褐	肩部紋様帯F、周囲LR縄紋充填		B5住Na23、5住-2
	5住	現高25.9		石・長・雲	(外)胴部斜条痕、底部外周ケズリ (内)工具ナデ、ナデ (底面)布目痕		
16	壺		頸部	淡橙褐	隆帯上に縄紋		B6住NW、6住-2
	6住	現高 6.1		石・長・褐	(外)ナデ (内)板状工具ナデ		内面粟状種子圧痕
17	壺		頸部	暗橙褐	口縁部LR縄紋と刺突A、下半頸部紋様帯B2・縦短線紋充填、円形貼付紋		B6住NE、6住-1
	6住	現高20.6		石・長・褐	(内)板状工具ナデ、ナデ、オサエ		
18	甕B	口径16.6 底径 6.4	口縁1/2	暗褐	口縁山形波状紋、頸部付加紋A3、胴部横条痕(2本/5~6ミ)・付加紋B1(短)1単位		B6住NE、6住-5
	6住	器高17.1	底部完	石・長・褐・雲	口唇巡回沈線 (外)ヨコナデ、ナデ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ		
19	壺		肩部	暗褐	肩部付加紋B、刺突A充填、LR縄紋地紋		B6住Na1、6住-3
	6住	現高11.8		石・長・褐・小礫	(内)ナデ、磨滅		外面炭化物付着
20	壺	底径 6.6	底部完	暗橙褐			B6住Na1、6住-4
	6住	現高 6.9		長・褐・雲	(外)ナデ、磨滅 (内)ナデ、磨滅		
21	甕A	口径29.4	口縁1/4	橙褐	口唇キザミ、口縁直下横条痕、縦羽状条痕(3本/6ミ~4本/9ミ)		B6住Na2、6住-6
	6住	現高13.6		石・長・褐	(内)僅かにハケメ状の条を残す工具ナデ、ナデ		
22	壺		胴部	暗褐	口唇刺突Aによる区画内横沈線、下半重四角沈線、円形貼付紋8単位		B7住SW、7住-5
	7住	現高 6.9		石・長・褐・雲	(内)工具ナデ、ナデ		大地系壺、頸部外面赤彩残る

番号	番号	寸法	残存	色調	紋様	注記・実測番号	
地点	部位・長さ (cm)	部位・割合	胎土	成形・調整	備考		
23	壺		頸部	淡橙褐	2本の横沈線2段、刺突、LR縄紋充填	B7住NW、7住-1	
	7住	現高 8.9		石・長	(内)ヨコナデ、工具ナデ	頸部外面赤彩痕	
24	甕B	口径18.0	口縁4/5	橙褐	口唇沈線巡回、口縁縦条痕(2本/5ミリ)、胴部同原体横線4段、山形短線、付加紋A3	B7住No7、7住-2	
	7住	現高 15.0		石・長・褐	口縁5単位突起(外)板状工具ナデ、ヨコナデ(内)板状工具ナデ、ヨコナデ		
25	甕B	口径16.7	底径 6.2	口縁1/2	淡褐	頸部と肩部に横沈線、その間に縦条痕	B7住No6、7住-3
	7住	器高 19.4		長・褐・雲	(外)ナデ(内)板状工具ナデ	内外面粟状種子圧痕	
26	甕A	口径30.6	口縁1/6	暗黄褐	口唇キザミ、斜条痕	B7住No8、7住-4	
	7住	現高 8.7		長・雲	(外)ヨコナデ(内)ハケメ状の条を残す工具ナデ、ナデ		
27	壺		頸部	淡黄褐	横・三角沈線、LR縄紋充填、鱗状突起4単位	B8住、8住-3	
	8住	現高 5.2		石・長・褐・雲	(外)ナデ(内)ナデ		
28	壺		頸部下半	暗褐	頸部紋様帯B、LR縄紋	B8住NW、8住-4	
	8住	現高 4.8		石・長・褐・雲	(内)板状工具ナデ	内外面炭化物付着、粟状種子圧痕	
29	壺		頸部	橙褐	上半細紋、下半刺突A・横沈線	B8住NW、8住-1	
	8住	現高 6.8		石・長	(内)ナデ	内外面摩滅激しい	
30	壺	口径 6.8	口縁1/8	黄褐	刺突Aで横区画し口縁と頸部下半にLR縄紋、横沈線	B8住、8住-2	
	8住	現高 9.8		石・長・褐・雲	(外)ナデ、ヨコナデ(内)ナデ、ヨコナデ		
31	壺		肩・胴部	橙褐	肩部上半横沈線と円形貼付紋、肩部紋様帯D・LR縄紋充填	B8住SW、8住-5	
	8住	現高 16.4		石・長・褐・雲	(外)胴部雑な条痕(内)板状工具ナデ	内面炭化物付着、粟状種子圧痕	
32	甕A		胴部	橙褐	雑な横羽状条痕	B8住SW、8住-6	
	8住	現高 15.8		長・褐・雲	(内)板状工具ナデ	内面粟状種子圧痕	
33	甕	底径 7.6	底部完	暗褐	斜条痕	B9住No3、9住-2	
	9住	現高 2.2		石・長・褐	(内)ナデ(底面)布目痕	内面炭化物付着著しい	
34	壺?	底径 7.0	底部完	暗褐	細文	B9住、9住-1	
	8住	現高 4.4		石・長	(外)底部外周ミガキ、ケズリ(内)ナデ、工具ナデ(底面)布目痕		
35	甕A	口径28.6	口縁1/3	暗褐	口唇刺突B、横羽状条痕	B10住No3、10住-1	
	10住	現高 9.0		長・褐・小礫	(外)ナデ(内)ナデ	外面炭化物付着	
36	壺		胴部	暗灰褐	摩滅不明	B11住No1、11住-1	
	11住	現高 17.6		石・長	摩滅不明	内外面摩滅	
37	壺		頸部	橙褐	LR縄文地紋、頸部紋様帯B	B12住W、12住-2	
	12住	現高 7.7		長	(内)ナデ、工具ナデ		
38	壺		肩・胴部	暗褐	肩部紋様帯G(押し沈線含む)	B12住W、12住-3	
	12住	現高 8.4		石・長・雲	(外)胴部斜条痕(沈線状)(内)ナデ、工具ナデ		
39	壺	底径 6.6	底部3/4	暗褐	なし	B12住E、12住-4	
	12住	現高 5.2		石・長	(外)ミガキ?(内)ナデ、工具ナデ(底面)布目痕		
40	壺	口径16.8	口縁1/4	橙褐	口縁無節細紋・内面刺突B、横沈線、頸部紋様帯B1	B12住S48W81、12住-1	
	12住	現高 21.4		石・長	(外)ケズリ、ヨコナデ(内)刺突文、工具ナデ、ヨコナデ	復元実測	
41	甕A	口径15.4	口縁1/4	暗褐	横羽状条痕・付加紋B1	B平建1P421、平建1-2	
	平建1	現高 5.8		石・長・褐・雲	(外)ヨコナデ(内)板状工具ナデ、ヨコナデ	内外面炭化物、内面粟状種子圧痕	
42	鉢?	口径10.4	口縁1/2	暗褐	斜条痕	B平建1P421、平建1-3	
	平建1	現高 5.7		石・長・雲	(外)ヨコナデ(内)ナデ、ヨコナデ、工具ナデ	天地不明瞭で一応鉢とする	
43	壺		肩・胴部	黄褐	肩部紋様帯B1(F)・縄紋充填、胴部斜条痕	B平建1土199、平建1-1	
	平建1	現高 14.6		石・長・褐・雲	(内)板状工具ナデ	内外面炭化物付着	
44	甕A	口径24.5	口縁1/8	暗褐	口唇キザミ、横羽状条痕、付加紋A2(縦)	B平建2検、平建2-1	
	平建2	現高 7.0		石・長	(内)板状工具ナデ	外面炭化物付着	
45	甕A	口径27.1	口縁1/2	暗褐	口唇条痕、横羽状条痕(部分的に縦羽状)、付加紋B1(3単位)	B建6土186No2.3、建6-1	
	建6	現高 27.9	底部一部	石・長・褐	(内)ハケメ状の条の残る板状工具ナデ	外面炭化物付着、補修孔2	



番号	番号	寸法	残存	色調	紋様	注記・実測番号	
地点	部位・長さ (cm)	部位・割合	胎土	成形・調整	備考		
46	壺	口径 8.2	口縁1/6	淡褐	口唇キザミ、口縁縦沈線、頸部横条痕	B建8土150、建8-1	
	建8	現高 2.7		石・長・褐・雲	(内)板状工具ナデ		
47	壺	底径 6.0	底部完	黄橙	櫛描波状紋	B柱列2、柱列2-1	
	柱列2	現高 12.7		石・長・褐・雲	(外)ナデ (内)ナデ		
48	甕A	底径 7.7	口縁一部	暗褐	胴部上半縦・下半横条痕、付加紋A3	B埋壘1、土器棺墓-1	
	土器棺墓	現高 28.1	底部完	石・長・褐・細礫	(内)板状工具ナデ、ナデ (底面)ナデ	内面下部炭化物付着	
49	壺		肩・胴部	暗褐	肩部紋様帯A・円形沈線・刺突A充填、LR縄紋充填	B埋壘1、土器棺墓-2	
	土器棺墓	現高 16.8		石・長・雲	(外)ナデ、胴部斜方向の調整痕 (内)板状工具ナデ、ナデ	土器棺墓蓋	
50	?			淡褐	隆帯上および下に刺突A	BP256、P256-1	
	P256	現高 1.8		石・長・褐	(外)ナデ (内)ナデ		
51	甕	口径 18.0	口縁1/8	暗黄褐	口唇キザミ、胴部縦条痕 (3~4本/10ミリ)	BP430、P430-1	
	P430	現高 6.0		石・長	(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ	外面炭化物付着	
52	甕		胴部	黄褐	斜条痕	BP222、P222-1	
	P222	現高 15.7		石・長・雲	(内)板状工具ナデ	外面炭化物付着、内外面粟状種子圧痕	
53	甕	底径 8.4	底部1/2	暗褐	条痕	BP222、P222-2	
	P222	現高 4.5		長・雲	(外)ケズリ (内)板状工具ナデ (底面)布目痕	内面炭化物付着	
54	壺	口径 15.5	底径 6.6	口縁一部	暗褐	口唇内外刺突A、口縁横羽状沈線、コの字沈線と刺突A・円形貼付紋	BP306、P306-1
	P306	器高 14.3	底部一部	長・雲・黒褐	(内)板状工具ナデ、ナデ	大地系壘、口縁内面、頸外面炭化物付着	
55	壺	底径 6.3	底部3/4	橙褐	不明	BP441、P441-1	
	P441	現高 9.4		石・長・褐	(外)ナデ、ケズリ (底面)ナデ (内)ナデ	内外面摩滅	
56	甕A	口径 31.0	口縁1/2	暗褐	口唇キザミ、胴部上半縦条痕、下半斜条痕 (7本/16ミリ)、付加紋A4	BP442、P442-1	
	P442	現高 30.1		石・長・褐・雲	(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ、ナデ、ヨコナデ	内外面炭化物付着	
57	甕A	口径 18.4	口縁1/6	暗褐	口唇キザミ、乱れた斜~縦条痕 (3本/7~9ミリ)	B土148、土148-1	
	土148	現高 13.0		石・長・雲	(外)ナデ、ヨコナデ (内)ナデ、板状工具ナデ	外面炭化物付着	
58	壺			暗褐	肩部紋様帯F・縄紋充填	B土138、土138-1	
	土138	現高 11.5		石・長・雲	(外)ケズリ状の板状工具ナデ (内)板状工具ナデ	内面粟状種子圧痕	
59	壺?	口径 13.8	口縁1/6	暗褐	無紋	B土184、土184-3	
	土184	現高 4.2		石・長・雲	(外)ナデ、ヨコナデ (内)ナデ、ヨコナデ		
60	甕?	口径 12.0	口縁1/3	暗褐	胴部太沈線による複合鋸歯紋、口縁内面「山」の字沈線	B土184、土184-2	
	土184	現高 7.8		石・長・雲	口唇鋭い面取り (外)ケズリ状の板状工具ナデ (内)ナデ	大地系壘の一種?	
61	甕B	口径 40.1	口縁1/8	黄褐	口唇キザミ、口縁縦条痕・刺突A、胴部横波状紋と横線交互、付加紋B1 (推定4単位、枠付)	B土184、土184-1	
	土184	現高 17.8		石・長	口縁下部折返し状 (内)板状工具ナデ	内外面炭化物付着	
62	甕A	口径 23.2	口縁1/8	暗褐	口唇キザミ、胴部横条痕	B土155、土155-1	
	土155	現高 4.9		石・長	(外)ヨコナデ (内)ナデ	内外面摩滅	
63	甕A	口径 23.8	口縁一部	暗褐	口唇押圧、胴部横条痕 (6本/20ミリ)、付加紋B3	B土189、土189-1	
	土189	現高 9.3		石・長	(外)ヨコナデ (内)ナデ、ヨコナデ	内外面全面に炭化物付着	
64	甕A	口径 25.6	口縁1/3	暗褐	口唇キザミ、縦条痕	B土176Na1、土176-2	
	土176	現高 12.2		石・長・褐	(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ		
65	甕A	口径 27.0	口縁1/4	暗黄褐	口唇刺突A、胴部上半縦条痕・中位横羽状条痕	B土176、土176-3	
	土176	現高 14.3		石・長	(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ		
66	壺			橙褐	沈線による横線と円形モチーフ	B土176、土176-1	
	土176	現高 20.0		石・長・雲	(外)ナデ (内)ナデ	内外面摩滅	
67	壺		肩部	暗橙褐	刺突A、肩部紋様帯C、周囲縄紋充填	Bミノ3 4区、溝3-2	
	溝3	現高 3.1		長・褐・雲	(内)ナデ、指オサエ		
68	壺	口径 8.8	底径 8.0	口縁一部	橙褐	斜条痕 (条痕A)、口唇部太いキザミ	Bミノ3 4区、溝3-3
	溝3		底部1/4	長・褐	(内)板状工具ナデ、ナデ、ヨコナデ (底面)布目痕	無頸壘	

番号	番号	寸法	残存	色調	紋様	注記・実測番号
地点	部位・長さ (cm)	部位・割合	胎土	成形・調整	備考	
69	壺		肩・胴部	暗橙褐	肩部紋様帯B1・LR縄紋充填、縦の刺突A	Bミゾ3 4区、溝3-1
	溝3	現高14.3		石・長・褐・雲	(内)ナデ	
70	壺			黒褐	頸部横沈線、胴部重四角沈線、刺突B、貼付紋	A2住、混入-1
	混入	現高12.9		石・長・褐・雲	(外)板状工具ナデ (内)板状工具ナデ	大地系壺
71	壺		頸部	暗黄褐	同心円沈線(頸部紋様帯C)・刺突Aで縁取、無節縄紋充填、円形貼付紋	神-1
	既出品	現高13.2		長	(内)ナデ、ケズリ状の工具ナデ	太頸壺?
72	甕A	口径20.2	口縁1/6	暗褐	斜条痕、口唇刺突A	神-11
	既出品	現高 5.7		石・長・雲	(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ	外面粟状種子圧痕
73	甕B	口径25.0	口縁1/8	暗褐	口縁部波状紋、頸部沈線・刺突、以下縄紋、口縁内面短線状の刺突B	神-15
	既出品	現高 6.5		石・長・雲	(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ	
74	甕A	口径24.4	口縁1/6	暗褐	口唇キザミ、条痕(方向不明)、口縁内面刺突B(短線風)	神-9
	既出品	現高 3.7		石・長・雲	(内)板状工具ナデ	
75	甕A	口径23.6	胴部1/6	暗褐	口唇キザミ、胴部上半縦条痕・下半横条痕(4本/10ミリ)、付加紋A1	神-12
	既出品	現高10.5		長・雲	口唇面取り(外)ヨコナデ (内)ナデ、指圧痕、ミガキ、ヨコナデ	外面炭化物付着
76	甕A	口径28.4	口縁1/8	暗褐	横羽状条痕(5本/8ミリ)、口唇同一原体による刺突B	神-8
	既出品	現高 8.3		石・長・雲	(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ	外面全面に炭化物付着
77	甕B	口径26.4	口縁1/2	暗褐	口縁羽状の短線、胴部上半波状紋・横線紋、胴部下半斜条痕	神-14
	既出品	現高16.4		石・長・褐	口縁下部折返し状(外)ヨコナデ (内)ナデ、ヨコナデ	
78	甕A	口径20.3	口縁1/3	暗褐	口唇刺突B、胴部斜条痕(3本/11ミリ)	神-13
	既出品	現高 8.3		石・長・雲	(内)板状工具ナデ	内外面炭化物付着
79	甕A	口径29.8	口縁1/10	暗褐	口唇キザミ、縦条痕(4本/9.5ミリ)	神-10
	既出品	現高 6.4		石・長・雲	(内)板状工具ナデ	
80	甕	底径 8.4	底部1/3	暗褐	条痕(施紋方向下から上)	神-16
	既出品	現高 3.5		長・雲	(内)ナデ(底面)ナデ	
81	甕	底径10.0	底部1/3	橙褐	条痕	神-17
	既出品	現高 3.8		石・長・雲	(内)板状工具ナデ(底面)ナデ	内面炭化物付着
82	壺		頸・肩部	淡褐	頸部紋様帯B・中央刺突A充填、肩部紋様帯C・刺突A縁取・内部縄紋、貼付紋	神-5
	既出品	現高 7.4		石・長・雲	(内)ナデ	
83	壺		肩部	黄褐	肩部紋様帯B・中央縄紋充填	神-4
	既出品	現高 6.1		石・長・雲	(内)ナデ	外面炭化物付着、内面粟状種子圧痕
84	壺		胴部	黄褐	重四角沈線・外周刺突A・内部と外周に縄紋	神-19
	既出品	現高 7.1		石・長・雲	(内)ナデ	大地系壺
85	壺		頸・肩部	褐	頸部紋様帯B、肩部紋様帯D・円形沈線、周部縄紋充填	神-3
	既出品	現高10.3		長・雲	(内)ナデ	
86	壺	口径13.6	口縁1/3	暗褐	山形沈線、斜沈線と刺突A、縄紋	神-6
	既出品	現高 4.3		石・長・褐・雲	(外)ヨコナデ (内)板状工具ナデ、ヨコナデ	
87	壺	口径14.2	口縁1/3	黄褐	LR縄文、横沈線	神-7
	既出品	現高 4.3		石・長	(外)ヨコナデ (内)ナデ、ヨコナデ	
88	壺	口径17.6	口縁1/3	暗褐	口唇部内外縄紋、頸部横沈線・太い刺突A	神-18
	既出品	現高 4.1		石・長・雲	(外)板状工具ナデ (内)板状工具ナデ	大地系壺?、内外面炭化物付着
89	壺	底径 5.1	底部完	黒褐	横位平行沈線上に2種類のキザミ交互、平行沈線間に小円形刺突	神-20
	既出品	現高 9.7		長・雲	(外)ナデ (内)工具ナデ、ナデ、オサエ(底面)ナデ、圧痕	大地系壺、外面炭化物僅かに付着
90	壺		肩・胴部	暗褐	横の山形沈線、肩部紋様帯G・付加紋B2	神-2
	既出品	現高16.8		長・雲	(外)胴部ミガキ状調整 (内)板状工具ナデ、ナデ	

## 第5表 境窪遺跡弥生土器拓影一覽

〈備考欄凡例〉粟・粃：種子圧痕 炭：外器面の炭化物付着

番号	地点	器種	部位	紋 様	備 考	番号	地点	器種	部位	紋 様	備 考
91	3住	壺	肩	三角沈線・刺突A	B3住	152	6住	壺	頸下	三角沈線・充填縄紋	B6住SW
92	3住	壺	肩	横沈線?、縄紋	B3住SE	153	6住	壺	肩	三角沈線・充填縄紋	B6住
93	3住	壺	肩	重四角沈線・刺突A	B3住SE	154	6住	壺	肩	重四角沈線、円形貼付紋	B6住SW
94	3住	壺	肩	弧状沈線?、縄紋	B3住	155	6住	壺	頸下	横沈線、櫛描波状紋?	B6住、炭
95	3住	壺	頸下	三角沈線・充填縄紋	B3住SW	156	6住	壺	肩	重四角沈線・刺突B?	B6住W
96	3住	壺	頸	三角沈線・充填縄紋	B3住ベルト	157	6住	壺	肩	重四角沈線・充填縄紋、刺突A	B6住SW、内炭
97	3住	壺	肩	弧状沈線、充填櫛描、縄紋	B3住NE	158	6住	壺	肩	重四角沈線	B6住SE
98	3住	壺	肩下	横沈線、刺突A充填	B3住ベルト	159	6住	壺	肩	重四角沈線	B6住NE
99	3住	壺	肩	円形沈線・充填縄紋、円形貼付紋	B3住NE	160	6住	壺	肩	工字状沈線、山形沈線?、充填縄紋	B6住、炭
100	3住	壺?	肩	円形沈線?、縦沈線	B3住	161	6住	壺	肩	重四角沈線、円形貼付紋	B6住SW
101	3住	甕	口縁	横羽状条痕	B3住NW	162	6住	壺	肩	波状(山形)櫛描	B6住NW、小形の壺
102	3住	甕	口縁	縦条痕	B3住SW、炭	163	6住	壺	肩	同心円沈線・充填縄紋、斜条痕	B6住SW
103	3住	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	B3住SE	164	6住	壺	肩下	横沈線・付加紋	B2B6住
104	3住	甕	口縁	口唇条痕、斜条痕	B3住	165	6住	壺	肩	重四角沈線・刺突A充填	B6住SW
105	3住	甕	胴	斜条痕	B3住SE、炭	166	6住	甕	口縁	縦条痕	B6住
106	3住	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕、内面波状紋	B3住ベルト	167	6住	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕・縦条痕	B6住
107	3住	甕	口縁	横羽状条痕、内面刺突B	B3住SE、炭、粟	168	6住	甕	口縁	横条痕、内面刺突B	B6住ベルト、炭
108	3住	大地	口縁	下沈線、刺突A、	B3住SW	169	6住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	B6住
109	3住	大地	口縁	口唇キザミ、刺突A、沈線	B3住ベルト	170	6住	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	B6住、粟
110	4住	壺	頸下	三角沈線・充填縄紋・円形沈線?、刺突A	B4住SE	171	6住	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	B6住SE
111	4住	壺	頸下	沈線・横条痕状、縄紋	B4住	172	6住	甕	口縁・胴	口唇キザミ、斜条痕、付加紋A2二段	B6住SW、炭
112	4住	壺	頸下	三角沈線・充填縄紋・円形沈線・刺突A	B4住	173	6住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕、横沈線?	B6住SE、炭
113	4住	壺	頸下	山形沈線?、刺突A	B4住SW	174	6住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	B6住
114	4住	壺	肩	円形沈線・刺突A充填、沈線、縄紋	B4住NE	175	6住	甕	口縁	縦条痕	B6住SW、炭
115	4住	壺	肩上	重四角沈線・刺突A充填・円形沈線?	B4住	176	6住	大地	口縁	横沈線、刺突A、円形貼付紋	B6住、炭
116	4住	壺	肩	横沈線、縄紋、円形沈線?	B4住	177	7住	壺	口縁	縄紋、横沈線	B7住SE
117	4住	壺	頸下	重四角沈線	B4住SE	178	7住	壺?	頸上	横沈線・櫛描波状紋交互	B7住、炭
118	4住	壺	肩	三角沈線・刺突A充填	B4住	179	7住	壺	肩上	三角沈線、刺突A	B7住
119	4住	壺	肩	工字状(横長楕円)沈線、横沈線	B4住、小形の壺	180	7住	壺	肩	工字状沈線・充填縄紋	B7住SW
120	4住	壺	肩	三角沈線・充填縄紋・円形沈線?	B4住SW	181	7住	壺	肩	重四角沈線・刺突A充填	B7住
121	4住	壺	肩	横沈線・付加紋B2	B4住	182	7住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	B7住SW
122	4住	壺	肩下	波状沈線・充填縄紋	B4住SW	183	7住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	B7住
123	4住	壺	肩	三角沈線、充填縄紋、横沈線	B4住検NW、124と同一	184	7住	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	B7住
124	4住	壺	肩	三角沈線、充填縄紋	B4住、123と同一	185	7住	甕	口縁	縦条痕	B7住SE
125	4住	壺	肩下	波状沈線・充填縄紋	B4住SE	186	7住	甕B	口縁	櫛描波状紋	B7住
126	4住	壺	口縁	波状口唇キザミ三点、刺突B、沈線	B4住、大頸壺?	187	7住	甕	口縁下	縦条痕、付加紋A2縦	B7住
127	4住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	B4住SW	188	7住	甕?	胴	斜条痕、付加紋A4	B7住検
128	4住	甕	口縁	斜条痕	B4住SE、粃	189	7住	甕	胴(腰)	付加紋A2、縦条痕	B7住SE、炭
129	4住	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	B4住NE	190	7住	大地	胴上	重四角沈線、刺突A	B7住、赤彩残
130	4住	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	B4住SW	191	7住	大地	胴	重四角沈線、円形貼付紋のうち刺突A	B7住SE
131	4住	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	B4住	192	8住	壺	頸下	横隆帯、三角沈線、刺突A	B8住
132	4住	甕	口縁	口唇キザミ、縦沈線	B4住SE、炭	193	8住	壺	頸	菱形沈線?、円形貼付紋	B8住
133	4住	甕	口縁	口唇縄紋、斜条痕	B4住SE	194	8住	壺	頸	横沈線・付加紋B2	B8住
134	4住	甕	口縁	口唇縄紋、斜条痕	B4住	195	8住	壺	肩上	菱形連繫沈線、円形沈線、円形貼付紋	B8住SW
135	4住	甕	口縁	横条痕、波状紋	B4住SE	196	8住	壺	肩上	重四角沈線	B8住
136	4住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	B4住SW、炭	197	8住	壺	肩上	重四角沈線、刺突A	B8住SW
137	4住	甕	口縁	横条痕、内面刺突B	B4住、炭	198	8住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	B8住
138	4住	甕	口縁	横羽状条痕	B4住SE、139と同一	199	8住	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	B8住SW、炭
139	4住	甕	胴	横羽状条痕	B4住SE、138と同一	200	8住	甕	口縁	横条痕・縦条痕	B8住、炭
140	4住	甕	胴	横羽状条痕	B4住SE	201	8住	甕	口縁	口唇横沈線、横羽状条痕、内面刺突B	B8住No16、炭
141	4住	甕	胴	縦羽状条痕、付加紋A2	B4住SW	202	8住	甕B	口縁	口唇キザミ、櫛描波状紋	B8住SW
142	4住	大地	口縁	下刺突A、内面付加紋B2	B4住No6	203	8住	甕B?	頸	沈線、斜条痕・波状紋	B8住、炭
143	5住	壺	肩下	波状沈線?、充填縄紋	B5住No1	204	8住	甕B?	口縁下	縦条痕、U字状の沈線?	B8住、粟、炭
144	5住	甕B	口縁	縦条痕、刺突A	B5住NE、炭	205	8住	大地?	胴	重四角沈線	B8住
145	5住	甕B	口縁	縦条痕、刺突A	B5住	206	10住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	B10住
146	5住	甕?	口縁	縄紋	B5住	207	10住	甕	口縁	口唇キザミ、横羽状条痕	B10住
147	5住	甕	口縁下	斜条痕、付加紋A2	B5住NE	208	10住	甕	口縁	口唇キザミ、横羽状条痕	B10住SW、炭
148	5住	甕	胴	縦条痕、斜条痕、付加紋A2二段	B5住	209	10住	甕	胴	縦条痕、斜条痕	B10住No1、炭
149	5住	大地	胴	重四角沈線、刺突A	B5住	210	10住	甕	胴	横羽状条痕、縦条痕	B10住
150	5住	大地	胴	重四角沈線・刺突A充填	B5住SE	211	9住	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	B9住
151	6住	壺	頸下部	三角沈線?、刺突A	B6住SE	212	9住	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	B9住、213と同一?

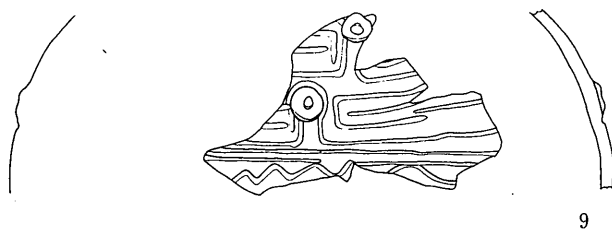
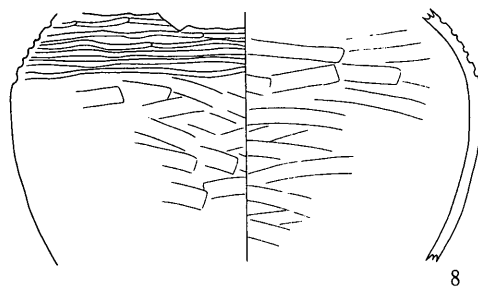
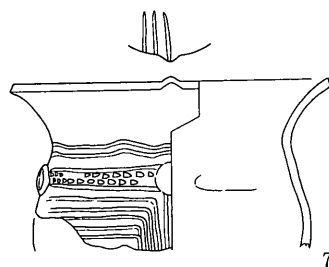
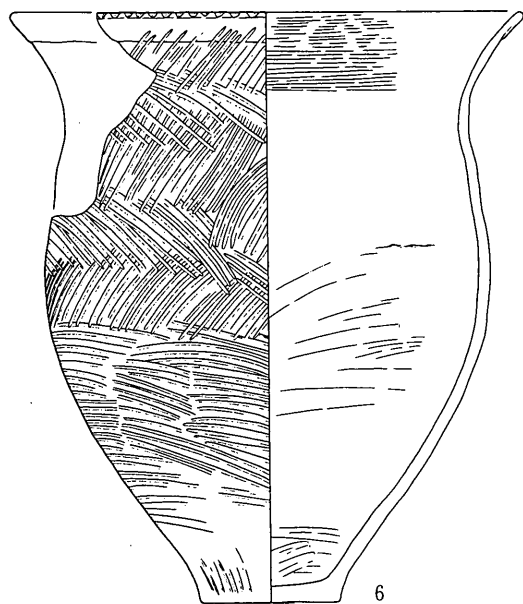
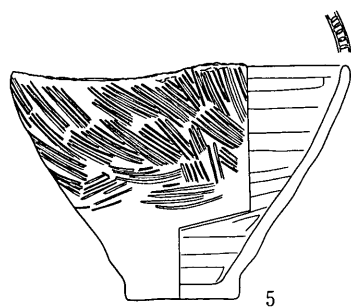
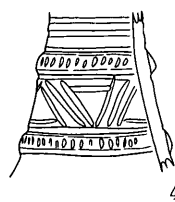
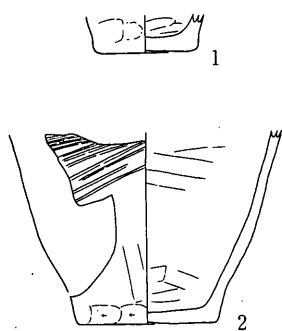
番号	地点	器種	部位	紋様	備考	番号	地点	器種	部位	紋様	備考
213	9住	甕	胴	横条痕	B9住、212と同一?	275	建8	甕	胴	横羽状条痕	建8W7
214	11住	壺	頸下	横沈線、縄紋	B11住N	276	柱	壺	肩下?	山形沈線?、縄紋	建8P420
215	11住	甕	肩	同心円沈線、刺突A	B11住S	277	P17	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕、内面刺突B	P17-1
216	11住	甕	胴	縦羽状条痕	B11住N	278	P17	甕	胴	横羽状条痕	P17-2
217	11住	甕	胴	斜条痕	B11住S	279	P211	甕	胴	粗い斜条痕	P211
218	12住	壺	口縁	刺突A、横沈線	B12住W、細頸壺	280	P214	壺	頸下	三角沈線・充填縄紋	P214
219	12住	壺?	頸	重四角沈線、刺突A	B12住	281	P222	甕	胴	斜条痕	P222、炭
220	12住	壺	肩	横沈線、同心円沈線?、縄紋	B12住	282	P234	壺	頸下	横沈線・短沈線充填	P234、小形の壺
221	12住	壺	肩	平行四辺形状の沈線、刺突A	B12住	283	P234	甕	胴	縦羽状条痕	P234
222	12住	壺	肩	重四角沈線	B12住W、炭	284	P237	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	P237、炭
223	12住	壺	肩	重四角沈線	B12住	285	P249	壺	肩下・胴	縄紋、横条痕	P249
224	12住	壺	肩	同心円沈線、縄紋	B12住W	286	P249	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	P249
225	12住	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕・横条痕	B12住W	287	P249	甕	口縁	斜条痕、内面刺突B	P249
226	12住	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	B12住W、炭	288	P272	甕	胴	縦条痕	P272、粟、炭
227	12住	甕	口縁	斜条痕	B12住S48W81	289	P299	甕?	胴上	斜条痕、刺突A懸垂	P299、炭
228	12住	甕	口縁	口唇条痕、横条痕、付加紋B1?	B12住E	290	P321	壺	肩	円形沈線、縄紋	P321
229	12住	甕	口縁	口唇条痕、斜条痕	B12住	291	P383	甕	口縁	口唇キザミ(条痕?)、縦条痕	P383、炭
230	12住	甕	口縁	斜条痕、内面刺突B	B12住S48W81、炭	292	P312	甕	胴	横条痕	P312、炭
231	12住	甕	腰	縦条痕、付加紋A4	B12住S48W78、炭	293	P331	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕、横条痕	P331、炭
232	12住	甕B	口縁下	櫛描波状紋	B12住W、炭	294	P425	壺	肩下	横沈線・付加紋B2	P425
233	平建1	壺	肩	同心円沈線?、重四角沈線?、縄紋	建10土199	295	P430	甕	口縁	口唇条痕、縦条痕	P430、炭
234	平建1	壺	頸下	三角沈線、充填縄紋	建10土199	296	P430	甕	胴	縦条痕、斜条痕	P430
235	平建1	甕	口縁	斜条痕	建10土426、炭	297	P432	甕	胴	斜条痕	P432
236	平建1	甕	口縁	横条痕	建10P421	298	P433	甕	胴	横条痕	P433、炭
237	平建1	甕	口縁	斜条痕	建10P421	299	P437	壺	頸下	横沈線、縄紋	P437
238	平建1	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	建10P421	300	P437	甕	胴	斜条痕・付加紋A4	P437、炭
239	平建1	甕	胴	横羽状条痕	建10土199、炭	301	土18	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	土18
240	平建1	甕B?	胴	山形沈線・縦条痕	建10土426	302	土29	壺	頸下	同心円沈線、刺突A、縄紋	土29
241	平建2	壺	頸	山形沈線、縄紋、刺突A	建11検	303	土29	甕	口縁	口縁横条痕、斜条痕	土29
242	平建2	壺	頸下	菱形連繫?、縄紋、刺突A	建11検	304	土29	甕	胴	横羽状条痕	土29
243	平建2	壺	頸下	横沈線、縄紋	建11検	305	土42	壺	肩	工字状沈線・充填縄紋	土42
244	平建2	壺	頸上	横沈線、三角沈線、縄紋	建11検	306	土42	壺	肩	重四角沈線	土42
245	平建2	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	建11検、炭	307	土109	甕	胴	斜条痕	土109
246	平建2	甕B	口縁	口唇キザミ、縄紋	柱列1P285、炭	308	土136	壺	頸下	三角沈線・充填縄紋	土136
247	平建2	甕	胴	縦条痕、付加紋A2	建11検、炭	309	土136	甕	胴	斜条痕	土136
248	建1	壺	肩	弧状沈線?・条痕?・充填縄紋	建1P202	310	土138	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	土138
249	建2	壺	頸	刺突A多段	建2P4	311	土138	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	土138、311~4同一
250	建2	甕	口縁	斜条痕	建2P2、炭	312	土138	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	土138、311~4同一
251	建2	甕	胴	横羽状条痕?	建2P8	313	土138	甕	胴	横羽状条痕(斜条痕交叉)	土138、311~4同一
252	建3	甕	口縁	口唇沈線、縦条痕・横短線	建3P3、炭、257類似	314	土138	甕	胴	横羽状条痕(斜条痕交叉)	土138、311~4同一
253	建3	甕	胴下	縦羽状条痕?	建3P5、炭	315	土146	壺?	肩下	横条痕、縦条痕	土146
254	建3	壺	頸	三角沈線・充填縄紋	建3P7	316	土148	甕	胴	縦条痕、横条痕	土148
255	建3	大地?	胴	重四角沈線、刺突A、円形貼付紋	建3P4	317	土148	大地	頸	沈線、縄紋、刺突A、貼付紋	土148、炭
256	建3	壺?	肩?	斜の平行沈線、地紋縄紋	建3P4	318	土152	甕	胴	斜条痕	土152
257	建4	甕	口縁	口唇横短線、縦条痕・横短線	建4P2、炭、252類似	319	土152	甕	口縁下	粗い斜条痕	土152、炭
258	建5	壺	肩	三角沈線・刺突A充填	建5P328、炭	320	土152	甕	口縁	口唇キザミ、横羽状条痕	土152、炭
259	建5	壺	頸上	三角沈線・充填縄紋	建5P381	321	土152	壺	肩下	同心円沈線・刺突A充填・充填縄紋	土152
260	建5	甕	胴	斜条痕	建5P385、炭	322	土152	壺	肩	工字状沈線・充填縄紋	土152
261	建5	甕B?	胴	斜条痕(右下)、横沈線、斜条痕(左下)	建5P330	323	土155	壺	肩下	三角沈線?、縄紋	土155
262	建6	甕	口縁	斜条痕	建6P292	324	土156	壺	肩下	縄紋(地紋?)	土156
263	建7	壺	肩	同心円沈線・充填縄紋	建7P278	325	土162	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	土162、炭
264	建7	壺	肩	三角沈線?・充填縄紋	建7P278	326	土162	甕	胴	縦羽状条痕	土162
265	建7	甕	口縁	口唇条痕、横条痕	建7P279	327	土162	甕	胴	横羽状条痕	土162
266	建8	壺	頸下	三角沈線・充填縄紋	建8Wフ	328	土166	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	土166
267	建8	壺	肩	同心円沈線?・刺突A充填	建8Wフ	329	土167	壺	肩	平行沈線?、縄紋	土167、炭
268	建8	壺	肩	三角沈線?・刺突A充填	建8土191	330	土174	壺	肩	三角沈線・ハケメ状の地紋	土174
269	建8	壺	肩下	弧状沈線・条痕・充填縄紋	建8P419	331	土175	壺	肩	三角沈線・充填縄紋	土175
270	建8	壺	肩	三角沈線・充填縄紋	建8P247	332	土175	壺	肩	三角沈線・充填縄紋・刺突A	土175
271	建8	甕	口縁	口唇条痕、横条痕、斜条痕	建8P419	333	土175	甕	口縁	口唇斜条痕交互、横条痕	土175
272	建8	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	建8P248	334	土175	甕	口縁	斜条痕	土175
273	建8	甕?	口縁	口唇キザミ、縄紋、横条痕	建8P248	335	土175	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	土175、炭
274	建8	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	建8Wフ	336	土175	甕	口縁	斜条痕	土175、炭

番号	地点	器種	部位	紋様	備考	番号	地点	器種	部位	紋様	備考
337	土175	甕	胴上	横条痕・付加紋B3	土175	399	B検	壺	肩下	櫛描状の平行線、太い刺突、縄紋	検
338	土175	甕B	口縁下	縦条痕・横波状紋	土175、炭	400	B検	壺	頸	横沈線、刺突A	S51W48、太頸壺?
339	土175	甕	底部	斜条痕、底面布圧痕	土175、炭	401	B検	甕	口縁	斜条痕	S45W75
340	土176	壺	肩下	横沈線、斜条痕	土176	402	B検	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	S45W72、炭
341	土176	壺	肩下	斜の平行沈線、刺突A	土176	403	B検	甕	口縁	口唇刺突B、縦条痕	S45W75、炭
342	土176	壺	肩下	平行沈線、刺突A	土176	404	B検	甕	口縁	縦条痕	検
343	土176	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	土176	405	B検	甕	口縁	縦条痕、内面刺突B	S51W51
344	土176	甕	口縁	斜条痕	土176	406	B検	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕、内面刺突B	S51W48
345	土176	甕	胴	横羽状条痕	土176	407	B検	甕	胴	斜条痕、付加紋A1	S45W69
346	土176	甕	胴上	横条痕、縦羽状条痕	土176、炭	408	B検	甕	口縁	口縁斜条痕、横条痕	S45W69、炭
347	土176	大地?	口縁下	重四角沈線、刺突A	土176	409	B検	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	S42W69、炭
348	土184	甕?	口縁	口唇キザミ、横条痕	土184	410	B検	甕	口縁	縦羽状条痕、付加紋B1	S42W75
349	土206	壺	肩	三角沈線?、刺突A	土206	411	B検	甕	口縁下	横条痕、付加紋B3	S45W69、炭
350	土206	甕	胴	縦羽状条痕	土206、炭	412	B検	甕	胴	縦条痕、付加紋A2(押圧痕)	S42W72、炭
351	土206	甕	胴	斜条痕	土206	413	B検	甕	胴下	横羽状条痕	S51W81
352	土211	甕?	胴	横条痕、縦条痕	土211、炭	414	B検	甕	胴下	横条痕	S51W48
353	溝3	壺	頸下	三角沈線?・充填縄紋	溝3 5区	415	B検	甕B?	口縁	口唇縄紋、横沈線、刺突A、内面沈線	S48W84、大地系?
354	溝3	壺	肩?	重四角沈線?、刺突A	溝3 5区	416	B検	大地?	口縁	連弧状沈線	S42W69
355	溝3	壺	頸下	鱗状突起、山形沈線、横槽円沈線	溝3 1区	417	B検	甕	口縁	波状紋	S45W75
356	溝3	壺	肩	平行沈線、長方形(工字状?)沈線	溝3 4区	418	B検	大地	頸・胴	横沈線、重四角沈線、刺突A	S42W72、炭
357	溝3	壺	頸下	平行沈線、三角沈線?、縄紋	溝3 5区	419	B検	甕B	口縁下	櫛描波状紋	S51W48、炭
358	溝3	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	溝3 5区、炭	420	B検	鉢?	口縁	口唇キザミ、斜条痕	S45W66
359	溝3	甕	口縁	口唇キザミ、斜条痕	溝3 5区、炭	421	既出品	壺	頸下	沈線、刺突A	
360	溝3	甕?	口縁	口唇キザミ、横条痕	溝3 1区	422	既出品	壺	肩	同心円沈線、横沈線、縄紋	
361	溝3	甕	口縁	口唇縄紋?、縦条痕、内面横条痕	溝3 2区、炭	423	既出品	壺	頸下	横沈線、縄紋	
362	溝3	甕	口縁	口唇キザミ、横羽状条痕	溝3 1区、炭	424	既出品	壺	肩	同心円沈線、縄紋	
363	溝3	甕	胴	斜条痕、付加紋A1	溝3 1区、炭	425	既出品	壺	肩下	山形沈線?、重四角沈線?、縄紋	
364	溝3	甕B	口縁	山形沈線、内面刺突B	溝3	426	既出品	壺	頸下	三角沈線?、縄紋	
365	谷	壺	頸下	横沈線	トレンチA	427	既出品	壺	肩	同心円沈線?、刺突A	
366	谷	甕?	口縁	縄紋	トレンチA	428	既出品	壺	肩下	重四角沈線?・縦短沈線充填	
367	谷	甕	口縁下	縦条痕	トレンチA	429	既出品	壺	肩下	横沈線、刺突A	
368	谷	甕?	胴	刺突A、条痕・山形沈線	トレンチA	430	既出品	壺	肩下	横沈線、刺突A、波状紋	
369	A検	壺	頸下	重四角沈線、刺突A	A2住NW	431	既出品	壺	頸下	横沈線、刺突A	
370	A検	壺	肩	円形沈線・刺突A充填、縄紋	A検	432	既出品	壺	肩	横沈線、刺突A、縄紋	
371	A検	壺	肩下	重四角沈線、刺突A、山形沈線、縄紋	A検	433	既出品	壺	頸	横沈線、縄紋	
372	A検	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	A2住、炭	434	既出品	壺	肩下	横沈線・充填縄紋、横条痕	
373	A検	甕	口縁	口唇刺突B?、横条痕、横羽状条痕	A2住	435	既出品	壺	肩	菱形沈線?、縄紋	
374	A検	甕	口縁	口唇刺突B、内面櫛描波状紋	A2住	436	既出品	壺	肩	工字状沈線?、山形沈線	
375	A検	甕B	口縁下	櫛描波状紋、横沈線	A2住	437	既出品	壺	肩	重四角沈線・充填縄紋	
376	B検	壺	頸	菱形連繫?、刺突A、鱗状突起、貼付紋	検、ヒサゴ形頸?	438	既出品	壺	肩	重四角沈線	
377	B検	壺	頸上	三角沈線・充填縄紋	検NW	439	既出品	壺	頸下	菱形連繫沈線、重四角沈線	
378	B検	壺	肩	三角沈線・刺突A充填	検	440	既出品	甕	口縁	縦羽状条痕?、付加紋B1	
379	B検	壺	肩	三角沈線・充填縄紋		441	既出品	甕	口縁	縦条痕	
380	B検	壺	肩下	三角沈線・充填縄紋	検	442	既出品	甕	口縁	口唇キザミ、横条痕	
381	B検	壺	頸	三角沈線・刺突A充填、縄紋	S45W72	443	既出品	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	
382	B検	壺	頸下	三角沈線・充填縄紋	S42W75	444	既出品	甕	口縁	口唇キザミ、縦羽状条痕	
383	B検	壺	頸	山形沈線?、横沈線、縄紋	検	445	既出品	甕	口縁	口唇刺突A、縦羽状条痕	
384	B検	壺	口縁	縄紋、刺突A、内面縄紋	S42W66	446	既出品	甕	口縁	口唇キザミ、縦条痕	
385	B検	壺	肩下	弧状沈線、三角沈線?	S45W66	447	既出品	甕	口縁	口唇キザミ、横羽状条痕	粟
386	B検	壺	肩	重四角沈線、縄紋	S45W69	448	既出品	甕	口縁	横条痕、内面刺突B	
387	B検	壺	頸上	重山形沈線	検	449	既出品	甕	口縁	口唇キザミ、縦羽状条痕、内面刺突B	
388	B検	壺	肩	工字状(横槽円)沈線、三角沈線、縄紋	検	450	既出品	甕	口縁	口唇キザミ、横羽状条痕、内面刺突B	
389	B検	壺	頸下	重四角沈線	S45W72	451	既出品	甕B?	口縁下	縦羽状条痕、刺突A	
390	B検	壺	肩下	横沈線、重四角沈線、縄紋	S48W75	452	既出品	甕	胴	縦条痕、付加紋A2、斜条痕	
391	B検	壺	頸	横沈線・充填縄紋	S51W48、小形の壺	453	既出品	甕B	口縁	口唇キザミ、波状紋	
392	B検	壺?	頸下	櫛描横線、波状紋、山形沈線	S42W75、小形の壺?	454	既出品	大地	口縁	横沈線、内面沈線・縄紋	
393	B検	壺	肩下	三角沈線?、刺突B、斜条痕	レキ集2	455	既出品	大地	胴	重四角沈線、円形貼付紋	
394	B検	壺	肩下	横沈線	S45W72	456	既出品	大地	頸	波状紋、刺突A、重四角沈線?	
395	B検	壺	頸下	横沈線、付加紋B2?	S48W75						
396	B検	壺	肩	弧状沈線?、縄紋	検						
397	B検	壺	肩	横沈線、山形沈線、縄紋地紋	S48W75						
398	B検	壺	頸下	横沈線、山形沈線	検、炭						

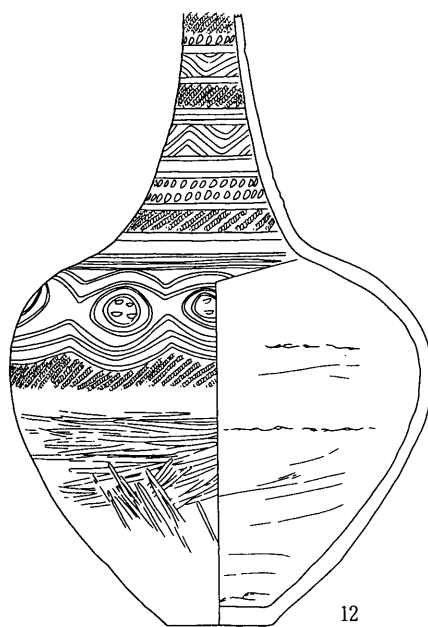
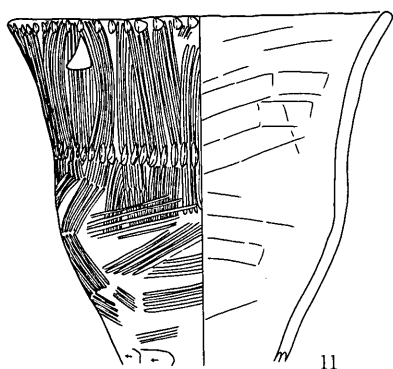
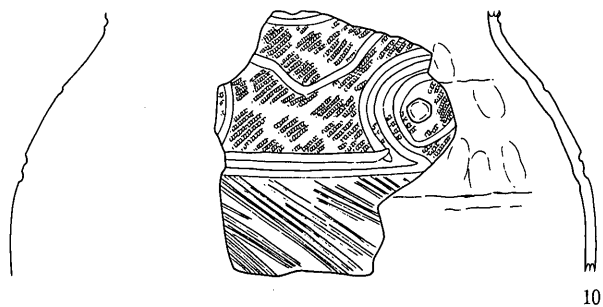
竖穴住居址

3住(1·2)

4住(3~9)



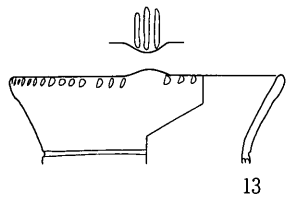
5住(10~15)



第26图 境窪遺跡 弥生土器(1)

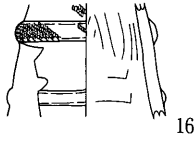




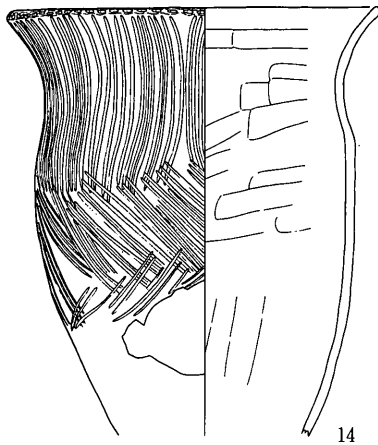


13

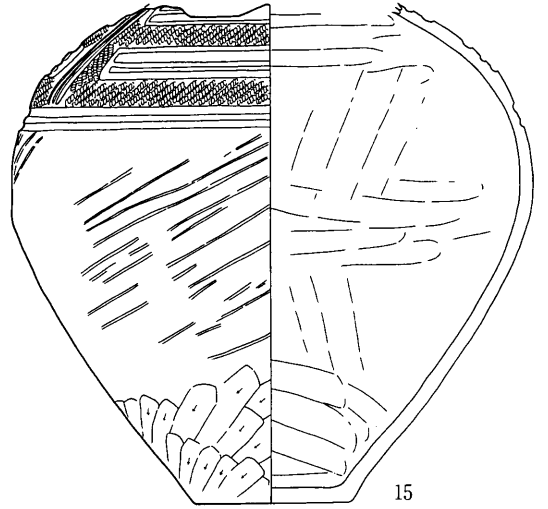
6住(16~21)



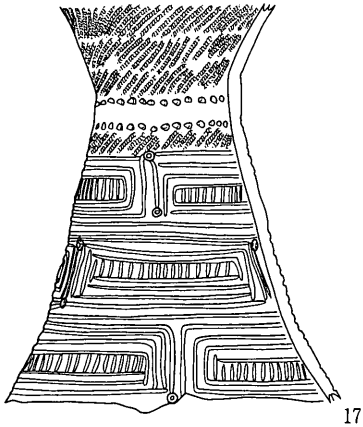
16



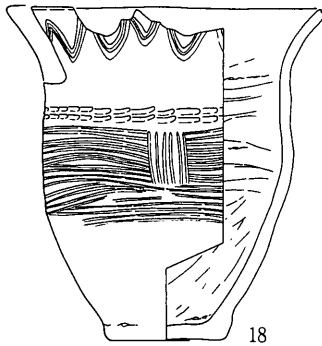
14



15

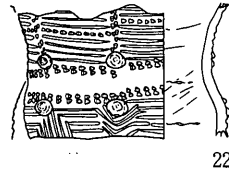


17

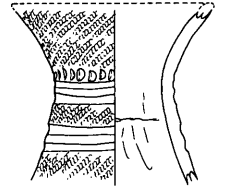


18

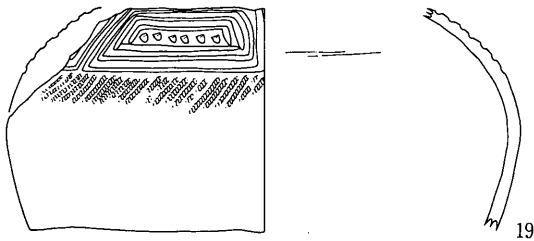
7住(22~26)



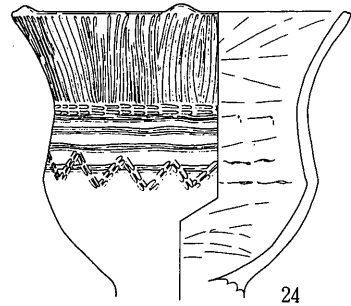
22



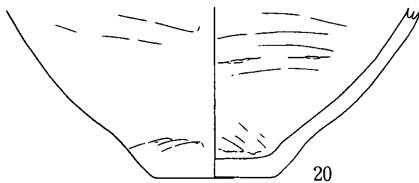
23



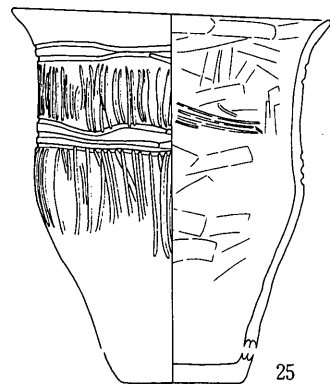
19



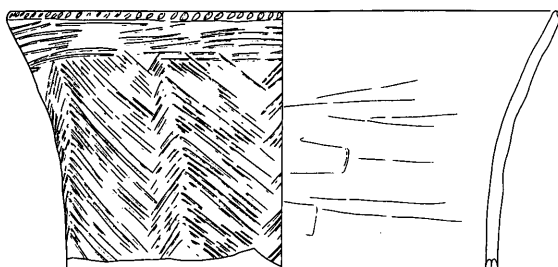
24



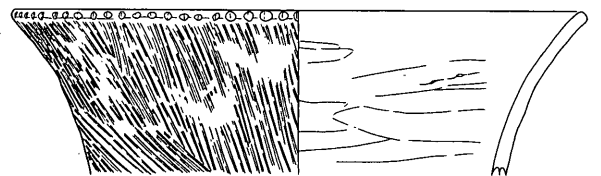
20



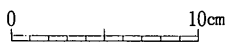
25



21

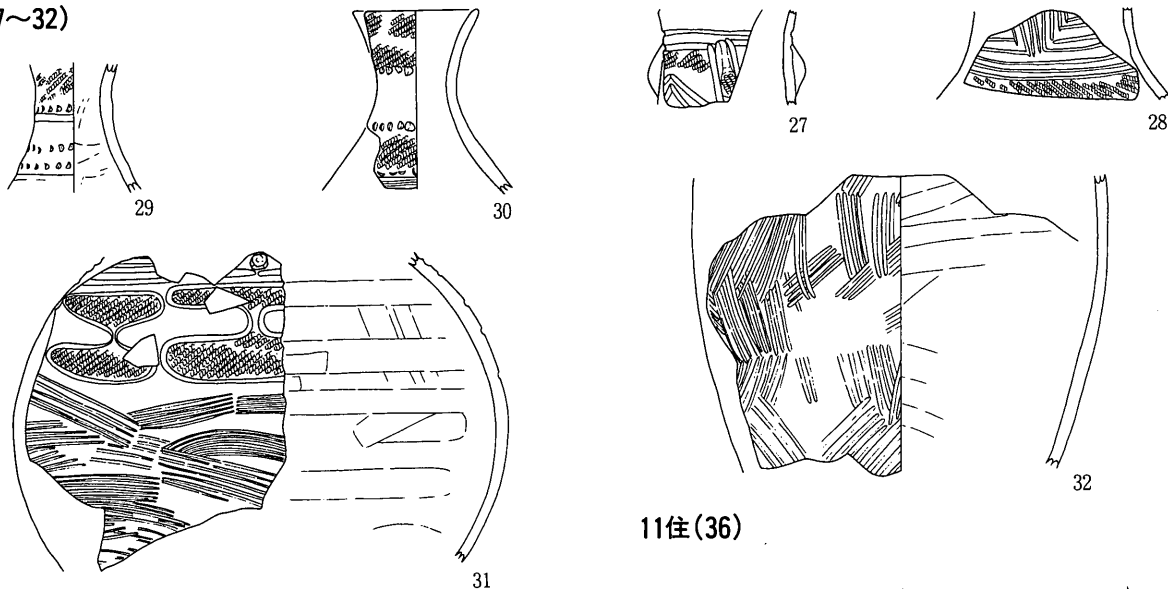


26

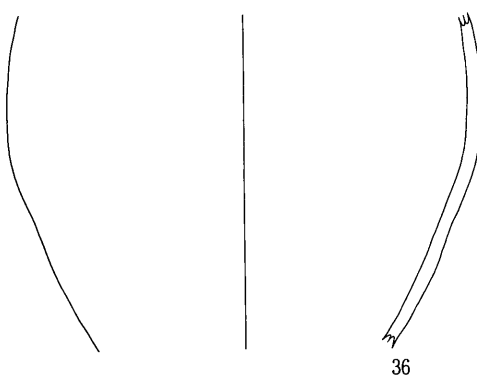


第27图 境窪遺跡 弥生土器(2)

8住(27~32)



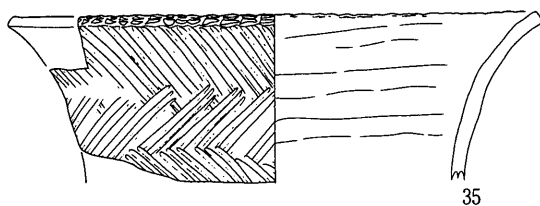
11住(36)



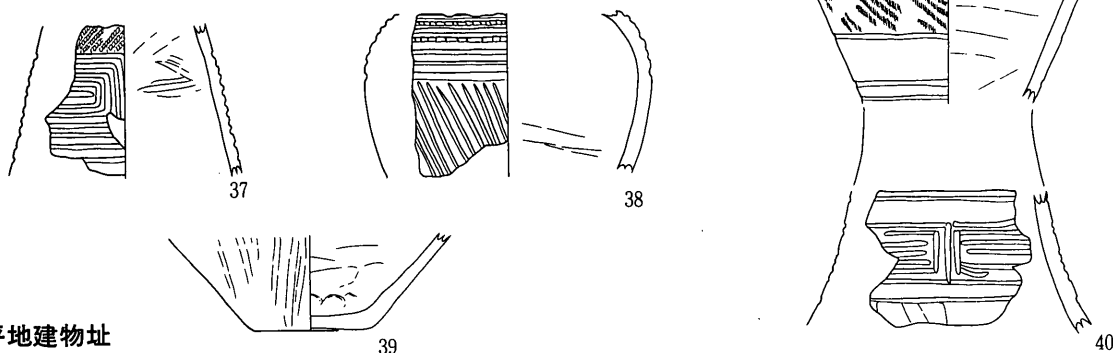
9住(33·34)



10住(35)



12住(37~40)

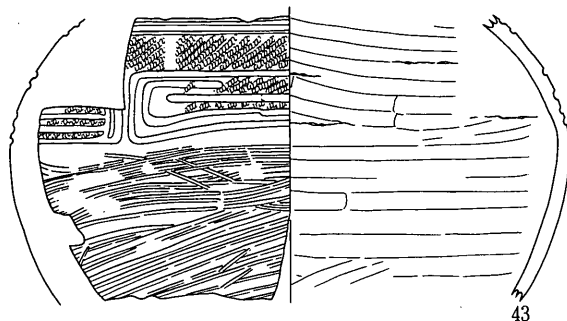
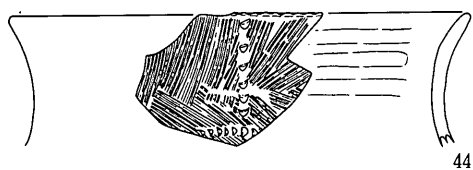


平地建物址

平建1(41~43)



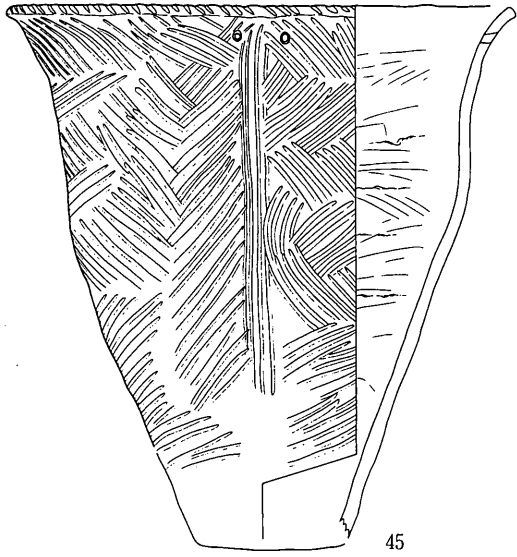
平建2(44)



0 10cm

第28图 境窪遺跡 弥生土器(3)

建6(45)



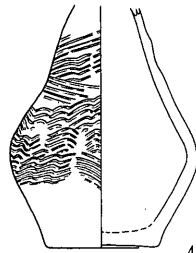
45

建8(46)



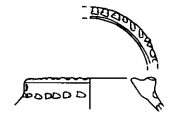
46

柱穴列2(47)

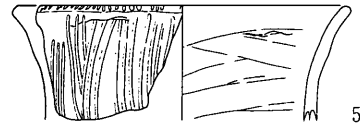


47

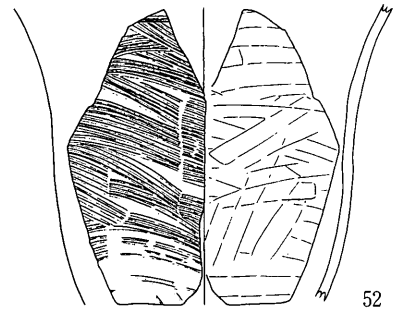
ピット(50~56)



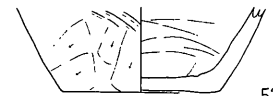
50  
P 256



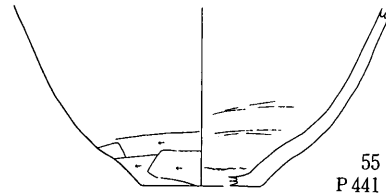
51  
P 430



52  
P 222

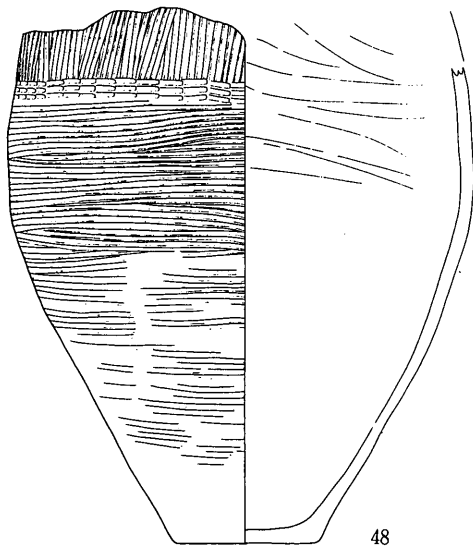


53  
P 232

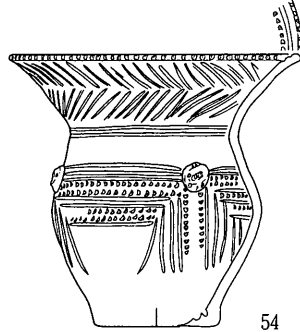


55  
P 441

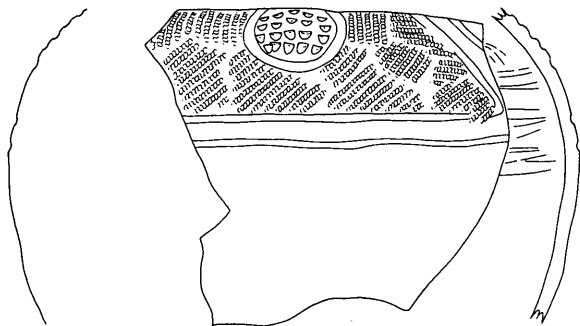
土器棺墓(48・49)



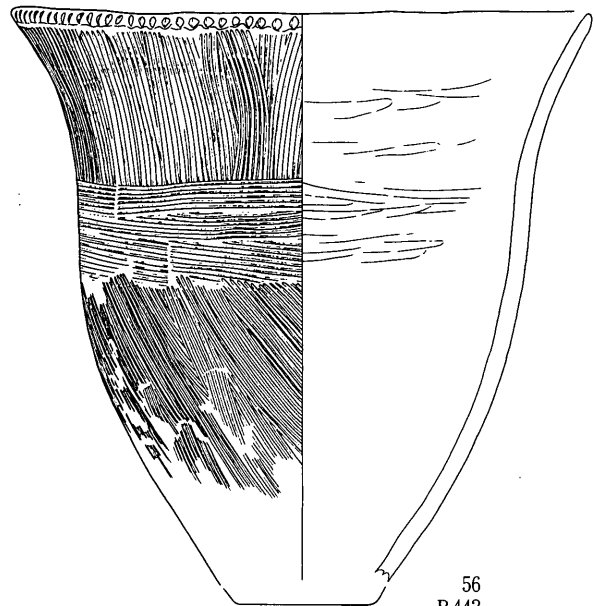
48



54  
P 306



49

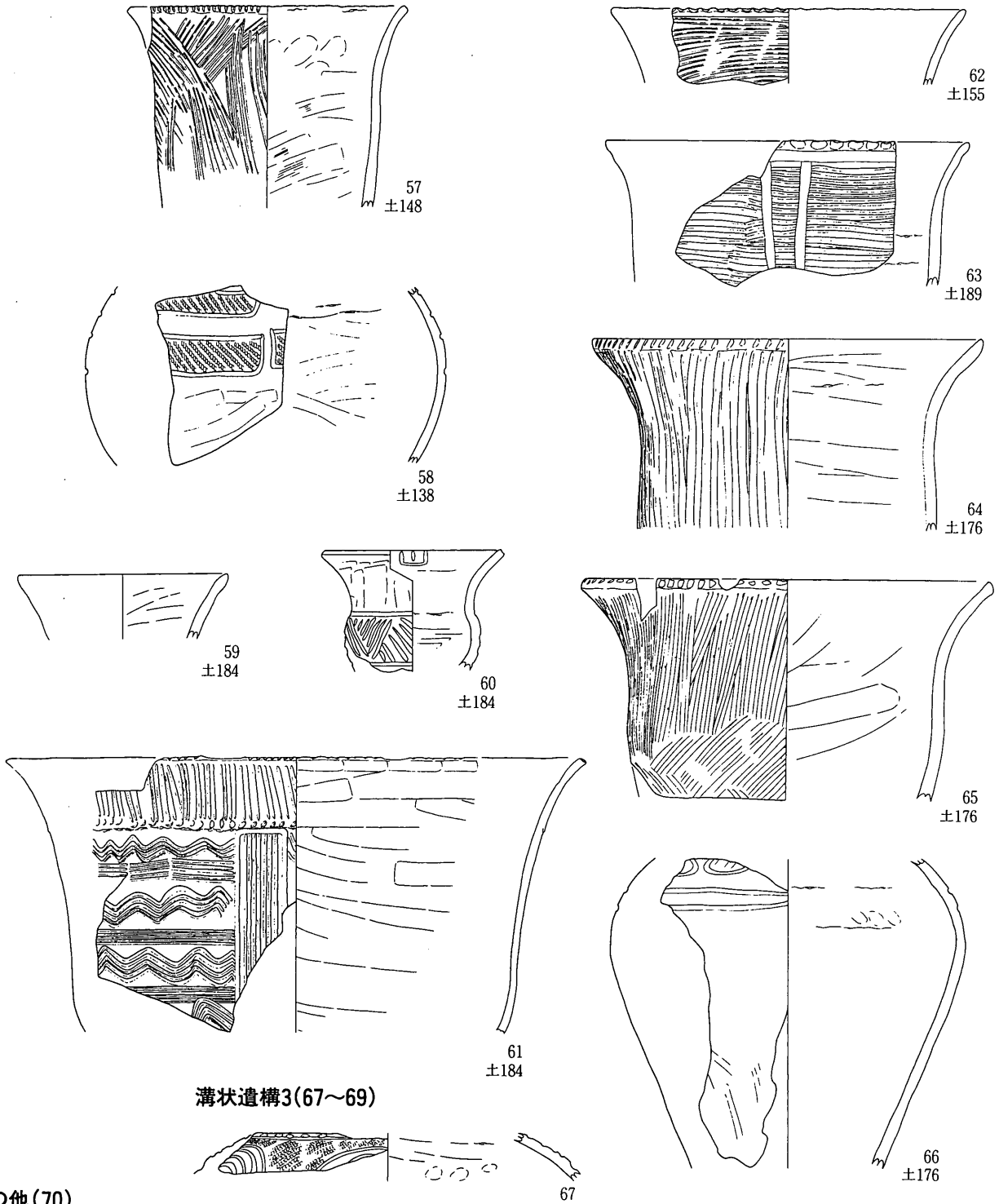


56  
P 442



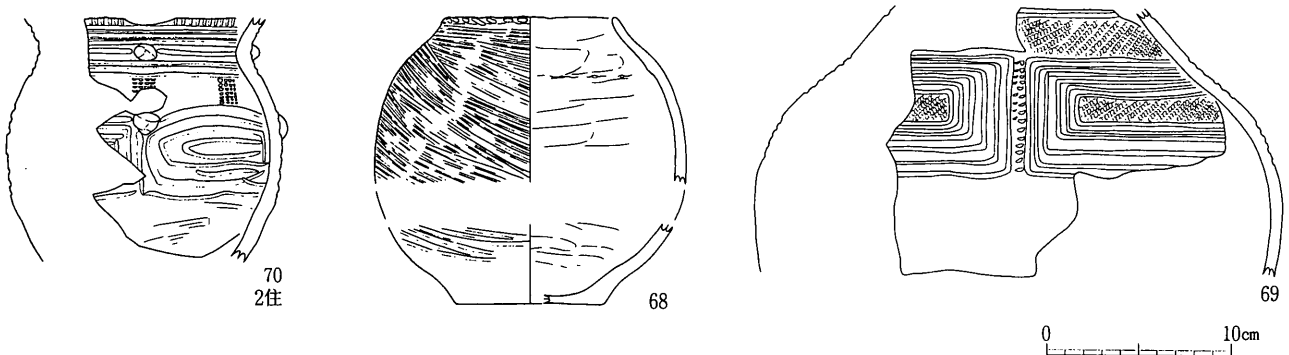
第29図 境窪遺跡 弥生土器(4)

土坑(57~66)

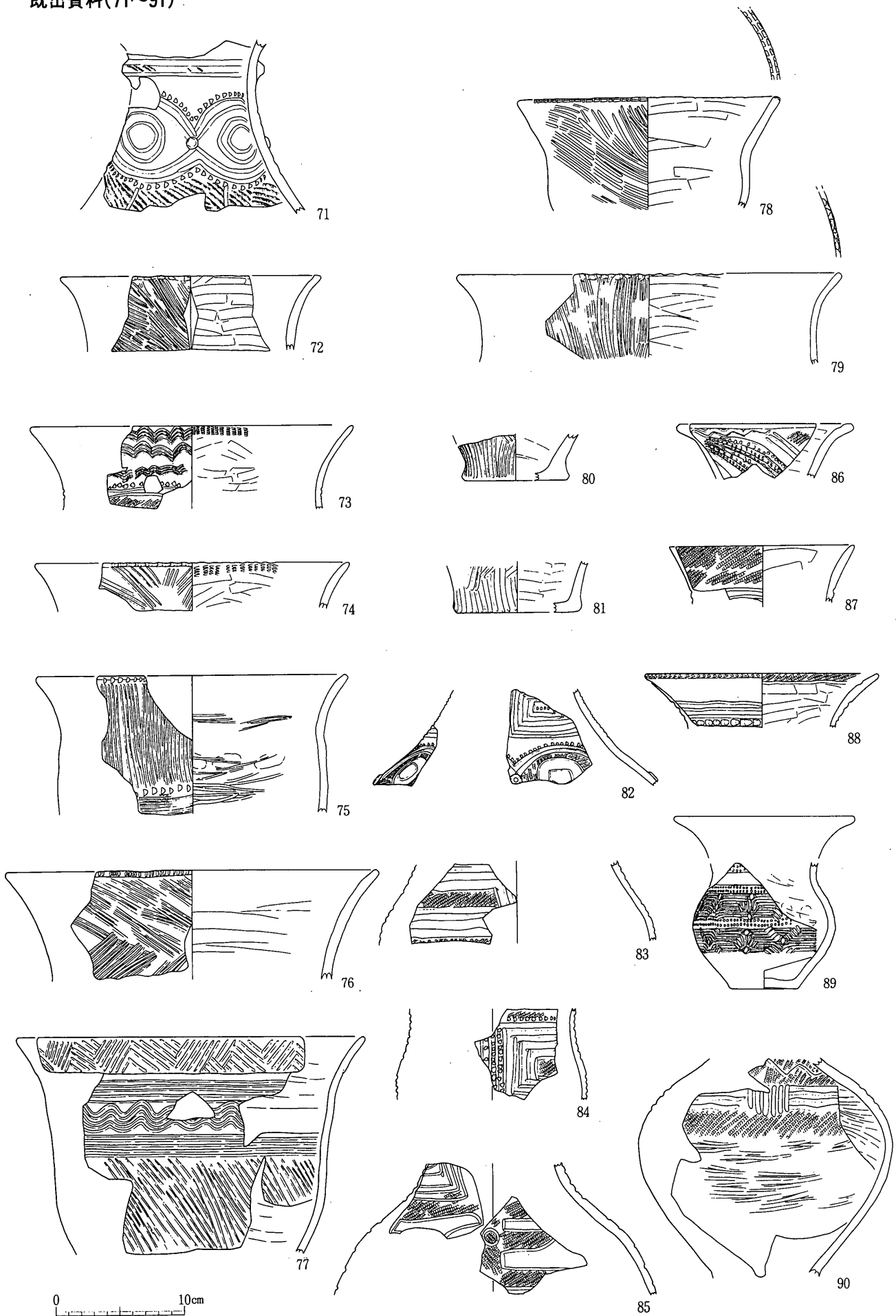


溝状遺構3(67~69)

その他(70)

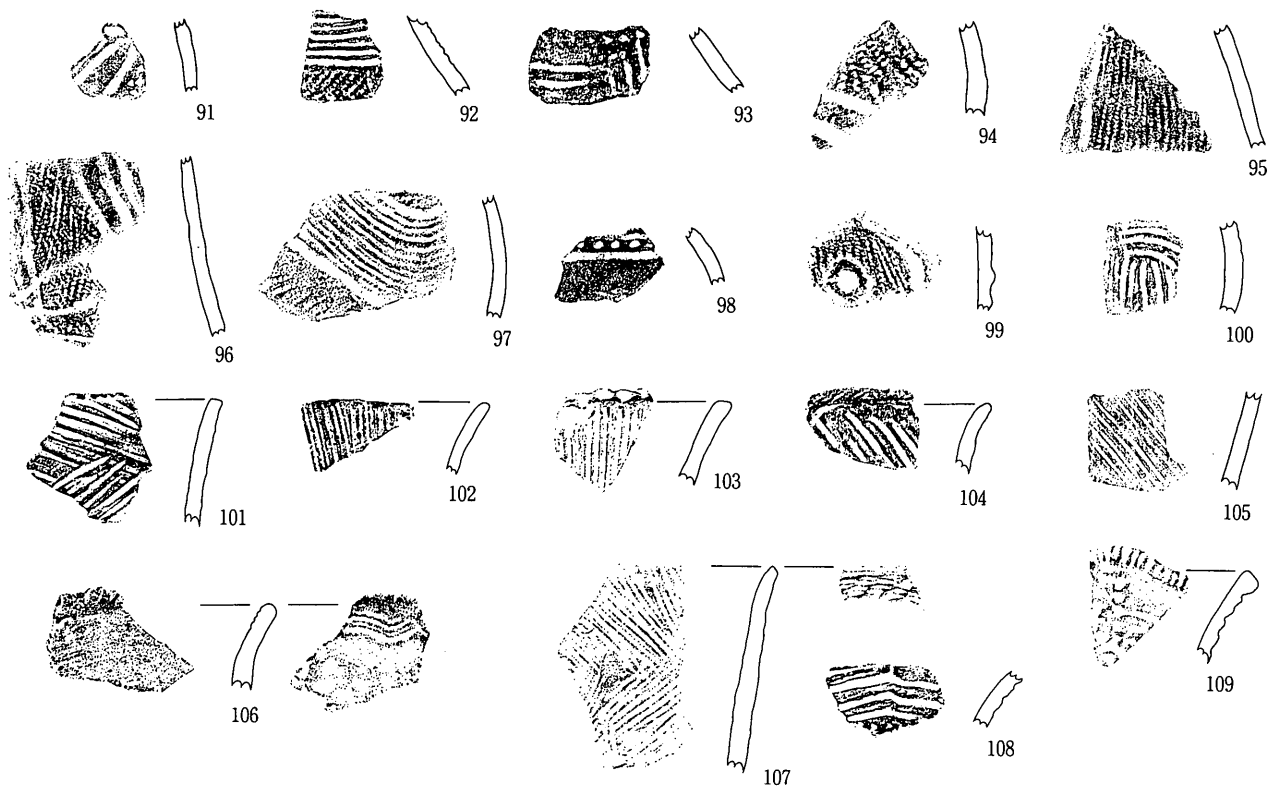


第30図 境窪遺跡 弥生土器(5)

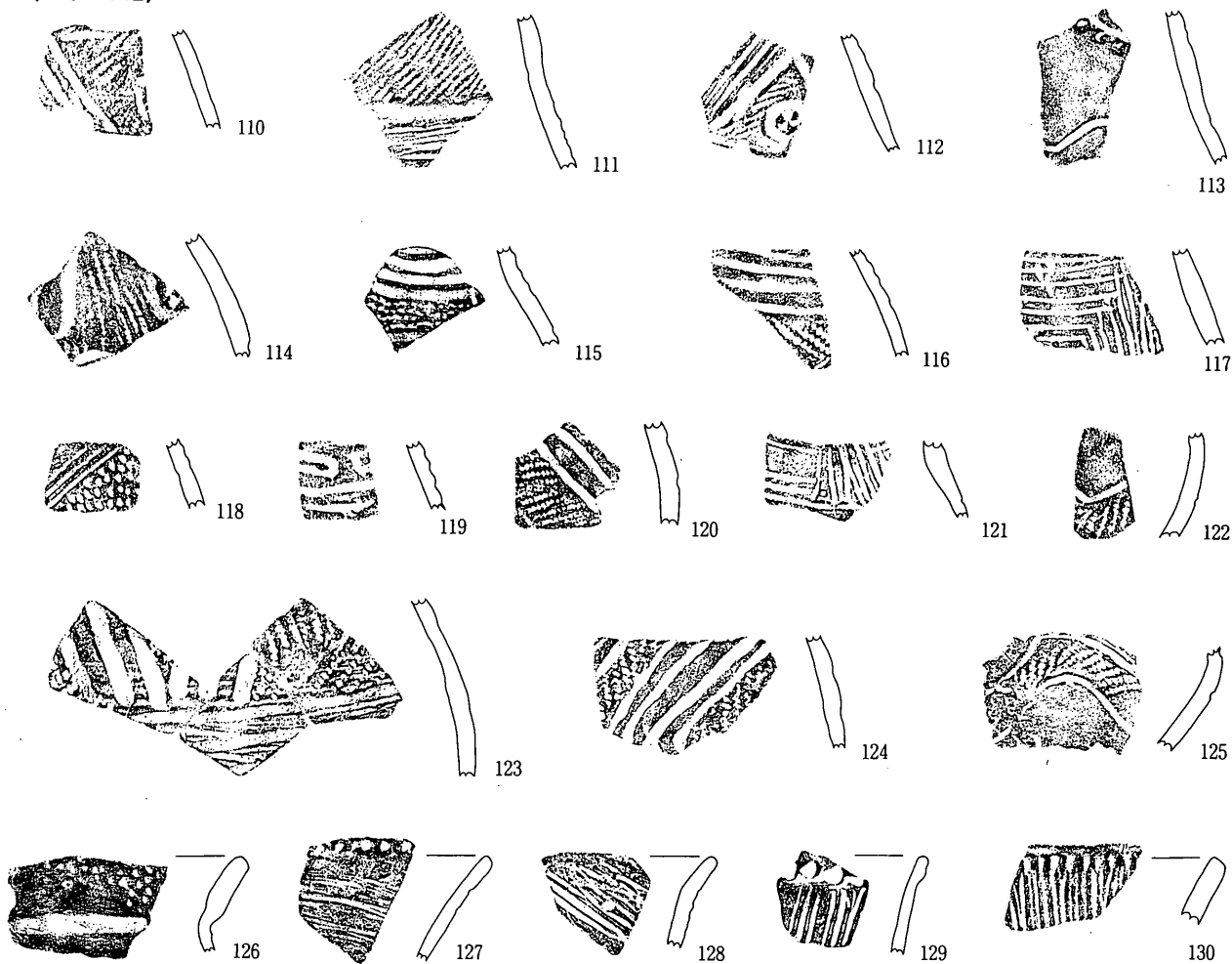


第31図 境窪遺跡 弥生土器(6)

竖穴住居址 3住(91~109)



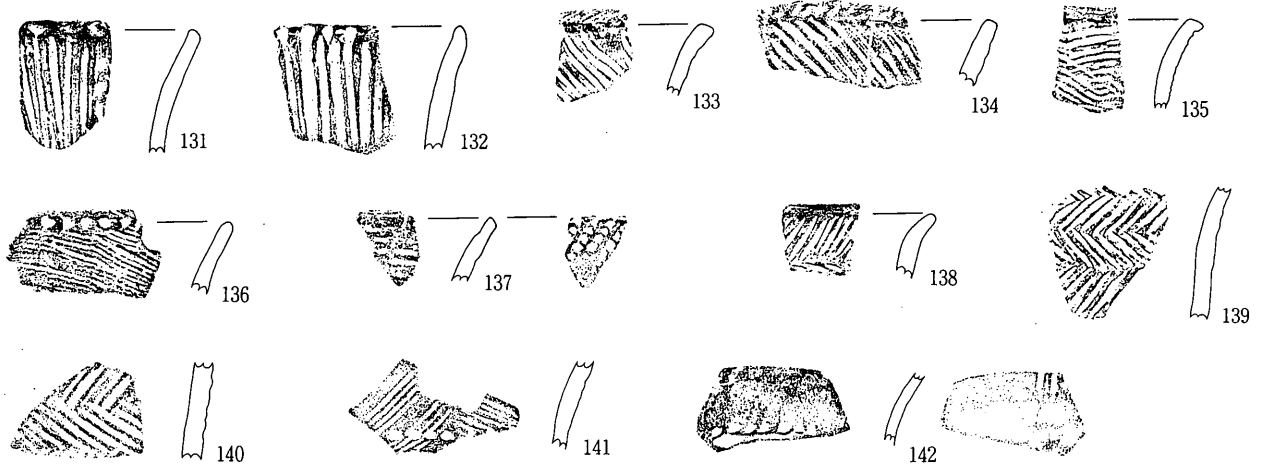
4住(110~142)



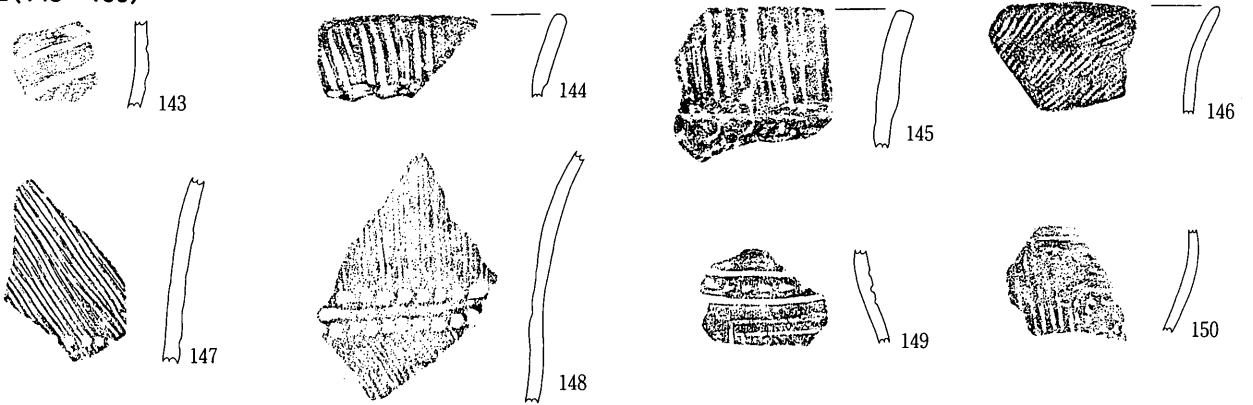
0 10cm

第32图 境窪遺跡 弥生土器(7)

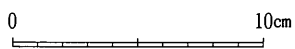
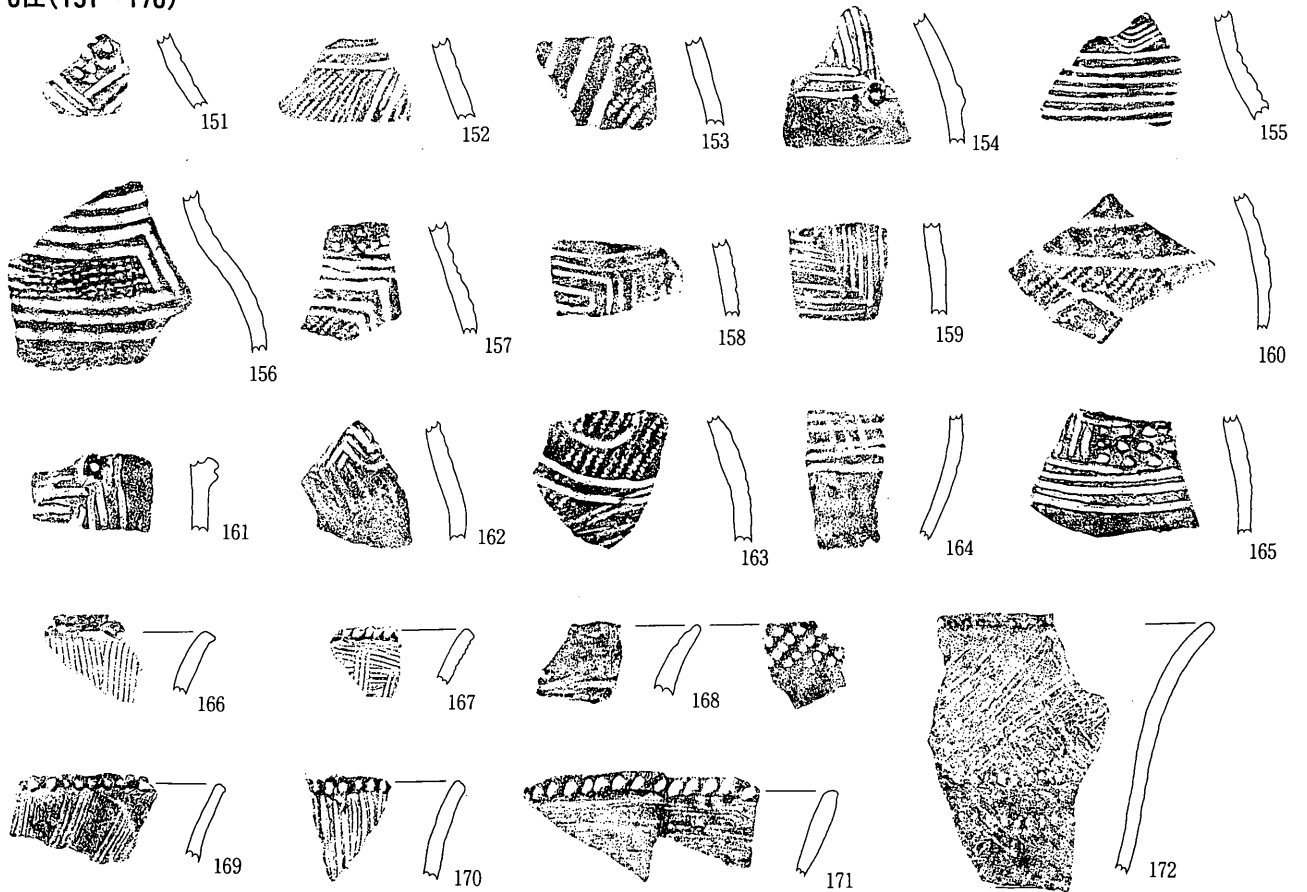




5住 (143~150)



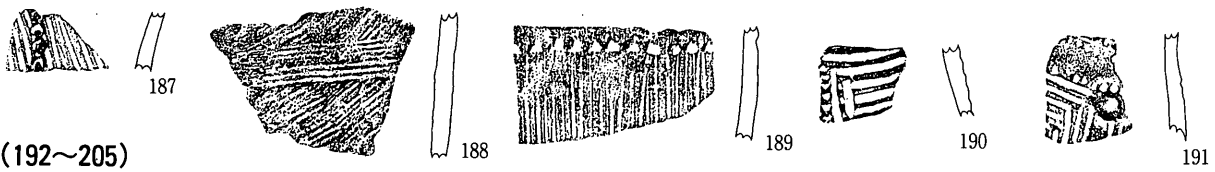
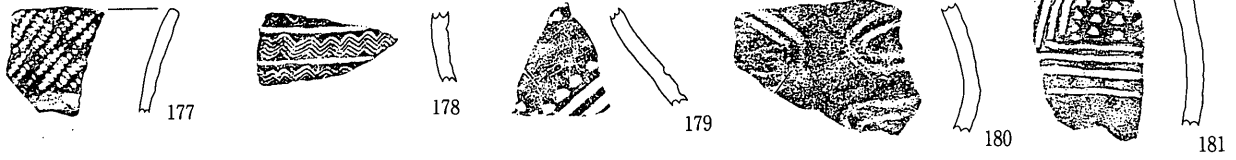
6住 (151~176)



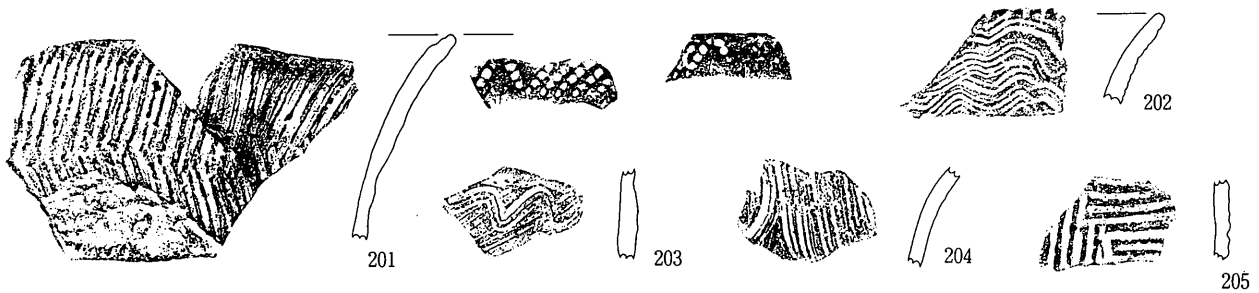
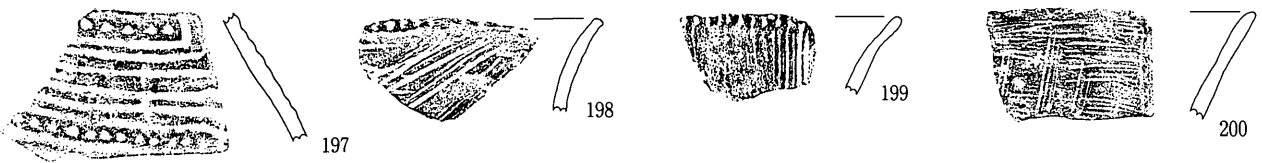
第33图 境窪遺跡 弥生土器 (8)



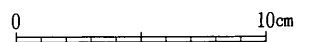
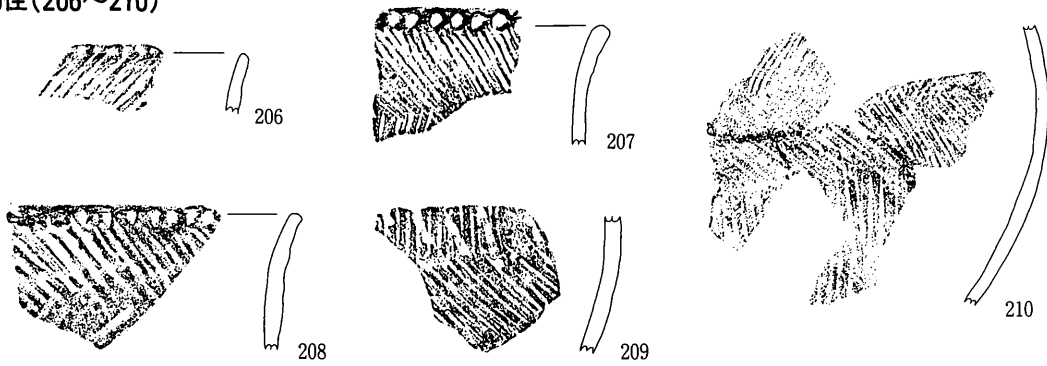
7住(177~191)



8住(192~205)

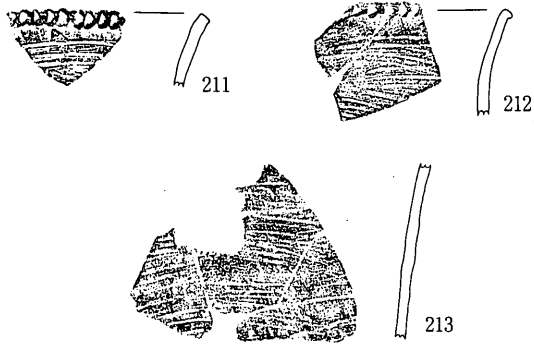


10住(206~210)

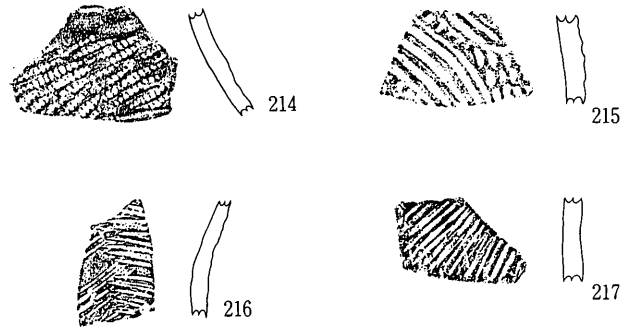


第 34 图 境窪遺跡 弥生土器 (9)

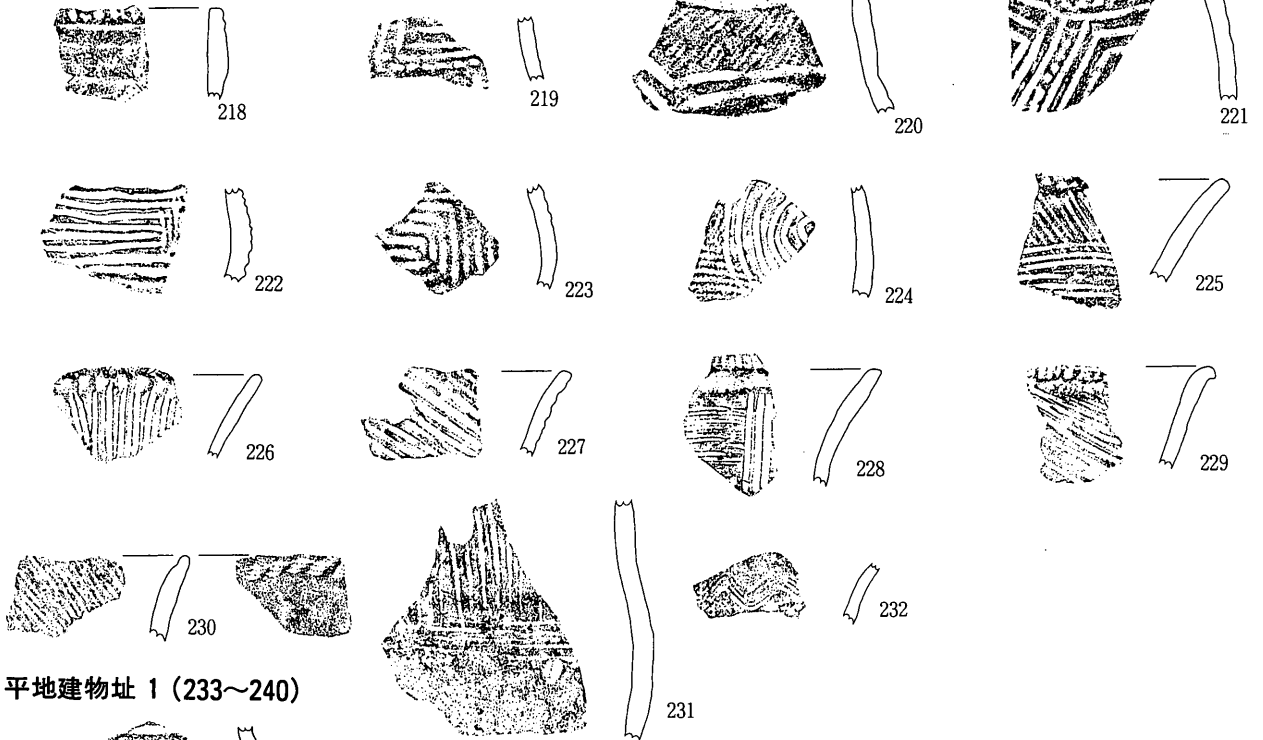
9住(211~213)



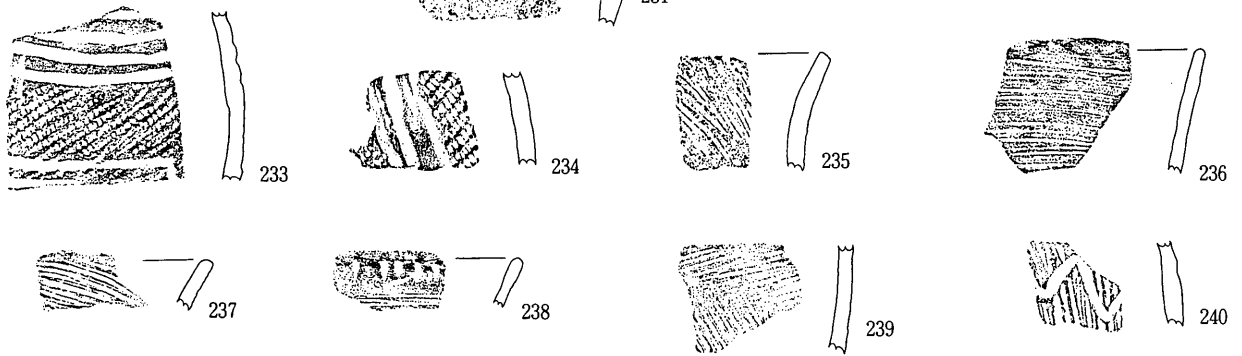
11住(214~217)



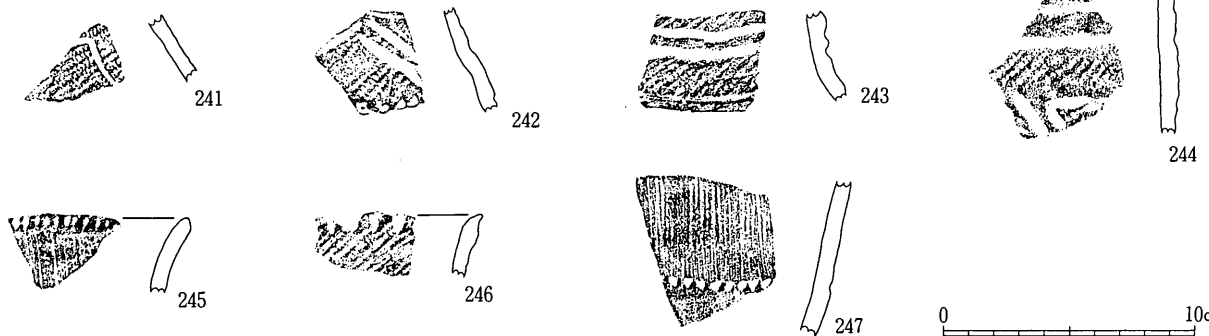
12住(218~232)



平地建物址 1 (233~240)

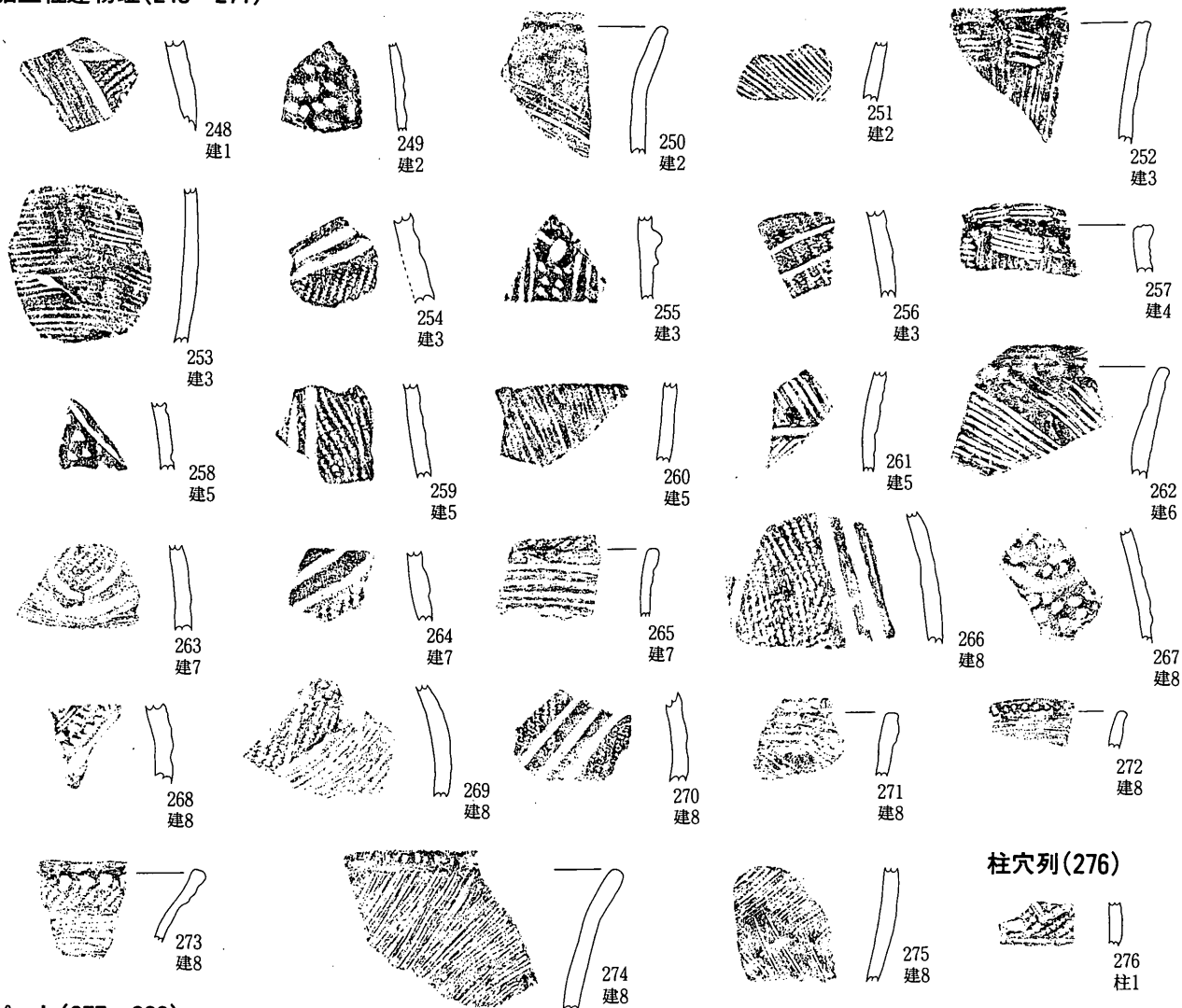


平地建物址 2 (241~247)

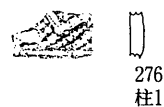


第 35 图 境窪遺跡 弥生土器 (10)

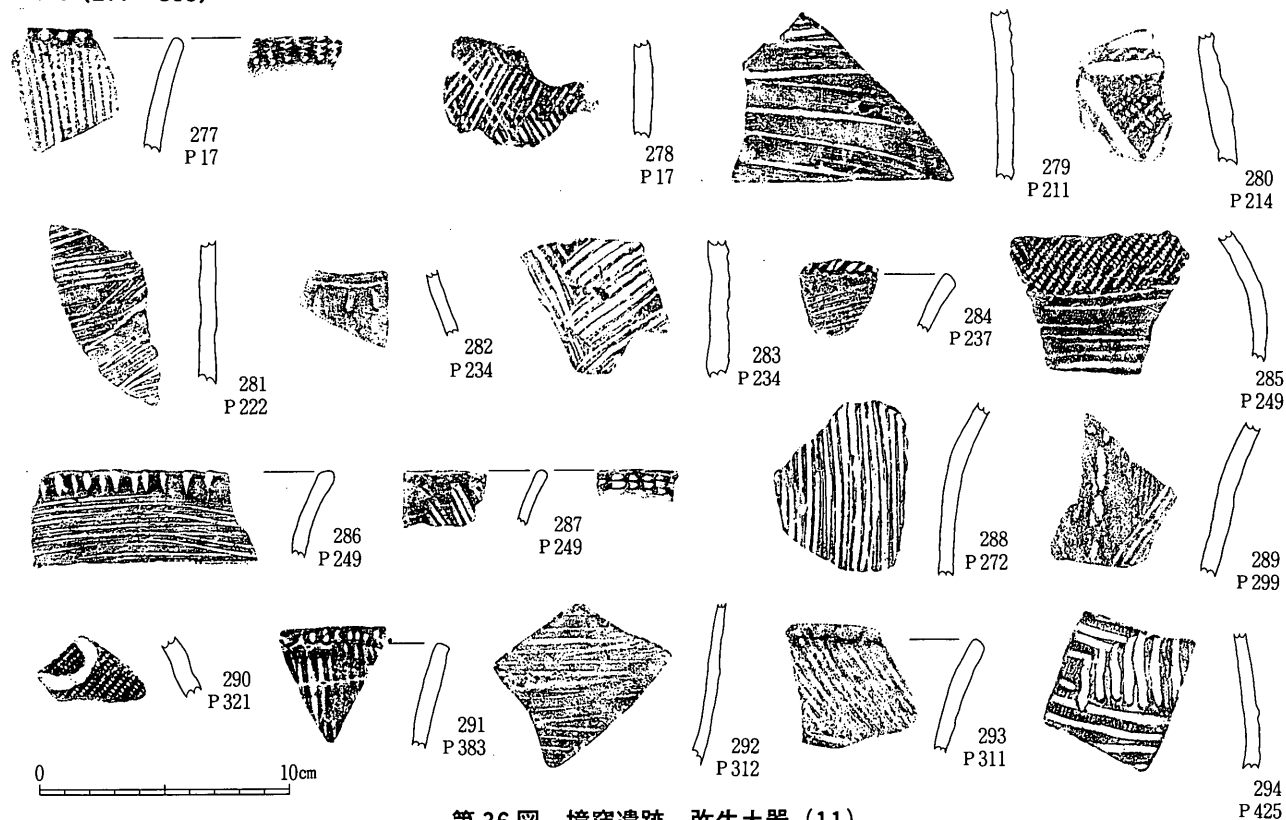
掘立柱建物址(248~271)



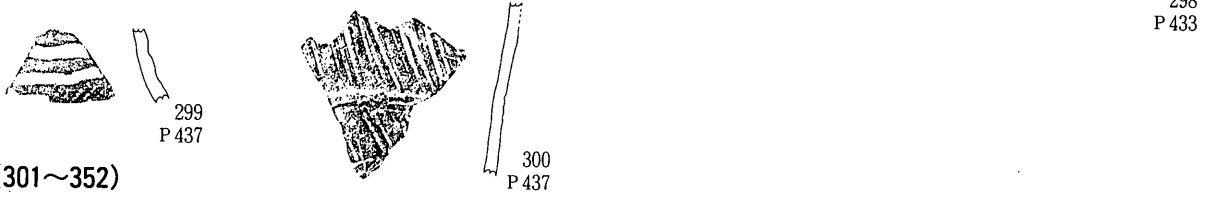
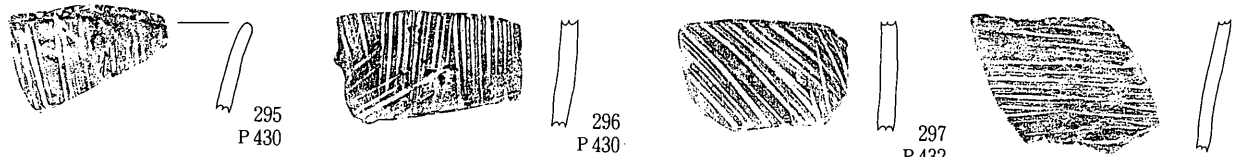
柱穴列(276)



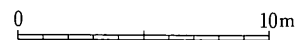
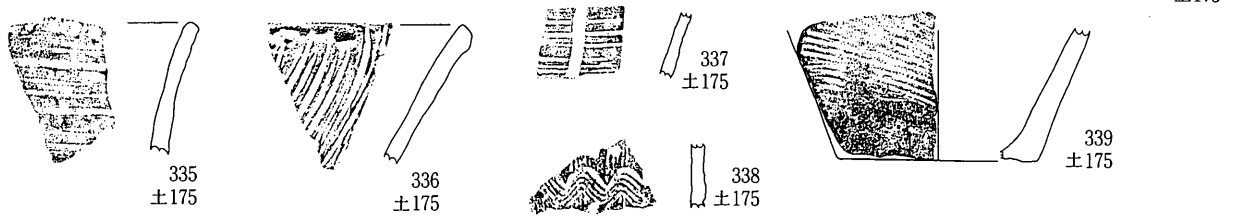
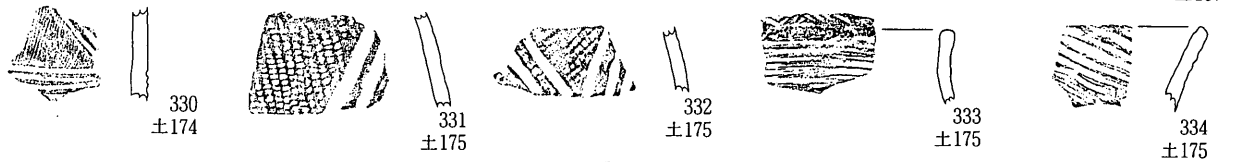
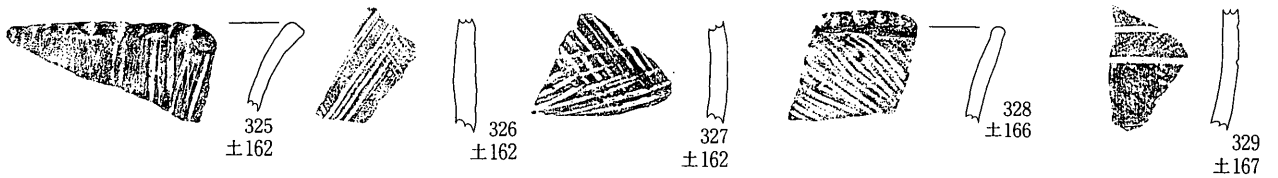
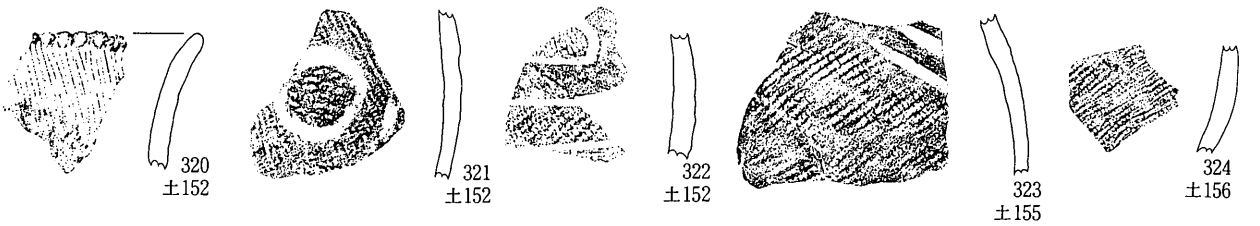
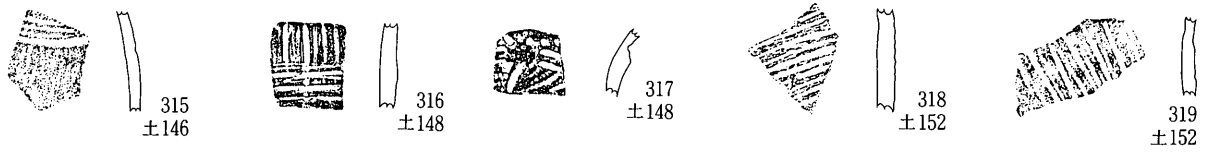
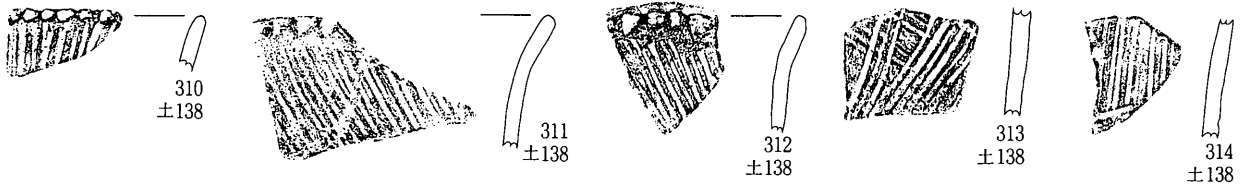
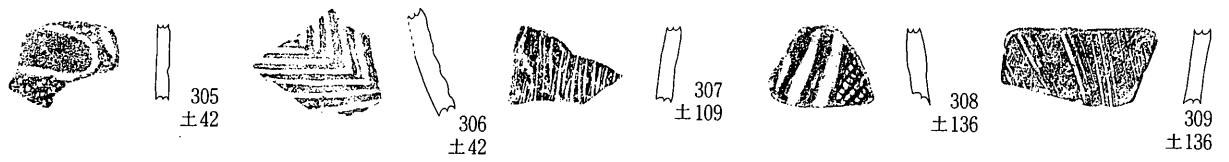
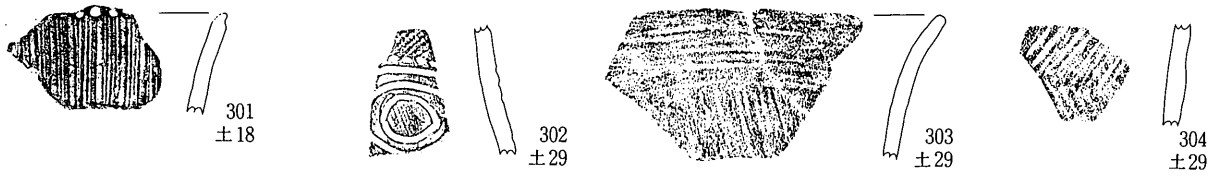
ピット(277~300)



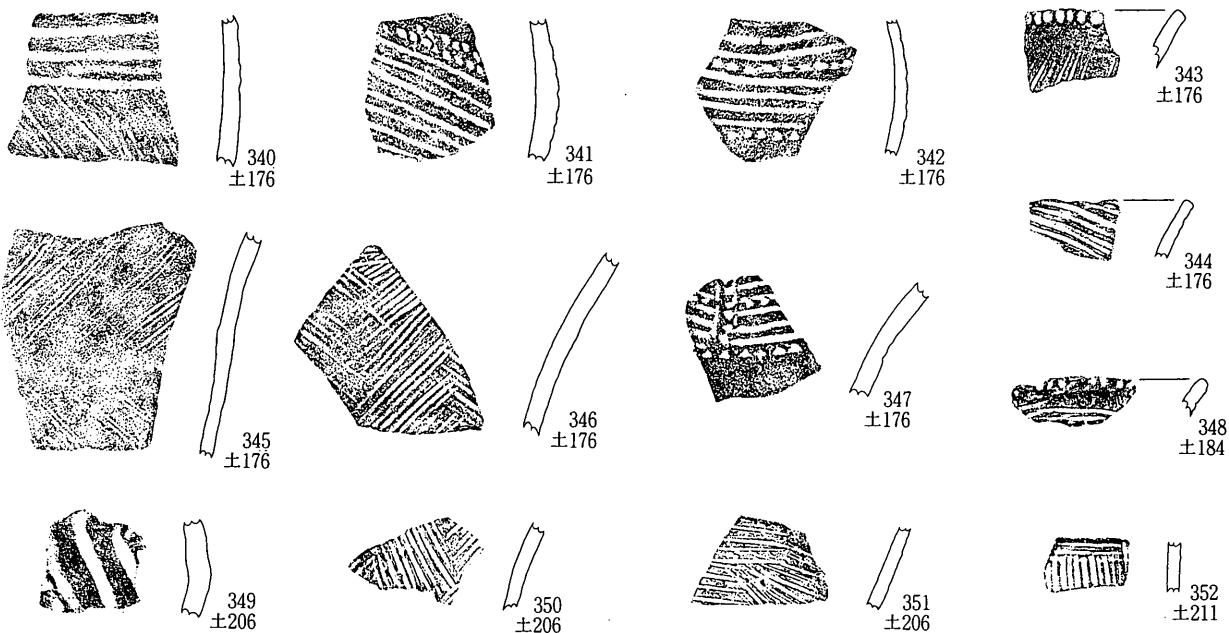
第 36 図 境窪遺跡 弥生土器 (11)



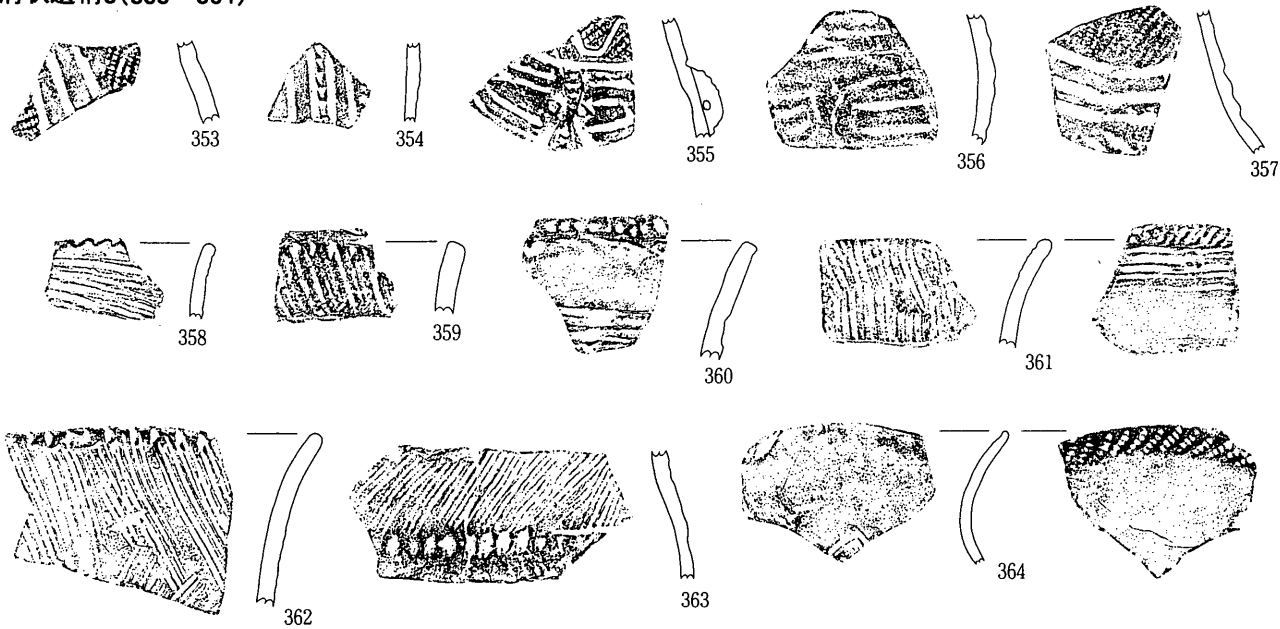
土坑(301~352)



第 37 图 境窪遺跡 弥生土器 (12)



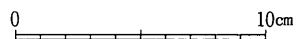
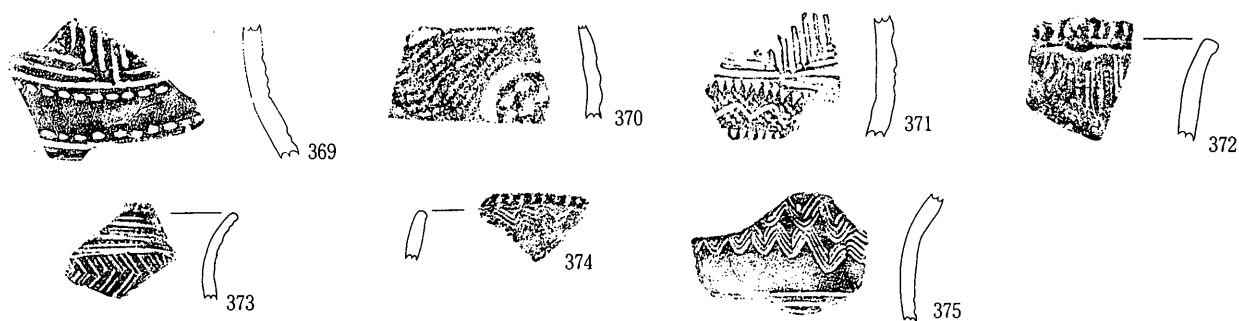
溝状遺構3(353~364)



谷状地形(365~368)



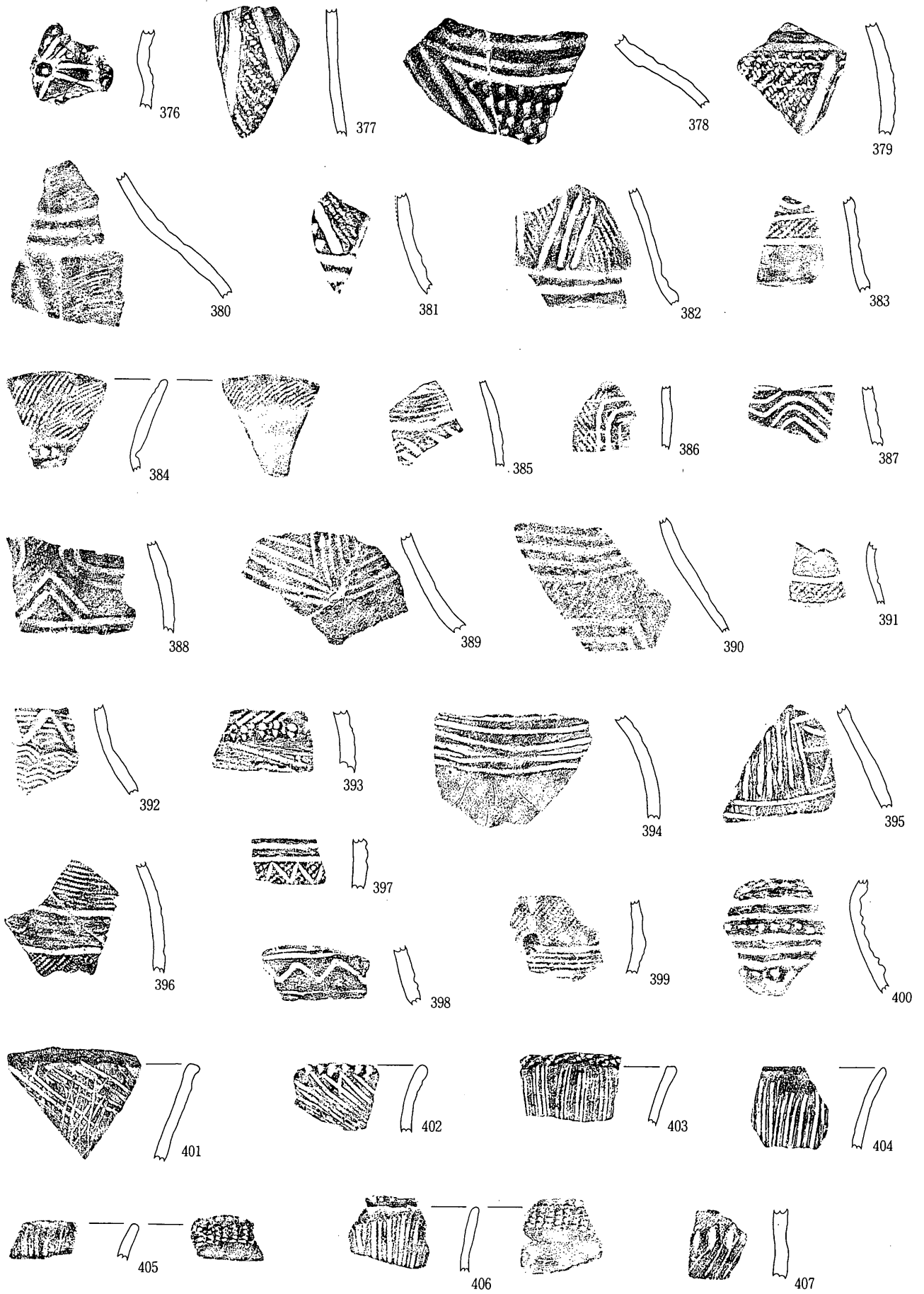
A区検出面(369~375)



第38図 境窪遺跡 弥生土器(13)

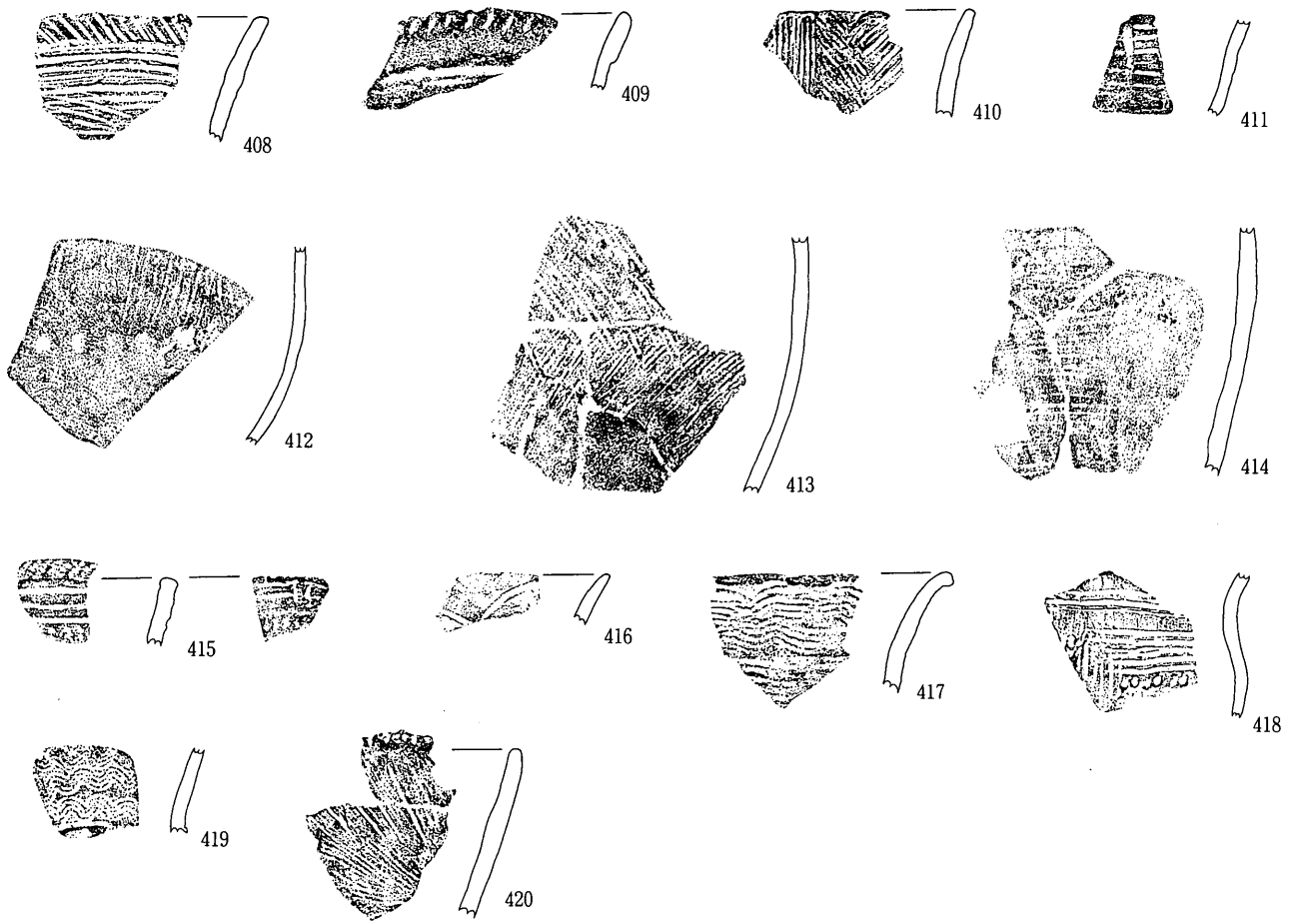


B区検出面(376~420)

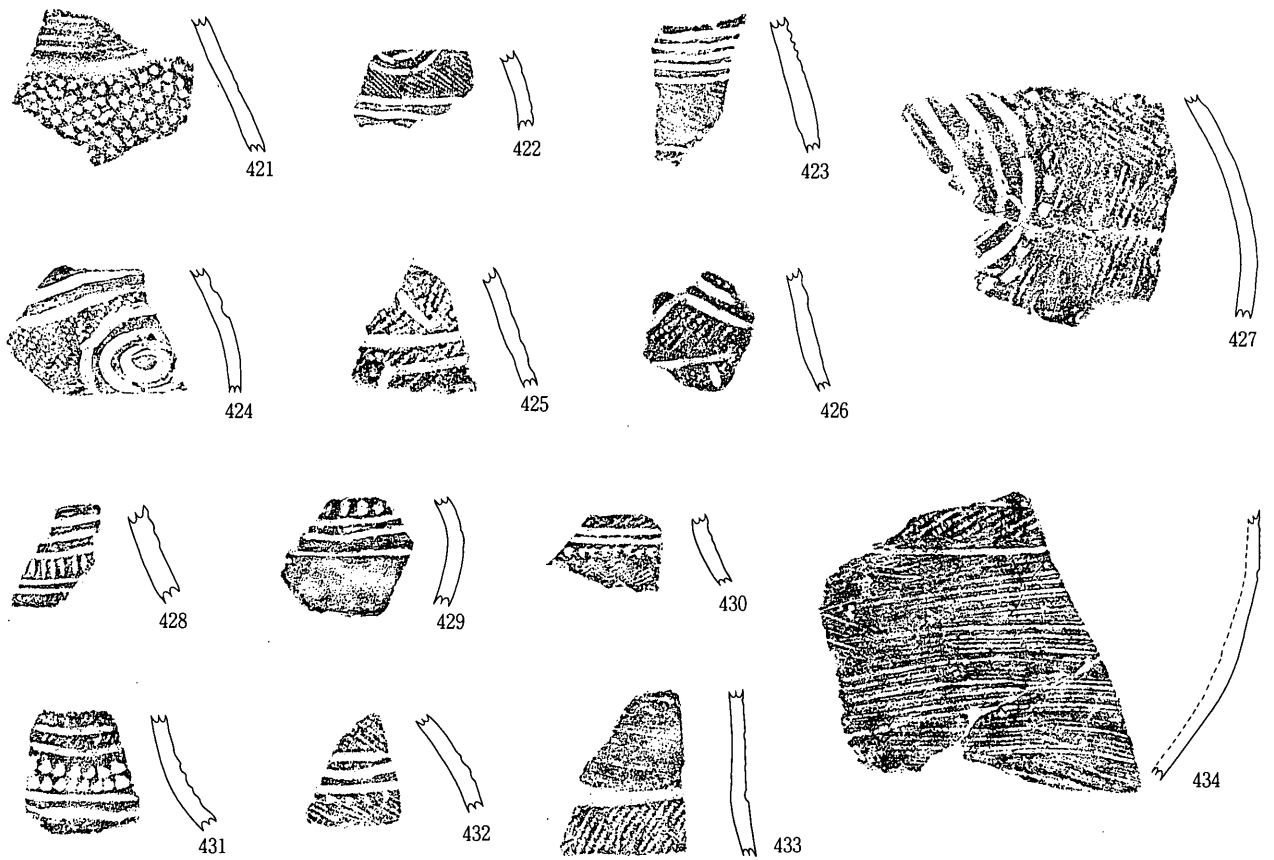


0 10cm

第39图 境窪遺跡 弥生土器 (14)

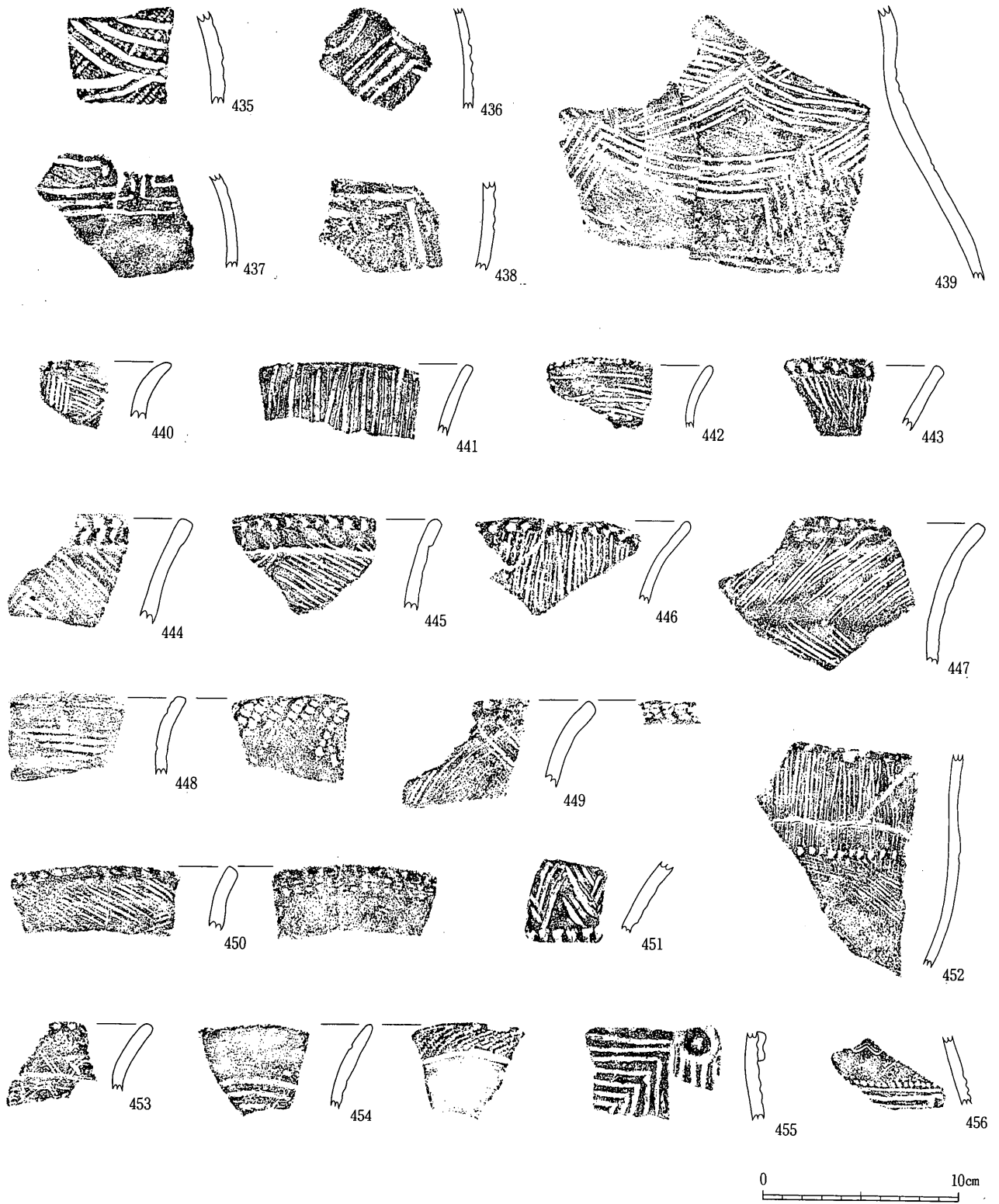


既出資料(421~456)



0 10cm

第 40 図 境窪遺跡 弥生土器 (15)



第 41 图 境窪遺跡 弥生土器 (16)

## ②石器・石製品（第6・7表、第42～56図）

### i) はじめに

境窪遺跡では主として竪穴住居址・土坑等の遺構に伴い、搬入品と考えられる礫等も含めると総点数1,370点、総重量約95,652gの石器・石製品が出土した。通常は土器群及び旧石器時代の石器群に対し実施される個体（母岩）識別・接合作業を実施したところ本項執筆段階までに、平均接合個体数は約2.4点とほぼ2点に等しく、境窪石器群全体としての接合率も約8.5%に止まるものの、接合資料48例、総接合個体数117点を確認し得た<sup>(註1)</sup>。石器の出土した遺構の多くにおいて弥生時代中期に帰属する土器との強い共伴関係が認められたこと等もあわせて考えると、所謂廃棄様式を示すものであったとしても、境窪石器群は極めて限定されたタイムスパン内において形成されたものと考えられる。

### ii) 枠組の提示

本項では遺跡の共時的性格に鑑み、遺跡構造論的立場から共時態的分析—総合を行うためのデータ提示を第一義とした。ここでは、本項において使用する基本的な用語について若干触れておく<sup>(註2)</sup>。

**単位石器群の設定** 明確な遺構より出土した資料を遺構単位石器群と呼称し、資料操作の基本的単位として設定した<sup>(註3)</sup>。そして遺構単位石器群により構成される構造体を境窪石器群と呼称した。

**石器の認識** 本項では従来使用されてきた機能名称は用いずに、なおかつそれぞれのタクソンについての分類基準、すなわちクライテリオンを明示するように努めた。そこで狭義の石器を「素材獲得技術痕跡及び二次加工技術痕跡の複合体」とし、二次加工の有無という定性的クライテリオンにより分離し得る素材獲得技術構造、二次加工技術構造というレベルの異なる構造の関係、すなわち構造間構造を石器製作技術システムと仮設した。

**剥離面及び剥離痕の分類** 本項では通常剥離を「バルブ及びバルブスカーが最も発達すると考えられる、剥片剥離を目的とする加撃」、両極剥離を「リング及び潰れ状を呈する剥離痕が最も発達すると考えられる、台石上でなされたと考えられる剥片剥離を目的とする加撃」、押圧剥離を「バルブ及びバルブスカーが最も発達しにくく、剥離痕末端部は階段状を呈することが多いと考えられる、対象物に対し接触した状態でなされたと考えられる加撃」の痕跡と仮設した。また、敲打技術を「剥片剥離を目的としないと考えられる、対象物に対し垂直になされたと考えられる加撃」とし、研磨技術を「加撃行為とは定性的に区別し得る、対象物を磨く行為」の痕跡と仮設した。

**剥離痕構成の分類** 主要剥離面の認められる個体については主要剥離面剥離軸（以下主要剥離軸と略す）を、主要剥離面の認められない個体については任意の剥離痕剥離軸を基準（基準となる剥離軸を12時方向からの剥離とする）とし、11～1時方向からの剥離を単設単軸的、5～7時方向からの剥離を両設単軸的、10～2時方向からの剥離を単設斜軸的、4～8時方向からの剥離を両設斜軸的、2～4時及び8～10時方向からの剥離を求心的と仮設した。

### iii) 石器概観

ここでは境窪石器群において認められた石器毎に、石材組成（境窪石器群としてみた点数比）、主要分布、素材獲得技術、二次加工技術、形態ヴァリエーション等の概観を行う<sup>(註4)</sup>。

**原石 (MS)** 「人為的加工痕が全く認められないが石器の素材と考えられるもの」と仮設した。黒耀石（37点97%）及び硬砂岩（1点3%）により構成される。分布の中心は住居址にあり、9住、10住、12住石器群を除いては1～6点が認められた。なお黒耀石集中石器群においても5点が認められた。黒耀石製MSは平均最大長32.3mm、平均最大幅24.4mm、平均最大厚13.6mm、平均重量10.8gを測る。

**石核 (C)** 「通常剥離の痕跡としての剥離痕が認められるもの」と仮設した。黒耀石（141点95%）、硬砂岩（5点3%）、及び砂岩（3点2%）により構成される。分布の中心は住居址にあり、すべての住居址単位石器群において1～17点が認められた。黒耀石製Cは平均最大長22.5mm、平均最大幅25.9mm、平均最大厚12.5mm、平均重量7.1gを測る。黒耀石製MSの平均最大幅を上回るのは、1) 黒耀石製Cの中に本遺跡外においてあまり剥片剥離が進行しなかった石核が搬入個体として含まれるため、2) 黒耀石製MSの中に折損資料や剥片剥離が実行不可能と見られる極小形のものが含まれるため、等の解釈も可能ではあるが、境窪石器群においては母岩識別・接合作業が不徹底なため可能性の提示に止まる。

**剥片 (F)** 「通常剥離の痕跡としての剥離面が認められるもの」と仮設した。黒耀石（194点84%）、硬砂岩（19点8%）、頁岩（6点3%）、ホルンフェルス（4点2%）のほか、構成率1%に満たないが珪質泥岩、凝灰岩、礫質砂岩、砂岩により構成される。分布の中心は住居址及び一部の土坑にあり、多くの土坑、ピット単位石器群においては1～数点のみが認められた。黒耀石製Fは平均最大長17.3mm、平均最大幅15.6mm、平均最大厚5.3mm、平均重量1.1gを測る。

**楔状石核 (BC)** 「両極剥離の痕跡としての剥離痕が認められるもの」と仮設した。84点が認められたが、黒耀石のみにより構成される。分布の中心は住居址にあり、9住石器群を除く住居址単位石器群において1～11点が認められた。ピット単位石器群においては全く認められず、土坑単位石器群においては19単位中5単位において1～2点が認められた。

平均最大長 21.6 mm、平均最大幅 19.0 mm、平均最大厚 9.3 mm、平均重量 3.5 g を測る。

楔状剥片 (BF) 「両極剥離の痕跡としての剥離面が認められるもの」と仮設した。20 点が認められたが、黒耀石のみにより構成される。分布の中心は住居址にあり、8 住、9 住、10 住石器群を除いて 1～4 点が認められた。ピット単位石器群においては全く認められず、土坑単位石器群においては土坑 141、土坑 175 石器群においてそれぞれ 1 点が認められた。平均最大長 20.5 mm、平均最大幅 15.2 mm、平均最大厚 5.8 mm、平均重量 1.8 g を測る。

碎片 (Ch) 「最大長 5 mm 以下のもの」と仮設したが、明確な主要剥離面や剥離痕が認められたものについては本タクソンには含めていない。7 点が認められたが、黒耀石のみにより構成される。分布はかなり限定され、3 住石器群において 2 点、4 住、5 住石器群においてそれぞれ 1 点、及び土坑 138 石器群において 3 点が認められたのみである<sup>(註5)</sup>。

鏃形石器 (FP) (第 43、44 図) 「主として押圧剥離により両面を整形されたもの」と仮設した。境窪石器群における緻密石材素材剥離系において主体をなすタクソンである。黒耀石 (37 点 84 %)、チャート (6 点 14 %)、珪質泥岩 (1 点 2 %) により構成される。主要分布は 9 住石器群を除く住居址単位石器群において 1～7 点が、土坑 21、土坑 138、土坑 162、土坑 175、ピット 418、ピット 425 石器群においてそれぞれ 1 点ずつが認められた。黒耀石製 FP は平均最大長 24.4 mm、平均最大幅 14.5 mm、平均最大厚 4.8 mm、平均重量 1.3 g、チャート製 FP は平均最大長 25.6 mm、平均最大幅 17.4 mm、平均最大厚 4.1 mm、平均重量 1.3 g、珪質泥岩製 FP は最大長 36.0 mm、最大幅 22.3 mm、最大厚 6.9 mm、重量 4.1 g を測る。珪質泥岩製 FP は資料数が未製品 1 点のみであるのに対し、黒耀石、チャート製 FP は未製品、製作段階の破損品、所謂完形品、及び実際に使用されたと考えられる破損品等を含むことから、珪質泥岩製 FP のみが大きな値を示すものと考えられる。素材としては通常剥片素材 (23 点 52 %)、礫素材 (1 点 2 %)、板状礫素材 (1 点 2 %)、素材不明 (19 点 43 %) が認められた。礫を素材として押圧剥離、通常剥離、両極剥離が施される資料の中には石核として分類したものもあり、今後未製品を含めて礫素材 FP と石核との分離も課題となろう。形態的には、所謂有茎式 (32 点 73 %)、所謂平基式 (2 点 5 %)、所謂有脚式 (2 点 5 %)、不明 (8 点 18 %) 等が認められる。通常剥片を素材とするもののうち、背面に礫面が認められる個体も多く認められる (16 点 70 %) ことから、素材獲得段階初期の剥片も FP 素材として用いられたと考えられる。二次加工技術は押圧剥離が主体をなし、通常及び両極剥離はほとんど認められなかった。212、349 には器面中央に打点が認められる通常の剥離では生じ得ない剥離痕が認められる。また 870、1032 には器面中央の稜線上を加撃した剥離痕が認められる。これらの二次加工技術は今後注意を要するものと考えられる<sup>(註6)</sup>。また 78、141、526 には所謂衝撃剥離痕が認められる<sup>(註7)</sup>。

鏃形石器 (Dr) (第 44 図) 「機能部と考えられる尖頭部の形成されたもの」と仮設した。黒耀石製の個体 2 点により構成される。分布は極めて限定され、4 住石器群において 1 点、S 42 W 69 グリットにおいて 1 点が認められたのみである。130 は背面に大きく礫面が認められる通常剥片を素材とし、背腹両面に押圧剥離により二次加工が施される。尖頭部には使用により形成されたと考えられる研磨痕が認められる。S 42 W 69 グリット出土のものについては図示し得なかったが、棒状礫を素材とし、背腹両面に両極剥離及び押圧剥離により二次加工が施されるものである。

スクレイパー状石器 (Sc) (第 44、45、53 図) 「剥片を素材とし、通常剥離、押圧剥離等により刃部と考えられる明確な剥離単位の形成されたもの」と仮設した。黒耀石 (14 点 88 %)、チャート (1 点 6 %)、黒色緻密安山岩 (1 点 6 %) により構成される。分布の中心は住居址及び一部の土坑にあり、明確な遺構に伴ったものとしては、4 住、5 住、6 住、7 住、12 住、建 7 石器群において 1～3 点が、土坑 61、土坑 175 石器群においてそれぞれ 1 点が認められた。通常剥片のみが素材として認められるが、適用される二次加工技術や、素材の用い方等は多様である。二次加工ある剥片、微細剥離痕ある剥片との分離も然る事ながら、境窪石器群においては板状の礫を素材とするものが存在したようであり、礫素材 Sc というタクソンを設定するのであれば、今後礫素材 FP 未製品や石核等との分離も課題となろう。

二次加工ある剥片 (RF) 「通常剥離、両極剥離、押圧剥離のいずれかにより形成された、主要剥離面を切る剥離痕の認められる剥片」と仮設した。黒耀石 (162 点 93 %)、チャート (2 点 1 %)、黒色緻密安山岩 (2 点 1 %)、硬砂岩 (5 点 3 %) 等のほか、構成率は 1% に満たないものの珪質泥岩、珪質頁岩、粘板岩それぞれ 1 点ずつにより構成される。分布の中心は住居址及び一部の土坑にあり、多くの土坑、ピット単位石器群においては 1～数点が認められたのみである。黒耀石製 RF は平均最大長 22.5 mm、平均最大幅 18.7 mm、平均最大厚 6.0 mm、平均重量 2.0 g を測る。

微細剥離痕ある剥片 (MF) 「肉眼観察において微細剥離痕の認められる剥片」と仮設した。黒耀石 (472 点 95 %)、チャート (5 点 1 %)、硬砂岩 (9 点 2 %)、頁岩 (5 点 1 %) 等のほか、構成率は 1% に満たないものの礫質砂岩 (1 点)、砂岩 (2 点) により構成される。分布の中心は住居址及び一部の土坑にあり、多くの土坑、ピット単位石器群においては 1～数点が認められたのみである。黒耀石製 MF は、平均最大長 19.9 mm、平均最大幅 17.3 mm、平均最大厚 5.2 mm、平均重量 1.4 g を測る。

打製斧形石器 (FA) (第 53 図) 「通常剥離、両極剥離等により両側縁が整形されたか、もしくは刃部の形成された斧形を呈するもの」と仮設した。珪質頁岩、頁岩、硬砂岩それぞれ 1 点ずつにより構成される。分布は極めて限定され、平建 2 石器群、溝 3 石器群、A 区検出面においてそれぞれ 1 点が認められたのみである。858 は背面に大きな礫面が認められ

るが腹面はすべて剥離痕により構成され、素材は不明である。残りの2点については図示し得なかったが、いずれも剥片素材のものである。なお粗質石材素材RFとの境界は不明瞭であるといわざるを得ない。

**磨製斧形石器 (PA)** (第54図)「剥離、敲打、そして最終的には研磨調整により整形された斧形を呈するもの」と仮設した。硬砂岩、輝緑凝灰岩、緑色凝灰岩により構成される。分布は住居址単位石器群に限定され、5住石器群において4点が認められたほか、6住、8住、10住石器群においてそれぞれ1点が認められた。形態ヴァリエーションとしては大まかに、1) 側面観が左右対称のもの(373、374、375、504、すべて緑色凝灰岩)、2) 側面観が左右非対称のもの(661輝緑凝灰岩、687緑色凝灰岩)、3) 打製斧形石器の一部に研磨がなされたもの(296硬砂岩)に分離し得る。

**磨製鏃形石器 (PP)** (第54図)「剥離、敲打、そして最終的には研磨調整により整形された平面形三角形状を呈するもの」と仮設した。分布は極めて限定され、4住石器群において硬砂岩1点(211)が認められたのみである。211背面及び腹面には一部の研磨面を切る剥離痕が複数枚認められ、穿孔部周辺にはそれらの剥離痕をさらに切る線状擦痕が認められる。線状擦痕は研磨面を形成するには至らないことから、使用に伴うものと考えられる。境窪石器群内において同一母岩は認められなかった。

**礫石器Ⅰ類 (PⅠ)** (第55図)「凸面に敲打技術が施されたか、もしくは敲打技術により凸面の形成されたもの」と仮設した。硬砂岩(2点18%)、礫質砂岩(6点55%)、砂岩(3点27%)により構成される。分布は住居址、建物址、及び一部の土坑等に限定され、3住、7住、8住、建6、土坑175、土坑176石器群において1～3点が認められた。礫をそのまま素材として用いたと考えられるため完形のものとは当然として、接合面が存在する破損品についても同一母岩資料はほとんど認められなかった。

**礫石器Ⅱ類 (PⅡ)** (第55図)「凸面に研磨技術が施されたか、もしくは研磨技術により凸面の形成されたもの」と仮設した。分布は住居址、建物址単位石器群に限定され、6住(砂岩)、建6石器群(833安山岩)において1点ずつが認められた。礫をそのまま素材として用いたと考えられるため完形のものとは当然として、接合面が存在する破損品についても同一母岩資料はほとんど認められなかった。

**礫石器Ⅲ類 (PⅢ)** (第55図)「凹面に敲打技術が施されたか、もしくは敲打技術により凹面の形成されたもの」と仮設した。礫質砂岩(3点75%)、砂岩(1点25%)により構成される。分布は住居址に限定され、7住(613礫質砂岩)、12住石器群(795砂岩)において1点ずつが認められた。礫をそのまま素材として用いたと考えられるため完形のものとは当然として、接合面が存在する破損品についても同一母岩資料はほとんど認められなかった。

**礫石器複合 (PC)** (第53、55図)「研磨、敲打、まれには剥離技術までもが複合して認められるもの」と仮設した。硬砂岩(1点5%)、頁岩(1点5%)、礫質砂岩(9点43%)、砂岩(10点48%)により構成される。分布は住居址及び一部の土坑等に限定され、3住、4住、6住、7住、8住、12住、土坑215石器群において1～9点が認められた。礫をそのまま素材として用いたと考えられるため完形のものとは当然として、接合面が存在する破損品についても同一母岩資料はほとんど認められなかった。

**砥石状石器 (Ws)** (第56図)「平坦面に研磨技術が施されたか、もしくは研磨技術により平坦面の形成されたもの」と仮設した。礫質砂岩(3点60%)、砂岩(2点40%)により構成される。分布は住居址及び一部の特殊遺構等に限定され、5住、8住、礫集中地点、溝3石器群において1～2点が認められた。礫をそのまま素材として用いたと考えられるため完形のものとは当然として、接合面が存在する破損品についても同一母岩資料はほとんど認められなかった。

**管状石器 (Ac)** (第54図)「研磨技術により円柱状に形成され、穿孔のなされたもの」と仮設した。所謂管玉に相当する。碧玉のみより構成される。分布は極めて限定され、8住石器群において碧玉1点(669)が認められたのみである。

**礫 (P)**「剥離、剥落、研磨、敲打、折れのいずれの痕跡も認められないもの」と仮設した。実際は何らかの礫石器として用いられていたものが石器として認識し得ず含まれている可能性も残る。チャート(1点8%)、硬砂岩(2点17%)、ホルンフェルス(1点8%)、礫質砂岩(5点42%)、砂岩(2点17%)、珪岩(1点8%)により構成される。分布は住居址、建物址に限定され、5住、6住、7住、8住、12住、平建2石器群において1～4点が認められた。接合面が存在しないことから当然の事ながら、すべて単独個体である。チャート礫は境窪石器群において緻密石材素材剥離系石器の素材として用いられていたものとは異なる粗質なもので、表面に転磨痕が認められる。ホルンフェルス礫は遺跡内での採集が不可能であったと考えられ、MSに含まれるべきものとも考えられるが、境窪石器群内において認められた粗質石材素材剥離系石器の素材としてはあまりにも小さすぎるため礫とした。砂岩及び礫質砂岩Pは平均最大長169.7mm、平均最大幅111.7mm、平均最大厚74.0mm、平均重量2,760.7gを測る。砂岩、礫質砂岩、硬砂岩及びチャート礫については本報「地層と堆積」の所見から、遺跡内において採集可能であったと考えられる。

**礫片 (PT)**「剥離を除く剥落、折れ、熱ハジケ等の痕跡が認められるもの」と仮設した。黒耀石(5点11%)、硬砂岩(4点9%)、頁岩(10点23%)、ホルンフェルス(1点2%)、凝灰岩(3点7%)、礫質砂岩(6点14%)、砂岩(15点34%)により構成される。分布の中心は住居址、建物址にあり、3住、6住、7住、8住、9住、10住、12住、平建2石器群において1～12点が認められた。母岩識別・接合作業の対象としたが、そのほとんどが単独個体と考えられる。



#### iv) 石材概観

境窪石器群においては、黒耀石（1,175点86%）、チャート（15点1%）、珪質泥岩（3点1%未満）、黒色緻密安山岩（3点1%未満）、硬砂岩（51点4%）、頁岩（23点2%）、珪質頁岩（2点1%未満）、ホルンフェルス（7点1%）、粘板岩（1点1%未満）、輝緑凝灰岩（1点1%未満）、緑色凝灰岩（5点1%未満）、凝灰岩（5点1%未満）、安山岩（1点1%未満）、礫質砂岩（35点3%）、砂岩（41点3%）、珪岩（1点1%未満）、碧玉（1点1%未満）が石器の素材もしくは自然礫として認められた。ここでは石材毎に、石器組成（境窪石器群としてみた点数比）、主要分布等の概観を行う<sup>(註8)</sup>。

黒耀石 (Ob) MS (37点3%)、C (141点12%)、F (194点17%)、BC (84点7%)、BF (20点2%)、Ch (7点1%)、FP (37点3%)、Dr (2点1%未満)、Sc (14点1%)、RF (162点14%)、MF (472点40%)、PT (5点1%未満)より構成される。緻密石材素材剥離系石器の主体をなす石材であり、素材獲得から二次加工、さらには使用に至るまでの段階の石器が認められる。遺構単位石器群中のほぼすべて（59単位中52単位88%）の石器群において分布が認められた。土坑、ピット単位石器群においては黒耀石のみにより構成される石器群も多い（35単位中29単位83%）。遺構単位石器群における黒耀石の平均組成率は78%の高率を呈する。逆に、黒耀石を全く保有しない遺構単位石器群としては、土坑156、土坑176、土坑196、土坑215、ピット215、ピット329、礫集中石器群等が認められた。

チャート (Ch) FP (6点40%)、Sc (1点7%)、RF (2点13%)、MF (5点33%)、P (1点7%)より構成される。自然礫と考えられるPを除いては、すべて二次加工段階以降の石器のみが認められる。分布は極めて限定され、3住、4住、5住、6住、12住、土坑162、土坑175石器群において1～4点が認められた。遺構単位石器群におけるチャートの平均組成率は1%の低率を呈する。境窪石器群においてもほぼすべての個体が同一母岩が認められず、単独個体であると考えられる。

珪質泥岩 (SiMu) F (1点33%)、FP (1点33%)、RF (1点33%)より構成される。F1点を除いては、二次加工段階以降の石器である。分布は極めて限定され、5住、ピット215石器群においてそれぞれ1点が認められた。遺構単位石器群における珪質泥岩の平均組成率は2%の低率を呈する。5住石器群の個体は境窪石器群においても同一母岩が認められず、単独個体であると考えられる。ピット215石器群の個体はグリット石器群中に同一母岩が認められる。

黒色緻密安山岩 (BAn) Sc (1点33%)、RF (2点67%)より構成される。すべて二次加工段階以降の石器である。分布は極めて限定され、4住、6住、8住石器群においてそれぞれ1点が認められた。遺構単位石器群における黒色緻密安山岩の平均組成率は1%未満の低率を呈する。4住石器群の個体(124)は境窪石器群においても同一母岩が認められず、単独個体であると考えられる。6住石器群の個体(436)は8住石器群の個体と同一母岩である。

硬砂岩 (HSa) MS (1点2%)、C (5点10%)、F (19点37%)、RF (5点10%)、MF (9点18%)、FA (1点2%)、PA (1点2%)、PP (1点2%)、PI (2点4%)、PC (1点2%)、P (2点4%)、PT (4点8%)より構成される。粗質石材素材剥離系石器の主体をなす石材であると同時に、粗質石材素材研磨・敲打系石器の素材ともなっている。また、非常にイレギュラーな存在ではあるが、剥離・研磨系石器ともいべきものの素材ともなっている(211、296)。素材獲得から二次加工、さらには使用に至るまでの段階の石器がすべて認められたが、ほとんどの資料が単独個体と考えられ、さまざまな状態において搬入がなされたと考えられる。住居址、平地建物址、建物址単位石器群においては15単位中9単位において1～6点が認められた。土坑、ピット単位石器群においては35単位中6単位において1～3点が認められた。遺構単位石器群における硬砂岩の平均組成率は黒耀石に次ぐ8%である。

頁岩 (Sh) F (6点26%)、MF (5点22%)、FA (1点4%)、PC (1点4%)、PT (10点44%)により構成される。そのほとんどが単独個体と考えられ、さまざまな状態において搬入がなされたと考えられる。分布は3住、4住、5住、6住、7住、12住、建7、土坑175、ピット276、溝3石器群において1～4点が認められた。遺構単位石器群における頁岩の平均組成率は1%である。

珪質頁岩 (SiSh) RF (1点50%)、FA (1点50%)により構成される。10住石器群の個体(690)及び平建2石器群の個体(858)は共に単独個体と考えられ、ほぼ完製品に近い状態において搬入がなされたと考えられる。遺構単位石器群における珪質頁岩の平均組成率は1%に満たない。

ホルンフェルス (Ho) F (4点57%)、MF (1点14%)、P (1点14%)、PT (1点14%)により構成される。ほとんどの資料が単独個体と考えられ、主に素材獲得段階までの状態において搬入がなされたと考えられる。分布は6住、7住、10住、土坑196石器群において1点が認められた。遺構単位石器群におけるホルンフェルスの平均組成率は1%である。

粘板岩 (Si) RF (1点100%)により構成される。10住石器群の705は単独個体と考えられ、ほぼ完製品に近い状態において搬入がなされたと考えられる。遺構単位石器群における粘板岩の平均組成率は1%に満たない。

輝緑凝灰岩 (Sc) PA (1点100%)により構成される。8住石器群の661は単独個体と考えられ、ほぼ完製品に近い状態において搬入がなされたと考えられる。遺構単位石器群における輝緑凝灰岩の平均組成率は1%に満たない。

緑色凝灰岩 (GTu) PA (5点100%)により構成される。すべて単独個体と考えられ、完成品に近い状態において搬入

がなされたと考えられる。分布は5住(373、374、375)、6住(504)、10住(687)石器群において1～3点が認められた。遺構単位石器群における緑色凝灰岩の平均組成率は1%に満たない。含有鉱物、鉱物構成、色調等からさらに、1) 373、375、504、2) 374、3) 687に細分し得る。373、375、504は従来閃緑岩と呼ばれていたものに相当するものであるが、本項では緑色凝灰岩に含めた。

凝灰岩(Tu) F(2点40%) PT(3点60%)により構成される。すべて単独個体と考えられ、素材獲得段階までの状態において搬入がなされたと考えられる。分布は6住、8住石器群において1～2点が認められた。遺構単位石器群における凝灰岩の平均組成率は1%に満たない。

安山岩(An) PⅡ(1点100%)により構成される。建6石器群の833は単独個体と考えられ、ほぼ完製品に近い状態において搬入がなされたと考えられる。遺構単位石器群における安山岩の平均組成率は1%に満たない。

礫質砂岩(CSa) F(2点6%)、MF(1点3%)、PⅠ(6点17%)、PⅢ(3点9%)、PC(9点26%)、Ws(3点9%)、P(5点14%)、PT(6点17%)より構成される。粗質石材素材研磨・敲打系石器素材の主体をなす石材であると同時に、粗質石材素材剥離系石器の素材ともなっている。素材獲得から二次加工、さらには使用に至るまでの段階の石器がすべて認められるが、ほとんどの個体が単独個体と考えられる。住居址、平地建物址、建物址単位石器群においては15単位中8単位において1～6点が認められた。土坑176、土坑215、礫集中、溝3石器群においては、1～2点が認められた。遺構単位石器群における礫質砂岩の平均組成率は6%である。

砂岩(Sa) C(3点7%)、F(2点5%)、MF(2点5%)、PⅠ(3点7%)、PⅡ(1点2%)、PⅢ(1点2%)、PC(10点24%)、Ws(2点5%)、P(2点5%)、PT(15点37%)より構成される。粗質石材素材研磨・敲打系石器の主体をなす石材であると同時に、粗質石材素材剥離系石器の素材ともなっている。素材獲得から二次加工、さらには使用に至るまでの段階の石器がすべて認められるが、ほとんどの個体が単独個体と考えられる。分布は住居址、平地建物址、建物址単位石器群においては15単位中9単位において1～18点が認められ、土坑175石器群においても1点が認められた。遺構単位石器群における砂岩の平均組成率は2%である。

珪岩(Qu) P(1点100%)により構成される。12住石器群において単独個体1点が認められたのみであり、原石状態で搬入がなされたと考えられる。遺構単位石器群における珪岩の平均組成率は1%に満たない。

碧玉(Ja) Ac(1点100%)により構成される。8住石器群の669は単独個体と考えられ、完製品に近い状態において搬入がなされたと考えられる。遺構単位石器群における碧玉の平均組成率は1%に満たない。

## v) 石器群概観

ここでは、遺構種単位石器群の概観を行った後、各遺構単位石器群の石器・石材組成の概観を行う<sup>(註9)</sup>。

**住居址単位石器群** 3住、4住、5住、6住、7住、8住、9住、10住、12住石器群のうち、3住(接合率2%)、4住、5住(接合率6%)、6住(接合率5%)、7住(接合率11%)、12住(接合率14%)石器群については総点数96～162点(黒耀石推定母岩数30～50母岩)、8住(接合率9%)、9住、10住石器群については総点数5～47点(黒耀石推定母岩数4～20母岩)と、総点数及び黒耀石推定母岩保有数には二つのピークがあるものと考えられる。住居址単位石器群のうち最も総点数の少なかった9住石器群を除いては、石器組成、石材組成共にほぼ等質的といえよう。

**平地建物址単位石器群** 平建1、平建2石器群は総点数がそれぞれ3点、6点(黒耀石推定母岩数2母岩、3母岩)と、住居址単位石器群とは格差が認められる。いずれの石器群においても同一母岩が認められないか、もしくはあったとしても数点に止まる。

**建物址単位石器群** 建3、建6、建7、建8石器群は総点数2～15点(黒耀石推定母岩数2～10母岩)と、住居址単位石器群とは格差が認められるが、平地建物址単位石器群に近い規模を持つ。しかしながら建3石器群は総点数こそ少ないものの、接合資料(接合率13%)や遺構間に分布する母岩が認められ、石器組成も住居址単位石器群と等質的である。建7石器群(接合率11%)においては遺構間接合資料(接合資料24)が確認されている。

**土坑・ピット単位石器群** 土坑138、土坑175、土坑189石器群を除いては総点数1～7点(黒耀石推定母岩数1～5母岩)と、平地建物址単位石器群及び建物址単位石器群とほぼ同等の規模を持つものである。しかし石器組成においては粗質石材素材敲打・研磨系石器がほとんど組成されず、石材組成においてもほとんどが黒耀石のみで組成されること等から異質なものと考えられる。土坑175石器群は土坑単位石器群としては総点数も26点と多く(黒耀石推定母岩数10母岩、接合率4%)、ピット217石器群構成個体との遺構間接合資料も認められた(接合資料41)。石器組成及び石材組成において、粗質石材素材研磨・敲打系石器を組成すること及び、土坑単位石器群としては豊富な石器組成を持つことから異質なものと考えられる。土坑138石器群は石材組成においては土坑・ピット単位石器群と等質的といえるものの、総点数は5住、6住石器群に次いで多い133点(黒耀石推定母岩数25母岩、接合率30%)が認められ、接合資料15例、総接合個体数40点が確認された。石器組成においてもFP未製品(870)を除いては素材獲得段階の石器のみが認められ、C(2点2%)、F(20点15%)、Ch(3点2%)、FP(1点1%)、RF(16点12%)、MF(89点67%)、PT(2点2%)

という異常な組成を示す。870は土坑138石器群内においては遺構内単独個体であるが、素材獲得作業が集中的に行われたと考えられる本石器群中における、所謂定形的石器未製品単独個体の存在は示唆的といえよう。土坑189石器群は総点数68点（黒耀石推定母岩数14母岩、接合率22%）が認められ、接合資料6例、総接合個体数15点が確認された。C（2点3%）、F（6点9%）、BC（2点3%）、RF（3点4%）、MF（54点79%）、PT（1点1%）、すべて黒耀石製という異常な石器・石材組成を示すが、土坑138石器群とは等質的である。所謂定形的石器は全く認められず、素材獲得作業が集中的に行われたものと考えられる。

その他の遺構単位石器群 柱列1、黒耀石集中、礫集中、溝3石器群等が認められたが、柱列1、黒耀石集中石器群（黒耀石推定母岩数10母岩、接合率17%）についてはいずれも単独で存在したものとは考え難く、建物址単位石器群や平地建物址単位石器群を構成していた可能性が高いものと考えられる。

遺構外出土石器群 原位置より遊離していると考えられるものとして、谷状地形、グリット、A区検、B区検、2住石器群等がある。これらの石器群については遺構単位石器群に準ずるものとして一括して扱った。谷状地形、2住石器群は後世の攪乱を受けたものと考えられる。グリット（接合率2%）、A区検、B区検石器群の資料的価値はそれぞれほぼ同等であり、建物址、平地建物址単位石器群に帰属する可能性が高いものと考えられる。

#### vi) 接合資料概観

ここでは境窪石器群において確認し得た接合資料48例について、出土遺構、石材、器種構成について概観すると同時に、その接合状況から石器製作作業を可能な限り復元してみたい<sup>(註10)</sup>。

接合資料1（第45図）：本資料は3住より出土した黒耀石製RF（11）とMF（70）より構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を上設打面として12時方向より11が剥離された後、同一作業面上において約180度の打面転移がなされ、下設打面より6時方向から70が剥離されたと考えられる。11は主要剥離面形成後通常剥離により二次加工が施されている。3住石器群内において同一母岩と考えられる剥片類、石核も数点認められた。

接合資料2（第45図）：本資料は5住より出土した黒耀石製F（230）とMF（310）により構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面として固定し、230が剥離された後欠落剥片が1枚以上剥離され、同一作業面上において230主要剥離軸とほぼ平行して310が剥離されたと考えられる。5住石器群内において同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料3（第45図）：本資料は5住より出土した黒耀石製RF（246）とMF（327）により構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面として固定し、246が剥離された後欠落剥片が1枚以上剥離され、同一作業面上において246主要剥離軸と平行して327が剥離されたと考えられる。246背面中央の稜線上には石核調整とも二次加工とも考えられる、剥離痕のヒンジ部を打面とした打点の残る剥離痕が3枚以上認められる。5住石器群内において同一母岩と考えられる資料も数点認められた。

接合資料4（第45図）：本資料は5住より出土した黒耀石製C（263）とMF（264）により構成される剥離面接合資料である。しかし接合面においてポジネガが反転しており、接合図腹面は同一の主要剥離面であることから、このポジティブ面の形成に伴う折れ面接合とも考えられる。5住石器群内において同一母岩と考えられる資料も数点認められる。

接合資料5（第45図）：本資料は5住より出土した黒耀石製C（270）とC（335）より構成される剥離面接合資料である。接合図背面、腹面、打面等には礫面が残ることから素材は板状礫であったと考えられる。接合図上端の礫面を打面とした剥片剥離中か、もしくは意図的な分割により、接合面である所謂垂直割れに近い剥離面が形成されたと考えられる。270、335は分離後、それぞれ接合面を打面とした単軸的通常剥離が進行したと考えられる。5住石器群内において同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料6（第45図）：本資料は5住より出土した黒耀石製MF（365）とMF（366）により構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面とし、365が剥離された後欠落剥片が4枚以上剥離され、同一作業面上において365主要剥離軸とほぼ平行して366が剥離されたと考えられる。365腹面末端には礫面を打面とした下設打面が認められる。364は同一母岩と考えられる資料であるが、背面構成から両下設打面より単軸的な剥片剥離がなされたと考えられる。5住石器群内において同一母岩と考えられる資料は364以外にも数点認められたが、石核は認められなかった。

接合資料7（第46図）：本資料は6住より出土した黒耀石製RF（380）とC（408）により構成される剥離面接合資料である。接合面は分割面とも考え得る8～9時方向からの大きな剥離面であり、380背面中央部がポジ面、408腹面下半がネガ面である。分離後380は分割面を作業面として剥片剥離が進行し、408は打面を礫面に転移して剥片剥離が進行したと考えられる。6住石器群内において同一母岩と考えられる資料として、SC（403）、剥片類2点、石核1点等が認められた。

接合資料8（第46図）：本資料は6住より出土した黒耀石製MF（435）とMF（437）により構成される折れ面接合資料である。435、437腹面の同一主要剥離面形成時に所謂垂直割れにより半折したと考えられる。435、437ともに接合面である折れ面を切る微細な剥離痕が認められる。6住石器群内においては同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料9 (第42・56図)：本資料は6住より出土した砂岩製PT(495)と、12住より出土したC(715)より構成される遺構間接合資料である。接合面は摂理面に沿った剥離面に近い剥落面であり、しかも境窪石器群内において495、715の2点のみより構成される母岩であるため、時間的な前後関係等は不明である。

接合資料10 (第56図)：本資料は6住より出土した砂岩製PT3点(500、499、498)より構成される折れ面接合資料である。三次元座標記録のなされた個体であるが、詳細な出土状況は不明である。接合面及び接合図腹面上端は、すべて打点の残る剥離面に近い折れ面であり、500、499等と同様の礫片が存在した可能性が高いが未回収である。

接合資料11 (第46図)：本資料は7住より出土した黒耀石製F3点(595、597、598)及びC2点(580、593)より構成される接合資料である。580と593が折れ面で接合する以外はすべて剥離面で接合する。595、597、598の順に剥離が進行したが、598剥離時に石核580、593は半折したと考えられる。593には折れ面を切る剥離痕が認められることから、折損後もさらに剥片剥離が進行したと考えられる。595背面左下にも礫面が認められることから棒状の礫を素材にしていたと考えられる。593Cの腹面には595、597、598の主要剥離軸とは180度逆方向からの剥離痕が残ることから、両設打面より単軸的な剥片剥離がなされたと考えられる。7住石器群内において同一母岩と考えられる資料として剥片類数点が認められた。

接合資料12 (第46図)：本資料は7住より出土した黒耀石製MF2点(581、579)及びF1点(576)より構成される剥離面接合資料である。礫面は581の打面、576の末端に僅かに残るのみであり、石核の素材や原礫の形状は不明である。12時方向より581が剥離された後、同一作業面上において約180度打面転移がなされ6時方向より576が剥離され、さらに約90度打面転移がなされ3時方向より579が剥離されたと考えられ、求心的な剥片剥離工程を示すと考えられる。僅か3点の接合資料であるが欠落剥片は多い。7住石器群内において同一母岩と考えられる資料として剥片類数点が認められた。

接合資料13 (第46図)：本資料は7住より出土した黒耀石製F2点(587、600)、MS1点(584)及びC1点(575)より構成される接合資料である。587、600の打面である礫面を見てもわかるように、不整形な礫を素材とし、打面、作業面共に固定して剥片剥離を行っている。587剥離以前に原礫は575と584に分離し、575の平坦な礫面に打面が固定され587が剥離された後、600背面に認められる剥離痕に対応する4枚以上の欠落剥片が剥離され、600が剥離されたと考えられる。575は600剥離後も剥片剥離が進行するが、それらに対応する剥片は回収されていない。7住石器群内において同一母岩と考えられる資料は認められなかった。なお、584、575との接合関係は図版作成後に確認されたため、実測図は掲載し得なかった。

接合資料14 (第47図)：本資料は8住より出土した黒耀石製F(649)とC(651)より構成される接合資料である。接合面は剥離面に近い剥落面である。接合図背面下部には剥落方向と180度逆の剥離軸を持つ剥離痕が少なくとも3枚以上認められる。同一母岩と考えられる資料は8住石器群内においては認められなかった。

接合資料15：本資料は8住より出土した凝灰岩製F2点(664、665)より構成される折れ面接合資料である。両面調整石器の調整剥片が主要剥離面形成時に所謂垂直割れにより半折したものと考えられる。2点のみより構成される母岩と考えられることから、遺跡外からの搬入品と考えられる。諸般の制約から実測図は掲載し得なかった。

接合資料16 (第47図)：本資料は12住より出土した黒耀石製RF2点(756、709)及びF1点(777)より構成される接合資料である。756剥離後、同一作業面上において約90度打面転移がなされ、9～12時方向よりかなりの欠落剥片が剥離された後709、777が剥離されたと考えられる。756は主要剥離面形成後打面部に二次加工が施されたと考えられる。709、777は同一主要剥離面を持つ1枚の剥片が中央部より折損もしくは折り取りがなされたもので、709には接合面である折れ面を切る剥離痕が認められることから、分離後さらに二次加工が施されたと考えられる。12住石器群内において同一母岩と考えられる石核2点が認められた。

接合資料17 (第47図)：本資料は12住より出土した黒耀石製MF(711)とMF(731)より構成される剥離面接合資料である。複数の剥離痕を打面とし、打面作業面共に固定しつつ、711が剥離された後連続して731が剥離されたと考えられる。12住石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料18のほか剥片類数点が認められたが、石核は認められなかった。

接合資料18 (第47図)：本資料は12住より出土した黒耀石製F(817)とF(721)により構成される剥離面接合資料である。721は腹面にポジ面が2面認められ、腹面下部のポジ面は腹面上部からの剥離痕複数枚に切られ、それらの剥離痕はさらに腹面上部の12時方向からの剥離面に切られる。すなわち、721は第1次主要剥離面(腹面下部のポジ面)形成後剥片素材石核として単軸的な剥片剥離が進行し、腹面上部のポジ面は剥離が抜けきらずにポジネガが反転し、同時に817主要剥離面が形成されたと考えられる。721背面右側面には2面のポジ面が認められる。12住石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料17のほか剥片類数点が認められたが、石核は認められなかった。

接合資料19 (第47図)：本資料は12住より出土した黒耀石製MF(755)とMF(729)により構成される剥離面接合資料である。755、729の背面には同一剥離痕も認められることから、まず729主要剥離軸に沿った剥片剥離がなされ、

同一作業面上において約 180 度打面転移がなされた後 6 時方向から 755 が剥離され、さらに同一作業面上において約 180 度打面転移がなされ 12 時方向から 729 が連続して剥離されたと考えられる。12 住石器群内において同一母岩と考えられる資料として剥片類数点が認められたが、石核は認められなかった。

接合資料 20 (第 47 図)：本資料は 12 住より出土した黒耀石製 MF (770) と RF (758) により構成される剥離面接合資料である。接合図打面、側面、背面、腹面に礫面が認められることから、大まかな原礫の形状が復元し得る資料である。770 背面の剥離痕、主要剥離面、758 背面剥離痕は同一礫面を打面とした 12 時方向からの剥離であり、同一作業面上において約 90 度打面転移がなされた後、3 時方向より 758 が剥離されたと考えられる。12 住石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料 22 のほか剥片類数点が認められたが、石核は認められなかった。

接合資料 21 (第 47 図)：本資料は 12 住より出土した黒耀石製 F (813) と RF (767) により構成される剥離面接合資料である。接合図打面、端面、両側面に礫面が認められることから、石核の形状の一端を復元し得る資料である。同一打面、同一作業面上において 813 を 12 時方向より剥離後連続して、813 主要剥離軸に平行して 767 が剥離されたと考えられる。767 は主要剥離面形成後、背面末端部に主要剥離面側から細かな二次加工が施される。12 住石器群内において同一母岩と考えられる資料として剥片類数点が認められたが、石核は認められなかった。

接合資料 22 (第 47 図)：本資料は 12 住より出土した黒耀石製 F (787) と MF (779) により構成される剥離面接合資料である。同一の礫面を打面とし、787 を 12 時方向より剥離した後、連続して 787 主要剥離軸に平行して 779 が剥離されたと考えられる。787 は上半部が欠損するが未回収である。787 の背面はほぼすべて礫面であり、本資料の含まれる母岩の剥片剥離初期段階を示していると考えられる。12 住石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料 20 のほか剥片類数点が認められたが、石核は認められなかった。

接合資料 23 (第 48 図)：本資料は建 3 ピット 5 より出土した黒耀石製 F (832) と、最短でも約 2 m を隔てた建 3 ピット 4 より出土した C (820) により構成される剥離面接合資料であり、遺構内遺構間接合ともいえる。832、820 の打面、下端面、腹面、820 の左側面には礫面が認められることから立方体状の原礫を素材としたと考えられる。大まかには 2 面の礫面打面、1 面の剥離痕打面より、4 面の作業面に対し剥片剥離がなされたと考えられる。832 は主要剥離面形成時に所謂垂直割れが生じたため半折したものと考えられる。建 3 石器群内においては同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料 24 (第 42・48 図)：本資料は S 12 W 66 グリットより出土した黒耀石製 MF (1178) と、最短でも約 16 m を隔てた建 7 ピット 3 より出土した MF (1163) により構成される剥離面接合資料である。ポジティブな剥離面を打面とし、1178 剥離後連続して、1178 主要剥離軸に平行して 1163 が剥離されたと考えられる。1178 は下部折損もしくは折り取り後、折れ面に対し微細剥離が施されたと考えられる。なお S 12 W 66 グリットはほぼピット群 1 の位置に相当し、1178 は何らかの構造物に伴う遺物であった可能性が高い。そのような意味で本資料は遺構間接合資料とも評価し得る。建 7 石器群内においては同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料 25 (第 48 図)：本資料は黒耀石集中地点より出土した黒耀石製 C (1164) と C (1165) により構成される折れ面接合資料である。接合図背面、打面、端面、側面、腹面には礫面が認められ、不整形かつ起伏に富んだ原礫を素材としたものと考えられる。両資料の背面には同一剥離痕が複数認められ、それらの剥離痕形成時に半折したものと考えられる。1164 には接合面である折れ面を切る剥離痕が背面右側面に認められることから、分離後もさらに剥片剥離が進行したと考えられる。黒耀石集中石器群において同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料 26 (第 48 図)：本資料は土坑 138 より出土した黒耀石製 MF 6 点 (871、872、873、874、875、876) より構成される剥離面接合資料である。873 背面及び、875 背面左半から上半に認められる剥離痕に対応する剥片はすべて欠落することから、ほぼ平坦な礫面を打面として固定し、作業面も固定して、871→872→欠落剥片 2 枚以上→873→874→欠落剥片 6 枚以上→875→876 の順に単軸的剥片剥離が進行したと考えられる。接合図背面、打面、左右両側面、下端面には礫面が認められることから、本母岩の剥片剥離工程の初期段階を示すものと考えられる。同一母岩と考えられる資料は、土坑 138 石器群内においてのみ剥片類 2 点が認められたが、これらは 876 以降に剥離された欠落剥片数枚を介して本接合資料と接合する可能性が高い。

接合資料 27 (第 49 図)：本資料は土坑 138 より出土した黒耀石製 MF (880) と MF (881) により構成される剥離面接合資料である。複剥離面打面より 880 が剥離され、連続して、同一打面より 880 主要剥離軸に平行して 881 が剥離されたと考えられる。打面は複数の剥離痕により構成されるものの、調整打面とは考え難く、頻繁な打面及び作業面転移によるものと考えておきたい。880、881 主要剥離軸だけを見れば単軸的であるが、接合図背面構成からは求心的な剥離工程の一端に過ぎないといえる。土坑 138 石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料 28 のほかにも剥片類十数点が認められたが、かなりの剥離を隔てたものと考えられる。

接合資料 28 (第 49 図)：本資料は土坑 138 より出土した黒耀石製 MF (882) と MF (883) により構成される剥離面接合資料である。大きな一枚の剥離痕を打面とし、882 が剥離され、883 背面中央の剥離痕に対応する欠落剥片が 1 枚

剥離され、同一打面より882主要剥離軸に平行して883が剥離されたと考えられる。打面は大きな一枚の剥離痕により構成されるものの、調整打面とは考えがたく、頻繁な打面及び作業面転移によるものと考えておきたい。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として接合資料27のほかにも剥片類十数点が認められたが、かなりの剥離を隔てたものと考えられる。

接合資料29(第49図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF(892)とMF(891)により構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面とし、892が剥離され、891背面左の剥離痕に対応する欠落剥片が1枚剥離された後、同一打面より892主要剥離軸に平行して891が剥離されたと考えられる。892下端面及び右側面には礫面が認められる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料30(第49図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF(893)とRF(894)により構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面とし、893が剥離され、894背面左の剥離痕に対応する欠落剥片が2枚以上剥離された後、同一打面より893主要剥離軸に平行して894が剥離されたと考えられる。893下端面及び右側面には礫面が認められる。894は主要剥離面形成後、背面右側縁下半に微細だが連続した調整が施されたと考えられる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として接合資料33、34のほか剥片類十数点が認められた。

接合資料31(第49図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF(896)、MF(895)及びMF(897)より構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面として固定し、896→895→897の順に連続して、単軸的に剥片剥離が進行したと考えられる。897上半は古折したものと考えられるが未回収である。接合図打面、下端面、左側面には礫面が認められることから、素材は立方体状の礫であったと考えられる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料32のほか数点が認められた。

接合資料32(第50図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製RF(898)とMF(899)により構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面として固定し、898剥離後、899背面右側縁に認められる複数の剥離痕に対応する欠落剥片が剥離され、898主要剥離軸にほぼ平行して899が剥離されたと考えられる。接合図打面、下端面、左側面には礫面が認められることから、素材は立方体状の礫であったと考えられる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料31のほか数点が認められた。

接合資料33(第50図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF(900)とMF(901)により構成される剥離面接合資料である。やや起伏のある礫面を打面として固定し、900剥離後連続して900主要剥離軸にほぼ平行して901が剥離されたと考えられる。900背面下半には、900背面上半の剥離痕2枚、900主要剥離面、及び901主要剥離の剥離軸とは異なる3～4時方向からの剥離痕が3枚認められ、その間に約90度の打面転移がなされたと考えられる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料30、34のほか剥片類十数点が認められた。

接合資料34(第50図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF(902)とMF(903)により構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面として固定し、902剥離後、903背面左側縁上半に認められる剥離痕に対応する欠落剥片2枚以上が剥離され、902主要剥離軸にほぼ平行して903が剥離されたと考えられる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料30、33のほか剥片類十数点が認められた。

接合資料35(第50図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF(904)とMF(905)により構成される剥離面接合資料である。904は上半部欠損(未回収)、905は点状打面を呈するため、打面構成は不明である。904剥離後、905背面上縁に認められる剥離痕に対応する欠落剥片1枚以上が剥離され、その後905が剥離されたと考えられる。904主要剥離軸のみが1～2時方向より剥離されたほかは、ほぼ単軸的な剥片剥離が進行したものと考えられる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として剥片類数点が認められた。

接合資料36(第50図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製F(906)とMF3点(907、908、909)より構成される剥離面接合資料である。接合図背面左側面の礫面を打面、下端を作業面として906、907が9～10時方向よりほぼ連続して剥離され、接合図背面へ作業面転移がなされた後、908背面中央、909背面右に認められる同一剥離痕に対応する欠落剥片1枚以上が剥離され、908が12～1時方向より剥離され、続いて12時方向より909が剥離されたと考えられる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として剥片類十数点が認められた。

接合資料37(第50図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF(915)とRF(916)により構成される折れ面接合資料である。915、916腹面である同一主要剥離面形成時に所謂垂直割れにより半折したと考えられる。分離後916背面左側縁下半には、接合面である折れ面を切る二次加工が施される。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料38(第51図)：本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF(918)とMF(917)により構成される剥離面接合資料である。平坦な礫面を打面として固定し、918剥離後、917背面上半に認められる剥離痕に対応する欠落剥片7枚以上が剥離され、打面調整が1枚以上なされた後、918主要剥離軸にほぼ平行して917が剥離されたと考えられる。918、917左側面には、かなり打点が遠いと考えられる同一剥離痕が認められた。土坑138石器群内において同一母岩

と考えられる資料として、接合資料39、石核(954)のほか剥片類数点が認められた。

接合資料39(第51図):本資料は土坑138より出土した黒耀石製RF(919)とMF2点(920、921)より構成される剥離面接合資料である。接合図上端面の2枚の剥離痕及び礫面を打面として固定し、919剥離後、920背面左側縁上半に認められる剥離痕に対応する欠落剥片1枚以上が剥離され、919主要剥離軸にほぼ平行して920が剥離され、921背面左右両側縁及び上部に認められる剥離痕に対応する欠落剥片8枚以上が剥離された後、920主要剥離軸に平行して921が剥離されたと考えられる。919左側面にはかなり打点が遠いと考えられる6~7時方向からの剥離痕、920背面下部には8~9時方向からの剥離痕、921背面右側縁には2~3時方向からの剥離痕が認められるほかは、ほぼ単軸的な剥片剥離が進行したと考えられる。921打面左半は礫面としたが剥離痕である可能性もある。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として、接合資料38、石核(954)のほか剥片類数点が認められた。

接合資料40(第51図):本資料は土坑138より出土した黒耀石製MF4点(922、923、924、925)により構成される剥離面接合資料である。接合図背面上端の平坦な礫面を打面として固定し、922剥離後、923背面左側縁に認められる剥離痕に対応する欠落剥片1枚以上が10~11時方向より剥離され、922主要剥離軸にほぼ平行して923が剥離され、924下端、925背面下半に認められる剥離痕に対応する欠落剥片10枚以上が2~3時方向より剥離された後、924背面左に認められる剥離痕に対応する欠落剥片1枚以上が11~12時方向より剥離され、923主要剥離軸に平行して924が剥離された後、連続して925が剥離されたと考えられる。欠落する剥片を除いては、ほぼ単軸的な剥片剥離が進行したと考えられる。土坑138石器群内において同一母岩と考えられる資料として、剥片類数点が認められた。

接合資料41(第42・51図):本資料はピット217より出土した黒耀石製MF(1135)と、ピット217に切られると考えられる土坑175より出土したMF(1025)により構成される剥離面接合資料である。接合図上面の複数の剥離痕及び礫面を打面として固定し、1135剥離後約90度の作業面転移がなされ、1135主要剥離軸に平行して1025が剥離されたと考えられる。打面は複数の剥離痕及び礫面より構成されるが、打面調整としてではなく、頻繁な打面及び作業面転移によるものと考えられる。ピット217、土坑175両石器群内においては同一母岩と考えられる資料は認められなかった。切り合う遺構間においてではあるが、一応は遺構間接合資料である。

接合資料42(第52図):本資料は土坑189より出土した黒耀石製MF(1054)とRF(1055)より構成される剥離面接合資料である。複数の剥離痕及び平坦な礫面を打面として固定し、1054剥離後、1055背面左半に認められる剥離痕に対応する欠落剥片6枚以上が剥離され、1054主要剥離軸にほぼ平行して1055が剥離されたと考えられる。1055は主要剥離面形成後背面上縁右半に二次加工が施されたと考えられる。土坑189石器群内において同一母岩と考えられる資料として、剥片類数点が認められた。

接合資料43(第52図):本資料は土坑189より出土した黒耀石製MF4点(1069、1070、1071、1072)により構成される剥離面接合資料である。接合図背面上端の平坦な礫面を打面として固定し、1069剥離後、1070、1071背面右側縁に認められる同一剥離痕に対応する欠落剥片1枚以上が12~1時方向より剥離され、1069主要剥離軸にほぼ平行して連続して1070、1071が剥離された後、1072背面左に認められる剥離痕に対応する欠落剥片8枚以上が12時方向より剥離され、1072が剥離されたと考えられる。接合状態において打面、下端面及び両側面に礫面が認められることから、立方体状もしくは長方体状の原礫を素材としていたと考えられる。土坑189石器群内において同一母岩と考えられる資料として、数枚の欠落剥片を介して1069背面に接合する可能性の高い接合資料44のほか、接合資料45、剥片類数点が認められた。

接合資料44(第52図):本資料は土坑189より出土した黒耀石製MF(1073)とMF(1074)より構成される剥離面接合資料である。やや起伏のある礫面を打面として固定し、1073剥離後、1074背面中央に認められる剥離痕に対応する欠落剥片3枚以上が剥離され、1073主要剥離軸にほぼ平行して1074が剥離されたと考えられる。土坑189石器群内において同一母岩と考えられる資料として、数枚の欠落剥片を介して1074腹面に接合する可能性の高い接合資料43のほか、接合資料45、剥片類数点が認められた。

接合資料45(第52図):本資料は土坑189より出土した黒耀石製MF(1075)とMF(1076)より構成される折れ面接合資料である。1075、1076腹面である同一主要剥離面形成時に所謂垂直割れにより半折したと考えられる。1075腹面左側縁下半には、微細な剥離痕がやや連続して認められる。土坑189石器群内において同一母岩と考えられる資料として接合資料43、44のほか、剥片類数点が認められた。

接合資料46(第52図):本資料は土坑189より出土した黒耀石製MF(1079)とMF(1080)より構成される剥離面接合資料である。平坦な2面の礫面を打面として固定し、1079剥離後連続して、1079主要剥離軸にほぼ平行して1080が剥離されたと考えられる。接合図背面構成から、同一作業面上において6時方向→3時方向→12時方向と、求心的な剥片剥離が進行したと考えられる。土坑189石器群内において同一母岩と考えられる資料として剥片類数点のほか、剥片を素材とした両極石核が認められた。

接合資料47(第52図):本資料は土坑189より出土した黒耀石製RF(1100)とMF2点(1098、1099)により構成される剥離面接合資料である。やや起伏のある礫面を打面として固定し、1100剥離後、1098背面右側縁中央及び1099



背面右側縁中央に認められる同一剥離痕に対応する欠落剥片1枚以上が剥離され、1100 主要剥離軸にはほぼ平行して連続して1098、1099が剥離されたと考えられる。1100は主要剥離面形成後折損もしくは折り取りがなされ、折れ面にはさらに二次加工が通常剥離及び微細剥離により施されたと考えられる。1099打面及び下端面にはほぼ平行する礫面が認められることから、原礫形状の一端を想定し得る。土坑189石器群内において同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

接合資料48：本資料はS51 W81グリットより出土した礫質砂岩製PC(1321)とPC(1322)により構成される折れ面接合資料である。諸般の制約から図示し得なかったものである。5住出土Ws(377)同様の板状の礫を素材とし、両面の平坦面には光沢を帯びるほど研磨がなされる。ほぼ全周を接合資料10(500)に見られたのと同様な剥離面に近い折れ面が覆う。境窪石器群内において同一母岩と考えられる資料は認められなかった。

## vii) 小 結

ここでは境窪遺跡において仮設した石器製作技術システムを、予察を多分に交えつつ概観し、本項のまとめとしたい。

緻密石材素材剥離系石器において主体をなす黒耀石石器群については、主として住居址単位石器群及び一部の特殊な土坑単位石器群においてライフサイクルのほぼすべての段階に対応すると考えられる母岩が認められ、素材獲得段階の接合資料44例を確認し得た。僅かに遺構間接合資料(接合資料24、接合資料41)も認められたが、その多くは遺構単位石器群内に収束する傾向が見られることから、各遺構内においてある程度まとまった素材獲得作業が行われたものと考えられる。しかし遺構単位石器群内において原礫の状態にまで復元し得る母岩別資料は確認されなかったことから、母岩は単一の遺構内において消費し尽くされることは少なく、遺構から遺構へ、そしてまたさらに別の遺構へとといったように搬入及び搬出がなされていたものと考えられる。狭義の石器としてはFP、Dr、Sc、RF、MF等が認められたが、MFはそのクライテリオンに問題があったためか、石器組成において異常な高率を呈することとなった。これら狭義の石器の素材獲得技術構造においては通常剥離が主体をなし、二次加工技術構造においては押圧剥離、通常剥離、微細剥離が多用されていたようである。両極剥離は素材獲得技術構造においても二次加工技術構造においても低率を呈すると考えられ、境窪石器群においてBC、BFは狭義の石器とは関係があまり認められない独立した存在と考えられる。チャート、珪質泥岩石器群はそのほとんどが遺構単位石器群内においてのみならず、境窪石器群内においても同一母岩の認められない単独個体であったことから、遺跡外との関係を想定し得るものと考えられる。

粗質石材素材剥離系石器については、遺構単位石器群内においてのみならず境窪石器群として母岩識別・接合作業を実施したものの、そのほとんどが遺構単位石器群内においてのみならず、境窪石器群内においても同一母岩の認められない単独個体であり、接合資料は僅かに1例(接合資料15)を確認し得たのみであった。そのため素材獲得技術構造、二次加工技術構造共に不明な部分が多く残されることとなった。

粗質石材素材研磨・敲打系石器については、その素材の主体をなす砂岩、礫質砂岩が遺跡内もしくは遺跡周辺において採集可能であったのか、住居址単位石器群において一定量が認められた。しかしながら粗質石材素材剥離系石器同様、接合面の存在する個体もそのほとんどが遺構単位石器群内においてのみならず、境窪石器群内においても同一母岩の認められない単独個体であり、接合資料は遺構間接合を含むものの僅かに3例(接合資料9、10、48)を確認し得たのみであった。二次加工段階において研磨・敲打技術が多用されるため素材獲得技術構造に不明な部分が多いものの、礫形状、施調整部位及び、適用された二次加工技術の関係から石器製作技術システムの設定は可能であるとの印象を受けたが、諸般の制約もあり本項では成し得なかった。

最終的な母岩識別率は、黒耀石石器群については遺構単位石器群内という限定付きで黒耀石製個体接合率と同等、非黒耀石石器群については境窪石器群内としてもほぼ100%に達したと考えられるものの、接合率は境窪石器群として9%に止まった。現段階においては、境窪石器群を形成した石器製作主体は共時態の関係として、黒耀石石器群については主に遺構単位石器群間において、非黒耀石石器群については主に遺跡の範囲外、すなわち遺跡単位石器群間において、「関係」を持っていた可能性を指摘し得るに止まる<sup>(註11)</sup>。

### <補註>

註1 考古学的調査の本質であるとも考えられるが、1) 調査段階の遺物検出・回収精度に問題があった、2) 母岩識別・接合作業の精度が低かったため低率を示した、等の可能性は否定しきれないことをまずお断りしておきたい。平均接合個体数、接合率はそれぞれ総接合個体数/総接合資料数、総接合個体数/遺物総点数として算出している。なお諸般の制約から、実測図を提示し得た個体数は193点であり、そのうち接合資料構成個体数は111点である。

註2 基本的立場は拙稿より継承したものである(太田 1997)。

註3 資料提示及び操作の基本単位となる単位石器群の設定については、諸般の制約から、1) 調査段階において遺物の垂直出土位置の記録化が十分には行われ得なかったこと、2) 母岩識別・接合作業を十分には行い得なかったこと等から、調査段階での遺物の主要取り上げ単位である遺構単位とした。従って遺棄・廃棄論的発言は控え目にならざるを得ない。本項でいう遺構単位石器群とは、旧石器時代研究におけるブロックの概念に近いものである。しかしながらブロックが遺物分布の視覚的なまとまりから仮設され、母岩識別・接合作業等の結果から検証されるべきものであるのに対し、遺構単位石器群は遺構の内部-外部という定性的基準を持つという点で若干異なる性格を持つものと考えられる。なお本項中では遺構略号は原則として例言において示したものをを用いたが、建物址：掘立柱建物址、平地建物址：平地式建物址、黒耀石集中：黒耀石集中地点、礫集中：礫集中地点、等の略号も混在する。

- 註4 石材構成比は境窪石器群として算出した。また、分布については明確な遺構に伴って出土した遺構単位石器群に限定した。
- 註5 遺物回収率等の調査精度を第一～三者が検討するには、遺構内覆土のサンプリングを行い、所謂極微砕石片を検出するのも有効な手段の一つと考えられる(工藤 1995)。
- 註6 二上山北麓遺跡群における弥生時代槍先形石器についてはすでに、器面中央部に生じた隆起部分を除去し、器厚を減ずるための調整が存在していた可能性も提示されており(佐藤 1997)、境窪石器群の鏝形石器に認められた調整も同様の意図で行われたものと考えられる。
- 註7 御堂島 正氏による実験成果に準拠した(御堂島 1996)。
- 註8 石材構成比は境窪石器群として算出したが、分布については明確な遺構に伴って出土した遺構単位石器群に限定した。なお、石材鑑定にあたっては荒川隆史、石黒立人、伊藤淳史、加藤 学、森 義直各氏より有益な御教唆を頂いた。記して御礼申し上げます。
- 註9 母岩識別・接合作業は徹底し得なかったが、遺構単位石器群内において、接合資料の確認されている石器群については接合率を示すと同時に、遺構単位石器群内における黒耀石推定母岩数をあくまでも参考値ということで提示しておきたい。
- 註10 遺構単位石器群において同一母岩と考えられる個体が認められたものについては、剥片類(RF、MF、F、BFの総称)、石核の概数を示す。なお、両極剥離工程を示す接合資料は認められなかったため、剥離面及び剥離痕は断りのない限りすべて通常剥離によるものである。
- 註11 整理作業において母岩識別・接合作業を徹底し得なかったことにより、本石器群の資料的価値を激減させてしまったこと及び、遺跡構造論を実践することも、ましてやそのためのデータ提示すらも十分には成し得なかったことについては担当者として深く御詫び申し上げる次第である。

<主要引用・参考文献>

- 池田清彦 1997『さよならダーウィニズム』講談社
- 太田圭郁 1997「(2) 石器・石製品」『小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会
- 工藤敏久 1995「お仲間林遺跡における極微細石片の検出と分析」『お仲間林遺跡の研究』慶應義塾大学文学部 民族学・考古学研究室
- 佐藤啓介・高倉葉子・福島尚子 1996「遺物における構造と力」『第47トレンチ』京都大学考古学研究室
- 佐藤良二 1997「弥生時代槍先形石器の製作技術」『みずほ』第22号 大和弥生文化の会
- 大工原 豊 1996「(2) 石器」『考古学雑誌』第82巻第2号
- 竹岡俊樹 1996「言語の獲得」『旧石器考古学』52 旧石器文化談話会
- 野口 淳 1995「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階の遺跡群—石器製作の工程配置と連鎖の体系—」『旧石器考古学』51
- 御堂島 正 1996「ナイフ形石器の刺突実験」『神奈川考古』第32号

<凡 例>

第42図 境窪遺跡 B区遺構間接合資料分布図 本図に掲載した石器のスケールは黒耀石製のものが3/4、砂岩製のものが3/8としてある。また出土位置の三次元座標記録のなされた個体もあるが、ドットは遺構内の任意の位置に配置してある。

第6表 境窪遺跡遺構・石材単位石器組成 本表作成に当たっては、出土遺構の明確なものについては遺構単位石器群として扱い、出土遺構の明確でないものや遺構外より出土したものについては任意の抽象化を行い、遺構単位石器群に準ずる単位として扱っている。遺構名、石材、器種の略称及び略号については、例言及び本項中で示したものをを用いている。

第7表 境窪遺跡実測図掲載石器属性一覧 境窪石器群整理作業においては市販のデータベースソフトを用いて属性データベースを作成したが、紙幅の制約から実測図掲載個体に限り属性の一部を本表中に提示するに止めた。なお、属性の詳細及び略号については以下の通りである。

No. 境窪遺跡より出土した石器のすべてに対して与えたID、すなわち個体識別番号である。

出土遺構1 その石器の出土した遺構、すなわち所謂出土遺構である。

出土遺構2 原則として、その石器の出土遺構内における詳細な出土位置を示す。

器種 本文中、器種概観において触れた通りである。

素材 その石器の素材を示す。本文中で用いた略号のほかに、棒P：棒状礫、板P：板状礫、球P：球状礫、不明：不明なもの、-：観察不能なもの、等の略号を用いた。

素技 素材形成段階において適用されたと考えられる技術、すなわち素材獲得技術を示した。通常：通常剥離、両極：両極剥離、礫：礫選択、剥落：剥落、不明：不明なもの、等の略号を用いた。

二技 二次加工段階において適用されたと考えられる技術、すなわち二次加工技術を示した。基本的な略号として、通常：通常剥離、両極：両極剥離、押圧：押圧剥離、微細：微細剥離、研磨：研磨、敲打：敲打、穿孔：穿孔、なし：二次加工の認められないもの、等の略号を用いた。なお複数の二次加工技術が複合していると考えられるものについては、上述の略号の頭文字を中黒でつないで示した。

長さ・幅・厚さ 実測図を取ると仮定し方眼紙上に据え、それぞれ最大部をmm単位で小数点第1位まで計測した。

重量 311g未満の資料についてはg単位で小数点第1位まで計測し、311g以上2,500g未満の資料については2g単位、2,500g以上5,000g未満の資料については5g単位、5,000g以上の資料については500g単位で重量の計測を行った。なお0.1gに満たない資料についてはすべて0.1gと表記した。

剥離角 剥片類もしくは剥片類を素材とする石器を対象とし、主要剥離面の推定剥離軸上における、打面と主要剥離面のなす角度の最大部を計測した。

打面 剥片類もしくは剥片類を素材とする石器の打面構成を、極大まかに分類した。新折：新しい折れもしくは欠損、古折：古い折れもしくは欠損、二次：二次加工により消滅、無：無打面、点状：点状打面、線状：線状打面、礫面：礫面のみより構成されるもの、単剥：単一剥離面打面、複剥：複剥離面打面、礫単：礫面及び単一の剥離面により構成されるもの、礫複：礫面及び複数の剥離面により構成されるもの、-：理論上存在しないかもしくは観察不能なもの、等の略号を用いた。

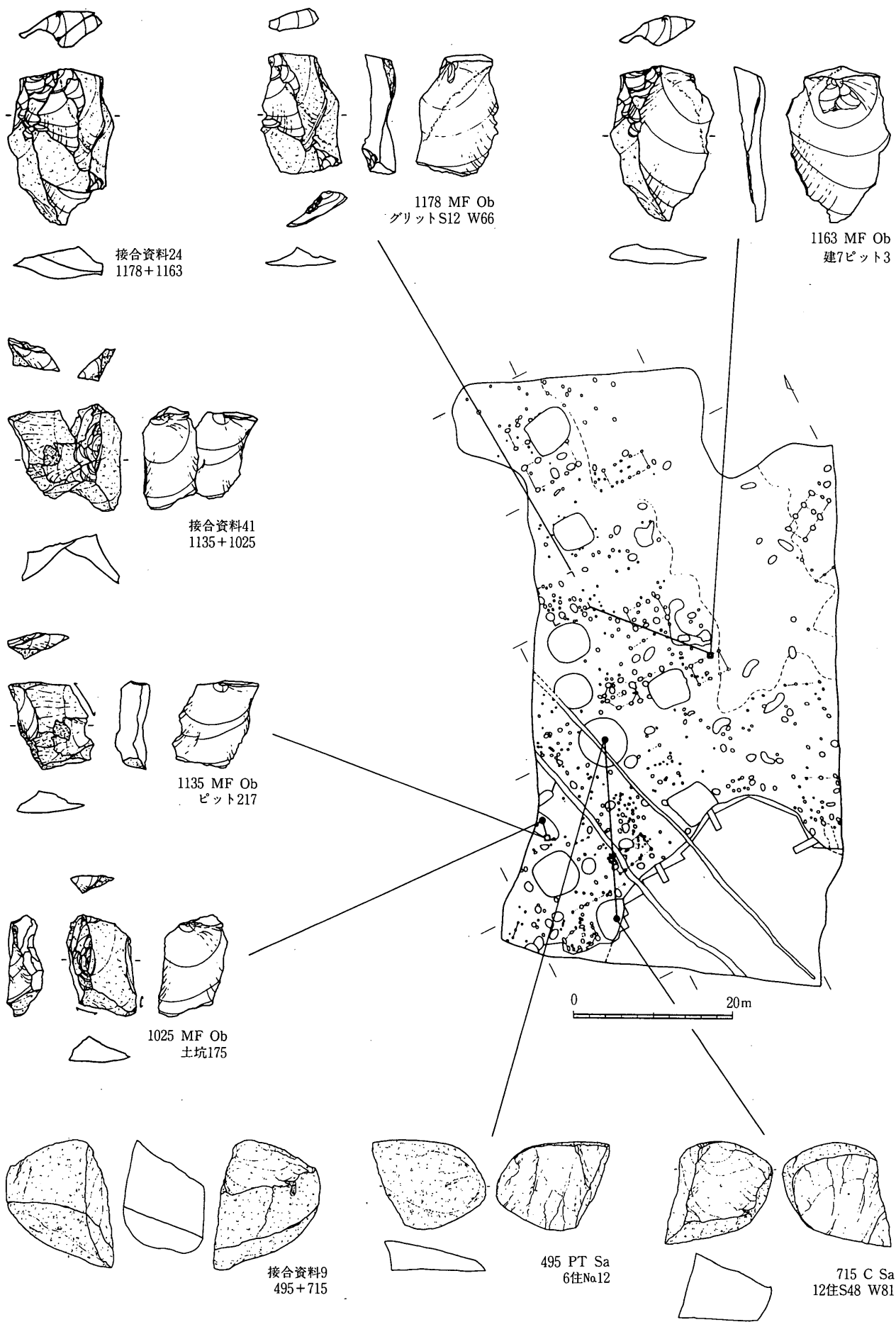
末端 剥片類もしくは剥片類を素材とする石器の主要剥離面末端形状を、極大まかに分類した。F：フェザーエンド、S：ステップエンド、H：ヒンジフラクチャー、O：ウートラパッセ、新折：新しい折れもしくは欠損、古折：古い折れもしくは欠損、二次：二次加工により消滅、-：理論上存在しないかもしくは観察不能なもの、等の略号を用いた。

礫面 実測図を取ると仮定し、礫面の残存位置を極大まかに示した。

石材 本文中、石材概観において触れた通りである。

接合資料No. 境窪遺跡より出土した接合資料のすべてに対して与えたID、すなわち接合資料識別番号である。

第43～56図 境窪遺跡 石器(43～56) 本図中においては原則として個体毎に、No.(ID)、器種略号、石材略号、出土遺構1、出土遺構2を示した。なお、略号は第7表凡例に準ずる。



第42図 境窪遺跡 B区遺構間接合資料分布図

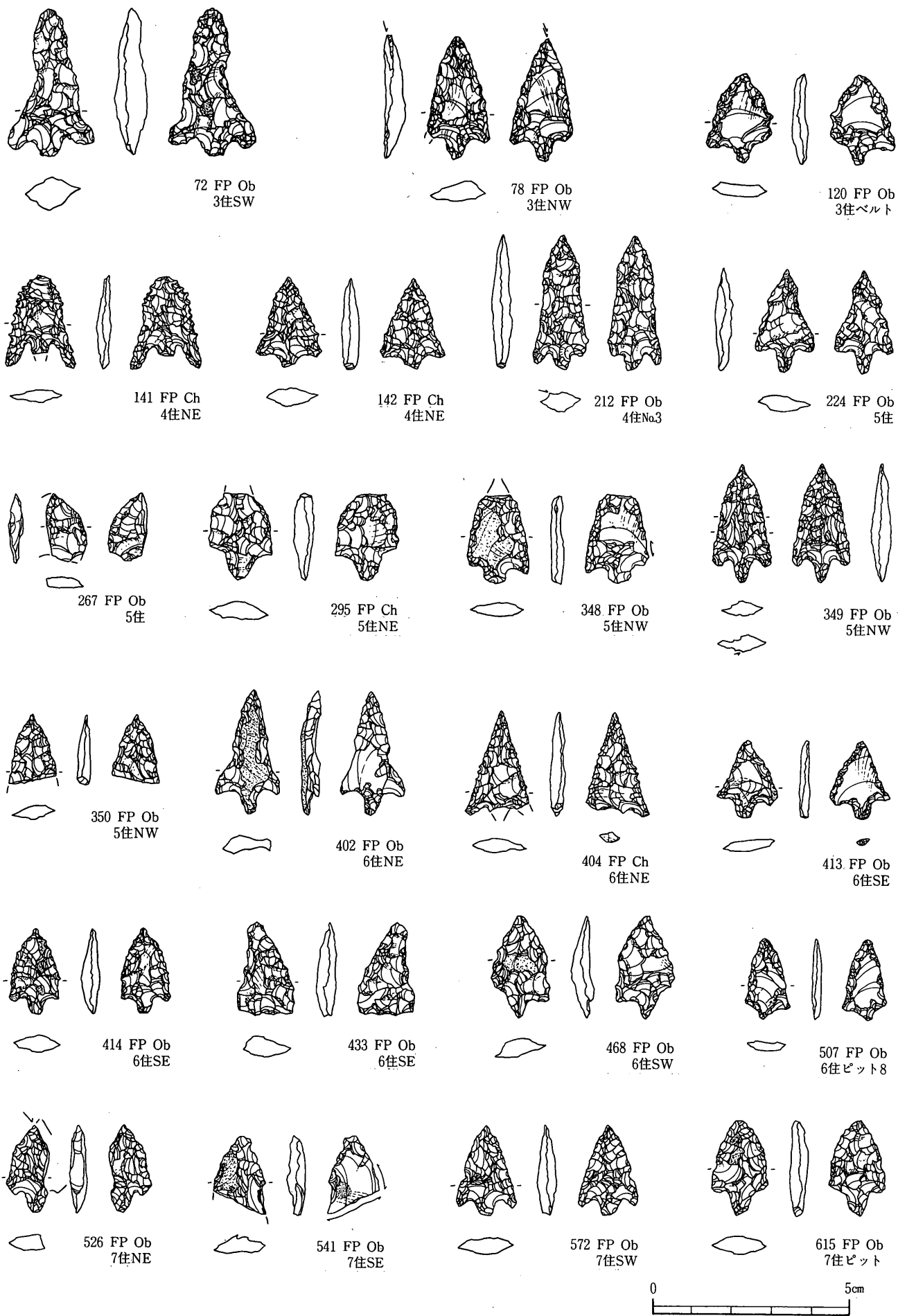




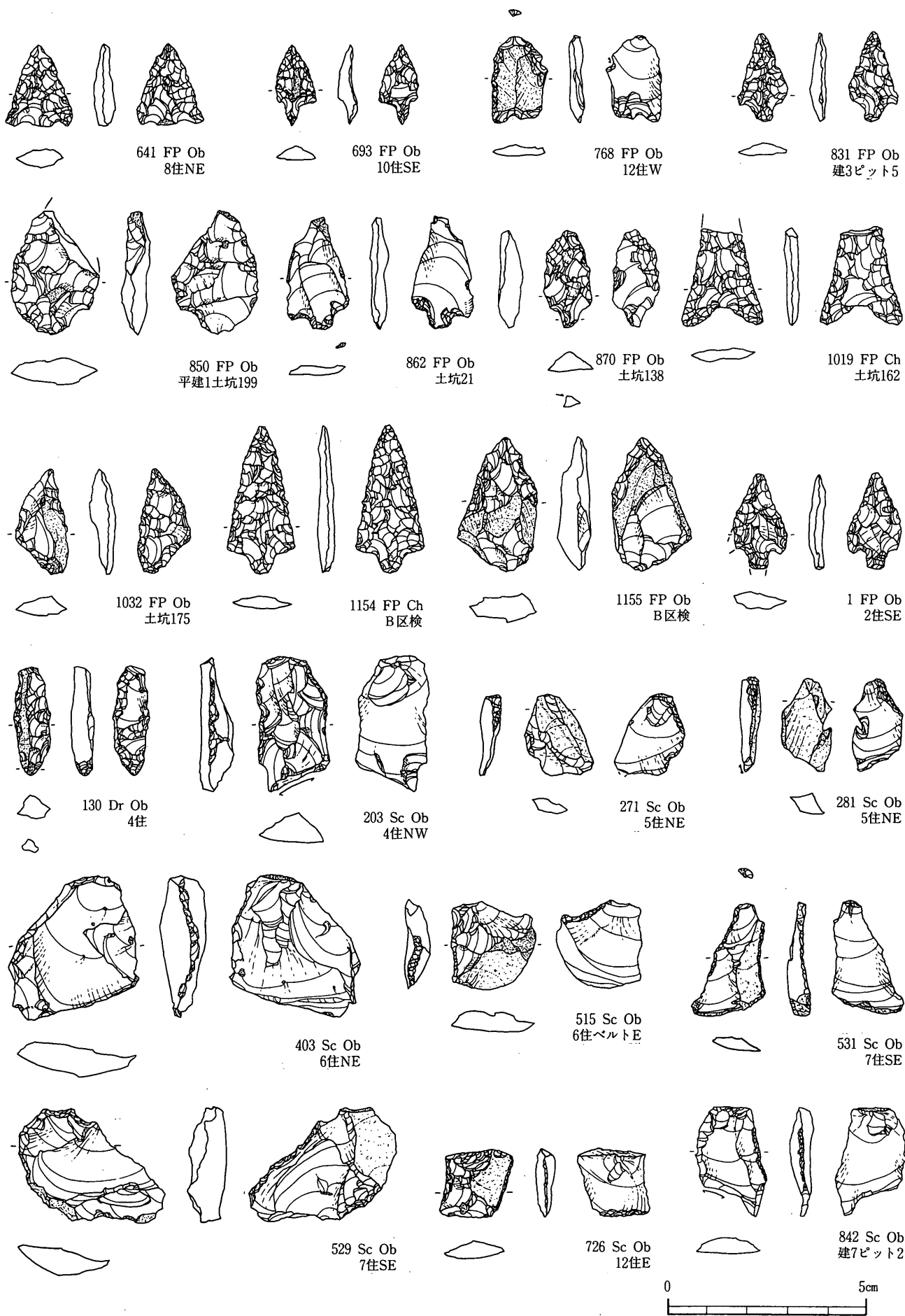




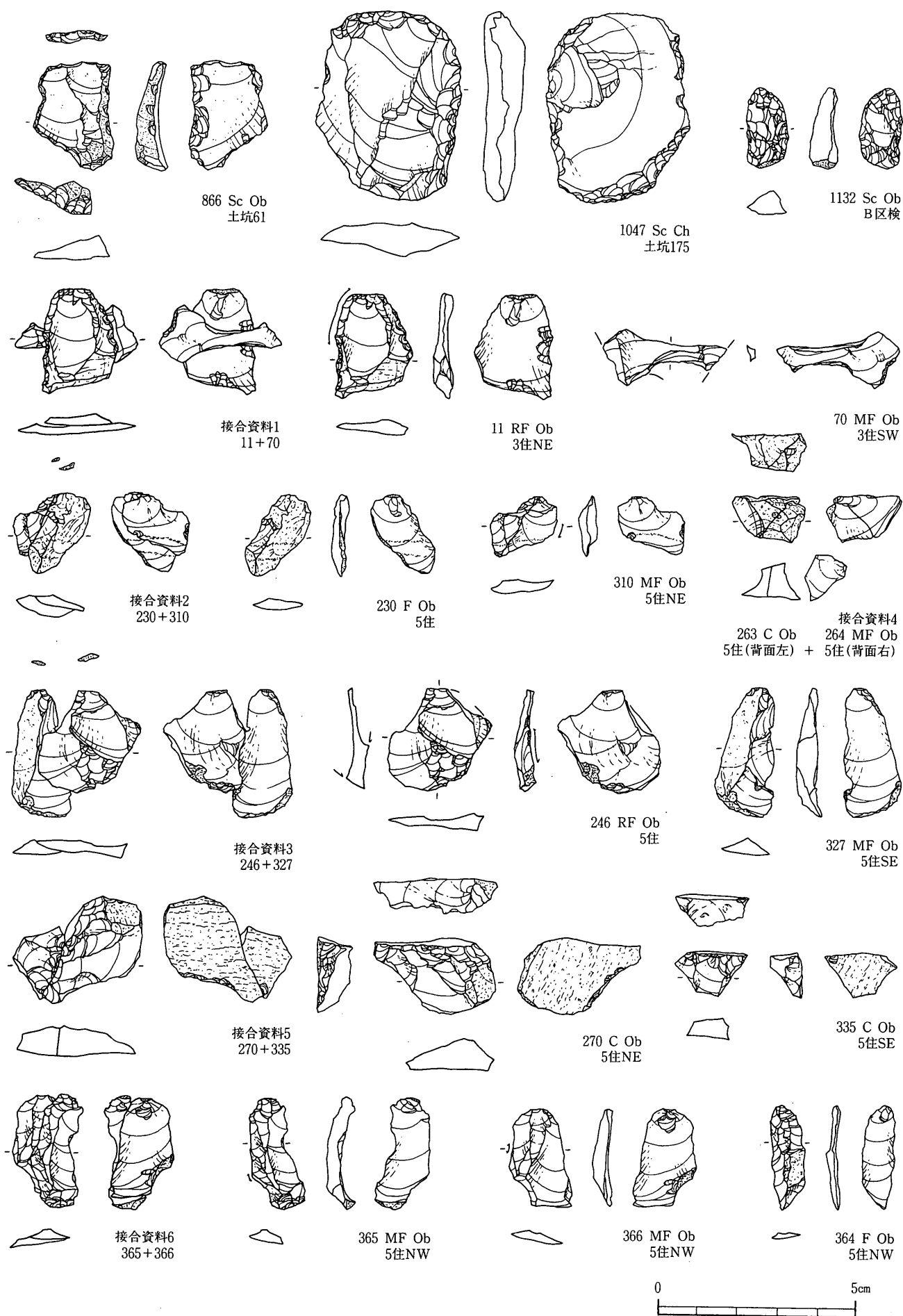




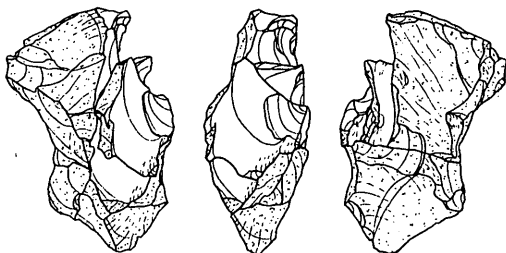
第43図 境窪遺跡 石器 (1)



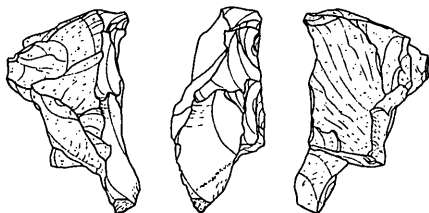
第44図 境窪遺跡 石器(2)



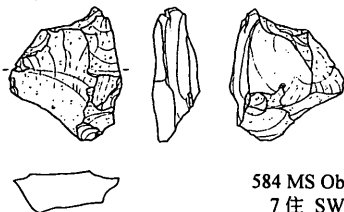
第45图 境窪遺跡 石器 (3)



接合資料 13  
584+587+600+575

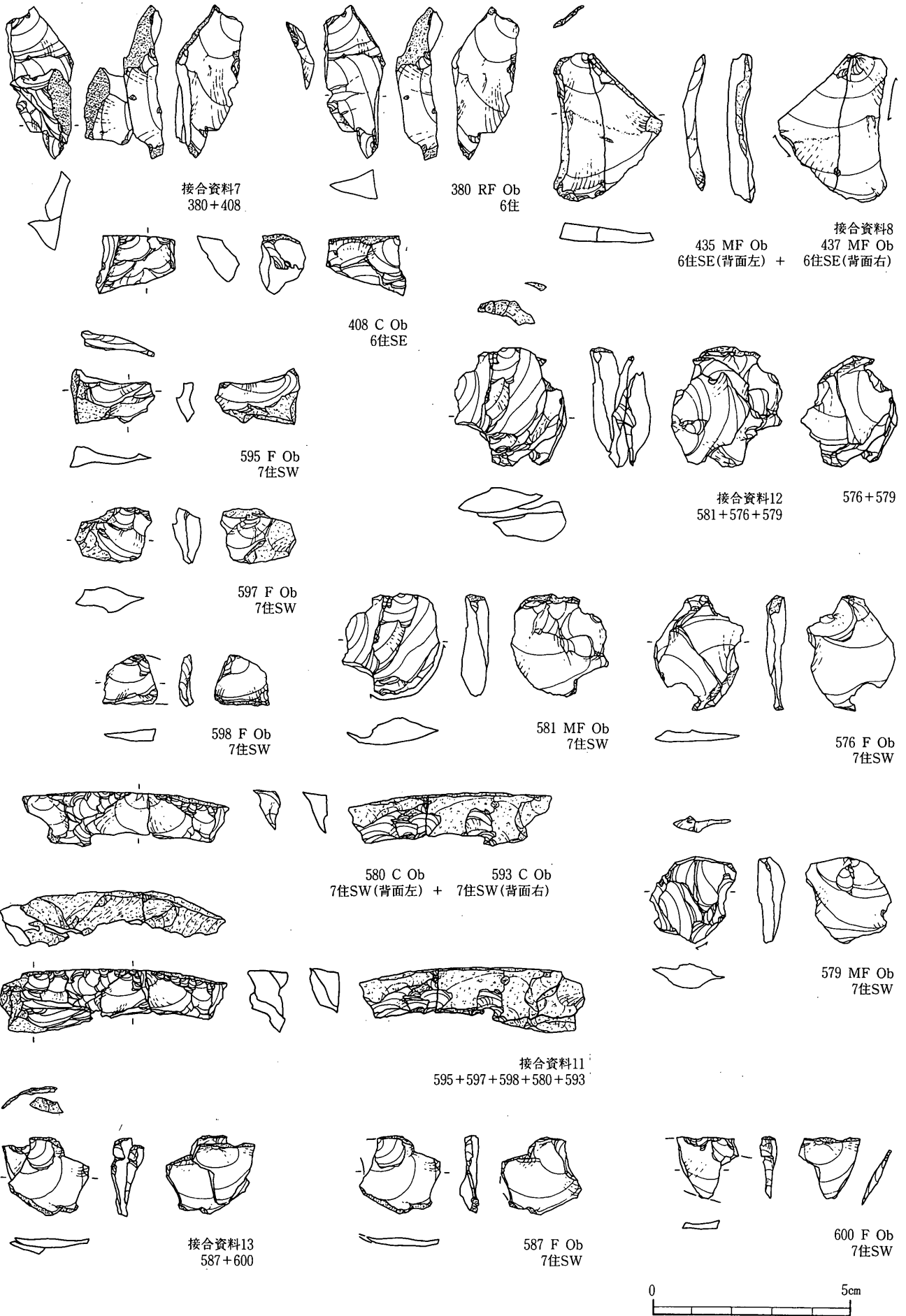


575 C Ob  
7住 SW

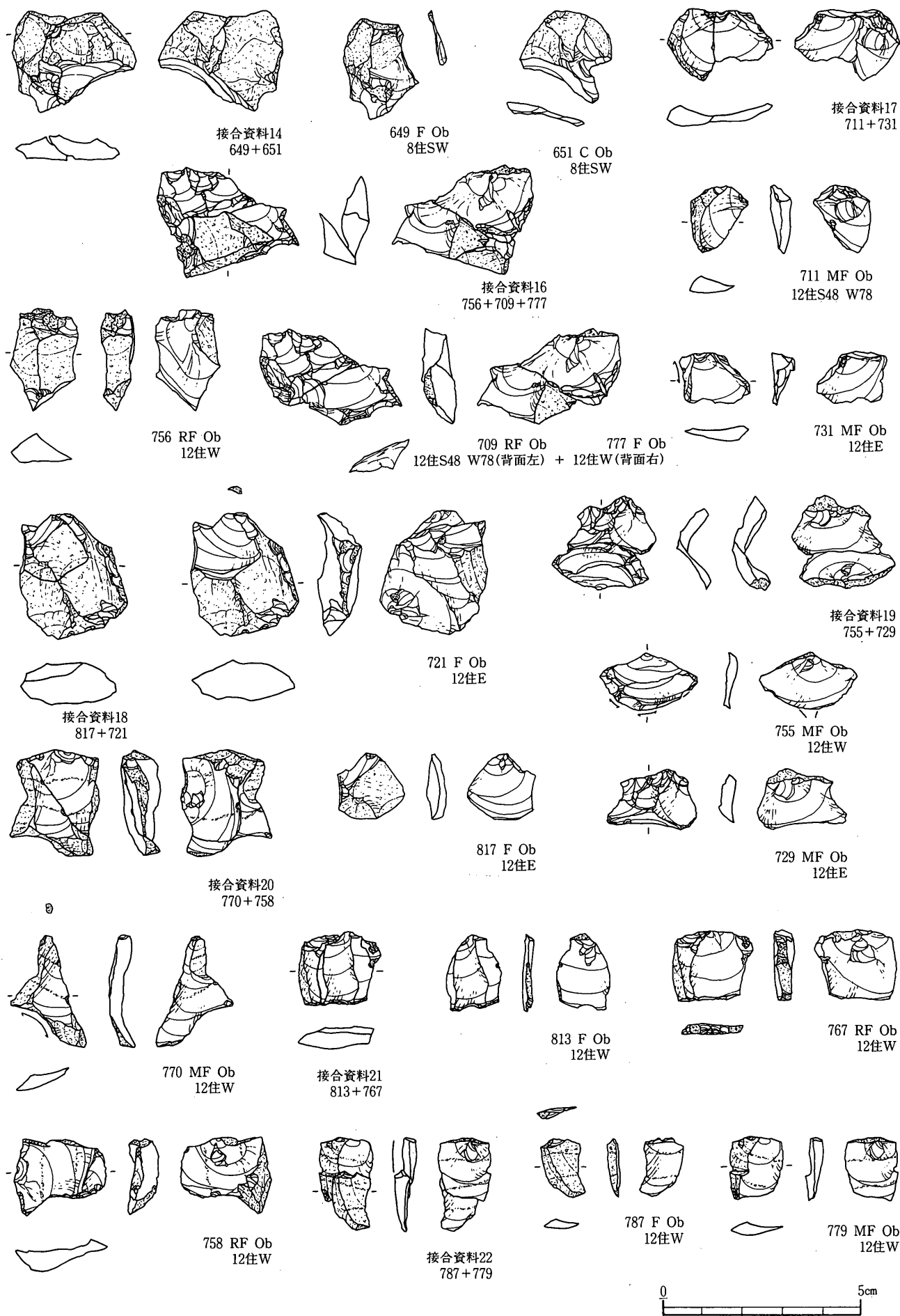


584 MS Ob  
7住 SW

境窪遺跡 石器 (追加資料) S=3/4



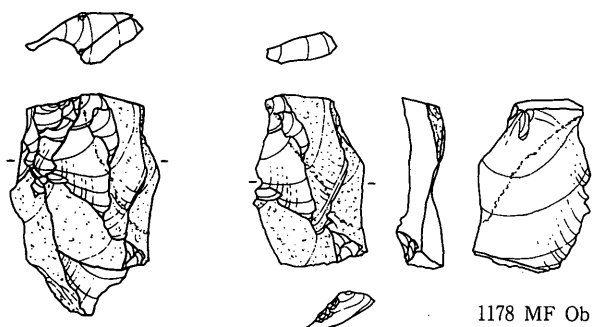
第46図 境窪遺跡 石器(4)



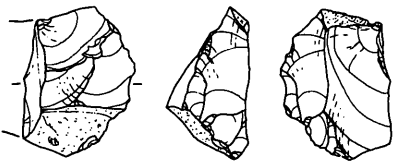
第47圖 境窪遺跡 石器(5)



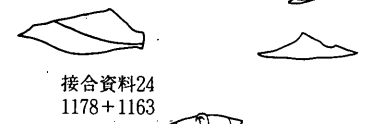
接合資料23  
832+820



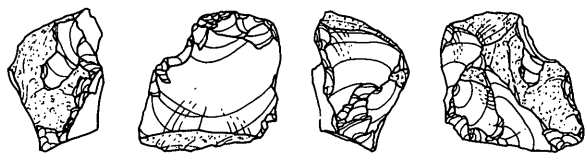
1178 MF Ob  
グリットS12 W66



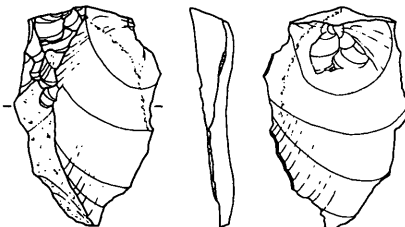
832 F Ob  
建3ピット5



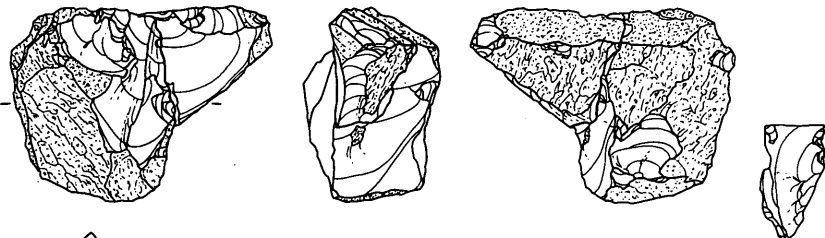
接合資料24  
1178+1163



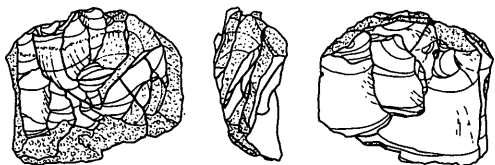
820 C Ob  
建3ピット4



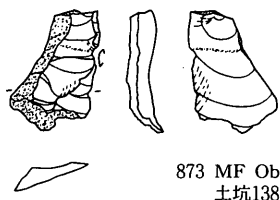
1163 MF Ob  
建7ピット3



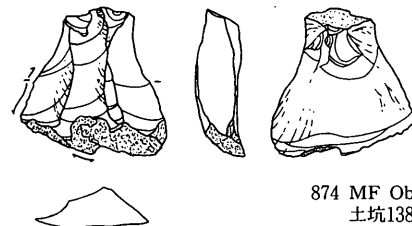
接合資料25  
1164 C Ob  
1165 C Ob  
黒耀石集中(背面右) + 黒耀石集中(背面左)



接合資料26  
871+872+873+874+875+876



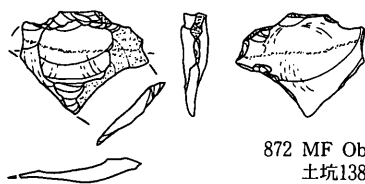
873 MF Ob  
土坑138



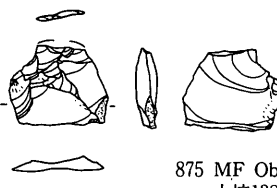
874 MF Ob  
土坑138



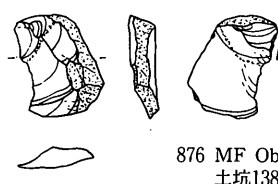
871 MF Ob  
土坑138



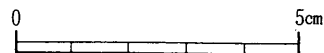
872 MF Ob  
土坑138



875 MF Ob  
土坑138

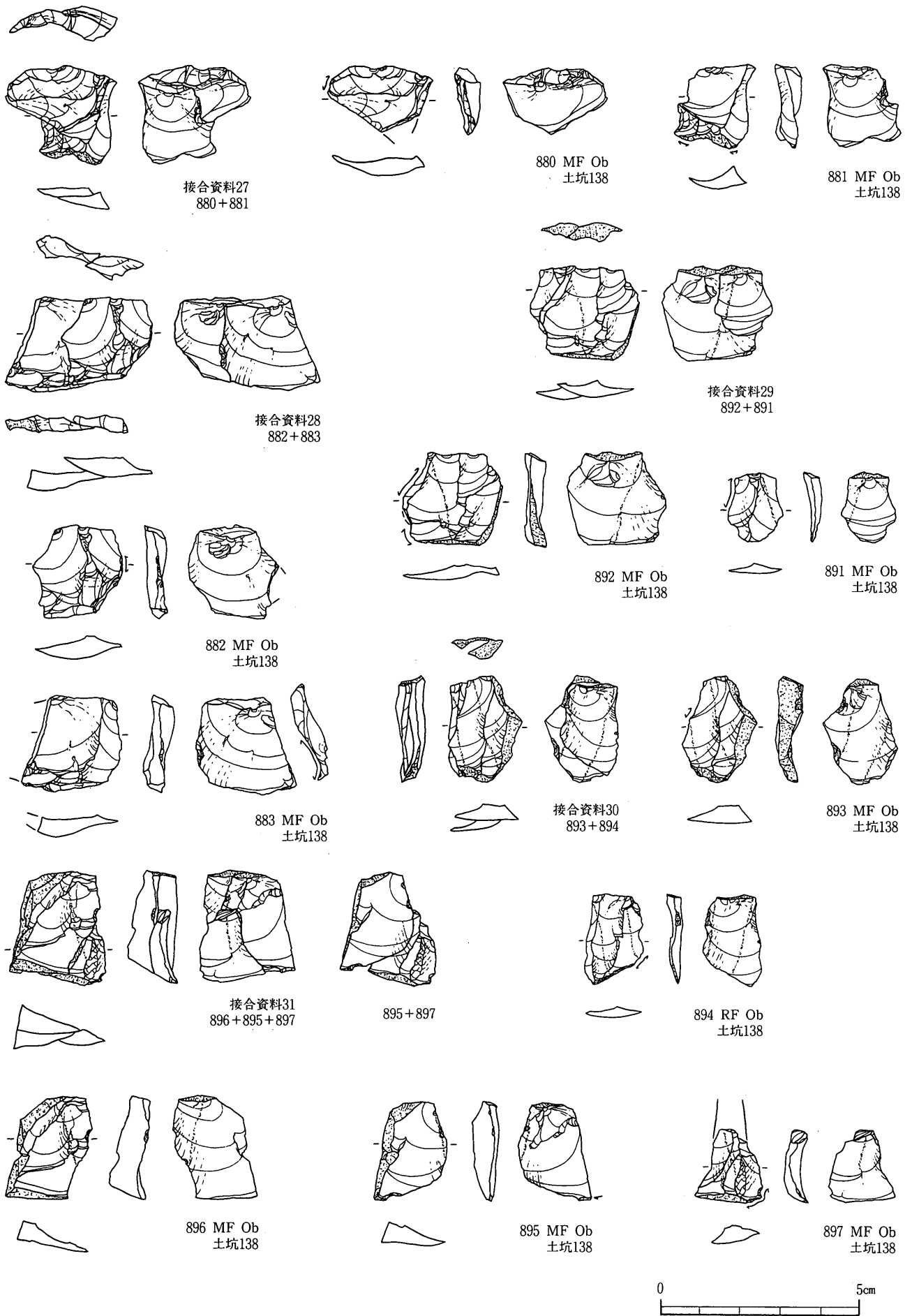


876 MF Ob  
土坑138

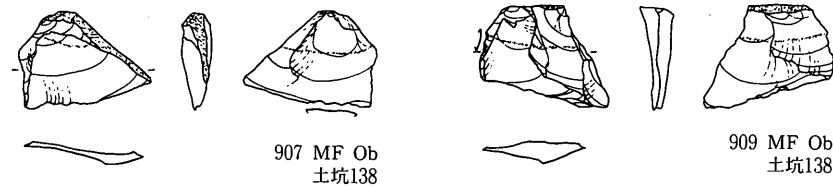
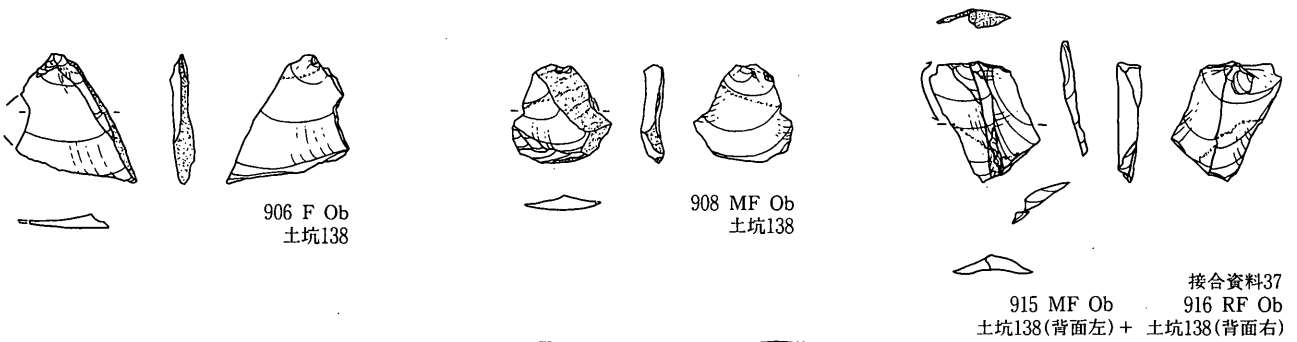
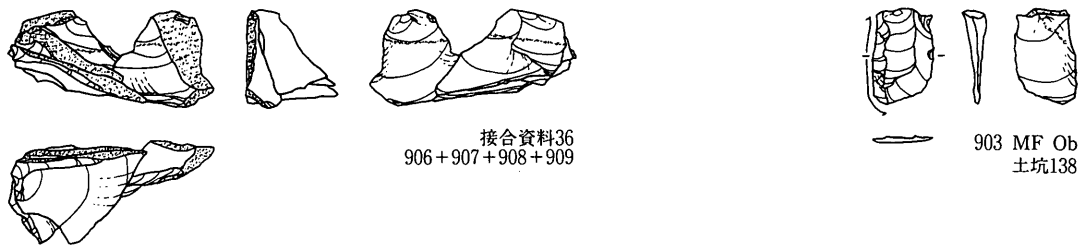
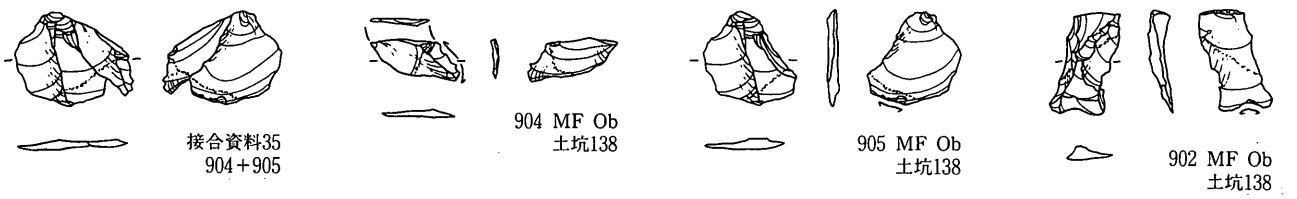
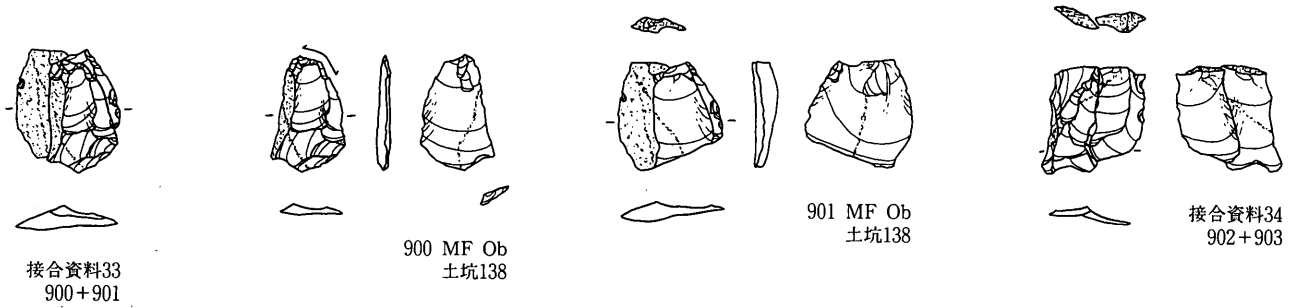
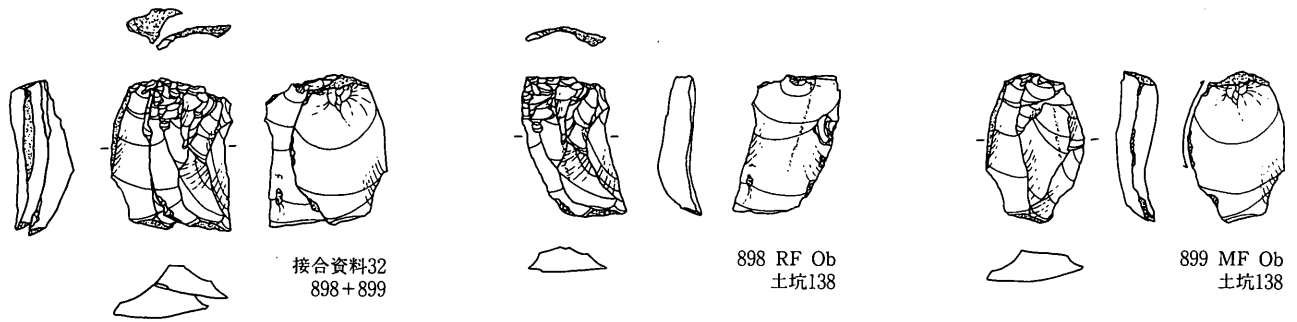


第48図 境窪遺跡 石器(6)





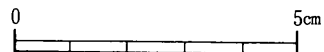
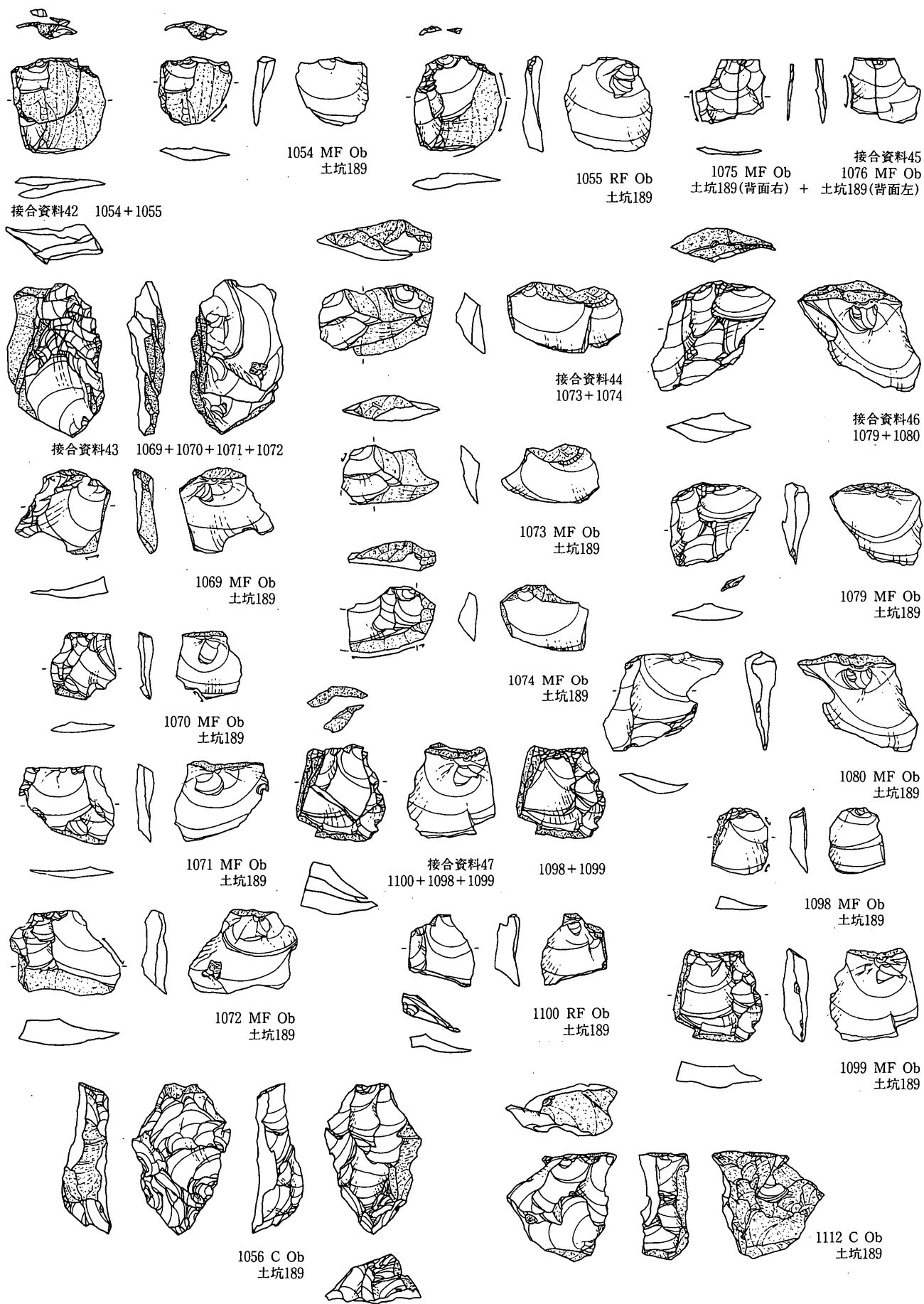
第49图 境窪遺跡 石器 (7)



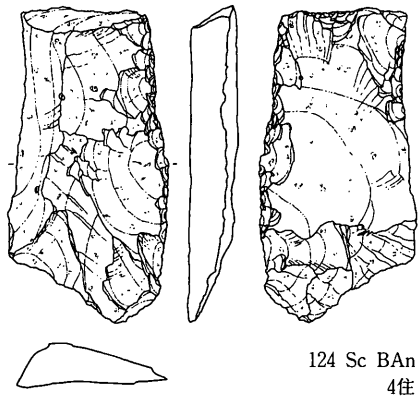
第50图 境窪遺跡 石器(8)



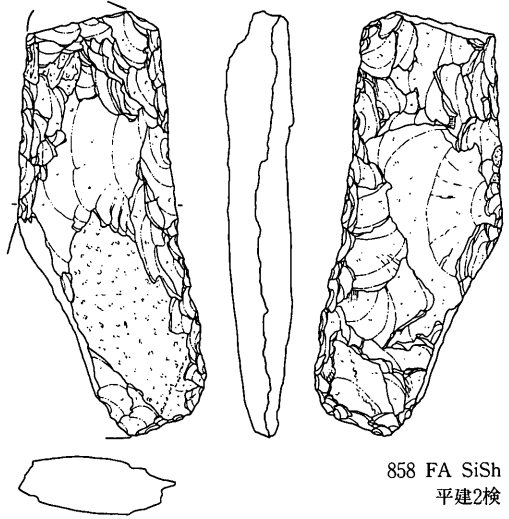
第 51 図 境窪遺跡 石器 (9)



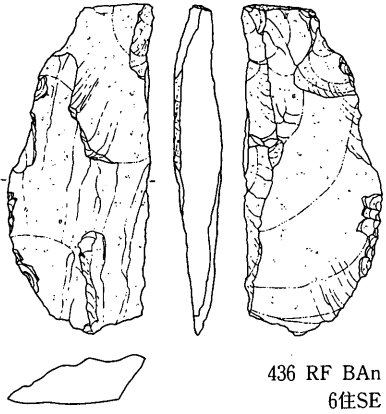
第52圖 境窪遺跡 石器 (10)



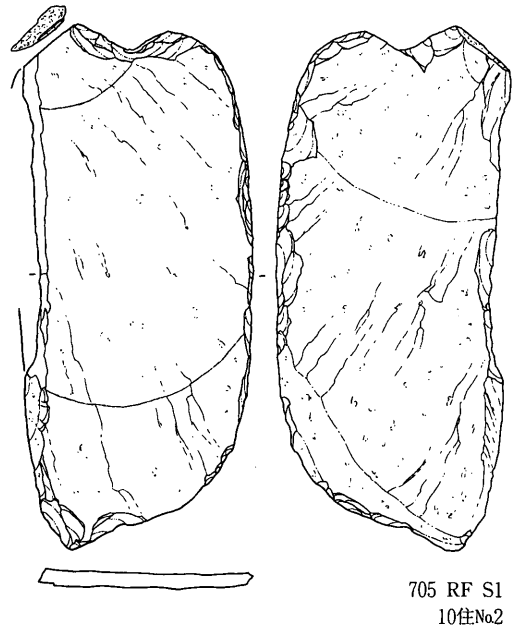
124 Sc BAn  
4住



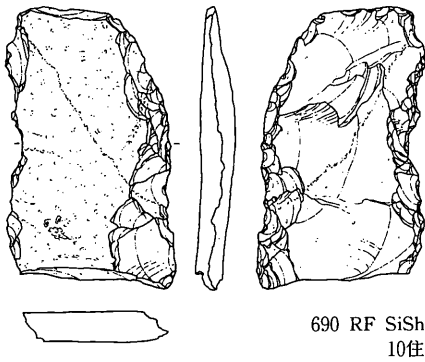
858 FA SiSh  
平建2検



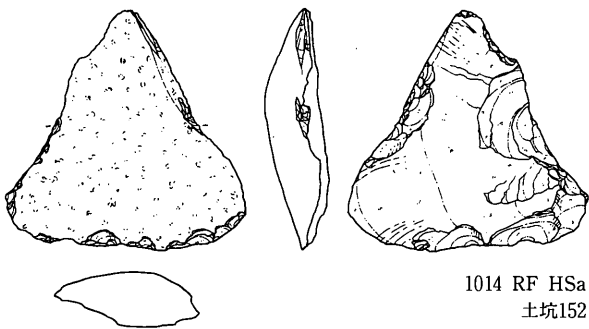
436 RF BAn  
6住SE



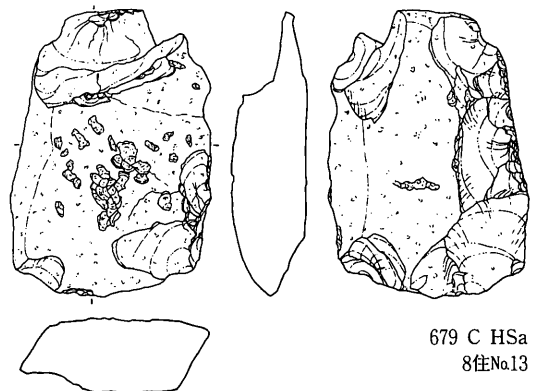
705 RF S1  
10住No.2



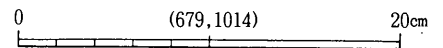
690 RF SiSh  
10住



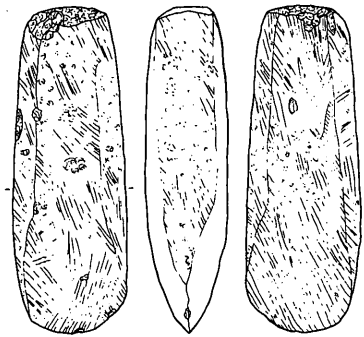
1014 RF HSa  
土坑152



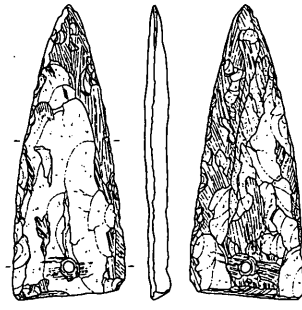
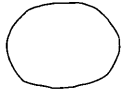
679 C HSa  
8住No.13



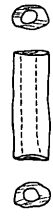
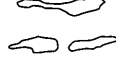
第53図 境窪遺跡 石器(11)



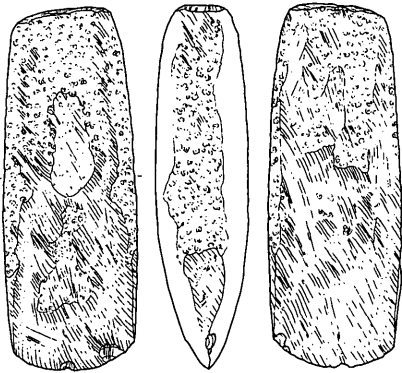
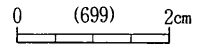
373 PA GTu  
5住No6



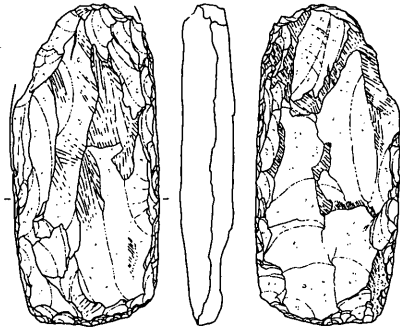
211 PP Hsa  
4住No2



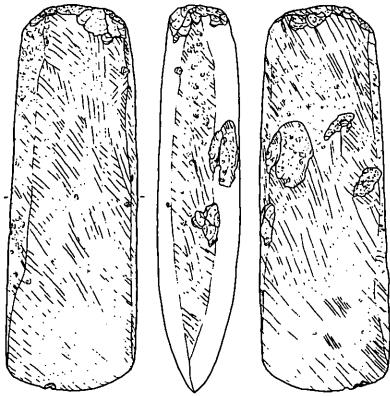
669 Ac Ja  
8住No.1



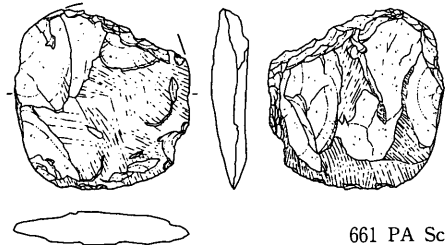
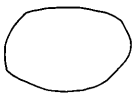
374 PA GTu  
5住No7



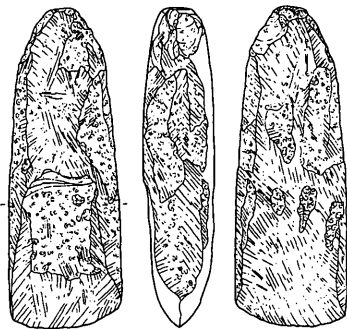
296 PA Hsa  
5住NE



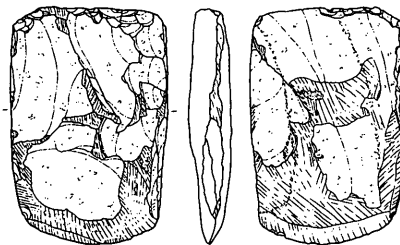
375 PA GTu  
5住No8



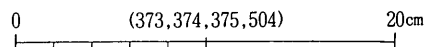
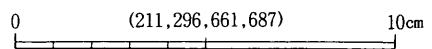
661 PA Sc  
8住SW



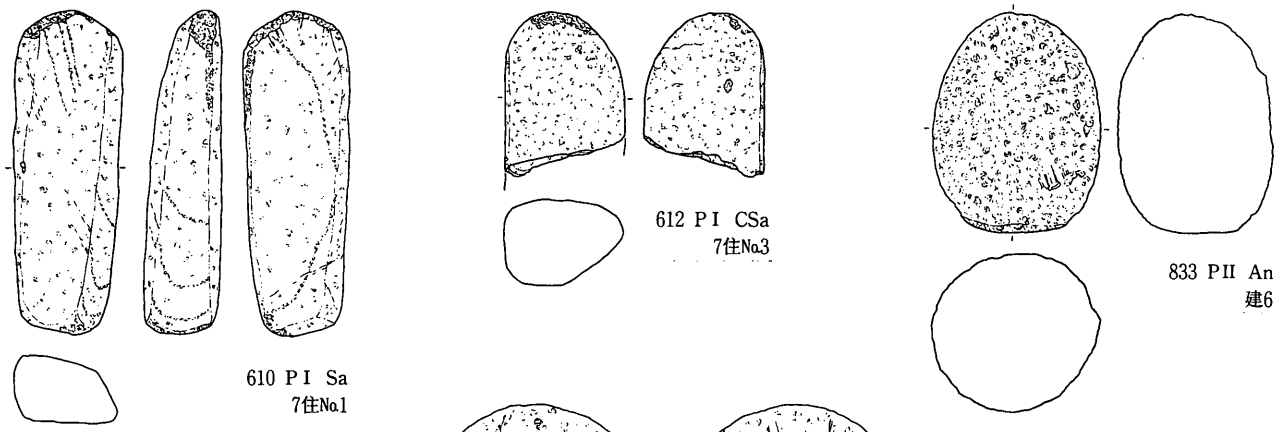
504 PA GTu  
6住No.19



687 PA GTu  
10住



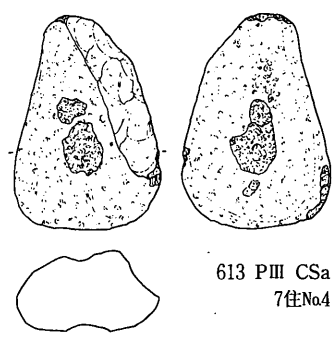
第54図 境窪遺跡 石器 (12)



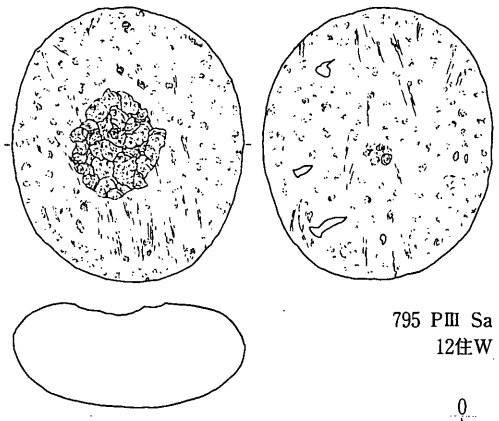
610 P I Sa  
7住No.1

612 P I CSa  
7住No.3

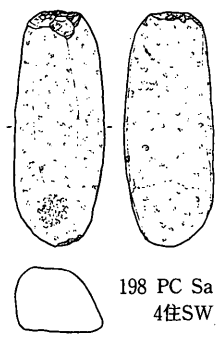
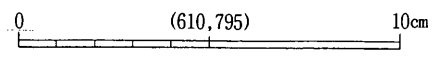
833 P II An  
建6



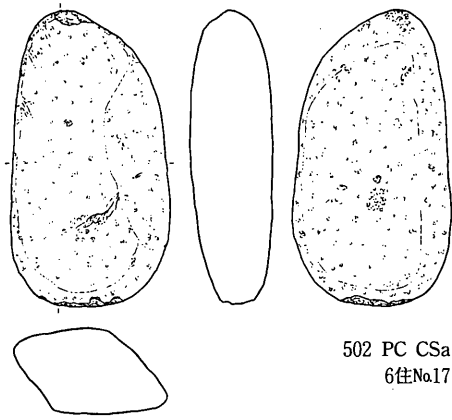
613 P III CSa  
7住No.4



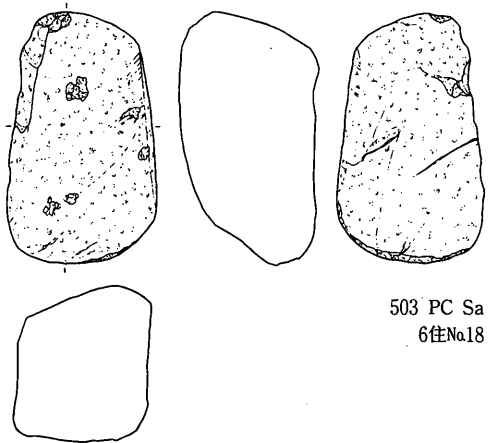
795 P III Sa  
12住W



198 PC Sa  
4住SW



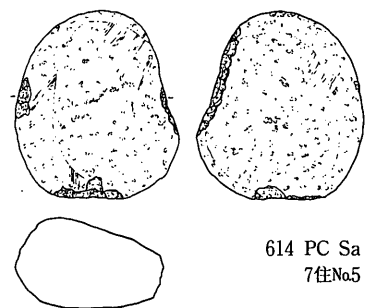
502 PC CSa  
6住No.17



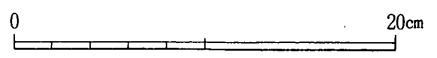
503 PC Sa  
6住No.18



496 PC Sa  
6住No.13

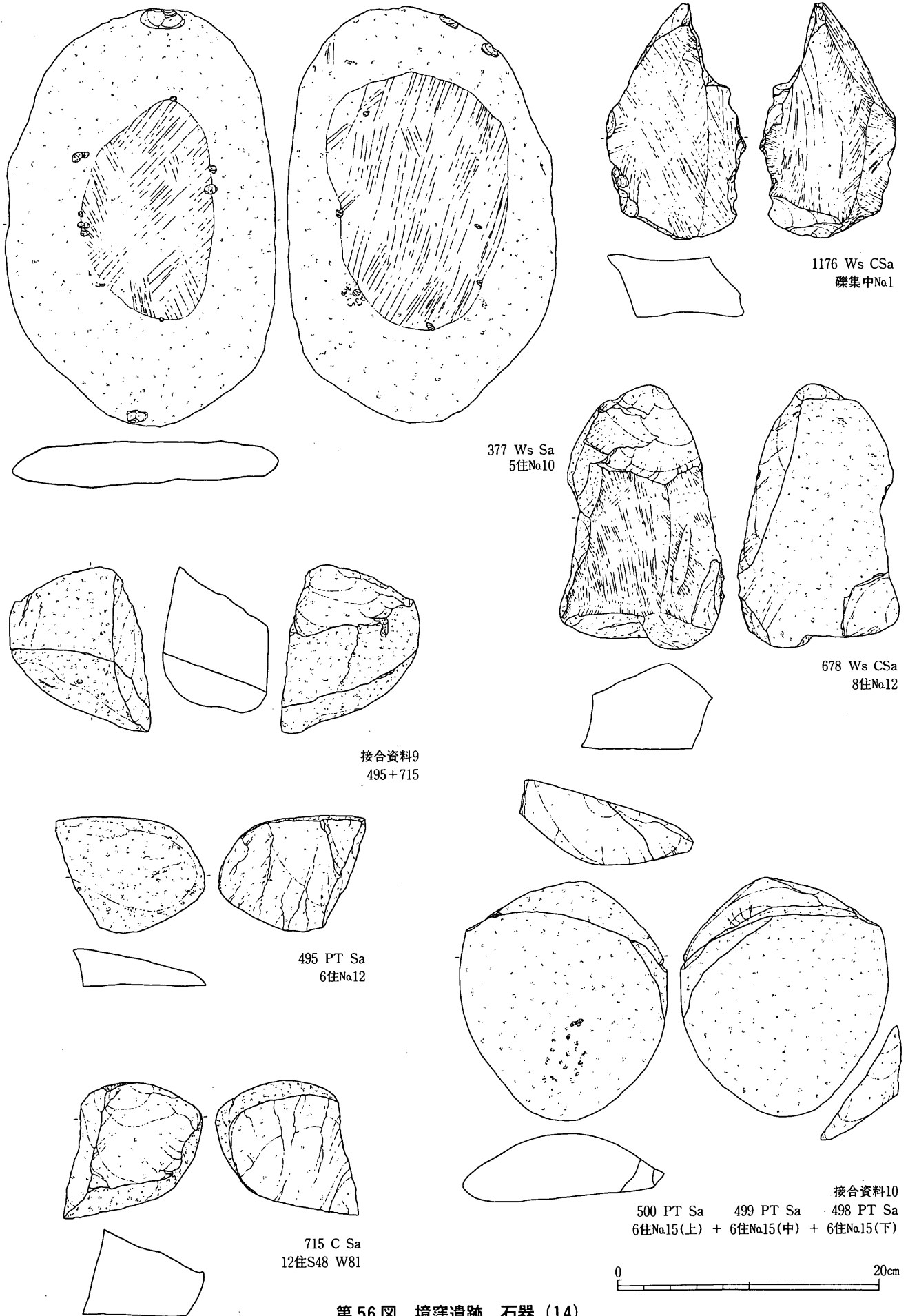


614 PC Sa  
7住No.5



第55図 境窪遺跡 石器 (13)





第56図 境窪遺跡 石器 (14)

### ③土製品（第 57 図）

ミニチュア土器 3 点、紡錘車 1 点、匙形土製品 1 点が出土している。

1 は 3 住から出土した壺形のミニチュア土器で、口縁部を欠く。大きさは胴部最大径 4.4cm、現存高 4.7cm を測る。胎土は密で微砂を含み、焼成も良好、淡黄褐色を呈する。成形・調整は非常に丁寧で、均整のとれた形態を呈する。胴上部には棒状工具による 5 条の沈線紋と同一工具先端による連続刺突紋が施される。2 は杯形のミニチュア土器で、5 住出土品である。口縁直下に 1 カ所、円孔を焼成前に穿っている。口径 4.6cm、器高 2.4cm を測り、1 と同様丁寧に作られ、暗褐色を呈する。器面には調整の際の工具痕が残る。3 は既出資料で、上部を欠く。底径 4.8cm、現存高 2.7cm を計測する。器形は杯形ないしは鉢形と思われ、やや下膨れの形態をなす。内外面ともにナデ調整を行い、胎土は淡黄褐色を呈する。

4 は 8 住から出土した匙形土製品で、全長 8.6cm を測る。各部の寸法は匙部の長さ 4.8cm（内法 3.8cm）、幅 3.7cm（同 2.8cm）、高さ 1.8cm（同 1.1cm）、柄部の軸径 1.1～1.4cm である。胎土は密で焼成良好、淡黄褐色を呈する。

5 は 4 住から得られた土製紡錘車で、直径 6.9cm、重量 48g を測る。厚さは中央部で 1.2cm あり、凸レンズ状の断面形を呈する。軸孔は直径 0.7cm で、紋様として表裏両面に棒状の工具による沈線で鋸歯状紋が施されている。胎土は微砂を含み、焼成良好、淡黄褐色を呈する。

### (3) 平安時代の遺物（第 57 図）

1・2 住から土器が出土しており、11 点について図化提示した。

#### ① 1 住出土土器

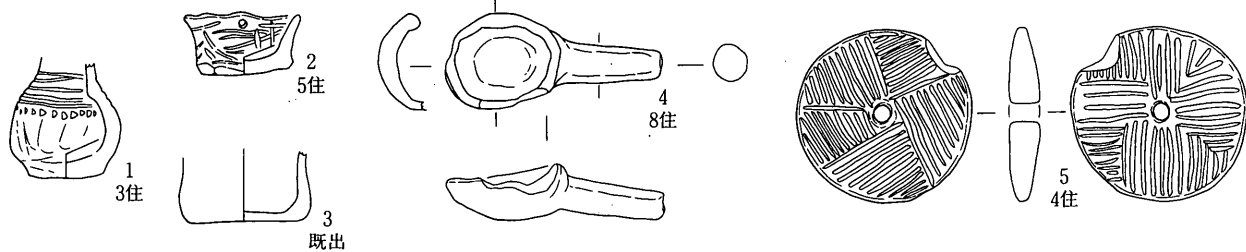
黒色土器 A の杯 A (1) が 1 点出土している。形態・技法の特徴から見て、平安時代、9 世紀代のものであろう。おそらく 2 住出土品と同時期のものであろう。

#### ② 2 住出土土器

出土土器のうち 10 点を図化・提示した。内訳は黒色土器 A 皿 B (5)・杯 A (2～4)・碗 (6)・鉢 A (7)、土師器小型甕 D (10)・甕 B (9)・甗?(8)・円筒形土器 (11) で、須恵器の杯類や灰釉陶器はまったく見られない。その他図化できなかったものとして、須恵器甕の破片がある。

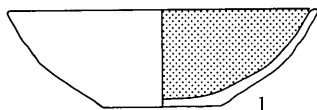
これら土器類の組成上の特徴を挙げると食器類の主体が黒色土器で占められ、須恵器の杯や土師器の杯・碗類、灰釉陶器の皿・碗類をまったく含まないこと、黒色土器 A に皿が含まれること等であり、土師器甕も含めた土器類の形態・技法上の特徴から松本平古代土器編年に照らすと、古代 7～8 期の様相を呈しているものと解釈されよう。

土製品

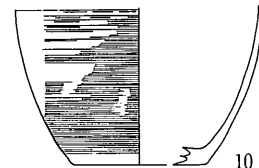
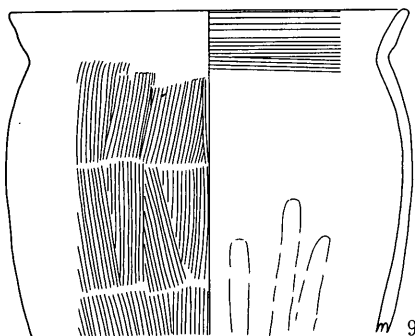
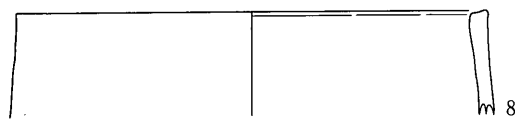
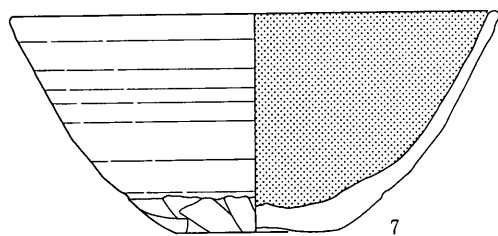
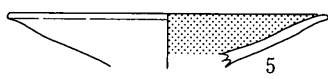
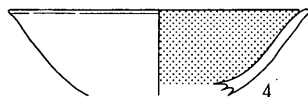
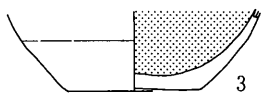
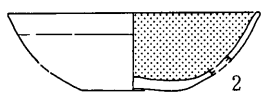


平安時代の土器

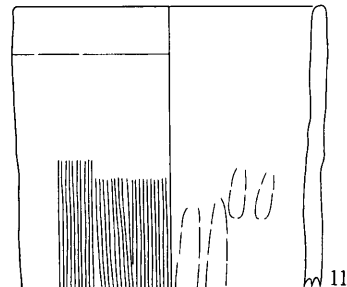
1住(1)



2住(2~11)



0 10cm



0 10cm

第57図 境窪遺跡 土製品・平安時代の土器

### 3. まとめ

今回の調査では弥生時代中期前半の純粋な集落址を検出し、信濃における弥生時代開始期の集落研究上、一級の資料を提供することとなった。従って調査結果についてはできるだけ詳細に報告するよう努めたが、残念ながら限られた時間と紙数の中では十分な分析と考察は行い得なかった。

最後に調査担当者の勝手な推測と仮定の上に境窪集落について素描し、調査のまとめにかえたい。

**竪穴住居址** これまで中南信地域を主体に調査された縄紋時代晩期～弥生時代中期前半期の竪穴住居址には、縄紋時代以来の円形住居址と東海地方の条痕紋文化に由来する方形住居址が併存する状況が指摘され、本集落もこうした状況と矛盾せず円・方両形態の住居址からなっている。一方で掘立柱建物址との切り合い関係や支柱穴の配列等の点から両形態の間に時間差を見出し、方形形態を新しい要素と見ることも可能ではある。しかし北信地域では円形住居が色濃く残り、中信地域でも小判形の住居址形態が確立する中期後半の状況を考慮すれば、中期前半の本集落では両者が併存し、そうした状況からやがて中期後半に至って中信地域では小判形の住居址形態が生まれたと考えるべきであろう。

住居址の内部は平面形態に関わらず、炉を中心とした空間構造をなす点で縄紋的な要素をとどめている。埋甕炉もまだ見られない。しかし縄紋晩期～弥生中期初頭の住居址に多い本数や配置の定まらない壁沿いに巡る柱穴ではなく、壁より一定の間隔をおいた内側に、比較的整然と五角形ないし方形状に配された柱のあり方はむしろ中期後半以降の住居址に通じる要素であり、新しい住居形態へと移行してゆく過程と見ることができよう。なお支柱穴を結んだ線の内外では硬さ等床面の状況が大きく異なっていた。おそらく内側では土間床とし、外側は板床等高床構造をなしていたのであろう。

**平地建物址** 2棟ともに地表面付近に床と炉を設け、8本柱・八角形配置となる点で共通点があり、同様な上屋構造の建物と考えられる。住居に対する付随的な建物だったのだろうか。類例を挙げるなら中期後半の長野市松原遺跡で多数検出された環状溝跡が該当しようか。溝の有無に違いがあるものの、炉址や柱穴の存在等、本遺跡との共通点も見出せ、平地建物の可能性が指摘されている。環状溝跡は松本市内でも後期初頭の竹淵遺跡で確認されており、今後この種の遺構に注意を払う必要がある。

**掘立柱建物址** 柱穴が大きく配置の整ったものを高床建物と考えた。しかしその数は住居址に匹敵して多く、非常に高い出現頻度である。これらの建物がすべて穀倉として供されたものか、また中期前半という段階にある本集落においてそれだけの安定した生産基盤が確保されていたのか、疑問も残る。あるいは弥生文化のかたちだけが先行して取り入れられた結果と見るべきなのだろうか。

**墓 址** 礫床木棺墓、再葬または乳幼児墓と考えられる土器棺墓、土坑墓が検出され、方形周溝墓出現以前の弥生集落における墓址形態が一通り見出された。しかし大きな群を形成するには至っておらず、このことは一つには集落の継続期間が短かったことを示しているのであろうか。

**集落の形態と構成** 今回の調査では集落を完全に露呈するには至っていないが、その範囲は容易に推察される。すなわち、集落の南を画する谷状地形は調査区の西側約10数mの距離をおいて北上することが試掘から判明しており、これに沿って帯状に集落が展開していることとなる。その北限は遺構が希薄となる10住付近であろう。東側は礫層帯をもってほぼ区切られている。こうして得られた居住域は南北約80m、東西40m（礫層帯東側の建物址を含めて60m）程の範囲である。

次に各遺構の配置状況を見てみよう。まず竪穴住居址では唯一大型の円形住居址である6住が居住域のほぼ中心に位置することに注目したい。次にこの6住を中心に据えて周囲の住居址を見渡すと、北側に南北方向に配列する7・8および9・10住、南側に連なる3・12住の2棟、北東～南東に連なる4・5住がそれぞれ他

の遺構とともに群をなしているように見受けられる。未調査の6住西側にも11住を含む別の群があるかもしれない。さらに各群を構成する住居址を比較すると、7住と8住は円形で南北主軸、9住と10住は方形で東西主軸の、同じく4住と5住も方形・東西主軸、3住と12住は楕円形ないし隅丸方形、というように形や方向、あるいは大きさがよく似通っている状況が窺える。

掘立柱建物址は9・10住の群に2棟のb類建物と1棟のa類建物、4・5住の群に3棟のb類建物、3・12住の群にはa類建物が1棟伴い、7・8住を除く各群に数棟ずつ伴っていることがわかる。建物址はさらに礫層帯を挟んだ東側にも2棟が分布し、この点だけ住居址とはあり方が異なっている。

平地建物址とそれに類する建物の可能性があるピット群1～4も各群に1～2箇所ずつ伴っている。

墓址は4・5住の群の東縁に重複して礫床木棺墓と土器棺墓があるが、6～8住付近を除いてどの群にも見られる楕円形や長方形の大型の土坑にも墓址（土坑墓）が含まれていると考えられるので、それらの分布する住居域の外縁部が墓域にあてられていたのであろう。

**集落の変遷** このように、あくまで視覚的側面だけから遺構配置を眺めると、各種建物からなるいくつかのまとまりと中央に位置する大型の住居址で構成され、周囲に墓址が展開する集落の状況が浮かび上がる。

次に集落の変遷について少し言及すると、まず住居址をはじめ遺構間に重複関係があまりないこと、墓址が少ないこと等の理由により、比較的短期間のうちに営まれた集落と見てよいだろう。しかし10住と建3・4、または5住と建8と平建1の重複関係、拡張の行われた住居の存在等の点から、1～2段階程度の動きが存在したものと捉えられる。具体的な遺構の動きまでは把握できないが、先に捉えた群別が正しいのなら、各群を構成する7・8住、9・10住、4・5住等一対になる住居址の間、また建3・4、建6・7・8等の間に時間的前後関係が存在する可能性もあろう、なお既出遺物の存在から窪地を挟んだ対岸、三間沢川との間の微高地上にも住居域が窺えるが、時間的にどのような関係にあるのか、またこれまで仮定したような集落の構造や動きが正しいのか、出土土器の編年研究を通じて検討しなければならない課題である。

**集落をとりまく景観** 境窪集落における主たる生業活動は恐らく湿潤な窪地を利用しての水稻や雑穀類の栽培であったのだろう。籾・種子圧痕が多く残された土器の存在がそれを証明する。また微高地上では狩猟も行われていた。黒耀石製の石鏃が多出し、原石の貯蔵や住居単位での石器製作の痕跡が見出されている。同じ微高地上を北に下った川西開田遺跡ⅡA地点でも石鏃や土器が出土しており、境窪集落の日常の活動領域が広がっていたのであろう。建築木材も微高地上に広がる落葉樹林から調達されたと考えられ、大型蛤刃石斧や多数のロームマウンドはこうした木材の採取や開拓を示唆する。炭化材樹種同定結果からは自然林に比べクリやクルミの割合が高いことも指摘されており、あるいはもう一つの生業活動としての植物質食料調達の手段としてある程度これらの樹木の管理的栽培も行われていた可能性を示している。

松本平西部や東部の山麓や扇状地上には縄文時代晩期末～弥生時代開始期の遺跡が点在している。それぞれの遺跡は概して小さく一時的な集落と考えられ、新たな生活地を求めて移動を繰り返したのであろう。境窪遺跡もこうした一時的な集落の一つと考えられるが、意外にもムラとしての体裁はよく整っていた。やがて中期後半以降、松本平における弥生文化は広範な可耕地（低湿地）に恵まれた奈良井川や薄川下流域、宮淵本村や県町等の集落で本格的に花開き、この地域は見放されることとなる。それは成長してゆく集落を支えるに足る安定した生産基盤を求めて行き着いた、当然の帰結に他ならないのであろう。

#### 〈参考文献〉

神村 透 1988 「弥生時代の住居と集落」『長野県史—考古史料編』全1巻4 遺構・遺物 他

# V 川西開田遺跡の調査成果

## 1. 検出遺構

### (1) 竪穴住居址・竪穴状遺構（第8表、第58・59・62～65図）

第1次・2A次調査区合わせて16棟の竪穴住居址と1基の竪穴状遺構が検出されている。竪穴住居址はいずれも奈良～平安時代に帰属するものである。以下、土器様相から推定した時期毎に遺構の特徴について概観する。なお遺構の詳細は一覧表に示した。

**4期頃** 8住が該当する。一辺4m弱の方形住居で、柱穴を持たないものである。カマドは先端部に円形ピットが取り付く長い煙道、小振りの礫を芯材に用い、粘土を多用した袖部を有し、この時期に通有の形態である。カマドの脇には貯蔵穴が見られる。

**6～8期** 両調査区とも最も遺構数が多い。3・5～7・9・10・12・14住が該当し、そのほとんどは7・8期に帰属するものである。プランはいずれも方形で、規模的には一辺4m未満、床面積9～13㎡の小型住居と、一辺4～4.6m、床面積15.7～17㎡の中型住居が見られる。

カマドは東壁または西壁の中央に設けられ、偏平礫を袖・天井の構築材とする。煙出しは短い。3住は燃焼室が壁外に張り出す形態である。廃棄時に意図的に破壊されたと思われるものがあり、構築材の礫が周辺に遺存する（5・7・11住等）。10・14住は柱穴を有し、ともに中型住居の中では規模が大きい（床面積17㎡以上）。その他、カマド両脇、あるいは片脇に貯蔵穴を設けるものも多い。

遺物は廃絶時の祭祀的行為の結果によるものか、カマド周辺に集中して食器類が完形に近い状態で出土、内部には土師器甕片が多く廃棄される傾向が窺える。

**9～11期** 2・4・11・13・15・16住が該当する。15住のみ11期で、他は9・10期に帰属する。形態は方ないし長方形プランで、規模的には一辺3m以下、床面積6.6㎡の小型住居（13住）と、一辺4～5m、床面積12～18㎡の中型住居（2・4・11・15住）、一辺6mの大型住居（16住）がある。

カマドは東壁か西壁の中央に設けられるが、11期の15住のみ隅に寄っている。形態的には7・8期のものと大差なく、カマド周辺に構築材の礫や杯類、土師器甕等が多く遺存している。柱穴は大型の16住で存在する可能性があるが、その他の遺構では見られない。カマド脇に貯蔵穴を配するものがしばしばある。

**竪穴状遺構** 第2B次調査区から検出された1棟のみである。長方形を呈し、堅緻な底面をなす他は屋内施設、遺物等何ら見当たらない。帰属時期も平安時代以降のいずれの時期か、特定し得ない。

### (2) 掘立柱建物址（第9表、第60・64図）

平安時代に帰属し、第1次調査区で2棟、第2A次調査区で1棟が検出されている。いずれも側柱式建物で、時期的には7～8期の住居址群に伴うものと考えられる。規模的には面積12～18㎡で比較的小型である。建3は建1の建て替え前の遺構と推定したが、柱配置に違いが見られること、古代の建物址としては梁間が1間配置となるものは少ないこと等から、あるいは建1に付随する柱穴列と見た方がよいのかもしれない。

### (3) 遺物集中地点（第66図）

第2B次調査区で検出されたもので、黒色土層中より縄紋時代後期の土器・石器類が集中的に見出されたものである。その範囲は南北5.6m・東西4.6m、垂直分布最大20cmに及ぶ。遺構の性格は当該期の生活址とも考えられるが、貼床・火処・ピット等は何ら検出されなかった。出土遺物は堀之内I式土器、石器類等である。

#### (4) 土 坑 (第60・61・65図)

総数38基が検出された。大半は第1次調査区から検出されている。出土遺物から見て2A次調査区の土51・52は弥生時代中期前半、第2B次調査区の土56・57は縄紋時代に帰属するものと考えられるが、その他の土坑については層位や周辺の遺構の状況から見てほとんどが奈良～平安時代、またはそれ以降のものと考えられる。

縄紋時代の土坑は土56が円形で深い掘り込みを有し、内部には礫が多い。土57は楕円形で浅い。

弥生時代の土坑は土52が長方形の掘り込みを有し、土器片と石器が内部から出土した。土51は三日月形を呈するロームマウンドであるが、埋土の上層に微細な黒耀石のチップが集中する個所が認められた。

第1次調査区で得られた古代の土坑は、ピットとともに特定地域への分布が集中する傾向が窺える。まず3住から建1・3にかけての周辺に16基が集中し、2住から4住にかけてもやや散在的だが9基存在する。それら以外の範囲ではほとんど土坑・ピットは見られない。

土坑の形態は土10・11・14が長方形ないし長楕円形で平坦な底面をなし、土16は三日月形の形態からロームマウンドに類するものと考えられる。その他の土坑は円形ないし楕円形を呈し、なだらかに掘り込まれる形態のものである。遺物は混入したと見られる中期後半の縄紋土器があるが、本来の帰属時期を示すものはほとんど得られていない。

#### (5) ピット (第5・6図)

246基が検出された。その大半は第1次調査区からの検出である。分布傾向は土坑と同様、奈良～平安時代の住居址・建物址周辺に集中している。2住の南西や3住の北側等、一部直線状の配列を見せる個所があり、あるいは柱穴列として捉えることができるかもしれない。時期的にはやはり古代以降のものと考えられよう。

第2A次調査区では建2周辺にピットの分布が見られ、同時期のものと考えられる。

#### (6) 溝状遺構 (第5・6・59・65図)

8条が検出された。溝9を除いて他はすべて1次調査区に存在する。

溝状遺構のうち規模の大きなものは溝8と溝9である。溝9は第2A次調査区の北辺、16住を切って東から西、すなわちN-92°-Wの方向に緩く傾斜して走り、地形の傾斜方向とは直交する。幅約3m、検出面からの深さ20～30cmを測り、掘り込みは安定している。底面はよく叩き締められ、広い平坦面をなす。覆土下層には砂礫の堆積もあり、本溝が水路として機能したことを窺わせる。溝はさらに調査区外に延びている。16住との切り合う部分の覆土中からは円盤状銅製品とそれ挟んで2点の鉄製馬具(鐙の吊金具)が置かれたような状況で出土、さらに90cm程西に延喜通寶(初铸907年)1点が存していた。溝9の帰属時期は銅製品に伴っていた黒色土器の杯や、銭の初铸年、16住との切り合い関係から9期頃と考えられる。

溝8は第1次調査区の南辺をやはり東から西、N-88°-Wの方向に緩く傾斜して走る。幅2～2.5m、深さ60～80cmを測り、覆土中には礫が多い。調査区内での総延長は55mを測り、さらに西および東方に延びている。掘り込みは明瞭で台形を呈する。遺物はきわめて少ないが、わずかに得られた鉄釉の陶器片から中・近世の水路ないし暗渠と推定された。

その他の溝状遺構は土坑・ピットの集中域にあり、これらと同時期に営まれたものと考えられる。掘り込みは幅狭で浅く、砂礫の堆積が見られないことから区画溝等としての機能が考えられよう。



第8表 川西開田遺跡竪穴住居址・竪穴状遺構一覧

規模はすべてcm単位、面積はm<sup>2</sup>である。( )は推定値、< >は残存値、深さは検出面からの最大値を示す。

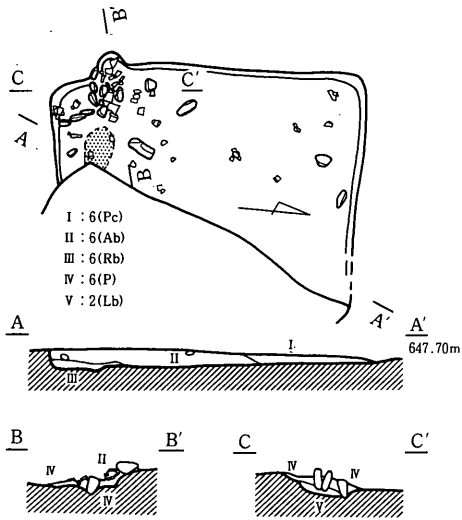
住 No.	地 区	平面形	規 模		主軸方位	カマド 位 置	主柱穴	遺 構 所 見	時 期
			長・短・深	床面積					
1	1	(方形)	長 472 短<456> 深 -26	<4.8>	N-97°-W	石 組 西壁南隅	—	試掘トレンチにより東半分失う。砂質土に掘り込まれ、床は小礫を含み硬い面をなす。カマドは袖と支脚石が残り、構築材と思われる礫が周辺に散乱。遺物のは少ない。緑釉陶器片が出土。	9 期
2	1	方 形	416 388 -16	14.3	N-96°-W	張 出 西壁中央	—	5住と重複。試掘トレンチ掘削時にカマドの袖・天井石と焼土を確認。砂質褐色土に掘り込まれており、プラン・床は不明瞭で把握が困難。出土遺物も少ない。	9 期
3	1	長方形	400 336 -30	9.4	N-111°-E	張 出 東壁中央	—	試掘トレンチにより中央部を失う。カマド構築材と思われる石材、焼土・炭化材が多量に残る。黄褐色土層に掘り込まれ、貼床を施す。遺物の出土量は少ないが、墨書土器など、貴重な遺物が出土した。	6 ~ 7 期
4	1	長方形	400 356 -44	12.2	N-81°-W	石 組 西壁中央	—	土12に切られる。砂礫層内に掘り込まれ、礫が多量に混入した黄褐色土の面を床面と推定、部分的に貼床も認められる。カマドは袖石・支柱石・天井石が残り、焚口に焼土が認められる。遺物はカマド周辺に散乱。墨書土器・緑釉陶器段皿・手捏ね土器・鎌・鉄滓等。	9 期
5	1	方 形	348 344 -20	10.5	N-94°-E	石 組 東壁中央	—	2住の下に存在。黄褐色土層内に掘り込まれている。カマドは両袖石が残る。床・壁面は淡黄褐色土、カマド内には焼土・炭化物が残る。壺片も僅かながら出土している。	7 ~ 8 期
6	1	(方形)	<340> <220> 0	<10.5>	N-88°-E	石 組 東壁中央	—	土3と重複。カマド周辺部から土器片が2点出土。砂層内にカマドの南側の袖石とわずかな焼土を確認したが、住居址のプランの確定はできなかった。	7 ~ 8 期
7	1	方 形	404 404 -12	14.2	N-93°-E	石 組 東壁中央	—	黄褐色土層内に掘り込まれている。カマドの支脚石、両袖石、火床が残り、土師器壺片が内部に散乱。カマドの両側には貯蔵穴があり、多量の土器が出土。焼土廃棄場と推定されるピットも見られる。	7 期
8	1	方 形	424 420 -20	15.7	N-83°-E	石 組 東壁中央	—	黄褐色土層内に掘り込まれている。北側にカマドの煙道が3mにわたって確認でき、焼土微粒も上層部において認められる。カマドは焚口に焼土・炭化物が残り、袖石が放射状に置かれていた。床面は貼床が認められる。遺物は少ない。	3 ~ 5 期
9	2A	長方形	432 380 -14	13.9	N-98°-E	石 組 西壁中央	?	床面は黄褐色土層中にあり、周辺部で厚く中央部で薄く堅緻な貼床を施す。カマドは天井、袖石をほとんど欠く。柱穴はP4・6・9等可能性があるが揃わない。P11は貯蔵穴、P1・3・7は構築時の掘り方であろう。遺物はカマド周辺から食器類、壺等の土器が出土。	8 期
10	2A	方 形	464 460 -30	18.6	N-93°-E	石 組 東壁中央	4本 P4・10・ 12・18	土55に切られる。黄褐色土層中に掘り込まれ、床面は堅緻な貼床がなされる。カマドは小礫や黄褐色土を用いて袖を構築する。柱穴は4本構成で、P4・18は壁外に張り出す。P1・9・14・16等は住居構築時の掘り方とみるべきか。遺物はカマド周辺に土器類が多く見られた。	8 期
11	2A	方 形	400 380 -20	12.4	N-92°-E	石 組 東壁中央	—	黄褐色土層中に掘り込まれ、床面は平坦に貼床が施される。カマドは両袖が残存し、天井部の石材が焚口を塞ぐように廃棄されている。南東隅には円形の貯蔵穴があり、内部に礫、食器類が遺存する。柱穴は見られない。墨書土器、緑釉陶器碗の破片が出土する。	10 期
12	2A	方 形	380 364 -10	12.5	N-89°-W	石 組 西壁中央	—	床面は黄褐色土層中にあり、平坦な面をなす。カマドは袖石を残し、火床面上から土師器壺片が少量出土。ピットは7基が検出されるが、柱穴は見られない。P1は位置的に見て貯蔵施設か。遺物は少ない。	7 ~ 8 期
13	2A	長方形	304 284 -12	6.6	N-87°-W	石 組 西壁中央	—	小型の住居址である。床面は黄褐色土層中に平坦に構築される。カマドは火床面のみ残す。柱穴はなく、カマド南側に浅い円形ピットが存する。遺物は非常に少ない。南東隅に編み物石が6個置かれる。	9 ~ 10 期
14	2A	方 形	456 436 -20	17.1	N-97°-W	石 組 西壁中央 (北壁下に 旧カマド)	4本	土54を切る。P322に切られる。軟弱な砂質土中に掘り込まれるため黄褐色土を厚く貼る。カマドは当初北壁中央に設け、後に西壁中央に移される。主柱穴は4基である。カマド脇には貯蔵穴がある。遺物はカマド周辺から杯類、壺が出土、土師器杯には墨書が存する。	7 ~ 8 期
15	2A	長方形	488 408 -20	17.6	N-90°-E	石 組 東壁北隅	—	暗黄褐色砂質土層中に構築され、床面は薄く黄褐色土を貼っている。カマドは天井部以外を完存する。四隅からは円形ピットが検出されるがいずれも浅く、住居構築時の掘り方であろう。遺物は廃棄時の行為か、カマド両側から多量の土師器杯・碗類が出土した。	11 期
16	2A	長方形	600 (528) -5	30.6	N-90°-E	石 組 東壁中央	—	溝1に切られる。床面は薄く貼床がなされる。カマドは火床面のみ残存し、構築材と思われる石材がP12内に集積されていた。直線的に配列するP1・5・14・17は本址と切り合う柱穴列の可能性が高い。遺物は少ないが床面から緑釉陶器碗の破片が出土した。	9 期
竪1	2B	長方形	568 268 -22	13.5	N-10°-E	—	—	黄褐色土層中に掘り込まれ、床面は平坦かつ堅緻である。ピット、火処等も何ら検出されない。遺物はわずかな小礫の他は皆無である。	不 明

第9表 川西開田遺跡掘立柱建物址一覧

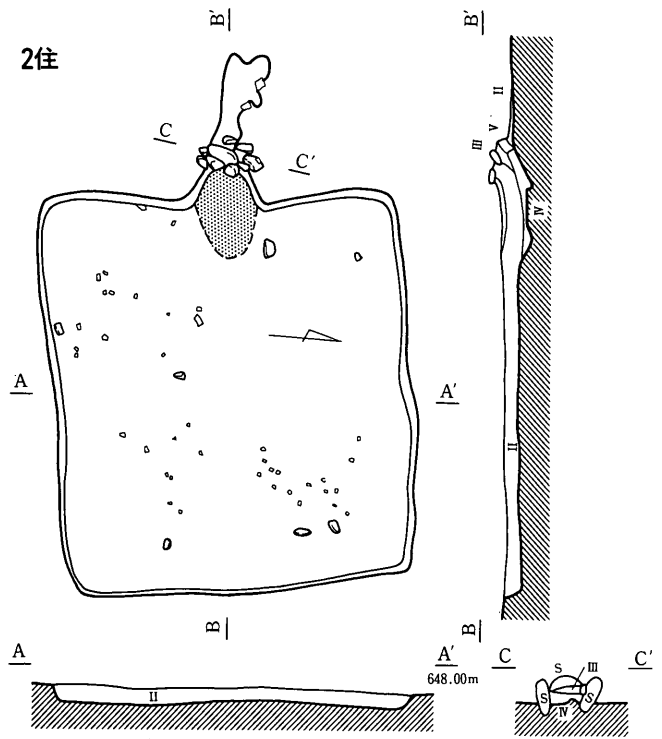
建 No.	地 区	平面形 柱配り	主軸方位 面積(m <sup>2</sup> )	規 模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱 穴			時 期 ・ 備 考
						平面形	規模(cm)	柱痕	
1	1	方 形 側柱式	N-86°-W 15.0	3間×2間 420×356	桁行 128~152 (140) 梁間 160~180 (178)	円 形	径 20~28 深 12~22	有	建3の建て替えか。P1~4は建3のものを再利用。P15は本址とは無関係か。
2	2A	方 形 側柱式	N-6°-W 18.3	2間×2間 464×412	桁行 204~240 (232) 梁間 200~208 (206)	円 形	径 30~52 深 8~20	有	規模に比して柱穴は小型である。ほとんどで柱痕が観察された。
3	1	方 形 側柱式	N-86°-W 12.4	1間×3間 420×296	桁行 136~144 (140) 梁間 288~300 (296)	円 形	径 34~68 深 12~25	—	建1より古。建1より規模、柱穴等やや小さい。P11~14は柱が抜きされ、礫が混入している。

竪穴住居址

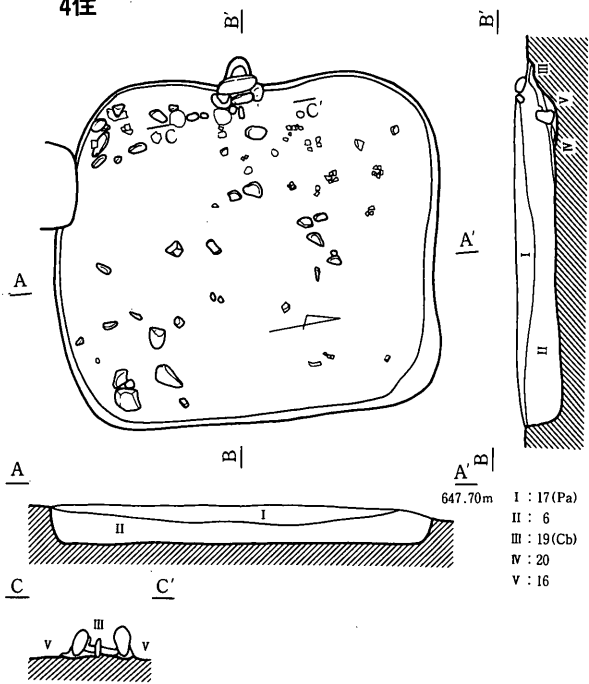
1住



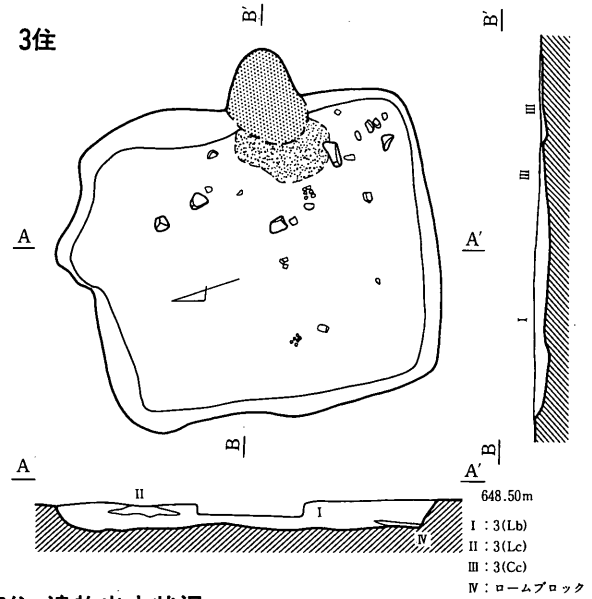
2住



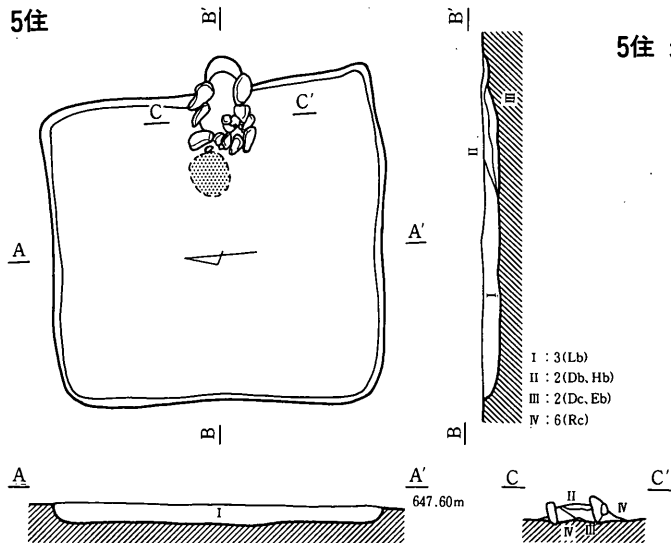
4住



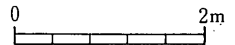
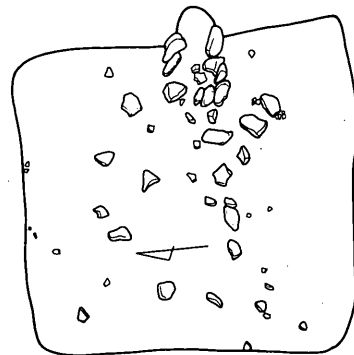
3住



5住

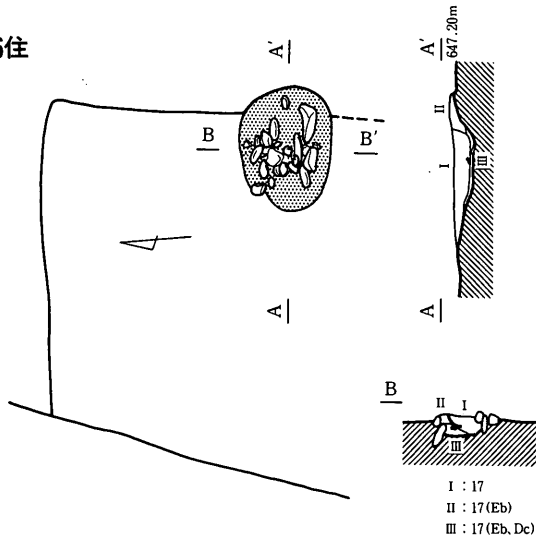


5住 遺物出土状況

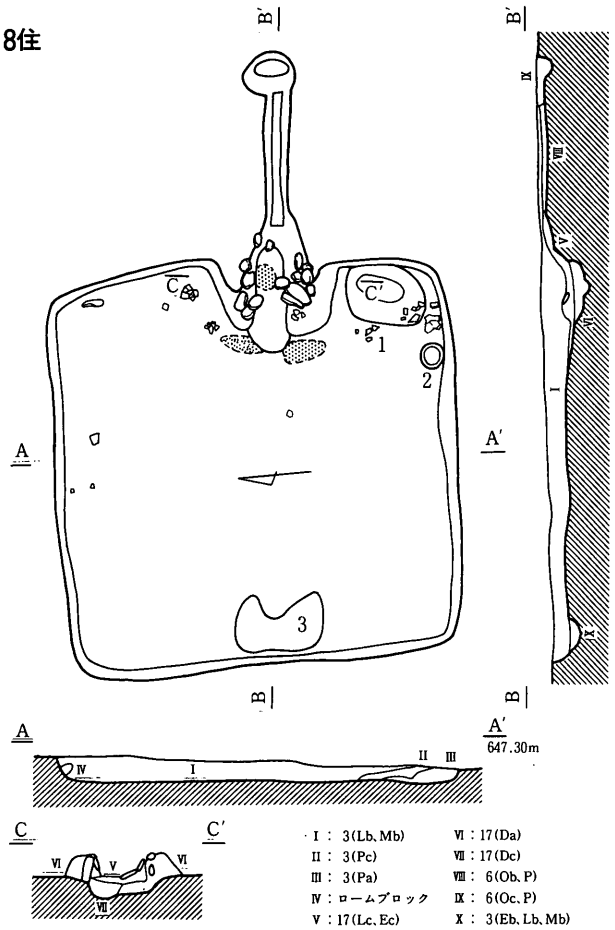


第58図 川西開田遺跡 I 竪穴住居址 (1)

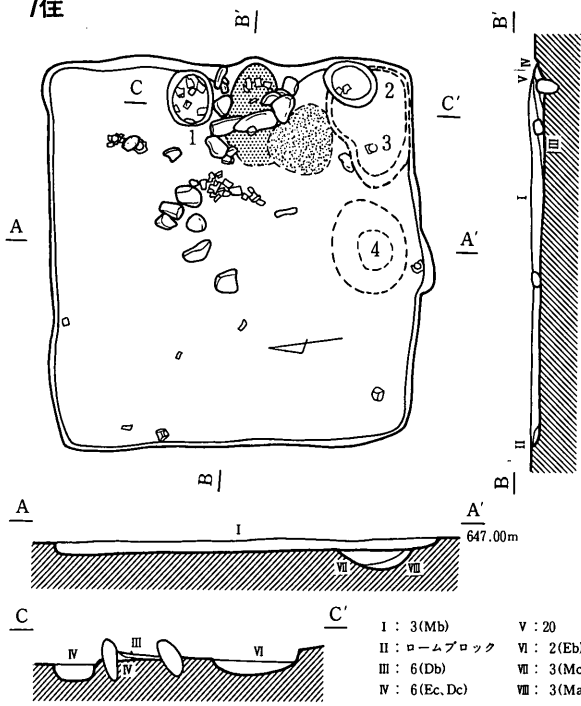
6住



8住

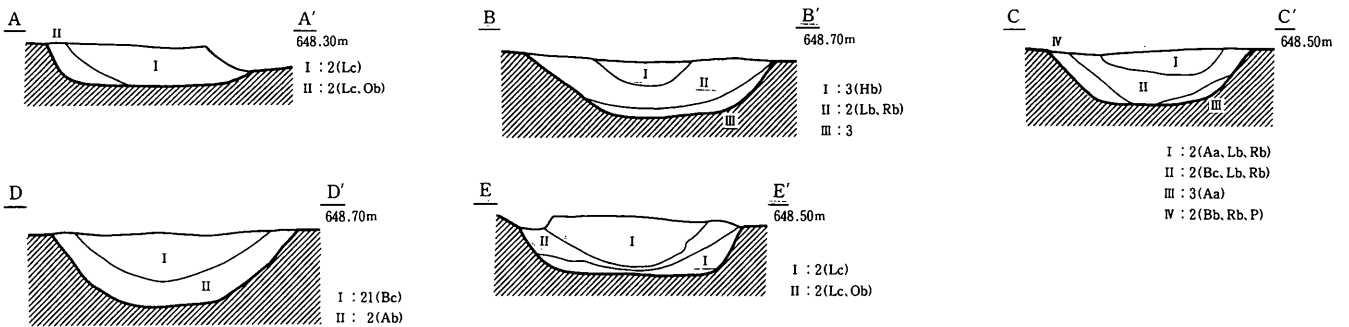


7住

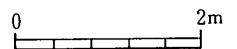
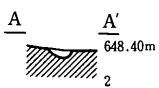


溝状遺構

溝8

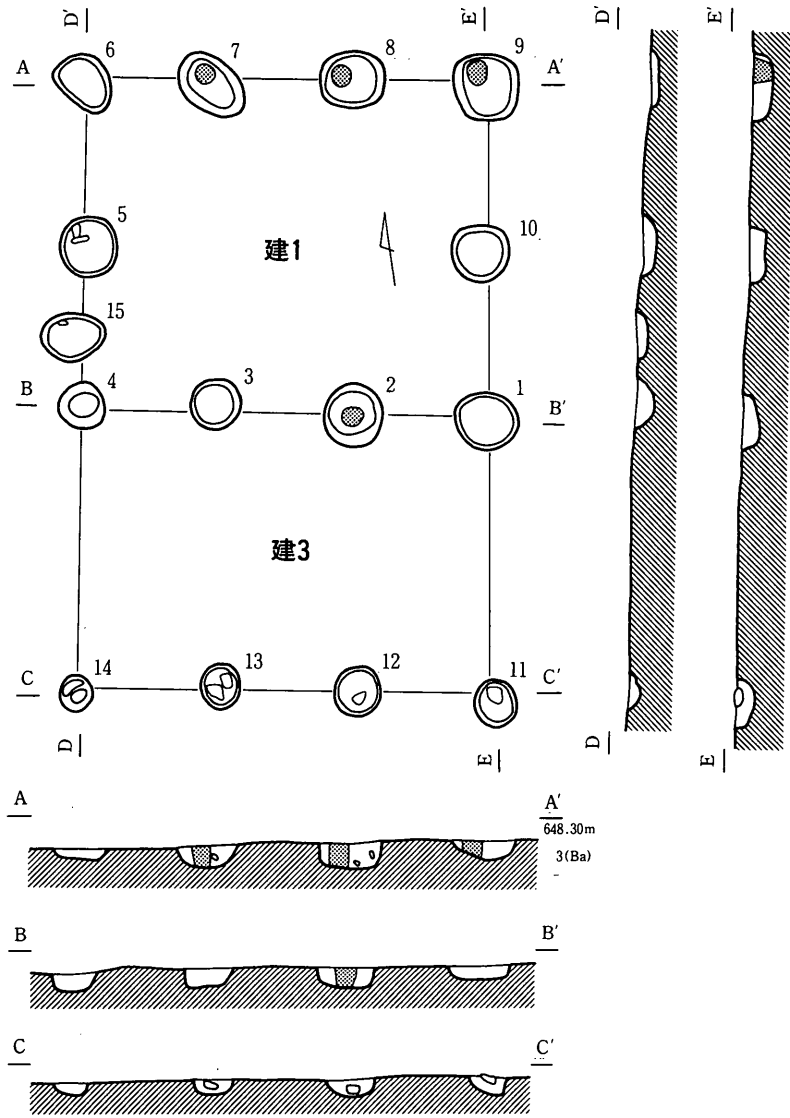


溝1

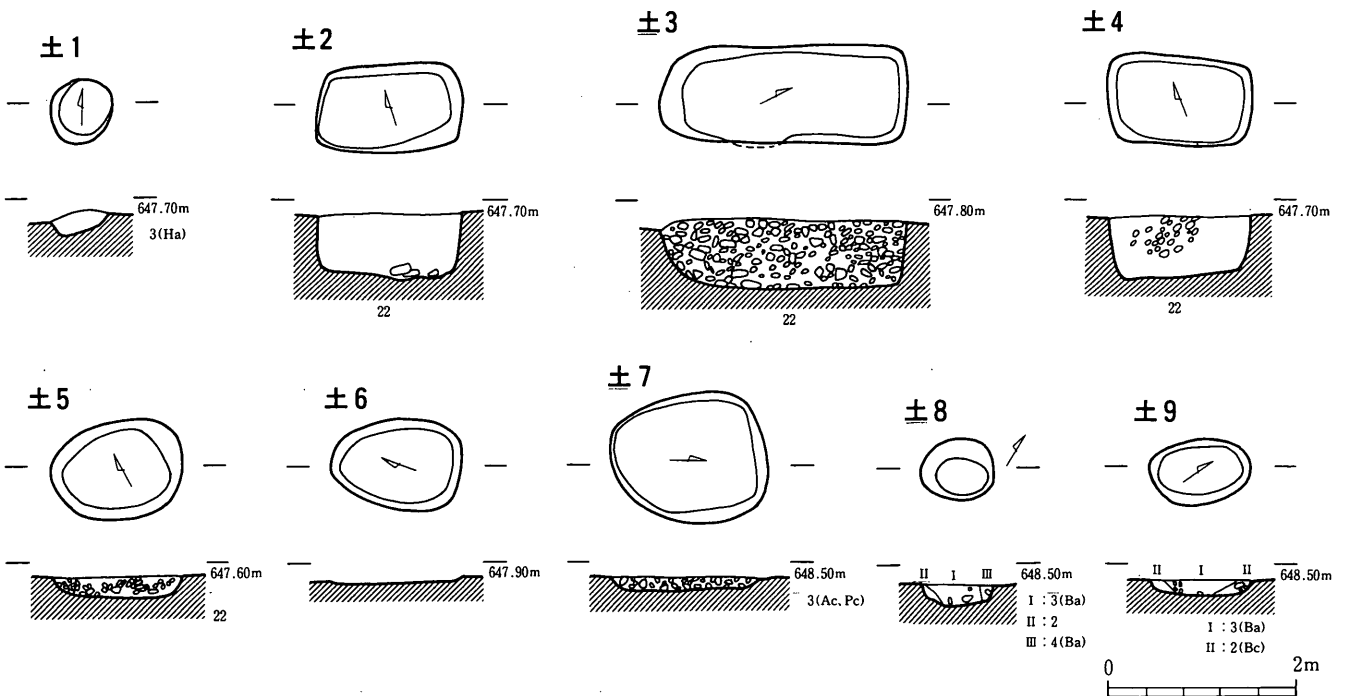


第 59 図 川西開田遺跡 I 竪穴住居址 (2)・溝状遺構

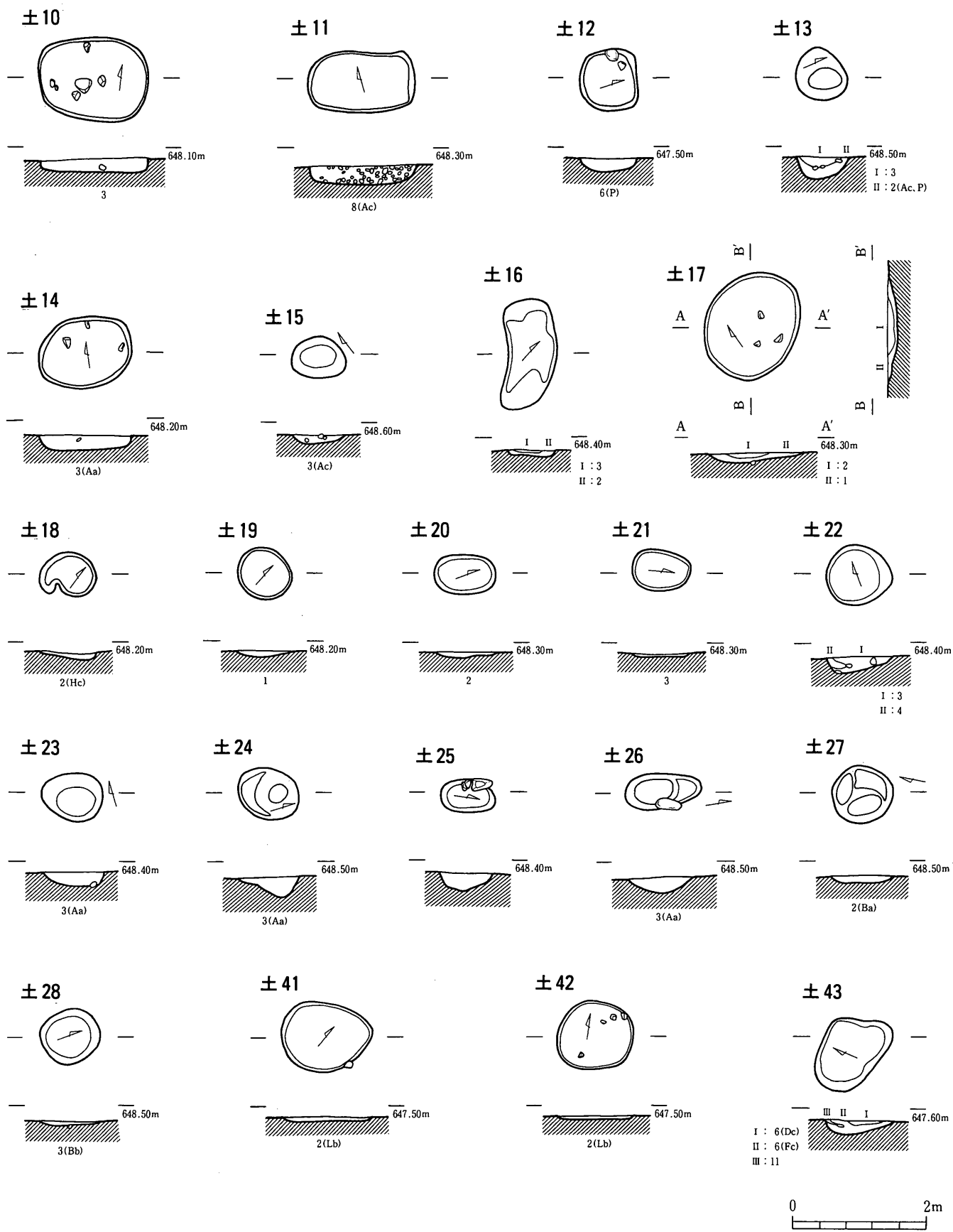
掘立柱建物址  
建1・3



土坑



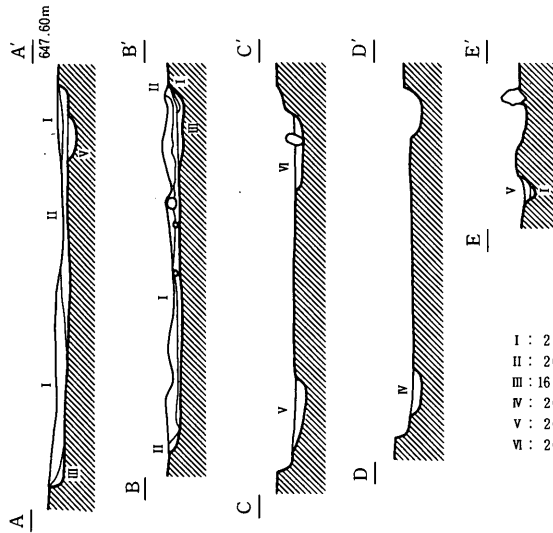
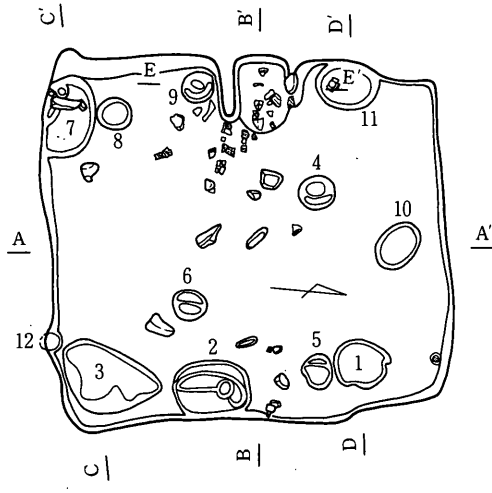
第60图 川西開田遺跡Ⅰ 掘立柱建物址・土坑(1)



第 61 図 川西開田遺跡 I 土坑 (2)

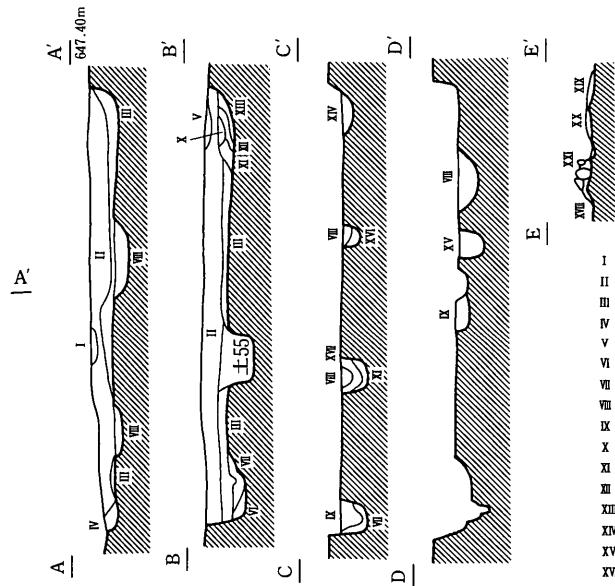
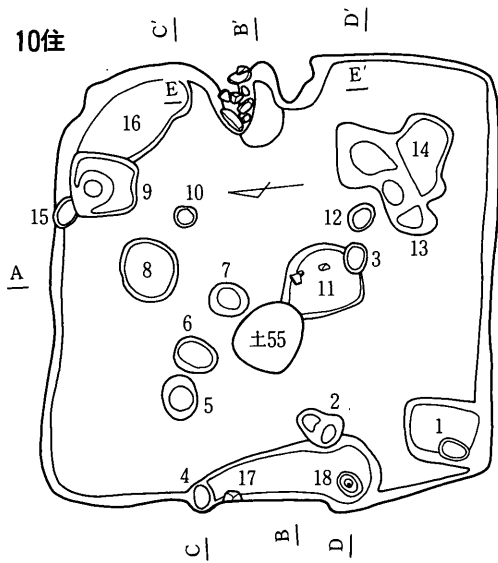
豎穴住居址

9住



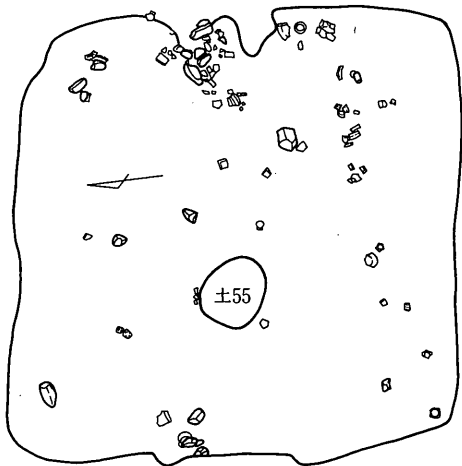
- I : 2
- II : 2(Ca, Ea, Ib)
- III : 16
- IV : 2(Ea, Dc)
- V : 2(Hc)
- VI : 2(H)

10住

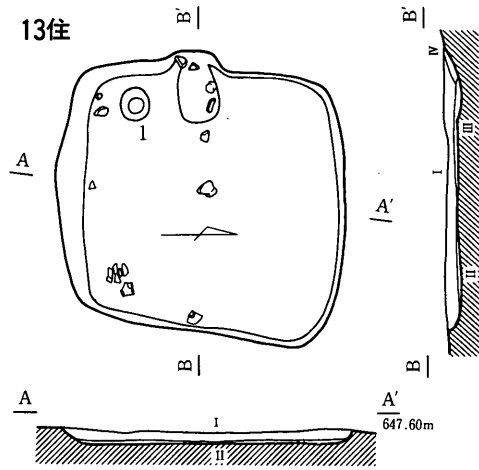


- I : 8(Te)
- II : 2(Eb)
- III : 2(Ic)
- IV : 6(Tc)
- V : 6
- VI : 2(Mc)
- VII : 2(Ma)
- VIII : 2(Hc)
- IX : 2(H)
- X : 2(Ca)
- XI : 3
- XII : 2(C)
- XIII : 2(Cc)
- XIV : 2(Ha)
- XV : 16(Hb)
- XVI : 2
- XVII : 3(Lc)
- XVIII : 17(Mc)
- XIX : 17(Mc)
- XX : 17(Mc, Rc)
- XXI : 2(Dc, Fc)

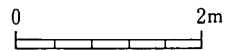
10住 遺物出土状況



13住

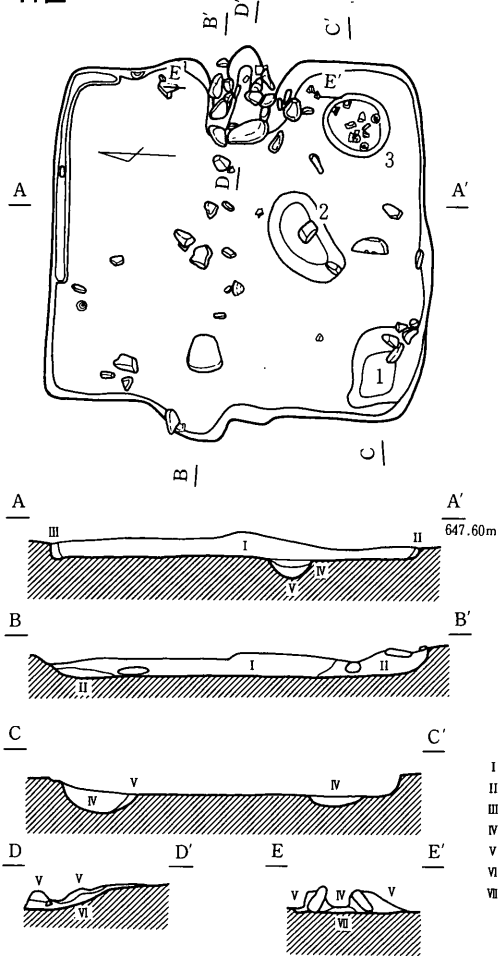


- I : 2(Lc, Rc)
- II : 2(Lc)貼床
- III : 3(Lc)
- IV : 3(Db, H6)

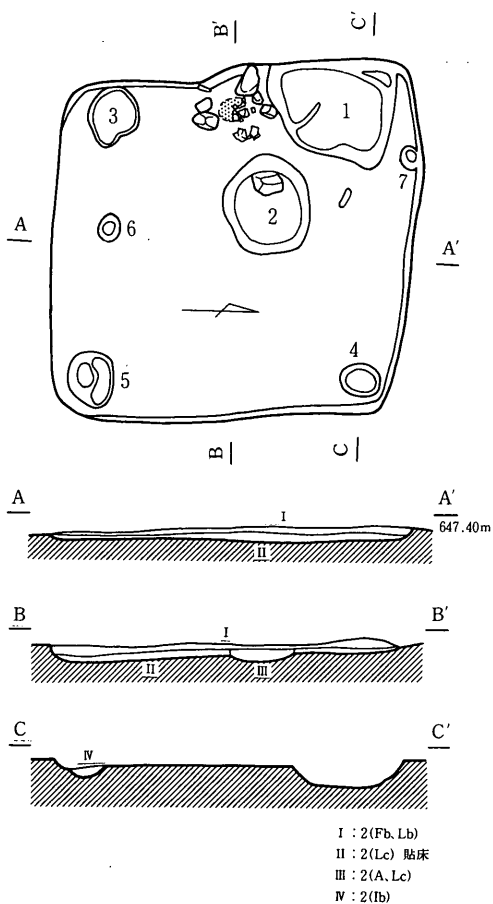


第62図 川西開田遺跡Ⅱ A 豎穴住居址(1)

11住



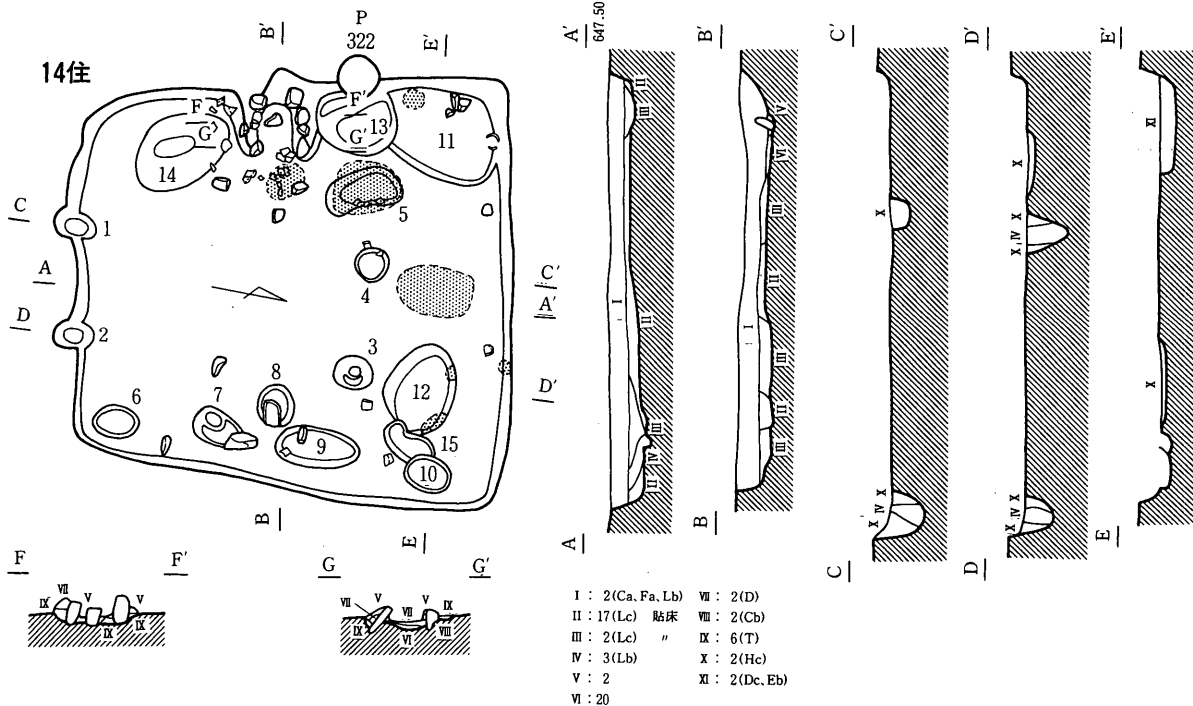
12住



- I : 2(Ia)
- II : 2(IIb)
- III : 2(IIIc)
- IV : 2(IVc)
- V : 17
- VI : 17(Db)
- VII : 20

- I : 2(Fb, Lb)
- II : 2(Lc) 貼床
- III : 2(A, Lc)
- IV : 2(Ib)

14住



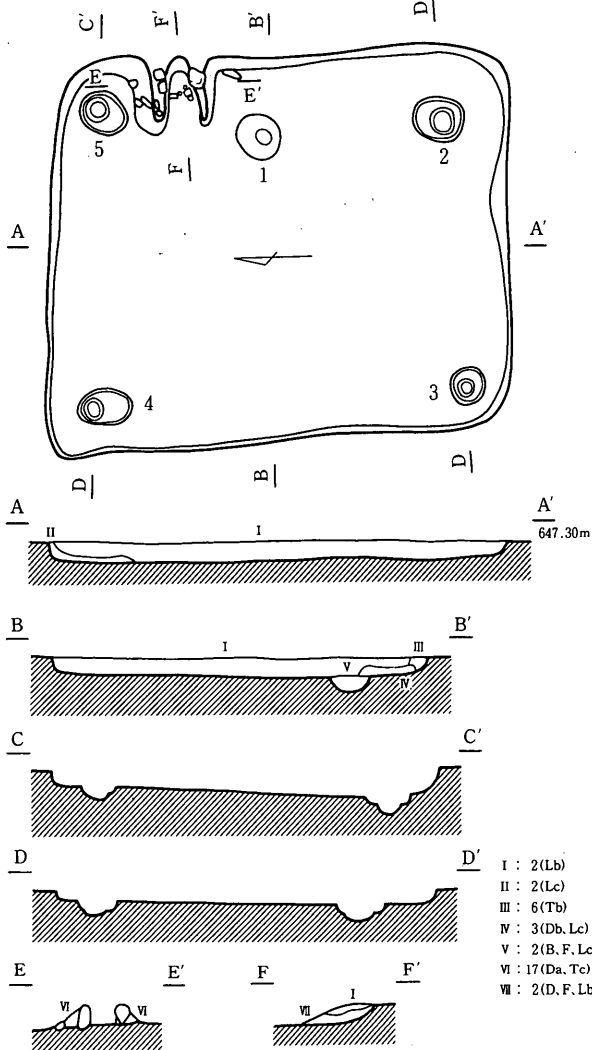
- I : 2(Ca, Fa, Lb)
- II : 17(Lc) 貼床
- III : 2(Lc) "
- IV : 3(Lb)
- V : 2
- VI : 20
- VII : 2(D)
- VIII : 2(Cb)
- IX : 6(T)
- X : 2(Hc)
- XI : 2(Dc, Eb)



第63図 川西開田遺跡Ⅱ A 竪穴住居址(2)

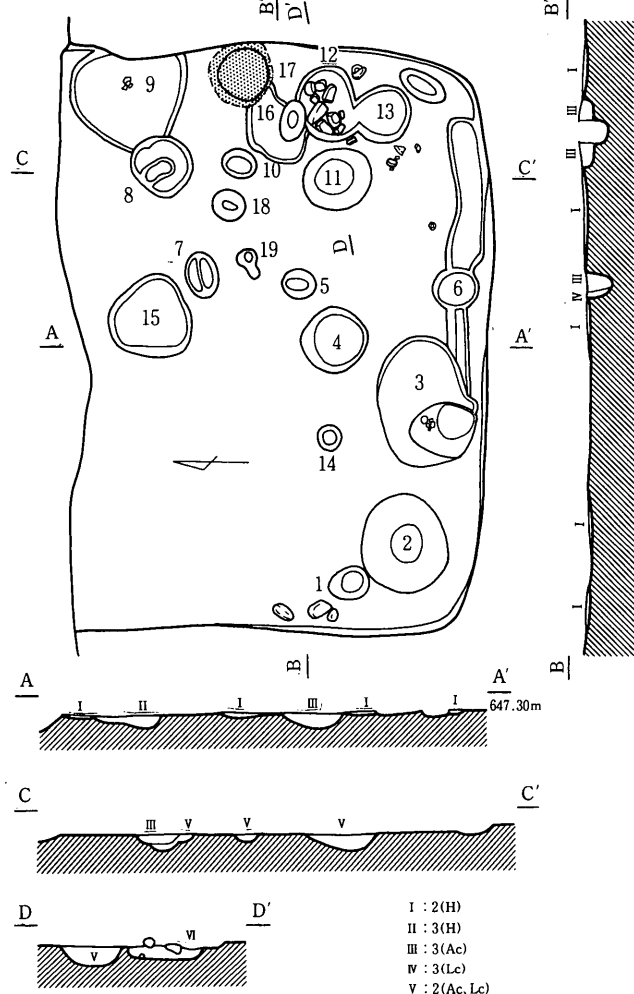


15住



- I : 2(Lb)
- II : 2(Lc)
- III : 6(Tb)
- IV : 3(Db, Lc)
- V : 2(B, F, Lc)
- VI : 17(Da, Tc)
- VII : 2(D, F, Lb)

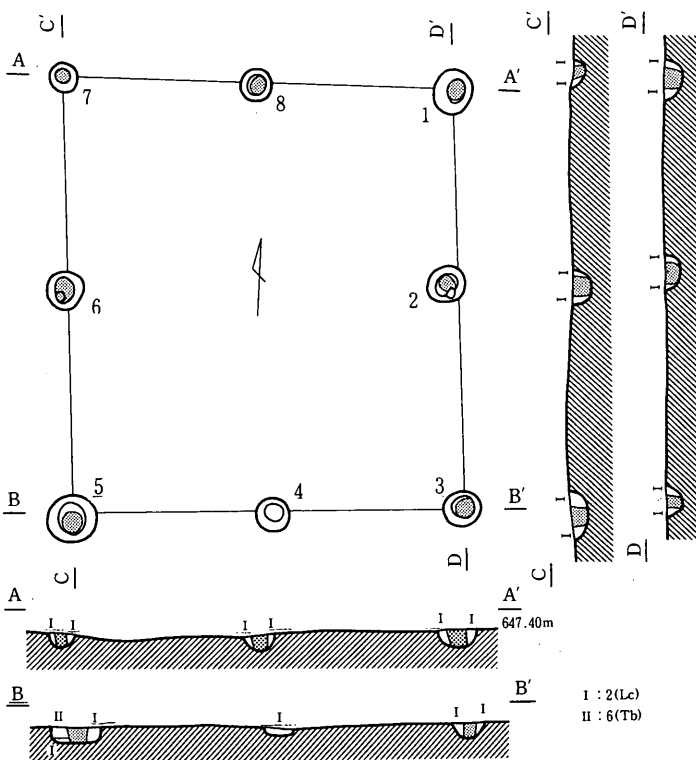
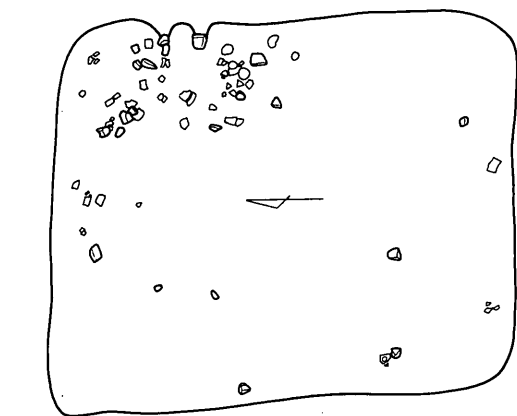
16住



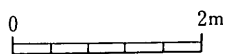
- I : 2(H)
- II : 3(H)
- III : 3(Ac)
- IV : 3(Lc)
- V : 2(Ac, Lc)
- VI : 3(Ac, Lc)

掘立柱建物址  
建2

15住 遺物出土状況

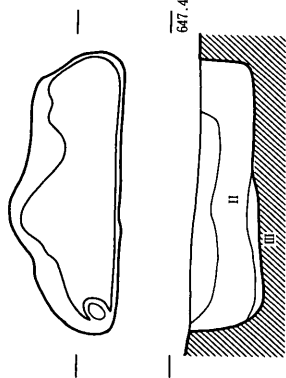


- I : 2(Lc)
- II : 6(Tb)



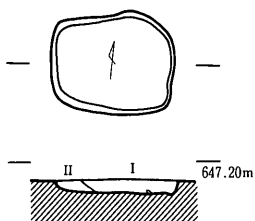
第64図 川西開田遺跡Ⅱ A 竪穴住居址(3)・掘立柱建物址

土坑 土51



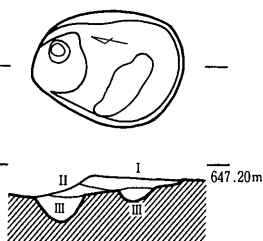
I : 2  
II : 18  
III : 3(Ib)

土52



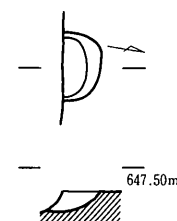
I : (Fa, Lb)  
II : (Fa, Lb)

土53



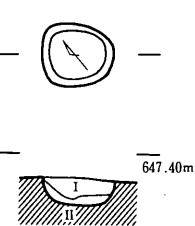
I : 3(Ac)  
II : 17(Ac)  
III : 15(Ac, Hc)

土54



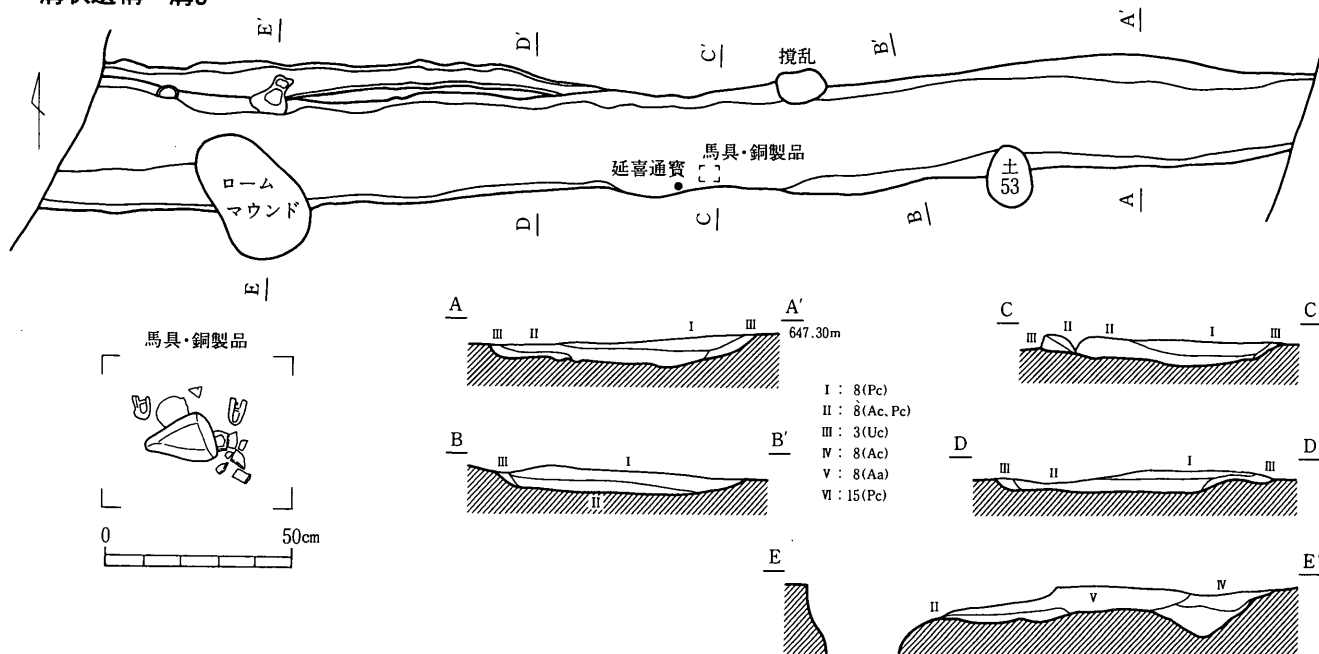
2(Dc, Lb)

土55



I : 2(H)  
II : 2(C, H)

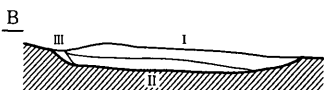
溝状遺構 溝9



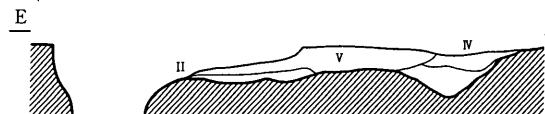
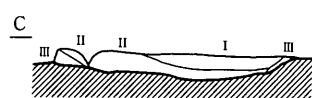
馬具・銅製品

馬具・銅製品

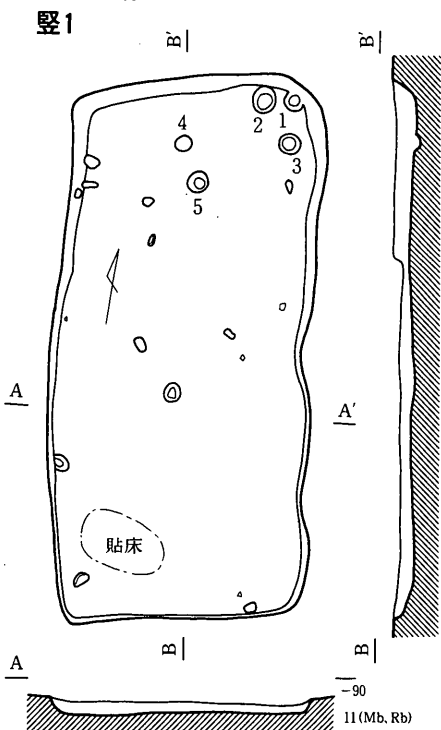
0 50cm



I : 8(Pc)  
II : 8(Ac, Pc)  
III : 3(Uc)  
IV : 8(Ac)  
V : 8(Aa)  
VI : 15(Pc)

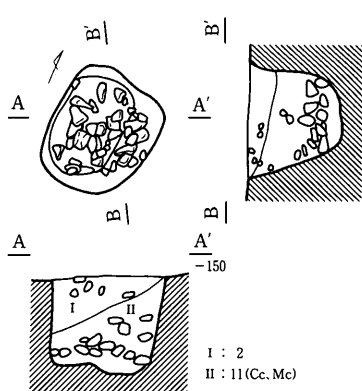


竪穴状遺構 竪1



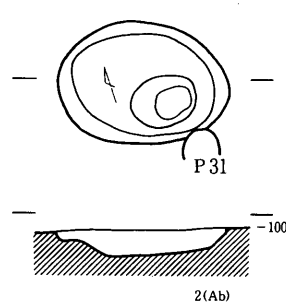
II (Mb, Rb)

土坑 土56



I : 2  
II : 11(Cc, Mc)

土57



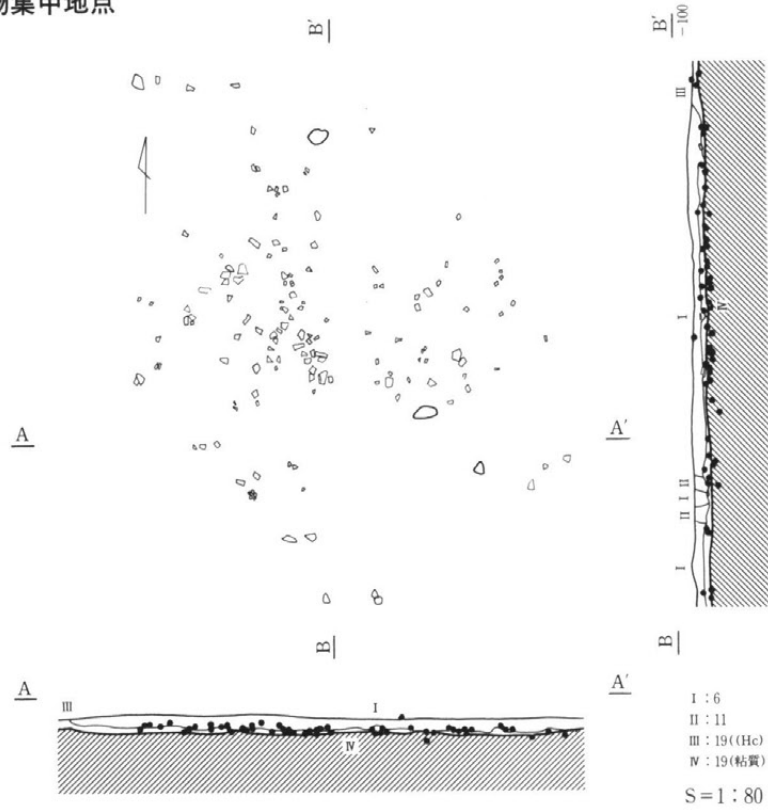
2(Ab)

溝9平面図のみ5m

0 2m

第65図 川西開田遺跡Ⅱ A・B 竪穴状遺構・土坑・溝状遺構

遺物集中地点



第66図 川西開田遺跡ⅡB 遺物集中地点



## 2. 出土遺物

### (1) 縄紋時代の遺物

第1次調査地点では縄紋時代の生活面については調査を実施しなかったため遺構に伴うものはないが、上層、奈良～平安時代あるいはそれ以降の遺構に混入して多数の縄紋中期後半の土器片、土製品（土偶・ミニチュア土器）、石器が出土した。これらのうち土器は在地的な唐草紋系土器の前半期の様相を呈するもので、当該期の集落が下層に存在することを窺わせた。

第2A次調査地点では試掘時に下層の黒褐色土層中から中期中葉の土器・石器が遺構（おそらく住居址）に伴って出土している。

第2B次調査地点では遺物集中に伴う後期堀之内I式土器、石器の他、中期土器も少量出土した。

### (2) 弥生時代の遺物

第2B調査地点において検出された土坑および検出面から中期前半期の土器片（壺・深鉢）、石器（石鏃・打製石斧等）が少量得られている。遺物の特徴は境窪遺跡出土資料と同一であり、弥生時代に関しては第2B次調査地点一帯を境窪遺跡の北縁にあたる地域と捉えるべきであろう。

### (3) 古墳時代の遺物（第72図）

平安時代の2住の覆土中から甕2個体分（1・2）、7住から壺底部片（3）が出土している。いずれもその特徴から古墳時代前期に位置付くもので、混入品とはいえ注意すべき資料である。

1は球形に近い胴部を呈する甕と考えられ、全体に薄く丁寧な作りである。口縁部はくの字状に屈折して外反気味に開く。口縁端部は上方につまみ上げ気味に鋭く面を取る。胴上部は収約が強い。器面の成形・調整は胴部外面および口縁部内面はハケ調整し、後に口縁部内外面ともにヨコナデを行う。胴部内面は入念にヘラケズリを行った後、さらに横方向にミガキを施している。胎土は密で、長石粒・赤褐色粒等を含む。焼成は良好、暗褐色を呈する。口縁部外面には煤が付着している。

2も球胴に近い甕だが、1に比べて肉厚・鈍重な作りである。口縁部は頸部より屈曲して短く開き、端部は丸く収める。器面調整は胴部内面をヘラナデ、胴部外面、口縁部内外面をハケ調整した後、端部にヨコナデを施す。胎土は微砂粒を含み、橙褐色を呈する。

3はおそらく壺の底部と考えられ、胴部は小径の底部より低い角度で外開して立ち上がる。底面は上げ底状を呈する。器面調整は内外面ともに丁寧なナデ調整を行い、器壁は薄い。胎土は長石等の粗い砂粒を多量に含み、前記2点の土器とは異なる特徴を示す。暗褐色を呈し、表面にタール状の黒色物質が付着する。

### (4) 奈良～平安時代の遺物（第67～73図）

#### ①土器・陶器（第67～72図）

住居址出土品を主体に169点を図化・提示した。それらについて遺構単位での形態や組成について検討すると、各遺構出土土器群の特徴は概ね次の4群にまとめることができ、また各群の中でも若干の変化を見ることができる。松本平における古代の土器様相および編年については既に先学により大綱が明らかにされており（例言に文献を記載した）、その成果に照らすとこうした群間および群内での差は時期差を示すものと考えられる。以下、各群ごとにその特徴と時期比定を行ってみる。

第1群 8住出土土器群が該当する。食器類の様相は不明、煮炊具に土師器甕B・Cが見られる。甕Bは第

2群のものと比較して器形、口縁部内面のカキ目の有無、胴部外面のハケ目調整の手法等が異なり、定型化前の古相を呈するものと捉えられる。甕Cの特徴と併せ、3～4期頃に帰属するものと考えられる。

第2群 3・5・6・7・9・10・12・14 住出土土器群が該当し、資料数が最も多い一群である。食器類は黒色土器Aの杯Aを主に椀・皿B、軟質須恵器の杯Aで構成され、土師器・須恵器・灰釉陶器は伴わないか、あってもごく少数である。煮炊具は甕B、小型甕Dを主体とする。黒色土器Aの杯Aは底部糸切り、土師器甕Bは口縁部内面にカキ目、胴部に縦方向のハケ目調整を施し、定型化した個体差の少ないものである。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式に比定されるものである。このように土器様相としては全体に7～8期の特徴がよく表れているものと言え、さらに細かく見るならば須恵器杯類を伴い軟質須恵器の見られない3・7住に古相を、土師器の杯類や灰釉陶器が伴う9・10住出土資料に新しい様相を見出すことができようか。

第3群 1・2・4・11・13・15 住出土土器群が該当する。食器類は土師器杯Aを主体に椀、黒色土器椀、灰釉陶器碗・皿で構成され、須恵器・軟質須恵器はまったく見られず、第2群で主体だった黒色土器A杯Aもほとんどない。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式に比定されるものが多い。加えて緑釉陶器D類の碗・皿がわずかに伴っている。煮炊具の土師器は胴部の上半がロクロ調整された甕B、ロクロナデのみの小型甕D、非ロクロ調整の小型甕E、甗B等で構成され、第2群とは様相を一変させる。こうしたあり方は9期以降の土器様相として捉えることが可能であるが、さらに土師器杯Aの口径と器高の分布に着目すると、各住居址出土資料に一定の傾向を見出すことができる。先ず1・2・4住出土資料で口径11～13cm、器高3.1～3.9cmの範囲に分布し9期、次に11住出土資料で口径11～12cm、器高3.1～3.8cmで10期、さらに15住出土資料では小型化が著しく口径10.8～10.9cm、器高3.0～3.1cmで11期の様相に相当するものである。

## ②鉄器 (第73図)

9点を図化・提示した。いずれも古代のもので、多くは住居址出土品である。

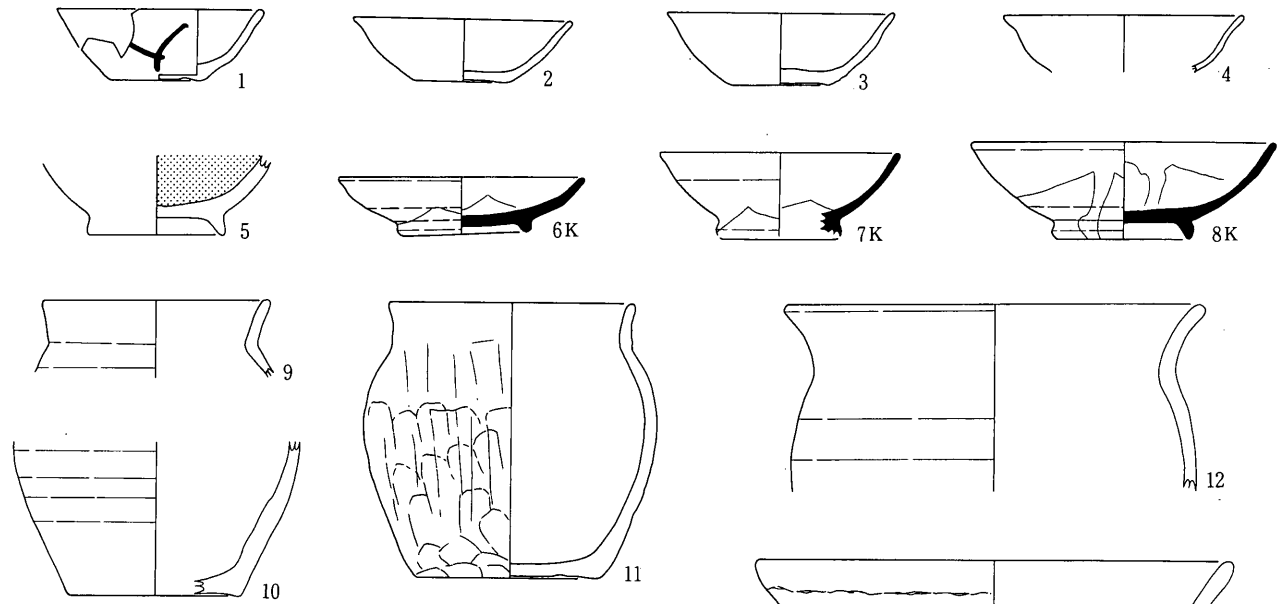
1は釘で、頭部を欠く。現存長3.6cm。2は苧引金具で刃部は薄く尖り、脚部には木質が残る。長さ8.3cm。3は鎌で着柄部を欠損する。折り返しの向きから左利き用と考えられる。7も鎌で身部長16.3cmを測る完形品である。2点とも基部が幅広で、刃部へは急激に屈曲して移行、幅も狭める。4は鎌の先端部か、薄い作りである。5は刀子で、先端部と基部の大半を欠く。刃側に関を設け、肉厚である。6はほぼ完形の雁股鎌で、身部は短く篋被部は逆三角形状を呈する。長さ13cm。9・10は出土状況から一対になるもので、馬具木鐙の頭部に接続する逆U字状金具である。10に鎖が固定されている他は2点とも同じ形態で、前金具は笹の葉状、後金具は羽子板状を呈し目釘が残る。前金具と後金具との間隔は3cm程で、木鐙頭部の厚みを示す。

## ③銅製品・銭貨 (第73図)

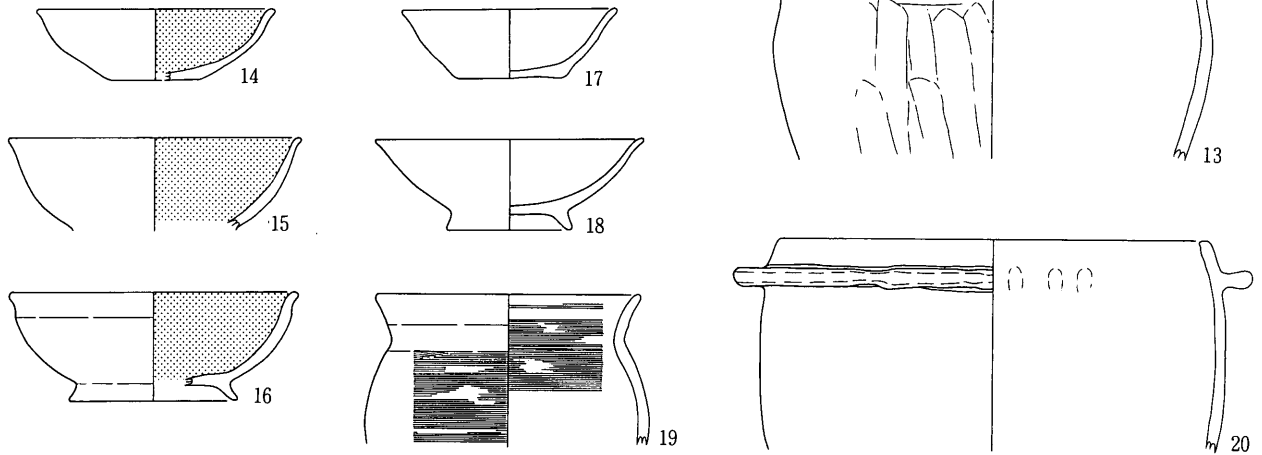
11は溝9より馬具とともに出土した円盤状の製品で、素材は比較的良質ではあるが二次的に受けた熱により変色・劣化を生じている。その際に生じたものか表面も凹凸が激しいが、本来は平滑な面をなしたものである。直径8.5cm、厚さ1mm内外を測り、中央部と縁部に近い位置に2個所の孔が見られる。おそらく意図的に穿たれたものであろう。外縁部は裏側にやや反り気味となり、端面の処理はあまり平滑ではない。出土状況から見て9・10の馬具、すなわち鐙の吊金具とともに整然と置かれたものと考えられるが、その性格は不明と言わざるを得ない。あるいは御正体とも考えたが線刻像等もなく決定根拠に欠ける。

8は同じ溝9内より近接して出土したもので、延喜通寶(初鑄907年)である。銭径1.8cmを測るが素材の質は不良で、劣化が著しく脆弱である。鑄潰れにより銭銘の判読も難しい。

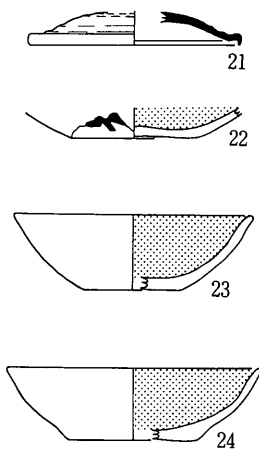
1住(1~13)



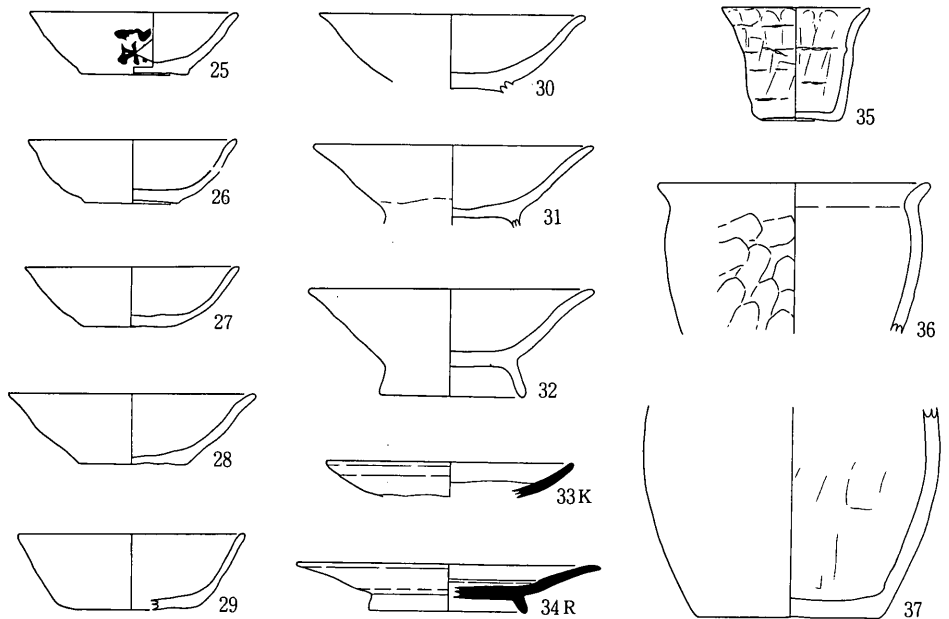
2住(14~20)



3住(21~24)



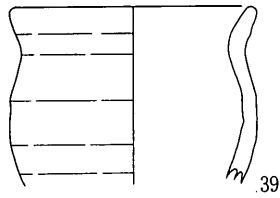
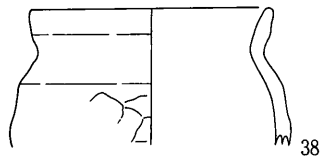
4住(25~40)



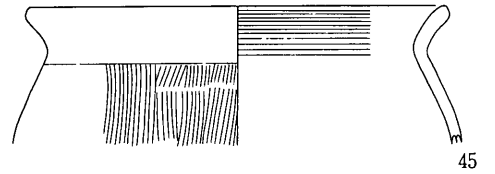
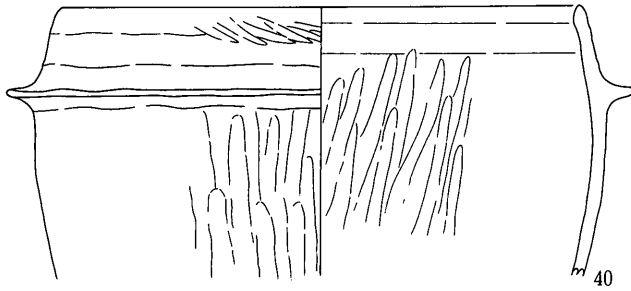
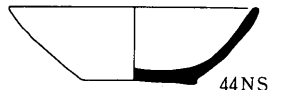
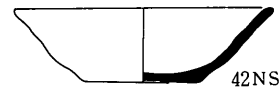
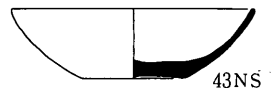
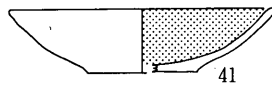
NS : 軟質須恵器  
 K : 灰釉陶器  
 R : 緑釉陶器

0 10cm

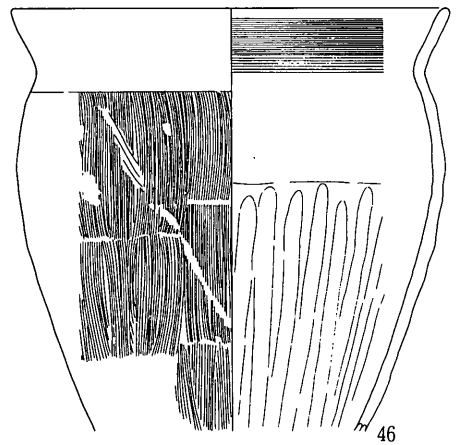
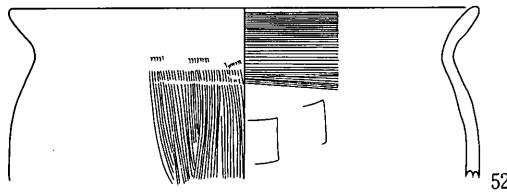
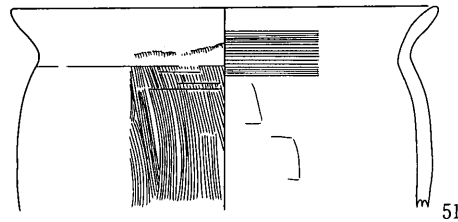
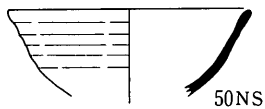
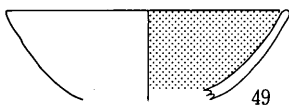
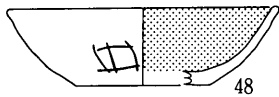
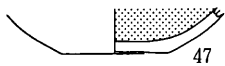
第 67 図 川西開田遺跡 土器 (1)



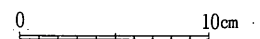
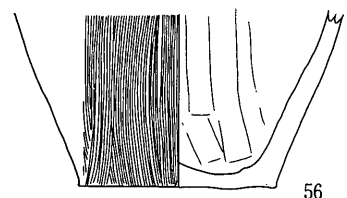
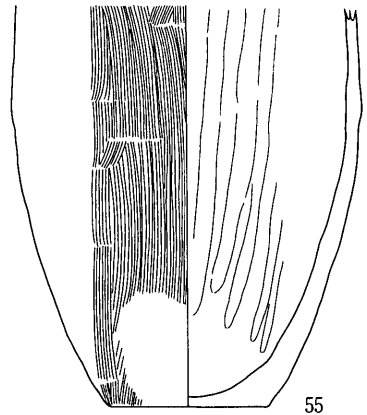
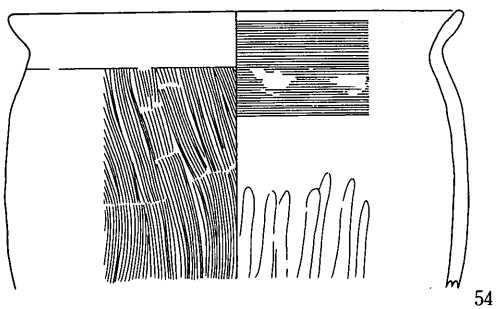
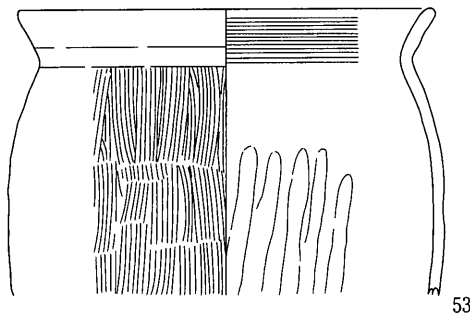
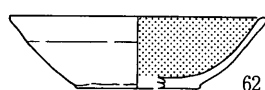
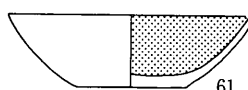
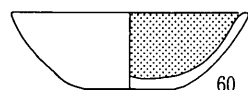
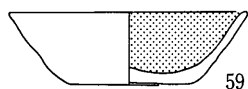
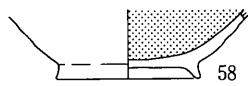
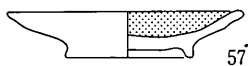
5住(41~46)



6住(47~56)

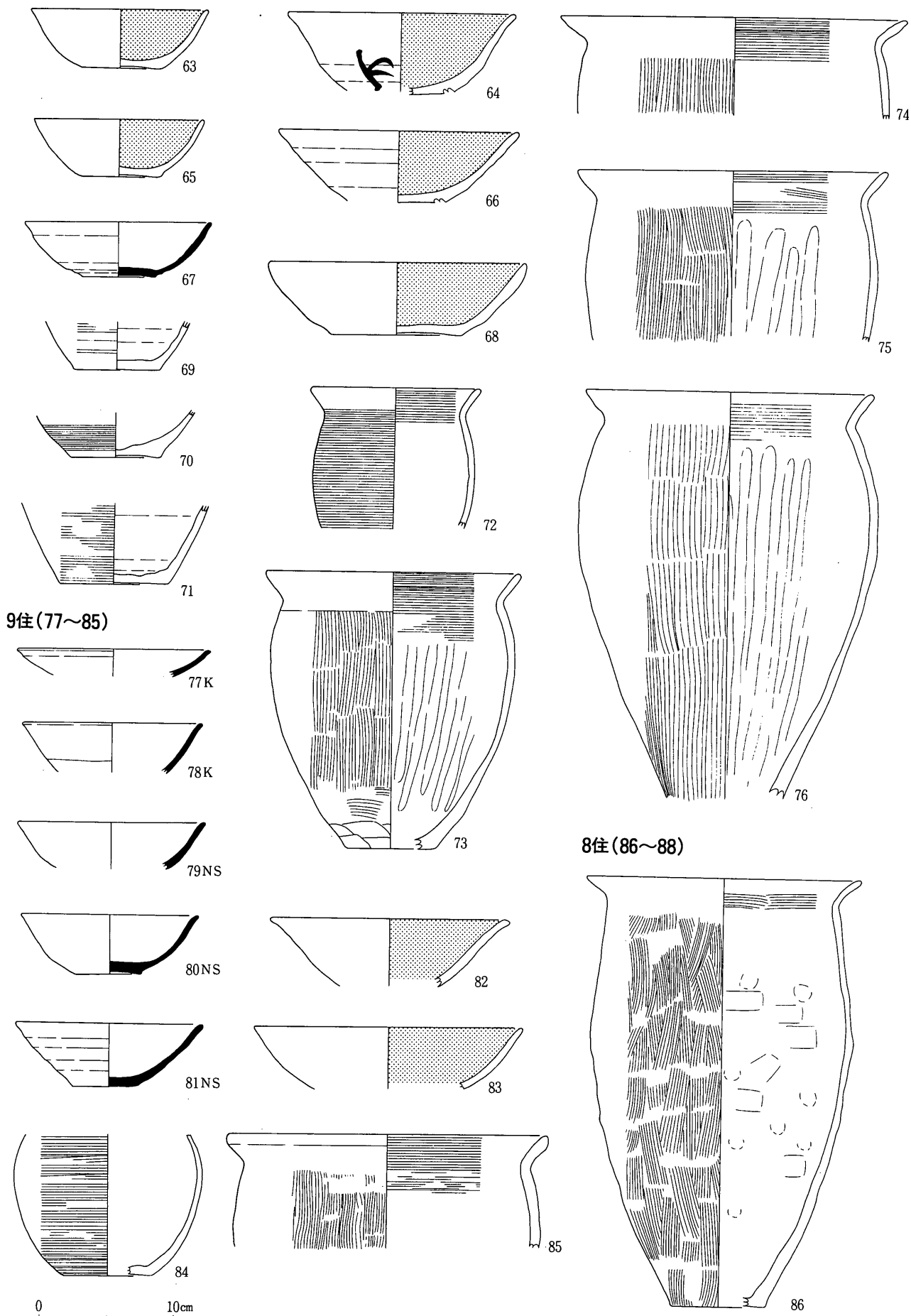


7住(57~76)

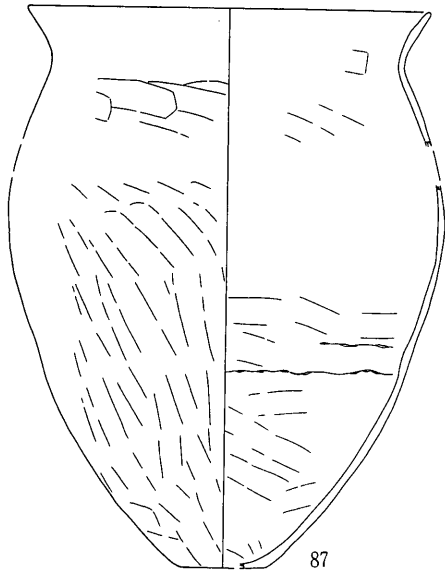


第68図 川西開田遺跡 土器(2)

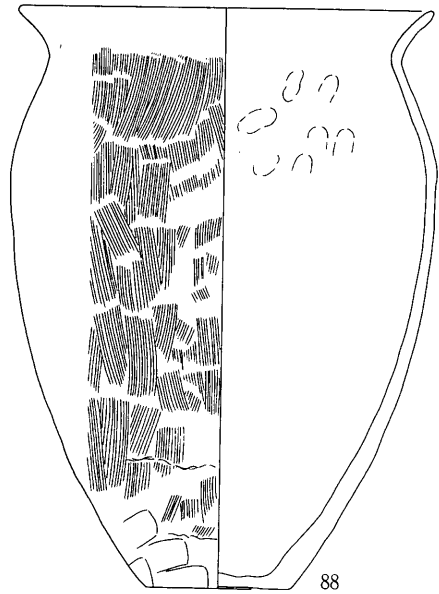




第69図 川西開田遺跡 土器(3)

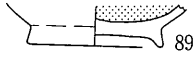


87

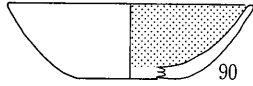


88

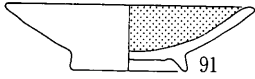
10住(89~107)



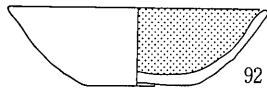
89



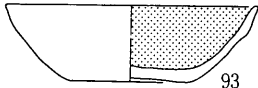
90



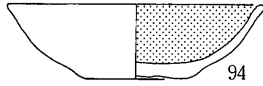
91



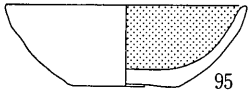
92



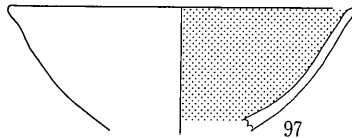
93



94



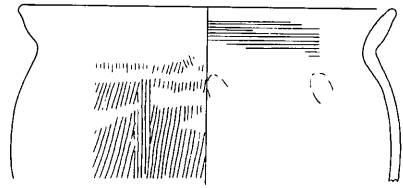
95



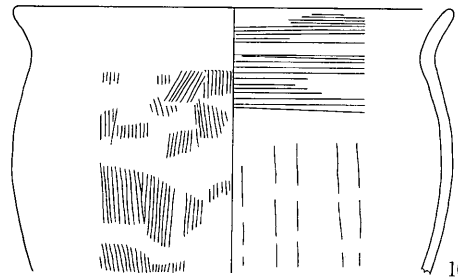
97



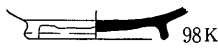
96



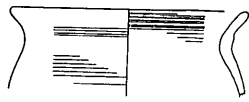
105



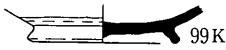
106



98K



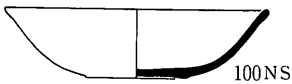
102



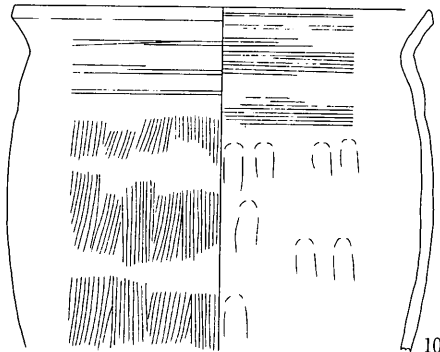
99K



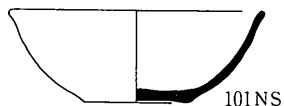
103



100NS



107

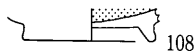


101NS



104

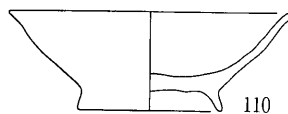
11住(108~125)



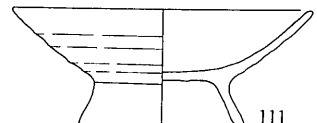
108



109



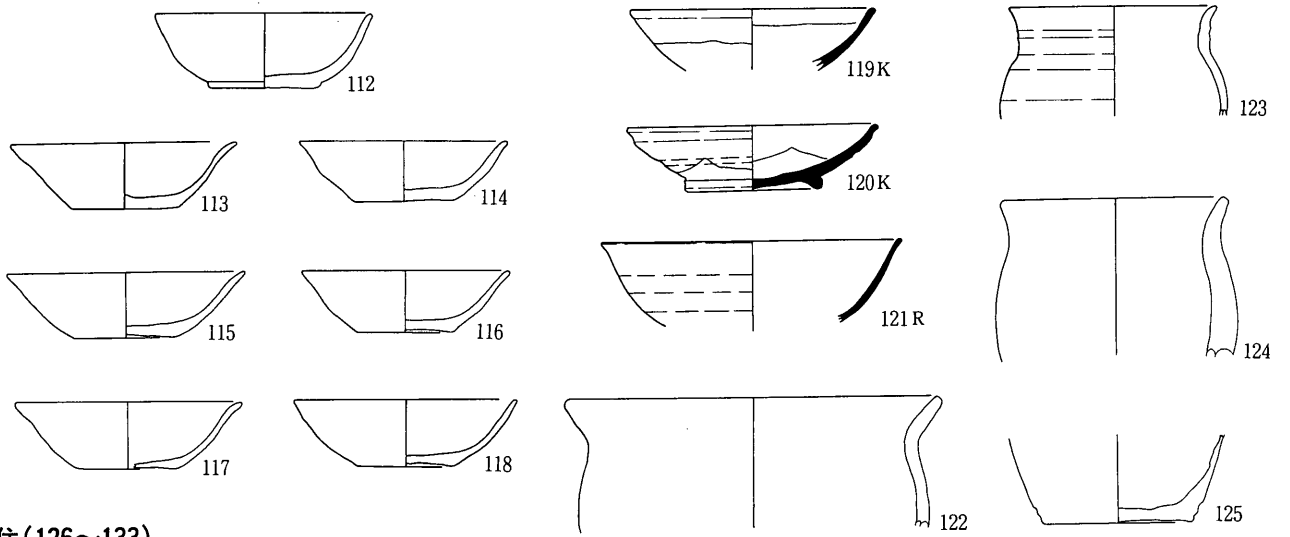
110



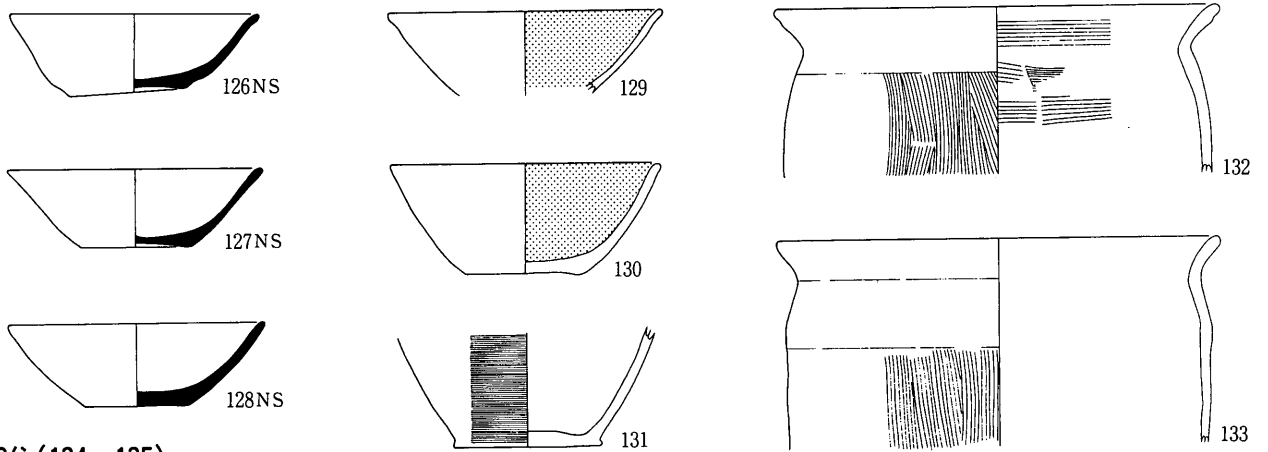
111

0 10cm

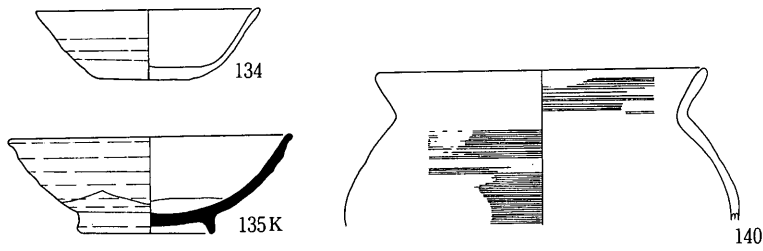
第70図 川西開田遺跡 土器(4)



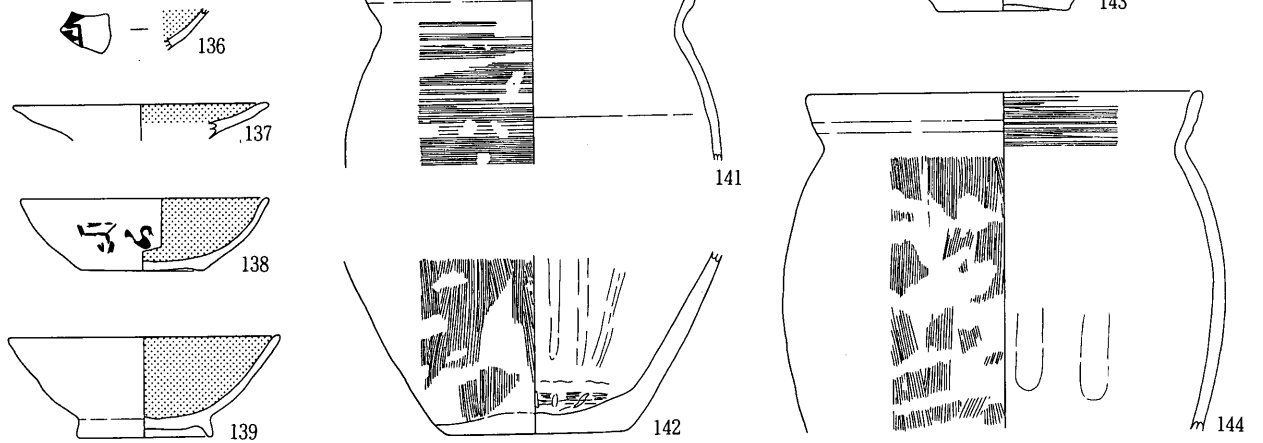
12住 (126~133)



13住 (134~135)



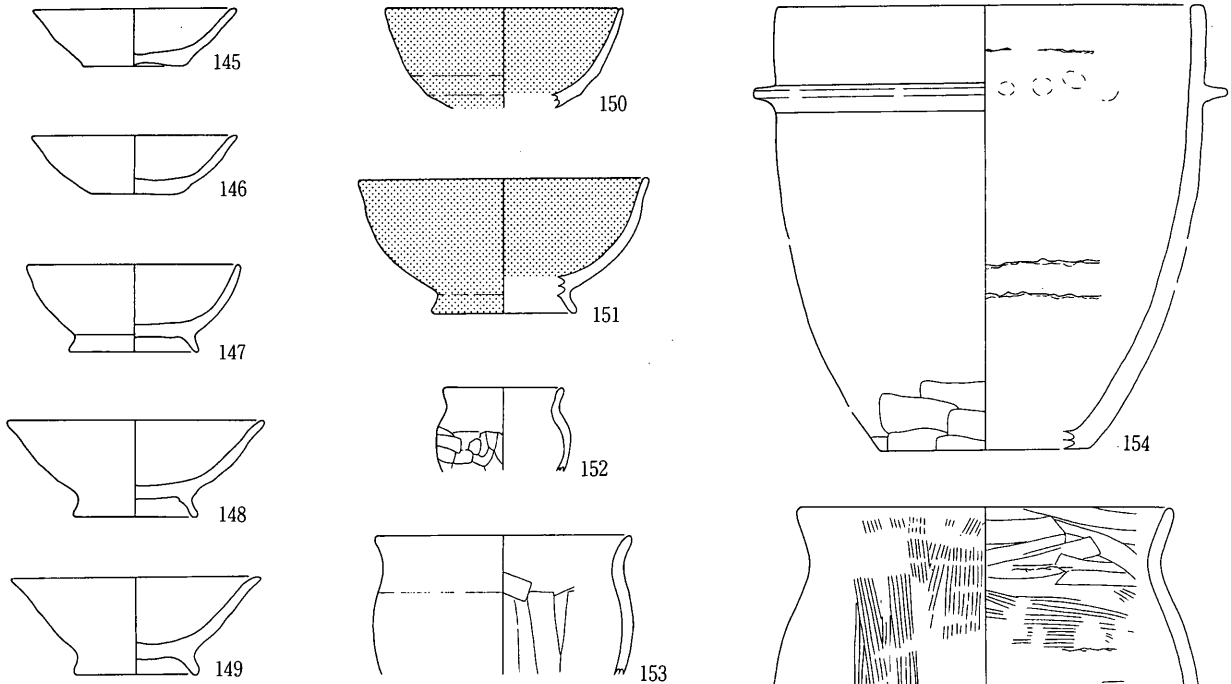
14住 (136~144)



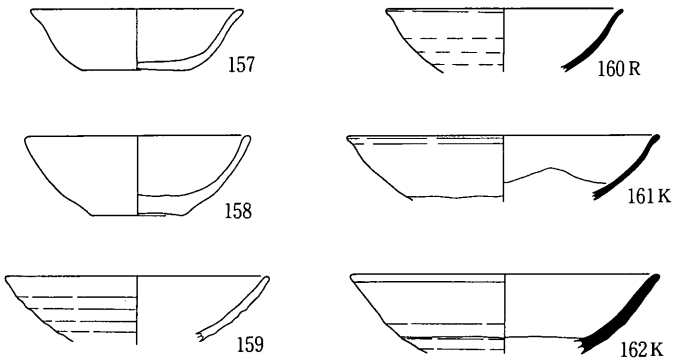
0 10cm

第71図 川西開田遺跡 土器 (5)

15住(145~156)



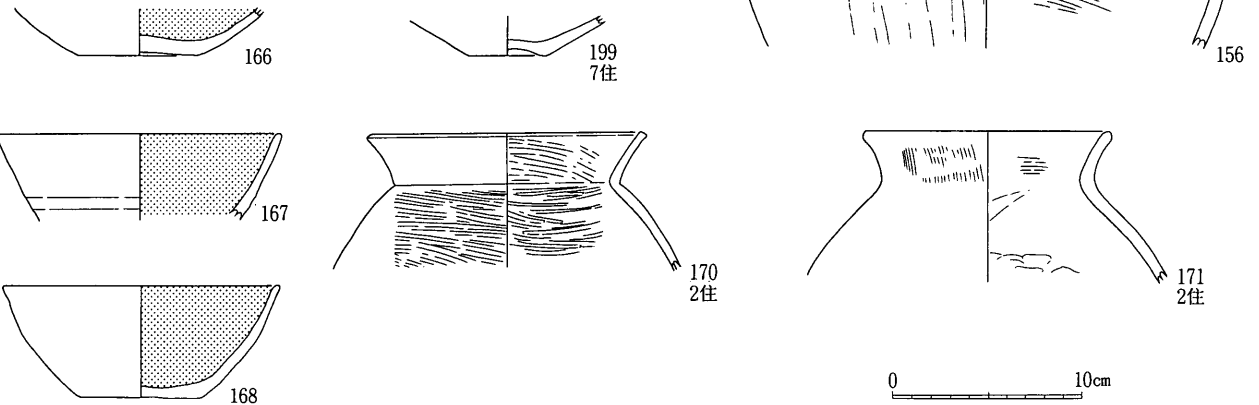
16住(157~163)



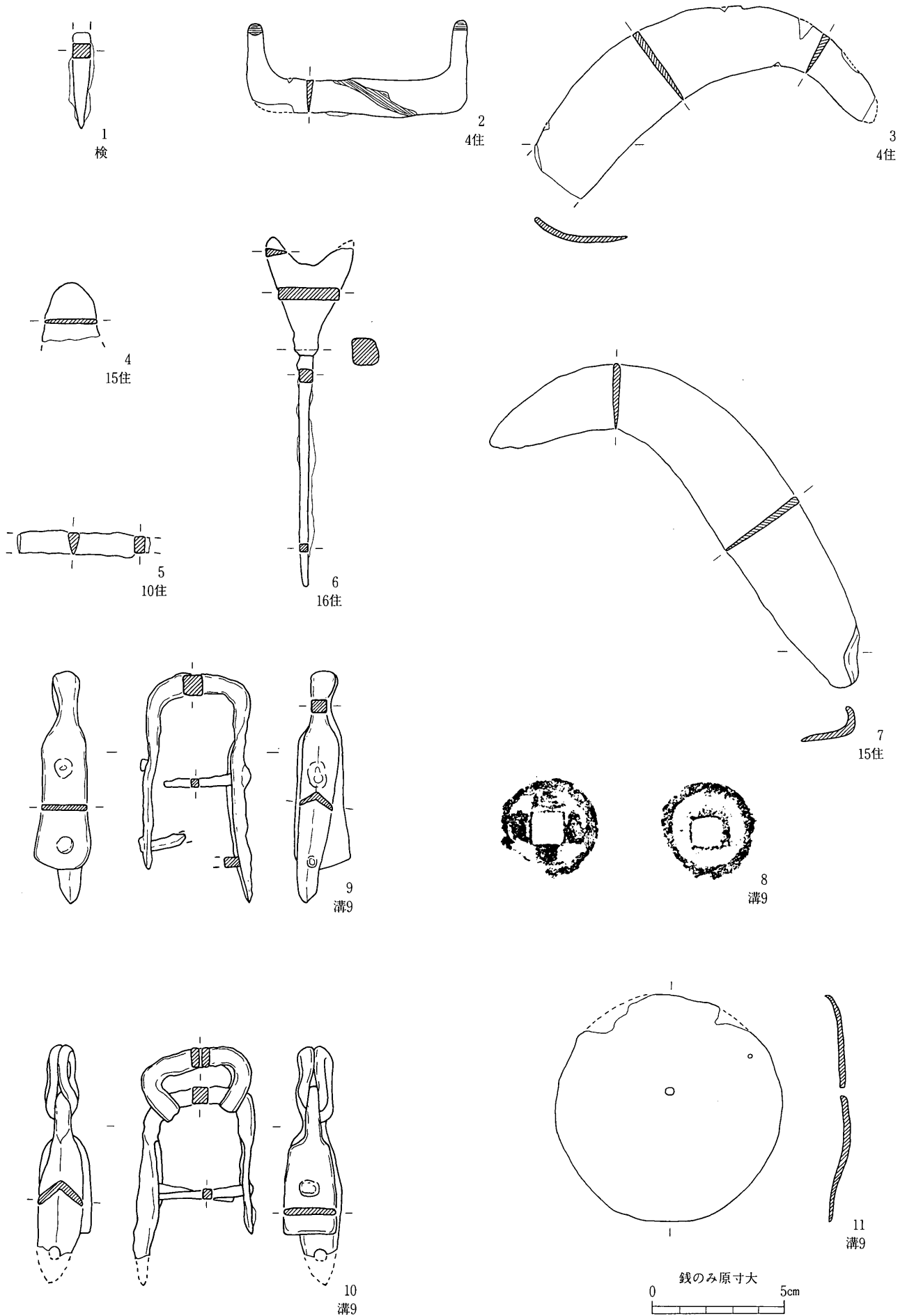
溝1(164~168)



その他(169~171)



第72図 川西開田遺跡 土器(6)



第73図 川西開田遺跡 鉄器・銅製品

### 3. まとめ

---

今回の3地点での発掘調査から、今まで不鮮明であった川西開田遺跡の実態にある程度迫るだけの情報を得ることができた。遺跡の範囲はどこまでかと言う問いについては、各時期各様でその把握は今回の調査だけでは不十分であり、今後の調査の積み重ねが必要となろう。しかし縄紋時代から平安に至る各時代にわたって断続的に集落が営まれることが判明した。ここでは調査のまとめとして、各時代の集落についてその展開を追ってみたい。

**縄紋時代** 今回ほとんど調査を行っていないが、第1次調査区一帯に中期後半の集落が、また第2 A次調査区を中心に中期中葉の集落が広がることが確実である。また第2 B次調査区付近や、境窪遺跡では後期前葉の遺物が出土しており、縄紋集落の下限を示している。おそらくこの時代の集落は鎖川と三間沢川に挟まれた沖積面の微高地上に、居住域をわずかずつ変えながら展開したものと予想される。巨視的に見れば松本平西部の縄紋遺跡群の一つとして位置付けられるものであろう。最も近接する他の中期集落としては三夜塚遺跡（山形村）があるが、ローム層の及ばない不安定なこの地域にも安定して集落が営まれることについてはあまり認識がなかったものであり、鎖川流域における遺跡のあり方について一考を促すものとなろう。

**弥生時代** 第2 A次調査区において数基の土坑と遺物を得たが、これらの時期は中期前半で境窪遺跡の時期と合致するものであった。位置的にも境窪遺跡から連続する地形面上であり、生業活動等、この地が境窪集落の活動の場であったものと捉えられよう。

**古墳時代** 遺物整理段階で前期土器が存在することが判明し、予想外の成果となった。遺構こそ未発見ながら遺物は良好であり、付近に生活址の存在することは確実であろう。奈良井側以西における古墳時代前期の遺跡はほとんど周知されておらず、唯一島立三の宮遺跡において集落が調査されたにとどまっている。鎖川流域においては初見の事例であり、松本平西部における集落分布を考える上で重要な資料を提供した。

**奈良～平安時代** 15棟の竪穴住居址、3棟の掘立柱建物址を得ることができた。また境窪遺跡でも2棟の住居址が検出された。その大半は7～10期、すなわち平安時代9世紀中葉～10世紀中葉にかけてのものであり、集落の継続時間を示している。第2 A次調査地点では11期に下る住居址が1棟あり（15住）、遅くとも10世紀後葉には集落が途絶えたものと捉えられる。集落の規模はせいぜい数棟から十数棟の住居址からなるまとまり＝小集落が数百m程度の間隔を置いて散在する状況が考えられる。しかし一方でこれらの集落がその規模の割合には緑釉陶器や銭、豊富な鉄製品、水路等を保有していた点は重要である。目を転じてこれらの集落とは三間沢川を挟んで対岸に位置する三間沢川左岸遺跡を見ると、ここでは生産基盤を想定し難い高燥とした地に270棟以上の竪穴住居址、掘立柱建物が密集し、集落外から用水路が引き込まれている。住居址の中には大型建物も見られ、9世紀中葉に突如として現われ、10世紀後葉には途絶えてしまう。遺物は「王」の墨書土器や緑釉陶器、青銅製の帯金具、八稜鏡や「長良私印」の出土等、通常の集落とは異なる様相を呈し、それらの状況から荘園に関わる集落としての性格が濃厚である。こうした三間沢川左岸遺跡での所見から、集落のスケールこそ異なるものの、継続時期や遺物のあり方等川西開田遺跡とは共通点が多く、互いに連関して複合体をなしていた可能性が高い。言い換えれば三間沢川左岸遺跡を核に、衛星状に小集落がとりまいていた状況が想定できよう。9世紀中葉以降にわかに開始された三間沢川流域、鎖川左岸地域における開発が、高い計画性の下に推し進められたことを、これら一連の調査で明らかにできた意義は大きい。

最後に、境窪・川西開田両遺跡の調査を通じてご理解とご協力をいただいた関係者、神林土地改良区および地元の皆様に謝意を表して本書の締めくくりとしたい。

# 付 編

## 1. 境窪遺跡放射性炭素年代測定結果報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

境窪遺跡は、松本市西部を流れる三間沢川右岸の微高地上に位置する。発掘調査によって検出された住居址は、出土した土器から弥生時代中期前半頃のものと考えられている。ここでは、住居跡覆土より出土した炭化材の放射性炭素年代を測定することにより、その住居跡の年代を検討する。

### (1) 試 料

試料は、第5号住居址覆土より採取された炭化材2点である。試料名は、No.1: 第5号住居址取り上げNo.20、No.3: 第5号住居址取り上げNo.18である。

### (2) 分析方法

#### ①前処理

乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を、除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰り返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は醇酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は補集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。

#### ②測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとした）にシンチレーターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とした。

#### ③測 定

測定は、液体シンチレーションカウンターにより、1回の測定時間50分間を20回繰り返し計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然係数を測定するブランク試料と一緒に測定した。

#### ④計 算

放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用した。

### (3) 分析結果

測定結果を下表に示す。

第10表 放射性炭素年代測定結果

試 料				年代値 (年前)	誤 差		Lab No.
試料番号	出土遺構	備 考	性 状		+	-	
No. 1	第5号住居址	取上 No.20	炭化材	2,380	220	220	PAL-219
No. 3	第5号住居址	取上 No.18	炭化材	2,350	630	580	PAL-220



注 (1) 年代値: 1,950年を基点とした値。

(2) 誤差: 測定誤差  $2\sigma$  (測定値の95%が入る範囲) を年代値に換算した値。

(3) PAL: パリノ・サーヴェイ (株) で測定。

#### (4) 考察

炭化材2点の年代値はほぼ同様の値を示し、互いに同時期のものと考えて良い。誤差の値が異なるが、これは試料の質量の違いが反映していると考えられる。

約2,300年前という年代値は、一般的な弥生時代の時期区分においては前期の初頭頃に相当する。したがって、共伴した土器の型式から推定される中期前半とは、約200年のずれが存在する。これについて、次に述べるいくつかの原因が考えられる。

まず、住居跡と土器と炭化材の3者の年代的なずれが考えられる。すなわち、最も古いのは住居の年代であり、それが埋積する過程で100年単位の時間間隙で土器や炭化材が入り込んだという場合である。次に考えられるのは、放射性炭素年代と暦年代とのずれである。これは、良く知られていることであるが、過去の大気中のCO<sub>2</sub>における<sup>14</sup>Cの濃度が、現在のそれとは同一でないことや、年代測定の計算に用いられている半減期の年代が、その後の実験により実際の半減期とは2%ほど異なっていることなどの理由により、測定年代と暦年代は必ずしも一致しない。暦年代への補正は、年輪年代のわかっている樹木について年輪毎の放射性炭素年代を測り、暦年代と測定年代とを対応させた曲線を用いることによって行われるが、現在はまだまだ様々な曲線が存在し、多くの問題点も含んでいる。したがって、ここでは特に補正は行わないが、上記のような200年ほどのずれは、この補正值に入る可能性もあり得る。

現時点では断定的なことは言えないが、今後も今回の住居跡の時期にかかわるような年代試料の増加があれば、再検討したい。

## 2. 境窪遺跡出土炭化材樹種同定結果報告

森 義直

### (1) 炭化材樹種同定結果

#### ①第5号住居址

灰化したものが多く、確認できたもののみ記す。

樹種 コナラ材 (多い)、クヌギ材 (少ない)、ハルニレ材 (1片)、他。

- |     |           |                  |
|-----|-----------|------------------|
| 試料1 | 取り上げNo.17 | コナラ              |
| 試料2 | 取り上げNo.18 | コナラ              |
| 試料3 | 取り上げNo.19 | コナラ (多)、ハルニレ、クヌギ |
| 試料4 | 取り上げNo.20 | クヌギ、コナラ、灰化が著しい   |
| 試料5 | 取り上げNo.21 | コナラ、灰化が著しい       |
| 試料6 | 取り上げNo.22 | クルミ、コナラ          |

#### ②第7号住居址

灰化したものは少ない。

樹種 クリ材 (非常に多い)、コナラ材 (多い)、クルミ材 (やや多い)、スギ材 (少ない)

- |     |           |                |
|-----|-----------|----------------|
| 試料1 | 取り上げNo. 1 | ヒノキの仲間         |
| 試料2 | 取り上げNo. 3 | クリ             |
| 試料3 | 取り上げNo. 4 | クリ (多)、コナラ     |
| 試料4 | 取り上げNo. 5 | クルミ            |
| 試料5 | 覆土 NE     | ヒノキまたはサクラ、クリ   |
| 試料6 | 覆土 NE     | クリ、ハルニレ        |
| 試料7 | 覆土 SE     | ハルニレ (多)、スギ、クリ |
| 試料8 | 覆土 NW     | コナラ、クリ、クルミ     |
| 試料9 | 覆土 SW     | クリ、クルミ、コナラ     |

#### ③第11号住居址

灰化したものが多く、確認できたもののみ記す。

樹種 クリ材、コナラ材、クヌギ材、他

- |     |    |              |
|-----|----|--------------|
| 試料1 | 覆土 | クリ、コナラ、灰化著しい |
| 試料2 | 覆土 | クヌギ、コナラ      |

### (2) 所見

5住と11住の炭化材は灰化の進んでいるものが多く、確認できたもののみ記したので当時の住居周辺の環境を推定するには適当とは思えないので、保存状態の良好な (あまり灰化しないうちに炭になったの意) 7住の炭化材から弥生中期における住居周辺部の植生を復元すると、住居の周辺にはクリ林とコナラ林が広がり、所々にクルミの木が茂り、針葉樹は少なく、冬は明るい落葉樹林であり、秋にはクリ・ナラ・クルミなどの実が多量に得られたものと推定される。マツ材が全くみられないのは、縄紋樹林と似ているが、縄紋樹林よりクリ材やクルミ材が多く、どこことなく不自然な感じがする。それは純粋な自然林ではなく、ある程度自分達の食料に都合がよいように、人為的に植生をコントロールしていた可能性が高いと見られるからである。

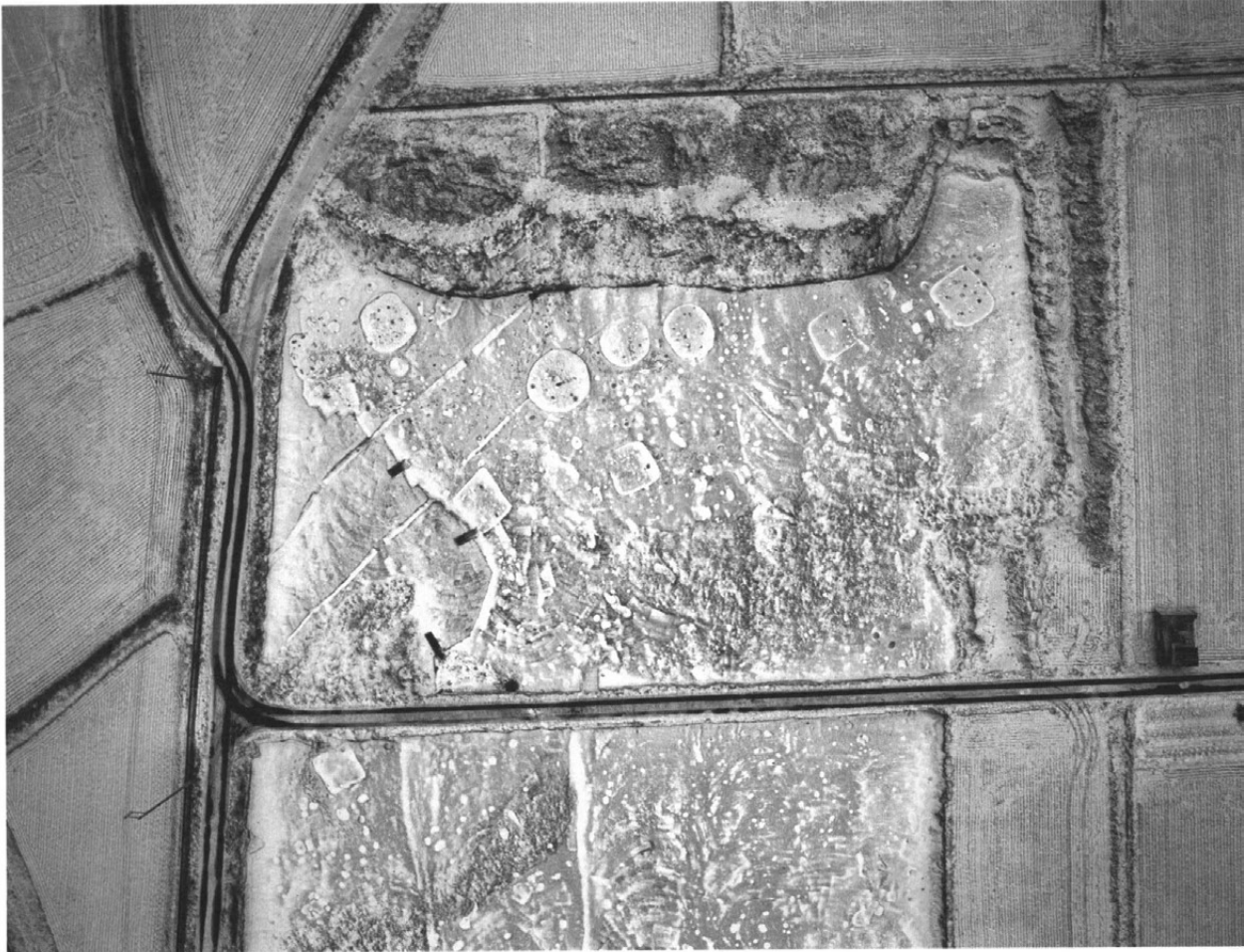
中信地区では5C末頃からマツ材の炭が出土し始め9Cには非常に多くなってくる。

圖 版

---



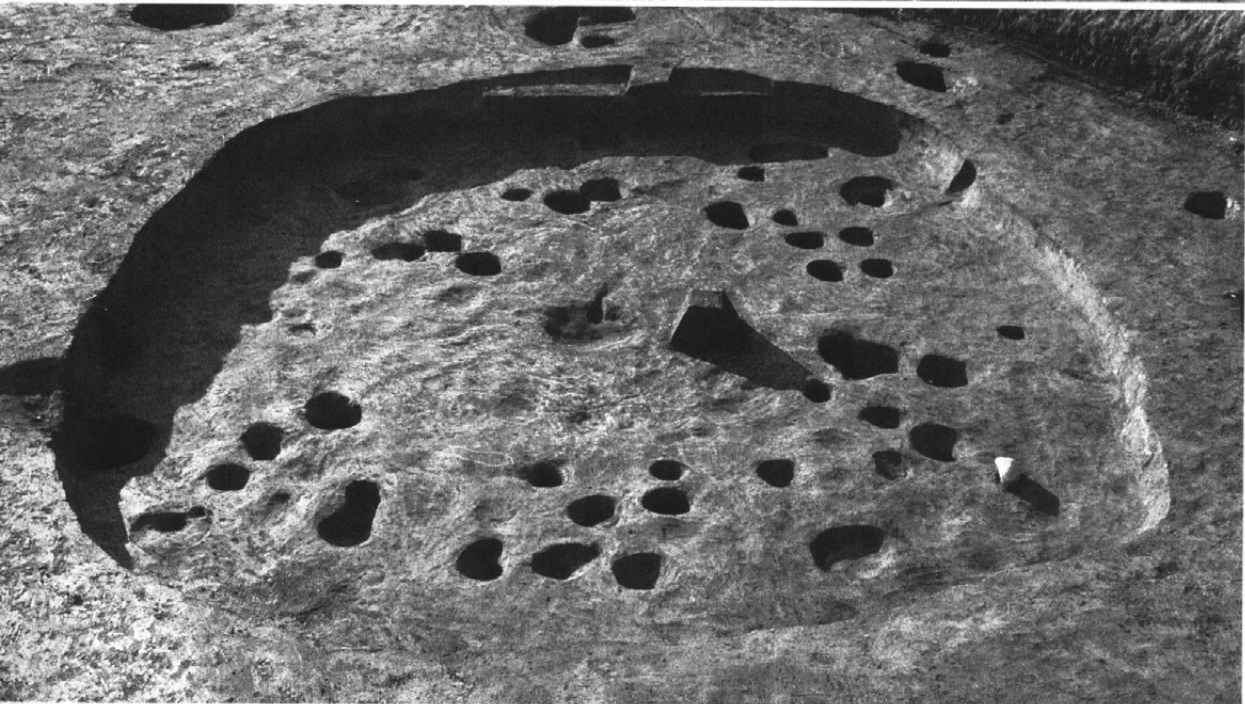
境窪遺跡全景（南から）



同上 B区全景（右側が北方向）



境窪遺跡  
2住全景（西から）



同上  
3住全景（東から）



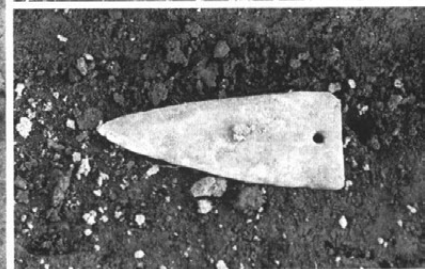
同上  
4住全景（東から）



境窪遺跡

4 住遺物出土状況

- 左：土器出土状況
- 右上：土製紡錘車
- 右下：磨製石鏃



同上

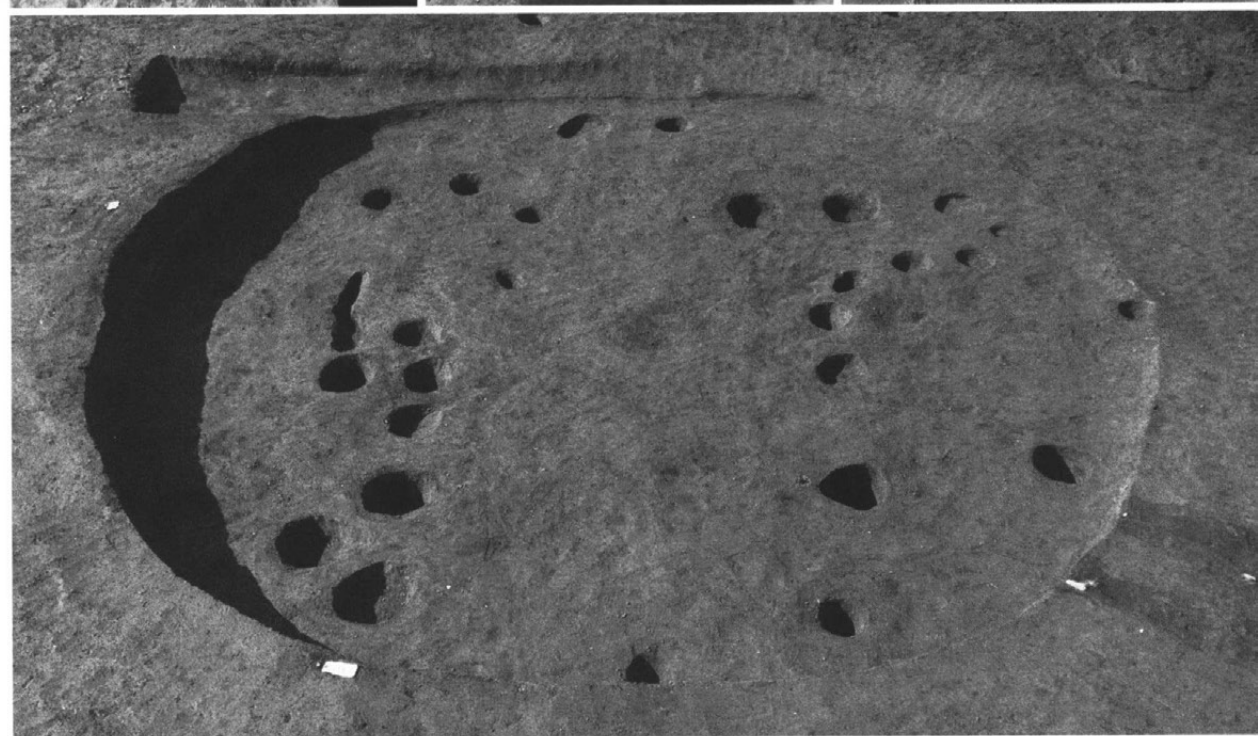
5 住遺物出土状況他

- 左：炉址
- 中：壺下半部
- 右：太型蛤刃石斧



同上

7 住全景（東から）



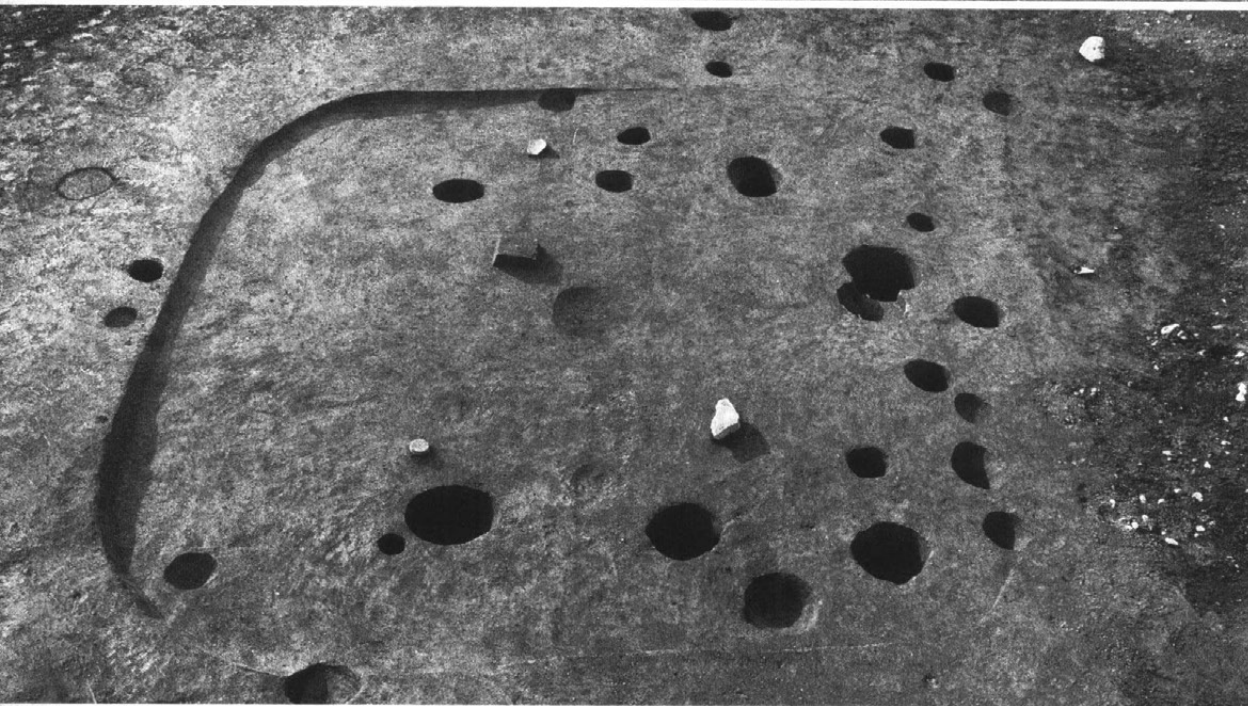
同上

7 住遺物出土状況

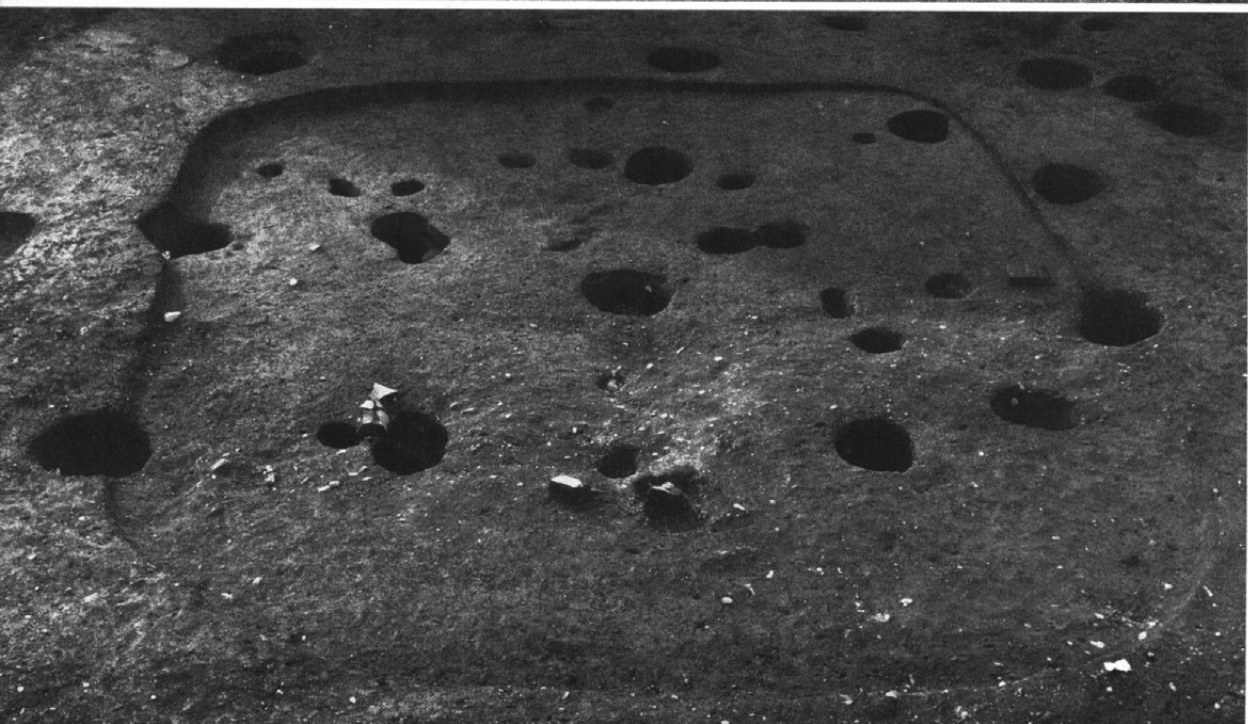




境窪遺跡  
8住全景（南から）



同上  
9住全景（東から）



同上  
10住全景（東から）



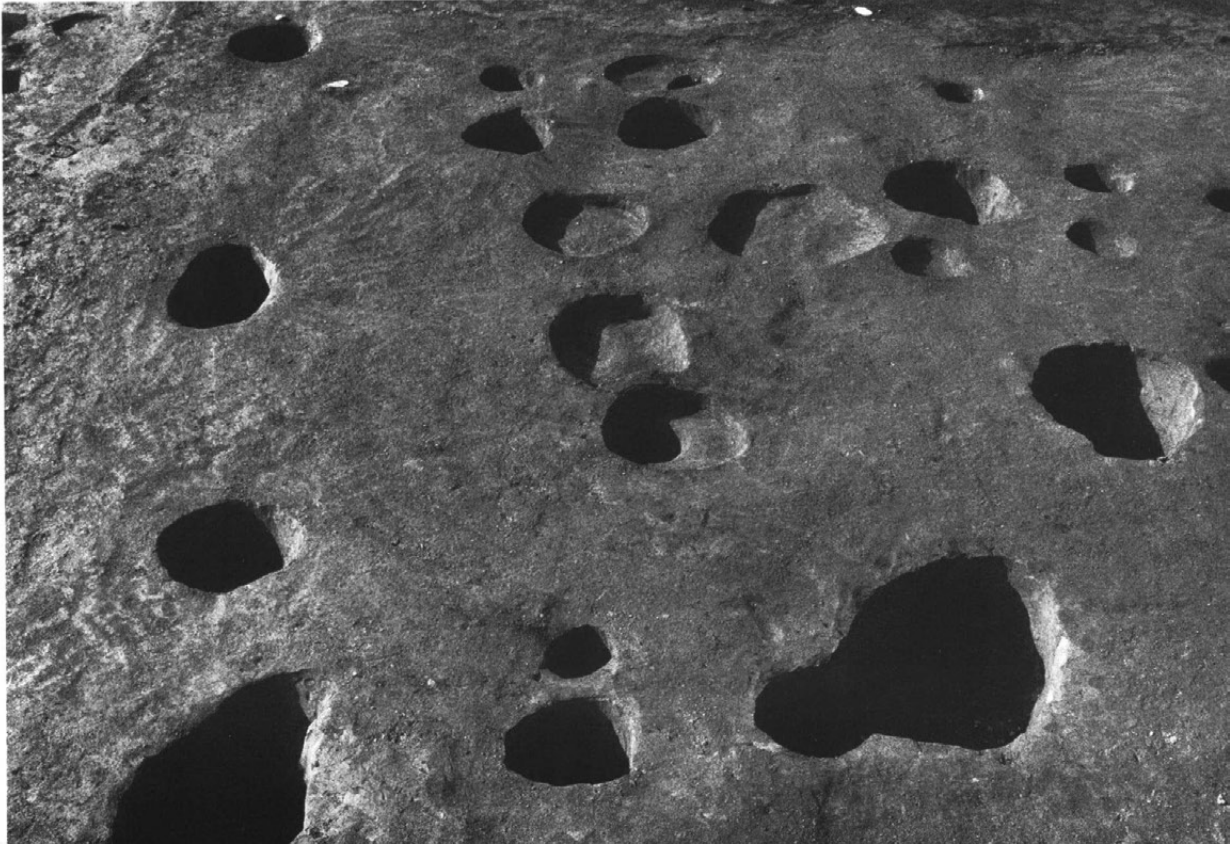
境窪遺跡  
11 住全景 (東から)



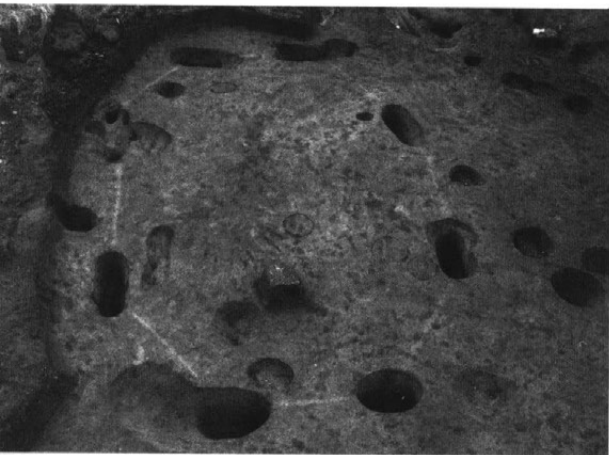
同上  
12 住全景 (西から)



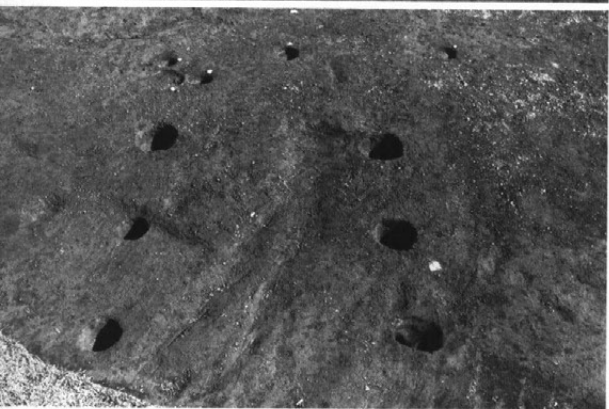
同上  
平地建物址 1 (東から)



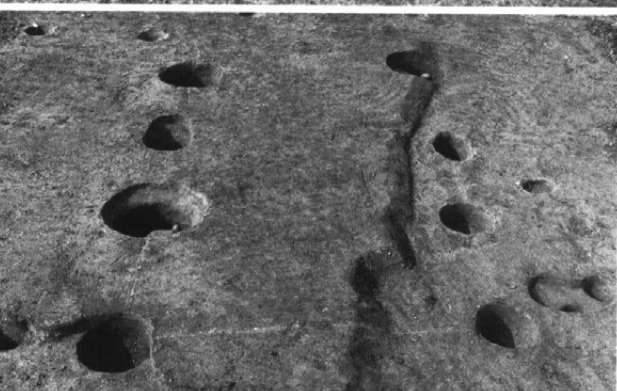
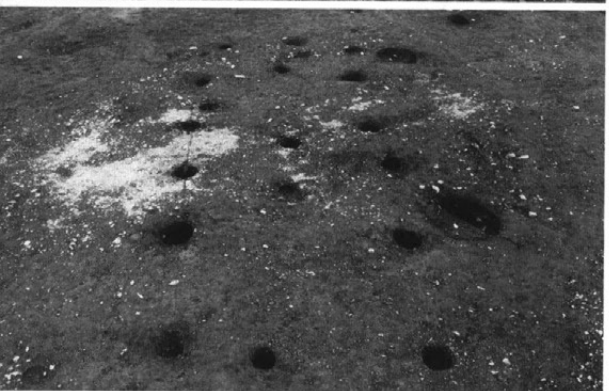




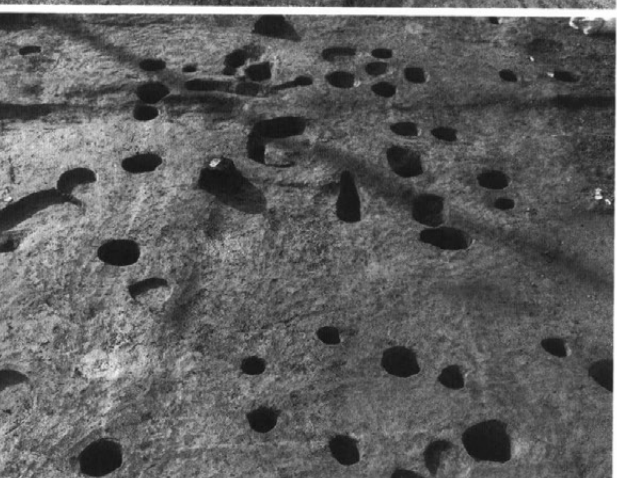
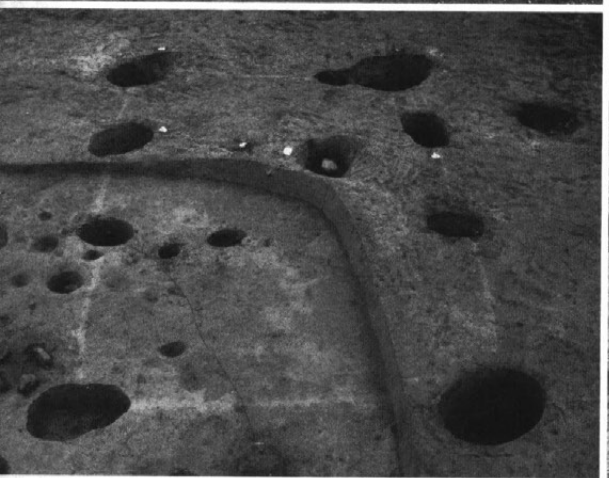
境窪遺跡  
左：平地建物址 2  
（東から）  
右：建物址 2（南から）



同上  
左：建物址 1（南から）  
右：建物址 3（北から）



同上  
左：建物址 5（東から）  
右：建物址 6（東から）

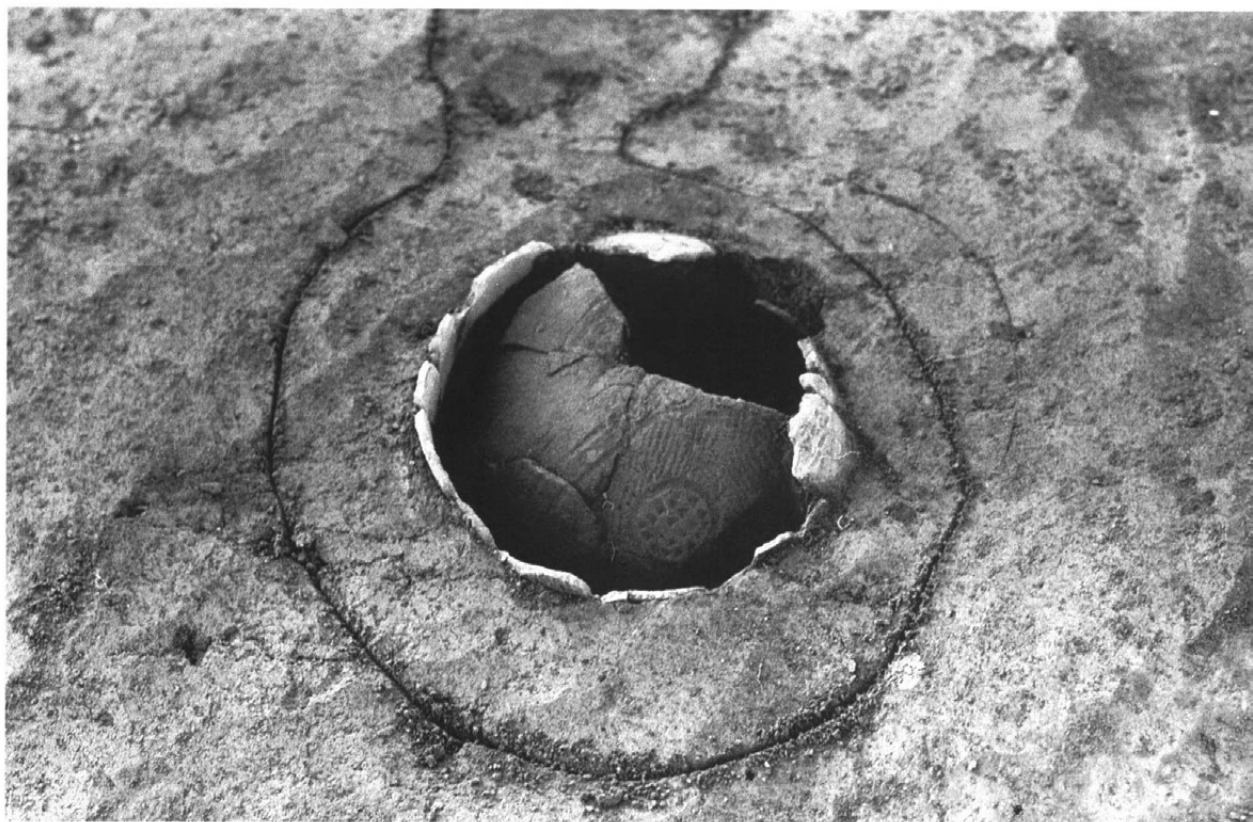


同上  
左：建物址 8（東から）  
右：建物址 9（東から）



同上  
建物址 6 ピットの状況  
左：P 1  
右：P 7

境窪遺跡  
土器棺墓



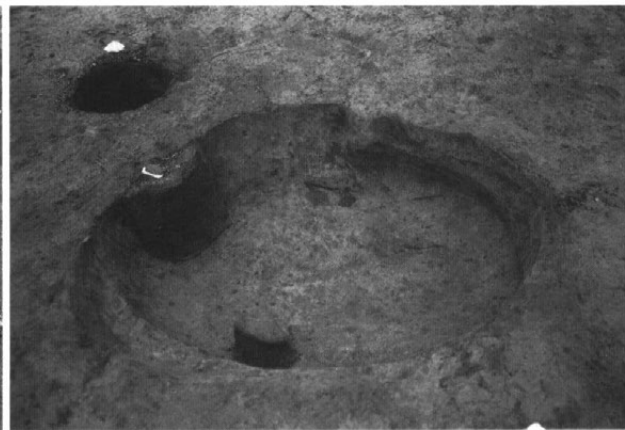
同上  
棺内部の状況



同上  
磔床木棺墓（北から）



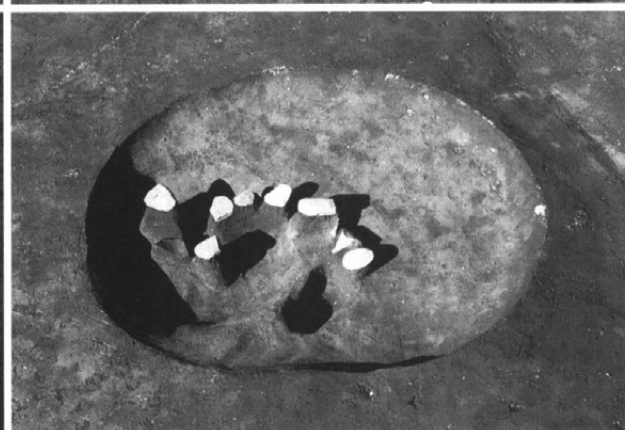




境窪遺跡  
左：土坑 131  
右：土坑 162



境窪遺跡  
左：土坑 172  
右：土坑 173



境窪遺跡  
左：土坑 174  
右：土坑 176



境窪遺跡  
左：土坑 184  
右：土坑 194



同上  
左：ピット 441  
右：ピット 442



4



3



7



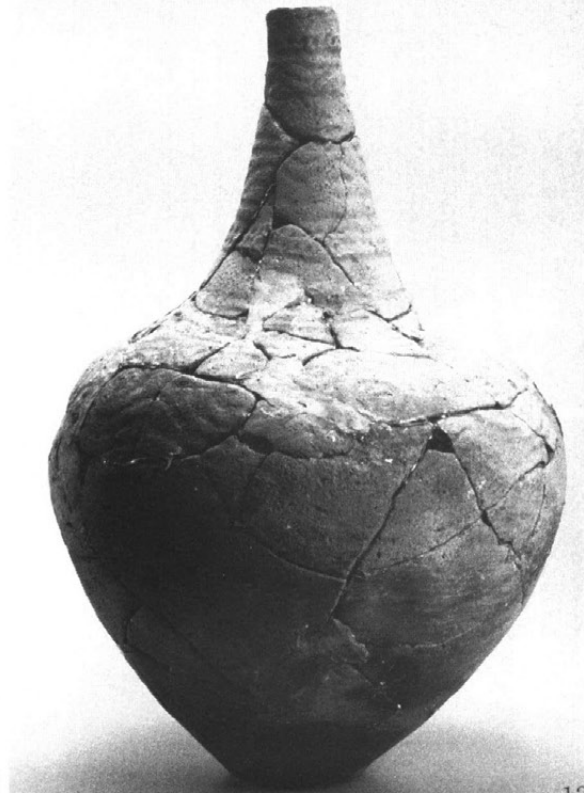
6



5



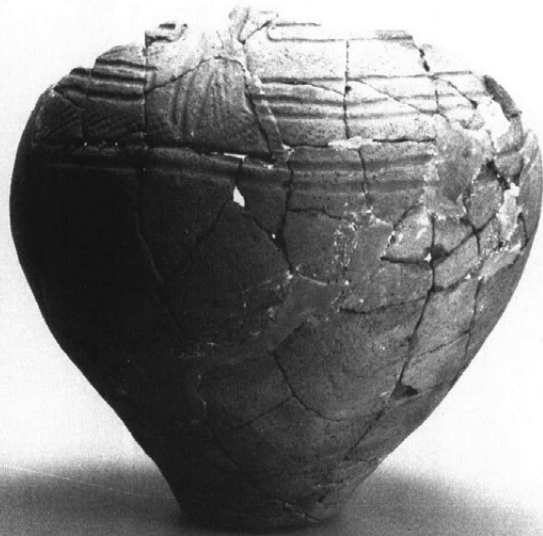
14



12



10



15



11



17



19



18



21

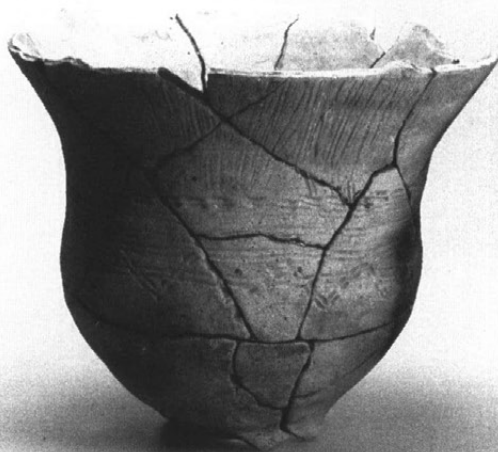




23



22



24



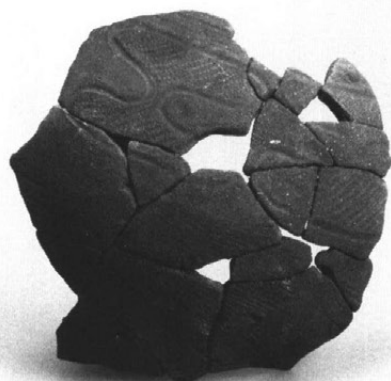
25



29



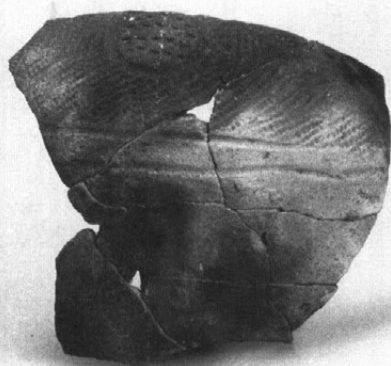
42



31



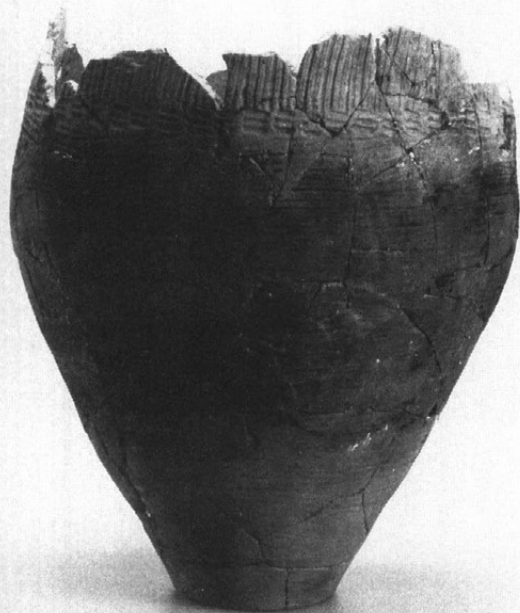
45



49



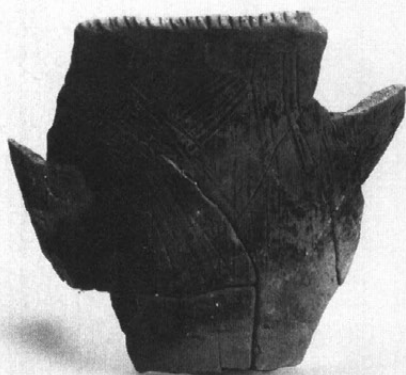
47



48



54



57



65



56



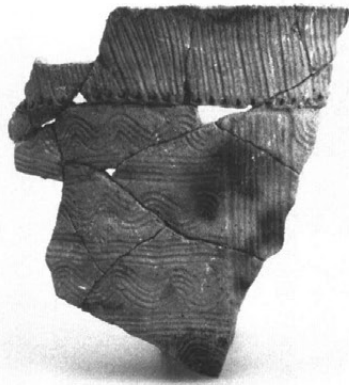
境窪遺跡  
弥生土器・土製品



60



70



61



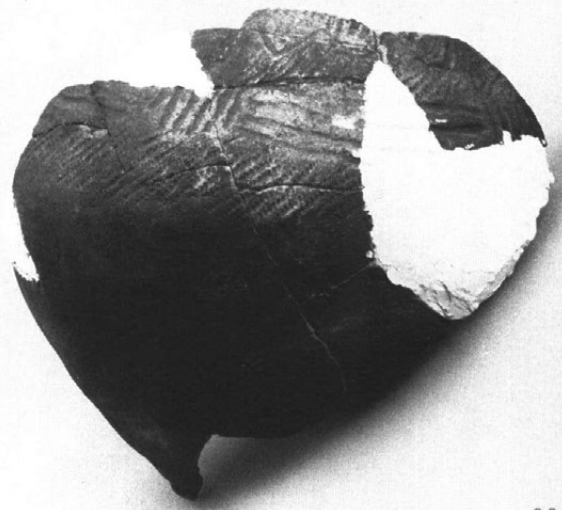
77



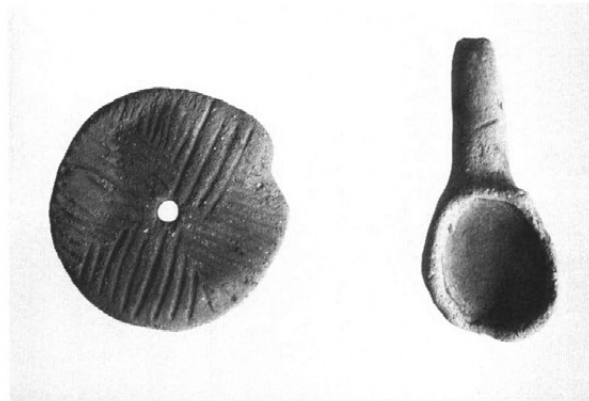
71



89



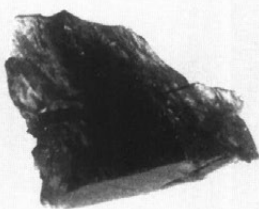
90



境窪遺跡  
石器接合資料  
(縮尺 1 : 1)



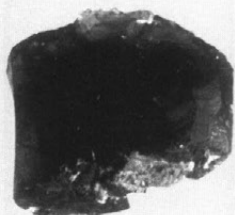
接合資料 11



接合資料 16



接合資料 12



接合資料 26



接合資料 31



接合資料 36



接合資料 39



接合資料 40



接合資料 43



接合資料 11



接合資料 16



接合資料 12



接合資料 26



接合資料 31



接合資料 36



接合資料 39



接合資料 40



接合資料 43



川西開田遺跡第2 A次調査区全景（川西開田ⅡA、東から）



同上（右側が南方向）





川西開田遺跡 I  
1 住全景 (東から)



同上  
3 住全景 (西から)

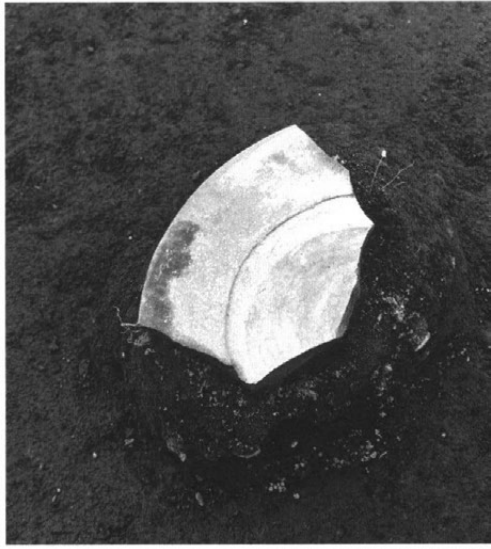


同上  
2 住全景 (東から)

川西開田遺跡 I  
4 住全景 (東から)



同上  
左：4 住カマド周辺  
右：緑釉陶器段皿



同上  
5 住全景 (西から)







川西開田遺跡ⅡA  
9住全景（東から）



同上  
10住全景（西から）



同上  
11住全景（東から）